





北に渡った言語学者金壽卿の再照明

板垣 竜太、コョンジン [編]

■BOCKS 同志社コリア研究センター

カバー表写真

- (上)金壽卿が東京で撮った写真(1942年、遺族所蔵)
- (中)ソ連の言語学者マーズルが撮った金壽卿の写真 (1958-59 年、《Российское корееведение: альманах》 2, 2001 所収)
- (下)金壽卿がトロントの家族に送った写真(1986年、遺族所蔵)

同志社コリア研究叢書 2

コョンジン板垣 竜太

〔編〕







北に渡



|目次|

凡例

はじめに — 板垣 竜太	1		
■基調講演1 父、金壽卿 — 金惠英・金泰成	7		
第1部 北朝鮮の言語学・言語政策と金壽卿			
2 北朝鮮の言語学史をどうみるか ―――― 金河秀	37		
3 国語学史の観点から見た金壽卿 — 崔 炅鳳	52		
第2部 金壽卿の国際的な照明			
4 金壽卿の朝鮮語研究と日本 — 板垣 竜太 一植民地、解放、越北—	81		
5 金壽卿 [1989] から読む 韓国の歴史比較言語学の一様相 — コヨンジン	138		
6 旧ソ連言語学と金壽卿 — 趙 義成	156		
7 金壽卿と中国の朝鮮語学 — 崔 義秀	173		

附録

1	^{寄稿} 私の心から尊敬する帥匠、金壽卿先生 ——————	- 崔 應九	195
<u> </u>	· 企壽卿年譜 ————————————————————————————————————		- 198
<u> </u>	金壽卿著作目録————————————————————————————————————		- 208
生	考・細記者プロフィール		- 220

凡例

- (1) 国号・言語名称は、原則として著者の表記にしたがう。ただし「北韓 (북한)」は原則として「北朝鮮」と訳す。
- (2) 注 (翻訳の場合は原注) 1, 2…は頁内の脚注とする。訳注は、短いものは文中に〔〕で括って挿入し、長いものは*1*2…の番号をふって頁内の脚注とする。
- (3) 書誌情報は各論文の末尾にまとめ、本文中では金壽卿 [1947] あるいは [金壽卿 1947:20] のように、著者名・発行年・頁番号によって表示する(「はじめに」を除く)。ただし、この形式による表記が難しい資料の場合は、脚注等で書誌情報を提示する。
- (4) 本文中では、論文や単行本のタイトルであっても、原則として日本語訳し、必要に応じて原語を表記する。漢字の人名・地名等の固有名詞で、日本語の読みとは異なる発音をする場合は、当該論文の初出でカタカナのルビをふる。
- (5) 日本語は原則として新漢字(現代の通用字体)、現代かなづかいで表記 する。ただし、引用の場合のかなづかいは原文のままとする。また、 「金寿卿」は全て「金壽卿」に統一するが、その他の人名等を表記す る際に旧漢字を用いるかどうかは、各著者(翻訳者)の判断に任せた。

はじめに

金壽卿は1918年に江原道通川郡で生まれ、京城帝国大学予科を経て、1937年に同大法文学部哲学科に入学した。1940年の卒業後に、東京帝国大学文学部言語学講座(大学院)に入り、1944年には京城帝大の朝鮮語学研究室の嘱託となった。1945年8月の日本の敗戦はソウルで迎えたが、1946年8月に北朝鮮(1948年9月以降は朝鮮民主主義人民共和国)に渡り、同国の言語学・言語政策において大きな影響力をもった言語学者である。たとえば現在「労働」という単語について、南では"上亭"(nodong)、北では"皇亭"(rodong)と表記する。この表記法が北朝鮮で確立される際に理論的根拠を提供したのが、金壽卿が1947年に『労働新聞』に発表した論文であった(巻末文献目録参照)。その他にも数多くの業績を残した金壽卿は、越北(1946年)から、金日成綜合大学を去る1968年まで、同国の言語学の中軸を担ったといってよい存在だった。その後しばらく学界での消息が途絶えるが、1980年代後半から研究活動を再開し、2000年に平壌で亡くなるまで活躍した。

金壽卿の経歴や業績については、これまで一定の研究蓄積があるが、まだ十分に明らかになってはいない。まず1990年代以降、北朝鮮において学説史的な再評価が進められた。1996年の金日成綜合大学創立50周年に合わせて、同大朝鮮語文学部が編んだ『主体の朝鮮語研究50年史』は、金壽卿が「審査」(監修に近い意味もあると思われる)を務めているのみならず、同書の各所で金壽卿の業績が学説史のなかに位置づけられている」。同じ年、金日成綜合大学の教員にして作家のリ・ギュチュンが、金壽卿を主人公と

¹ 김영황, 권승모 편, 『주체의 조선어연구 50년사』, 김일성종합대학 조선어문학부, 1996。

した『人生の絶頂』というタイトルの小説を刊行した²。2004年には朝鮮 語学の雑誌『文化語学習』が「有名な言語学者」シリーズのなかで金壽卿 を取り上げた3。これらの叙述は貴重な情報をもたらしたが、そこでとり あげられた金壽卿の個人史・学問史はほんの一部でしかない。一方、南の 韓国においては、時おり学説史のなかで触れられることはあったが、本格 的な再評価は、金敏洙(高麗大)が代表をつとめる財団法人東崇学術財団が、 2006年に第3回「東崇学術財団が選定した言語学者」として金壽卿を選ん だことが契機となった4。本書執筆者の1人である崔 炅 鳳氏(圓光大)が、 その際に金壽卿の業績をまとめ、2009年にはそれをさらに発展させた先駆 的な研究を公表した5。日本では、京城帝大時代の師であった言語学者の 小林英夫が1950年代に回想記を2本発表していたが6、その後関心を集めた わけではない。2000年に熊谷明泰が金壽卿の前記『労働新聞』論文を発掘 して歴史的に位置づけたが、これがほぼ唯一の貴重な学術的成果であった'。 このように金壽卿については東アジア諸国でそれなりの研究蓄積がある とはいえ、その歩みはまだ本格的に解明されてはいない。こうした状況を ふまえ、2013年11月9日(土)に、私たちは同志社大学において「北に渡っ

² 리규춘, 『장편실화 삶의 메부리』, 금성청년출판사, 1996。

^{3 &}quot;이름난 언어학자 김수경", 『문화어학습』 2004년 3호。

⁴ 최경봉, "제3회 2006년 東崇學術財團이 선정한 언어학자 金壽卿 (1918-1999)", 『財團法人東崇學術財團消息』 제11호, 2007。なお、金敏洙氏は、1946年に京城師範学校附設臨時中等教員養成所で、金壽卿から「朝鮮語学概論」の講義を直接聴いたことがあるという (최경봉 외, "해방 이후 국어 정립을 위한 학술적・정책적 활동 양상: 김민수 구술", 2007년도 구술자로 수집사업 녹취록, 국사편찬위원회, 2007)。

⁵ 최경봉, "金壽卿의 국어학 연구와 그 의의", 『한국어학』45호, 2009。

⁶ 小林英夫,「教え子」,『Papyrus (東京工業大学学友会図書館委員会)』No.1, 1951;同「白いハト」,『PHP』第110号, 1957 (いずれも『小林英夫著作集』10, みすず書房, 1977に収録)。

⁷ 熊谷明泰,「南北朝鮮における言語規範乖離の起点:頭音法則廃棄政策における金寿卿論 文の位置」,『関西大学人権問題研究室紀要』41,2000。

た言語学者・参議前 (1918-2000) の再照明」を開催した®。同シンポジウムは金壽卿の生涯と研究について多角度から検討することで、北朝鮮の言語政策・言語理論のみならず、植民地時代および冷戦期における学問や、南北分断状況における家族といった問題まで考えることを目標に掲げた。言語および言語学という側面から北朝鮮を照明することによって、同国に関する冷静な学術研究が求められる現状に新鮮な視点を提供することも目指していた。本書は、このシンポジウムで発表された論文および資料をもとに構成した。

このシンポジウムの企画経緯について、ここで少し説明しておきたい。 この企画の発端となったのは、2010年春のある出会いであった。2009年か ら2010年にかけて、私(板垣)は在外研究で米国に滞在した。その期間中に、 ある調査のためにカナダのトロントに行った。その目的は、朝鮮半島北部 の出身者にインタビューをすることだった。トロント郊外においてある方 のインタビューを終えた後、夕食時に同じくトロント郊外に住んでいた金 へ 裏英氏がいらっしゃった。カナダでは、配偶者の姓にしたがって Hye-Young Im とのお名前で、トロント大において教鞭をとっておられた。夕 食の場が郊外だったので、親切にも帰りに私を車で市内のホテルまで送っ てくださった。その車中で、「実は父が北朝鮮で言語学者だった」という お話をしてくださった。ご自身も平壌で生まれ、朝鮮戦争の時に父と生 き別れになってしまった。そして1960年前後に父が北で言語学者として活 躍しているという話を知り、その後、カナダに移民をした。1980年代に再 会を遂げ、その再会後に金壽卿を主人公にした小説も出版された。短い時 間ではあったが、およそそのような話をうかがった。非常に印象的な話 だったので、私の頭に深く刻みこまれた。

⁸ 同志社大学人文科学研究所が主催した国際シンポジウム「磁場としての東アジア」シリーズの第3回として開かれ、同志社コリア研究センターおよび同志社大学グローバル地域文化学部が共催した。

ただ、そのときは私自身がまだ北朝鮮の言語学や金壽卿について知識も関心も有しておらず、そのままになっていた。2012年11月、同志社大学の近所の店で、本学教員のコ・ヨンジン氏と話をしているなかで、「金壽卿という言語学者は1940~60年代にかけて、北朝鮮の言語学の基礎を作った人物だ」という話を聞いて、私の記憶が蘇ってきた。「確か、その娘という方にトロントで会った」と言って、ノートパソコンを開き、その時のメールのやりとりを見て、そのことを確認した。その場で、「ぜひ Hye-Young Im さんを呼んで、講演会を開こう」と話が盛り上がった。それが初期の企画内容だった。ちょうどその頃、人文科学研究所で2013年度に東アジアに関する国際シンポジウムを構想しており、この企画をその一環として開催することになった。それをきっかけに話がさらに大きくなり、韓国・中国・東京から研究者を呼ぶ国際シンポジウム企画となったのである。

こうした経緯からして、シンポジウムの中核は、何といっても金壽卿の実の娘・金惠英氏(シンポ当時はトロント大)と実の息子・金泰成氏(シンポ当時は全山大)による基調講演「父、金壽卿」にある。金壽卿は朝鮮戦争時に家族と離ればなれになったが、1980年代末以降、再会をとげる。シンポジウムでは、その家族離散と再会の経験を中心に語っていただいた。お2人が公の場でこの話を語るのはこれが初めてのことであった。当日は2人で順番に原稿を読み上げたが、会場からすすり泣きが聞こえてくる感動的な講演となった。

シンポジウムでは、こうしたパーソナル・ヒストリーを中心に置きなが ら、専門の研究者をパネリストとして招き、金壽卿の業績や生涯について 学術的・総合的に論じた。

第1部「北朝鮮の言語学・言語政策と金壽卿」では、まず金河秀氏(シンポ当時は延世大)に、その後の専門的な議論に先立つ講演として、北朝鮮の言語政策および言語学史を総論的に論じた。次に崔 炅 鳳氏(圓光大)が、2009年の論文では論じ尽くせなかった部分を中心に、コリア語研究史のな

かで金壽卿の業績を実証的に意味づけた。

第2部「金壽卿の国際的な照明」では、日本・旧ソ連・中国のそれぞれ の観点からの議論を提示する。まず、私(板垣)が、植民地期に遡って金 壽卿の朝鮮語学の形成を追い、その延長で解放直後の金壽卿の研究活動を も位置づけた。次にコ・ヨンジン氏は、金壽卿が三国時代の言語史研究に ついて南朝鮮(韓国)の学界を批判した著書(1989年)を、韓国・日本との 関係のなかで読み解いた。ソ連の言語学の影響については、既に文法書に ついての業績をもつ趙義成氏(東京外国語大学)に、あらためてより広いコ ンテキストから語っていただいた。そして、中国の朝鮮語学の元老研究者 である崔羲秀氏(青島濱海学院)が、中国朝鮮族の言語学への金壽卿の影響を、 文献、ご自身の体験、インタビューなどをもとに論じた。

本書は、このシンポジウムの報告順ほぼそのままに構成してある。ただ し、当日は基調講演を総合討論の直前におこなったのに対し、本書では冒 頭に入れてある点が異なる。このほか、金日成綜合大学に留学していたと きに会壽卿から直接学んだことのある崔應九氏(北京大)より特別寄稿が あり、シンポジウム当日に読み上げられた。これも本書に収録した。また、 私と金壽卿のご遺族の合作で、可能なかぎり詳細な年譜を作成するととも に、知り得たかぎりにおいて著作目録を整理した。シンポジウムの終了後、 さらに加筆訂正を加えた年譜・著作目録を巻末に掲載した。これは現時点 で最も正確で詳細な資料であると信じている。

シンポジウム当日は、専門家から一般の方々まで、多様な参加者があっ た。インターネットでの中継もおこなった。当日の報告集は余裕を見て 300部印刷したが、来られなかった方にも渡したいとまとめて持って帰る 方がおられたり、お世話になった方々などに後日送ったりしたため、ほぼ 在庫切れとなった。関心の高さがうかがえる。

このシンポジウムを活字化するにあたり、まず同志社大学人文科学研究 所の紀要『社会科学』44巻1号(2014年)にコリア語版を掲載した。同紀要

は同志社大学学術リポジトリ(http://library.doshisha.ac.jp/ir/)を通じてインターネットで全文を読むことができる。本書は、この日本語版であり、同志社コリア研究センターのコリア研究叢書2として刊行するとともに、同じく学術リポジトリでも公開する。内容はほぼ『社会科学』掲載論文の日本語訳といってよいが、体裁を整えたり、加筆訂正したりした部分もあるほか、日本の読者向けに訳注を付加したりしている。その意味で本書はそれ自体新たな著書というべきところもある。

本書が成立するまでのあいだに多くの方々のお世話になった。本書の出版費用は、まず匿名の方による寄付に依るところが大きく、この場で最初に感謝を申し上げたい。また、この企画は同志社コリア研究センターと高麗大民族文化研究院の国際共同研究「朝鮮半島と日本を越境する植民地主義および冷戦の文化」(頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム)の一環でもあり、同プログラムの助成金も活用させていただいた。このプログラムのメンバーでもある小川原宏幸氏には、叢書1に続き、原稿の校閲でお世話になった。シンポジウムの開催に際しては、同志社大学人文科学研究所の教職員がさまざまな面で助力してくださった。企画を進める過程では、「産光町氏(延辺大)、Ross King 氏(University of British Colombia)、伊藤英人氏(東京外国語大学)らのお世話になった。同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士課程の呉仁済氏は、シンポジウムの準備、本書の準備のいずれにおいても奔走してくれた人物として特記しておきたい。

日本、南北朝鮮、中国など、国境をまたがって足跡を残した金壽卿の歩みを追った本書が、東アジアの相互理解と緊張緩和に多少なりとも寄与できれば幸いである。

編者を代表して 2014年11月 板垣竜太

基調講演

1 父、金壽卿

金 惠 英* • **金** 泰 成**

まえがき

本稿は、2013年11月9日、日本の京都にある同志社大学において、同志 **社大学人文科学研究所の主催で開かれたシンポジウム「北に渡った言語学** 者・金壽卿の再照明」における講演原稿である。

朝鮮半島が分断された後、金壽卿の学者としての道は広く知られている とはいいがたいし、いわんやその成長の過程や個人的な側面はほとんど知 られてはこなかった。金壽卿の言語学者としての業績や様相は、このシン ポジウムにおいて他の研究者らが扱うことになるので、遺族である私たち としてはただ金壽卿の個人的な側面を振り返るにすぎない。それさえも、 6.25「朝鮮戦争〕当時に離散家族となった金壽卿の遺族として、残ってい る限られた資料と、場合によっては確認するのも難しい情報にもとづいて 準備した講演である。その点寛くご理解いただきたい。講演の時間的な長 さの制約もあり、詳細に扱うことができなかった部分もあるが、比較的詳 細に作成された年譜を合わせて参照していただきたい。

*金惠英:金壽卿の次女 **金泰成:金壽卿の次男

はじめに

まず、今回のシンポジウムを開催してくださった同志社大学と、準備の ために苦労された全ての方々に深い感謝のことばを申し上げます。あわせ て、分断された朝鮮半島の数多くの離散家族のうちの一家族として、全て の離散家族の希望がかなえられることを願う切なる思いも伝えておきたい と思います。

板垣竜太先生が論文「金壽卿の朝鮮語研究と日本」で、父の家庭背景や 学生としての成長過程を紹介されているので、可能なかぎり重複を避けた いと思います。そのため、私たちの話は、父の個人史というよりは、父を 想いながら生きてきた人々の話、「人間・金壽卿」に関する断片的でまと まりのない話となりますので、その点を理解くだされば幸いに存じます。

一般に自らの父について語る人たちは、「一緒に暮らしていたから知っている父」について語るのでしょうが、私たちの場合は「話に聞いて知っている父」になるかと思います。文献上の父は「越北した学者」でしょうが、私たちにとっては「別れていても、常に一緒にいる父」でした。母は言うまでもなく、祖母も別れた息子を忘れられず、私たちとともに暮らしながら、自然に父という存在を私たちの生き方のなかに植えてくれたのですが、それが私たちの成長過程におよぼした影響は計り知れないほどありがたいものでした。

父の学者的な面貌は、私 (次男・金泰成) が中学生の頃から外国語と国語 に関心を持つようになった刺激剤となり、結局私も学問を職業に選ぶこと になったのですが、その契機になったのではないかと思います。

一方、父の存在は私たち家族にとって重荷でもありました。父はただ学者であっただけで、政治家だったわけでもないにもかかわらずです。父の存在はほとんど隠していました。父については友だちにすら気安く言うことがはばかられ、誰かが父について聞いてきた場合はひどく困ったもので

す。私が大学に通っていた頃、父を知る教授にも、私が父の息子であることをあえて明らかにはしませんでした。

では、これからはじまる私たちの話は、おばあちゃんやおじいちゃんの 昔話として聞いていただければと存じます。

1. 意地っ張りの子、青年になる

1-1. 物静かながら意地の強い子

「金弁護士の家の下の息子」として育った父は、幼い頃から、家では「静かでおとなしいが、自分が正しいと思うとそれを曲げない子」と言われていました。3~4歳の頃の逸話ですが、父自身が間違っていたわけではないことに対し、祖父が煙管のようなものを口にくわえさせる罰を与えながら「許しを請え」と言ったところ、1時間以上じっと動かずにそれをくわえ続けることで自らの潔白を主張し、大人たちを驚かせたという話があります。

言語学としての文献学(ドイツ語では Philologie)の意味は、語源からいえば「ことばへの愛」と解釈できますが、父は幼い頃にこっけいな言葉遊びを面白がったといいます。「トンコル村のトンさんが頭をぶつけてボッコボン」などと言いながら楽しんでいたものでした。日本語で授業をする、日本人のための学校である群山公立中学校の生徒となってからは、雄弁大会に出場して賞をとったりもしたといいます。

後に京城帝国大学に入学した15歳の少年は、マントを誇らしげに着る普通の予科生とは異なることなく、清凉里の自然のなかで学校生活を楽しみ、学問の道に足を踏み入れたのでした。私たちの手元に少し残されている予科時代の写真のうち、次の写真【図1】を見るたびに、私たちは胸のつまるような思いになります。裏面に小さな文字でイギリスの詩人トマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-1771) の詩「田舎の墓地で詠んだ挽歌 (Elegy Written





図1 田園風景写真

(備考) 1934~37年頃。京城帝国大学予科周辺の清凉里の田園風景と、父が裏面に書い た "Elegy Written in a Country Churchyard" の最初の部分。

in a Country Churchyard)」の最初の部分¹が英文で記されているからです。

実をいえば、有名な詩だから私たちが感動を受けるのではなく、繊細で 物静かな性格の15~6歳の少年が学校で学んだであろう英詩を写真に書い ている場面を想像すると、その手つきが見え、また息づかいが感じられる ようだからです。

京城帝国大学ということばを聞くと、私たちは、小さい頃に祖母や母か ら、その大学にいた立派な学者についての話を、隣のおじさんの話のよう によく聞いていたことが思い出されます。言語学の教授だった小林英夫2、 小倉進平、哲学教授の安倍能成といった先生方は、私たちが幼心に聞いて 知っていましたが、まるで父から直接聞いたかのような感じでした。

そして世界を暗闇とそして私に残してゆく

¹ The curfew tolls the knell of parting day, The lowing herd wind slowly o'er the lea, And leaves the world to darkness and to me.

晩鐘が夕暮れのしらせを告げ 牛の群れが鳴きながらゆっくり草原をめぐり The ploughman homeward plods his weary day, 一日疲れきった農夫は重い足どりで家路につき

² 小林英夫教授は父を弟子と思って、さまざまな誠意をこめてくださったことを、彼の随筆 「教え子」から知ることができる。

1-2. 東京生活と結婚

1940年4月に東京帝国大学大学院に進学した父は、同年配の親戚である画家の金敏龜氏と親しくしており、韓国美術史の権威である黄壽永博士(1918-2011、1941年に東京帝国大学経済学部を卒業)ともこの時期に交流していたようです。そんな縁から、父の美術に対する関心は、ある意味当然ことだったかもしれません。わが家では母の側も文学、芸術に関心をもつ者がおり、学問と芸術を愛する雰囲気が今も家のなかで漂っています。

父は長期休暇のたびに帰郷していたようですが、1942年の春休みの時に 結婚した友人の付き添い人をした際に、新婦側の付き添い人をしていた梨 花女子専門学校文科出身の背の高い女性と出会うことになりました。その 翌年の春休みには、この2人の付き添い人が結婚することになりました。

最近の若者だったら、仕事もない学生を夫に選んだ母を愚かな新婦と思うかもしれませんが、両親の結婚は物質よりは相手の価値観を重要視した、2人の理想主義者の交わりでした。父は母にワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)の「質素な生活と高遠な思索(Plain living and high thinking)」という文句を生活の信条にしようと言ったといいます。

父は京城帝国大学予科の時代からさまざまな外国語に通じていたと言われていますが、ご承知のとおり、外国語を高い水準で習得するためには不断の努力と粘り強さが必要で、多くの時間を投資しなければなりません。ですから父は学生時代から寸暇を惜しむタイプで、結婚後、東京で勉強していた時には、母が理髪してあげる間にも本を読んでいたといいます。

1-3. 戦争から逃れて

短い新婚旅行の後、東京で暮らし、夏休みになってソウルに帰った両親は、祖父の用意していた恵化洞の家に住むことになりましたが、父は開講しても東京に帰りませんでした。いくつか理由はあったでしょうが、京城帝国大学で無給の助手として働いて、学徒兵の召集から逃れようとしたの

が大きな理由のように思われます。祖母と母を通じて常に父を感じながら 育ってきた私たちは、これを単純に「召集から逃れることを望んだ」とい うよりは、「戦争自体から逃れることを望んだ」と考えたいと思います。 哲学、言語学、文学、芸術に囲まれて過ごした父にとって、戦争は「出て 行って戦って勝つべきもの」ではなく「起こしてはならないもの」だった と思うのです。

父は、解放をむかえた1945年の12月から京城経済専門学校(解放後にソウル大学校商科大学となる)で教鞭をとるようになって初めてお金を稼ぐようになり、母は年子の面倒を見るようになりましたが、そこから「夫は職場に出て、妻は子を育てる」という平凡な家族生活が始まりました。父は普通の父親のように、2人の赤ちゃんの写真を洋服の内ポケットの手帳の中にいつも入れて出歩いていたといいます。

2. 平壌

2-1. 驚くべき決定

2人の子を育てる夫婦の睦まじい生活は長く続きませんでした。1946年8月16日の晩、父は母に、新たに創立される金日成大学(以下「金大」)の教授要員となってほしいとの委嘱状に応じて平壌に行くという驚くべき話を切り出し、そして夜中に金錫亨と朴時亨という2人の友人とともに出発しました。その頃は既に38度線を越えるということは安全ではなくなっていました。母は来月94歳になりますが、父が重大な話を出発のまさに前夜にしたことに、今も寂しい気持ちでいます。

その2ヶ月後、母は、やはり危険を顧みず、子どもたちを連れて平壌に行って父と合流しました。それから金大の建物が向かいに見える金大の教員社宅で、仲睦まじい家族生活が再開されました。この時期は、わが家が「落ち着きつつある時期」だということができますが、母はまた2人の子

どもを年子で産んで、4人の子を育てることとなり、父は講義を受け持っ て忙しい生活を送りながらも、著述活動を活発にしていました。

父は金大でロシア語も教えていましたが、父と年齢差がかなりある叔母 〔金壽卿の妹〕は、兄を教授にもつ、金大のロシア語専攻の学生でした。叔 母は何でも一所懸命する性格で、ロシア語専攻の学生のなかでも成績が最 も優秀でしたが、父は他の学生に1等の点数をあげ、叔母は2等級の学生に しかなれませんでした。叔母は父に抗議しましたが、父は最後まで席次を 変えなかったといいます。今80代後半の年齢になる叔母は、父から習った プーシキン (A. S. Pushkin, 1799-1837) の詩を、今も目をそっと閉じて諳んじ ています。

先に、父は寡黙な性格だったと申しましたが、事前の予告もなく、食事 の時間に友人を家に連れてくるほど、友人との交遊を大事に考えていまし た。母がそうした突然の客への接待に当惑すると、父は「あぁ、匙をもう 1本置いておけばいいんじゃないか」と言っていたといいます。

2-2. 行き違い

1950年6月25日の戦争勃発後、8月に父も金大教員らによって構成された 短期宣撫工作隊の一員として南へと派遣されました。父は全羅南道まで下っ ていった後、〔同年9月の国連軍による仁川上陸作戦以降〕人民軍に従い北へと後 退する過程で、他の金大教員らがみな平壌に戻ったにもかかわらず、父だ けが戦地に引き返すことになりました。さまざまな外国語、特に英語を駆 使する父を人民軍が必要としたためでした。外国語放送を聞くこと、国連 軍を意識した通訳などに備えて父を必要としたのではないかと思います。

同じ年の9月、国連軍が北進してきた頃、金大教員の家族らは爆撃を避 けるために平壌近郊の田舎へと疎開していたのですが、金大教員らは教え るという本来の仟務に復帰するため、1人また1人と帰ってきました。です が、父の姿は見えませんでした。母は最後の帰還者と見られた父の友人・

金 得 中 教授から、もうこれ以上帰ってくる金大教員はいないだろうとい う言葉を聞き、重大な決断を下しました。危険を顧みず、家長を探して南 へと下ろうという決定でした。他の避難民に混ざって、いつどこで爆撃を 受けるか分からない私たちの避難が始まりました。危険極まりない避難の 道程でしたが、その時には不平やわがままを言ったりする子どもはいなかっ たといいます。黄海道まで来たとき、ある村の家に入って、少しのあいだ 休ませてほしいとお願いしたところ、その家の主人は乞食のような身なり をした多くの避難民に心のこもった昼食をふるまったといいます。母は今 も、可能ならばあの家の主人に何かお礼をしたいと言っています。長々と 続く避難の途中で、荷物を積んでいない米軍トラックが見えました。母は ソウル駅まで乗せてほしいと、若い米兵に英語でお願いしました。そのお かげで他の避難民とともに私たちは疲れきった体をトラックの上で休ませ ることができました。父は英語ができたために家族のもとに戻れず人民軍 に従軍しなければならなくなり、母は英語ができたために米軍のトラック に乗せてもらうことができたというのは、戦争の皮肉としか言いようがあ りません。

父が人民軍に従って北へと後退する道程は、文字通り千辛万苦の道でした。九死に一生を得て故郷の通川に帰ってみると、村は爆撃で灰の山となっており、親戚も見当たりませんでした。ついに1951年3月初めに平壌の近郊に着き、金大教授だった父の母方の叔父³の家族にまず会ったのですが、そこで叔母から、家族が父を探して南下したという消息を聞いたのでした。

³ 経済学部教授·李種植。

3. 離散家族となって

3-1. 六角亭

父母も当時の多くの人々と同様に、朝鮮半島がこれほど長期にわたって 分断することになるとは思ってもいなかったので、ソウルの恵化洞の家を そのまま置いておき、ソウルの明倫洞に住んでいた父方の伯父にその管理を任せて越北したのでした。

家長を探す母が家長となって恵化洞の家に戻ってきた時には、戦火のただ中に裸同然で避難してきた人々が被っていたさまざまな困難を経験することになり、なじみの家まで手放さなければなりませんでした。幸い伯母の実家の配慮により、伯父の家族と私たち家族は全羅北道に行って暮らすことになりました。母は「良民証」がなく、仕事に就くことができなかったため、私たち家族は沃溝郡臨版面でしばらく避難民向けの配給によって延命しました。経済的な困難のない家庭で育った母は、嫁ぎ先の姻戚にまで頼って生活するしかなかったという事実をなかなか受け容れられなかったといいます。

私たちは臨陂で、伯母の実父が友人たちと風流を楽しむ時のために建てた別荘「六角亭」で暮らしました。その建物は名前どおり壁面が6つ、つまり六角形をしており、自然と調和するように美しく設計された2階建ての家でした。そのようなすばらしい家で、食べることの心配ばかりしなければならないというのは、これもまた戦争のもたらしたアイロニーでした。

⁴ 金東椿 (聖公会大学校社会科学部教授)の「民間人虐殺問題、なぜどのように解決しなければならないのか」(『新たに明らかになる現代史記録』88、2000年6月12日)に「朝鮮戦争当時、戦線が行ったり来たりするなかで、誰が敵であり誰が見方なのかという点が不明確になると、周辺の保証を通じて、国軍が入ってきた後、治安と秩序を維持するために、大韓民国に協力しようという住民を良民として分類したのである」とある。良民証は「良民」であることを証明する小さなカードだった。

ですが、私たち家族にとって最も凄惨な戦争のアイロニーは、人民軍が 英語の知識をもつ父を重用した半面で、戦争の最中に祖父が人民軍によっ て虐殺されたということです。混沌と混乱の時期に、双方の軍隊による民 間人虐殺があったということは、朝鮮半島の歴史においてまことに胸の痛 むことです。

3-2. 小さな希望の種

私たちの避難民生活が終わったのは1953年4月、母が慶尚南道〔密陽郡〕 武安面の武安中学校で教えはじめてからのことでした。伯父〔金壽卿の兄〕が、今の「全北大学校の前身となる裡里農科大学校」で農業経済学の教授となったのですが、同じ大学の教授を叔母〔金壽卿の妹〕に紹介し、2人は結婚しました。叔母の夫の妹は、武安中学校から他の学校に転勤したのですが、その後任として母を推薦してくれたおかげで教員となれたのでした。公立学校の教師となった母は、良民証も難なく持てることになりました。ようやく母は仕事をもった家長となり、私たちと一緒に住んでいた祖母が子ども4人の面倒をみる主婦の役割を受け持つことになりました。2人は父と再び会えるだろうとの希望をもって、1日1日を過ごしたのでした。

ところが、私たちがだいぶ大きくなってから知った話なのですが、政府の情報機関からしょっちゅう人がやってきて、母に「夫の生死を知っているか?夫とどんな連絡をとっているのか?」などと疑いをもち、犯罪者に尋問するかのように煩わしくふるまったといいます。この問題は、後に政府でおこなった「戸籍整理期間」に、母が父を「死亡」と戸籍整理できるようになったため無くなったのですが、書類上であっても夫を死者に仕立

^{5 1947}年10月15日開校。1951年に全北大学校に吸収統合され、国立全北大学校と名称を変更した。

⁶ 植物病理学教授·金 倧 熙。

て上げる妻のつらさは容易に想像できます。

1950年代末、母は待ち焦がれていた報せを伯父から聞くことになりました。前に触れた小林先生が、金大の父から安否を尋ねる書簡を日本で受け取ったとの消息が、ソウルの国語学者・李崇寧先生を通じて伯父に伝えられたのです。母がこのことを教えてくれたのは、私たちが少し大きくなってからのことでした。それは、私たちと似たような状況にある離散家族が、さまざまな面において慎重に生きなければならなかったためです。父の生存の消息は何よりも嬉しいことでしたが、私たちが行けない平壌にいるということが、欲深い人間としてはもどかしく思いました。この消息は私たちの胸に希望の小さな種を植えてくれた一方で、私たち家族はこの希望を現実へと変えるためには何をどうすればよいのか、分かりませんでした。祖母は時おり母に「今日の新聞に、ねぇ、統一するという記事はないかい?」と聞くこともありました。

そうしたなか、祖母はあれほど愛する息子に会えないまま亡くなってしまいました。これは私たちの胸に恨として残っています。私たちが幼かった頃、祖母は寤寐不忘〔寝ても覚めても忘れないこと〕、父のことばかり考えていましたので、母は「もし家族のうち1人だけお前たちの父と再会が許されたとするならば、私はお前たちのおばあちゃんにその役目を譲るよ」と言っていたこともあります。後に父は祖母が亡くなったという話を聞いて、「その墓でもさすってみたい」と言い、深く悲しんでいたといいます。母が慶尚南道の教育庁所属の教師だったため、規定により、私たちが同じ場所に長いこと住むことはできませんでした。武安から密陽、進永へと引っ越し、1961年から、母は釜山市教育庁の所属で働くことになり、私たちは釜山でずいぶん長く暮らしました。私たちはオリンピック大会の前に聖火を持って開催会場まで走っていく人のように、胸の中に小さな希望の種を抱き引っ越しを繰り返していたのです。

母は、成長していく子どもたちの進学、進路決定、結婚等について父と

相談するようなこともできず、さまざまなことを1人で決めなければならなかったのですが、そうした時には、父への想いが一層強まりました。その「想い」というのは、もちろん父を慕うものでしたが、時に父のせいで子ども4人を1人で育てなければならないという重荷を担うことになったことに対し、父をうらむこともあったようです。韓国では毎年母の日になると「母の恩恵」という歌を歌いますが、私たちはこの文章を書きながら、父のみならず、母の恩恵を振り返ることになりました。私たちはこの歌を毎日歌っても、母の恩恵に報いることはできないと思います。

3-3. 長女の決断

私(次女・金惠英)の姉(長女・釜惠慈)もまた幼い時には童詩を書くことを楽しむ性格でしたが、大学進学を前にして看護学を勉強することに決めました。当時、看護師は北米やヨーロッパに移住しやすかったので、海外で父の消息を知ることができるのではないかというのが姉の考えでした。

姉は看護学を学んだ後、カナダへの移民手続きを進めていた青年と結婚することになり、1970年にカナダに移民しました。その後、姉が家族を招待することにより、私、兄、母と順にトロントに集まることになりました。弟〔金壽卿〕を慕っていた伯父までが1974年に亡くなってしまったことで、私たちの焦燥感は一層強まりました。それでも、平壌訪問の機会がいずれ来るのではないかと、カナダの市民権を獲得すること以外には、特にすることもなく私たちは歳月を過ごすことになりました。

1960年代に韓国外国語大学にいらしていた東北大学教授の中村完先生から、私の従姉⁷が日本語を学んだことがあったのですが、その縁もあり、 私が1983年に日本を訪問した際に、仙台まで中村先生を訪ねました。中村

⁷ 伯父(金福卿)の三女・金妧植。

先生は1980年に平壌で父に短時間会われたのですが⁸、その話を聞き、撮った写真をいただくために行ったのです。中村先生が撮られた写真は、別れた後初めて見る父の写真でした。その日私は仙台から東京に戻る新幹線のなかで、窓の外に広がる風景も楽しむことなく、金日成大学ではなく中央図書館で勤務しているという父のことを想い、交錯する万感を振り払うことができませんでした。中村先生は、父が京城帝国大学の助手だった頃によく知っていた言語学者・河野六郎先生の弟子で、平壌訪問時に可能であればよろしく伝えてほしいという師匠の依頼を受け、挨拶しに行ったのでした。中村先生の紹介で、私はもうご年配の河野六郎先生にも東京でお目にかかりましたが、中村先生と河野先生の温かいお声は今も耳に響いています。

3-4. 講演会に行ったわけ

1985年のある日、母は、トロントを訪問中だった延辺大学の歴史学教授・ 高永一先生の講演があるとの広告を見て、その講演会に行き、高永一先生に一つお願いをしました。平壌の家族に手紙を人便〔人づて〕で渡してほしいというお願いでしたが、世界は狭いもので、高永一先生は1956年に延辺大学を訪問した父を記憶しておられました。高永一先生の助力により、私たちは1986年の春に父の手紙を人便で受け取りました(附録1参照)。その後、父とカナダ在住の家族はカナダの郵政当局を通じて、時間はかかっても問題なく手紙をやりとりすることができました。高永一先生への感謝の気持ちは忘れられません。

父の最初の手紙には父の再婚の事実が書かれており、母の心は傷ついた だろうと思いますが、後の父の説明では、場合によっては母にはその最初

8 中村完教授は、1980年11月に東北大学学者訪朝・訪中団の一員として平壌を訪問した。

の手紙しか送れないかもしれないという事態を想定し、母 [妻] をおもんばかる父 [夫] の心情とともにあらゆる事実を手紙で知らせるのがよかろうと考えたからだということでした。ここにも父の性格の一面を見ることができます。愛する家族と別れるという経験をした父は、手紙でも「別れる」ことになるかもしれないという心配をしていたのだと思います。父は、再婚したという事実について、母にいつも許しを請いたいという心情でいたようです。一方、歳月が流れ、母は、父が再婚しないでは個人的にも対外的にも耐えがたい状況におかれていたのではないかと考えることで、心を落ち着けているようでした。

4. 北京にて、その後

4-1. 父子の再会

私(次女・金惠英)は、1988年8月に北京大学で開かれた第2次朝鮮学学術討論会に参加し、平壌の学者らとともに来た父と会うことになりました。この父子再会が果たされたのには、北京大学教授・崔應九先生のお力添えが大きく、トロント大学教授の白應進先生の隠れた助力もありました。この場を借りて感謝申し上げます。

私はカナダに移民してきた後、2番目の子が2歳になった頃に、文理科大学の教科課程に対する好奇心が生じ、再び学校に入りました。もちろん私自身の興味もあったのですが、父の消息を聞く道が開かれるかもしれないという漠然とした考えから、言語や言語教育方面の勉強を少ししました。そうしていたところ、私の家族の背景が周りにも少しずつ知られるようになり、言葉や思いが種になると言われるとおり、私の漠然とした思いは芽を伸ばし、このお2人が再会を手助けしてくれることになったのでした。

1週間の学会の期間中、父は崔應九先生の配慮により、参加者のうち唯 ーシングルルームに泊まっていたのですが、それは父子が1つの部屋で自 由に話せるようにするためでした。

父の部屋に私を連れて行った人がドアをノックすると、父は部屋の中に 私だけを引き入れ、ドアを「無礼」ともいえるほどピシャッと閉め、私を ぐいっと抱きしめました。38年ぶりの抱擁が何分間続いたのか、今も思い 出すことの難しい、ただ「永遠」ともいうべき時間でした。父は、この父 子再会について、ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)の『ファウス ト』を引用しながら、「時よ、止まれ!」とのことばで、その喜びを表現 していました。昔の青春時代に戻ったかのようだとも言っていました。

先ほどみなさんに、父が戦争の時に金大の教員らと南に下った後、北へと後退する過程について語りましたが、これは北京で父から聞いた話でした。毎日、学会の参加者らとの夕食が終わると、私が父の部屋に行って、しばらくのあいだ父と2人だけの時間をもちました。父は、私たち家族が行き違ってしまって互いに離別してしまった戦争当時の話をしきりにしたがりました。ですから夜になると、私に「さあ、また戦争日記を続けよう」と言っていました。

父が九死に一生を得て、長い行軍により疲れ切った体を支え、「懐かしい親戚に会えるだろう、ひょっとすると妻や子が私を探して通川に来ているかもしれない」と考えながら故郷である通川に行ったところ、目の前に広がった光景はベルギーの作家ローデンバック(Georges Raymond Constantin Rodenbach, 1855-1898)の小説『死都ブルージュ(Bruges-la-Morte)』に出てくる場面と酷似していたと言っていました。その言葉を聞いて、父は戦争中にも文学的な感受性を失わずにいたのだとも思われました。

学会の期間中のある日、しばしの時間を割いて、平壌の家族に渡す贈り物を買うために、父とともに百貨店に行きました。服地を選びながら、父と布の色、模様、質感などについて意見を述べ合ったのですが、父と私の趣味が似ているということを知り、ひそかに嬉しく思いました。私は何日かのあいだ、知らず知らずのうちに「子どもの頃から祖母と母から聞いて

きた父」と「私の目の前で生きて動いている父」とがどのように異なるの か、あるいはどの程度似ているのかをずっと比較していたのではないかと 思います。

私は父とともに過ごした時間が「完璧な2人だけの時間」になるよう、 カメラや録音機のようなものですら、2人の間に入り込まないようにしま した。私が38年間望んでいたのは、ただ幼い子どもが父と同じ部屋で一緒 にいることで満足し、特に一緒に遊んだりしなくても良いぐらいに満ちた りた、ささやかな喜びを味わえるような、そんな平凡な時間を少しでもも てればということだったので、父と特別なことをしない方が私の気持ちは より満足感を覚えたのでした。

血を分けた父子間でも、訊かない方がよいことがあるものですが、私は ただ2人だけの自由な時間があったにもかかわらず、父がこれまでの人生 でおこなった選択に満足しているかとか、学者としての長い空白期にどん な思いを持っていたのかといった質問は、最後までしませんでした。

私は、父が学会の期間中にトロントの家族と電話で話す機会をつくりし ました。電話で話したという経験は、私たち家族にとって、特に姉にとっ て意味深い追憶として残ることになりました。それに加えて、父がソウル の弟〔金壽卿の次男〕に書いた手紙を、私は後に弟に渡すことができました。 父は、その手紙で、弟が学者として完成していくことを嬉しく思うとしな がら、ドイツの Philologie (文献学=言語学) をしっかりやれとの言葉を綴っ ていました。別れた子どもに直接影響をおよぼすことができなくても、学 問の世界へと歩み始めた息子がいることを嬉しそうにしていました。

学会が終わった後、私は平壌見物をすることになりました。2泊3日間だ け滞在し、父と平壌の一番下の妹(金惠玉)とともに、清潔で美しい平壌 やその周りを観光し、2日目の夜には父のアパートに行って夕食をご馳走 になりました。父が再婚した、平壌の弟妹らの母は、柔和な性格の持ち主 のように思えましたし、弟妹も意志を強く持った若者として育っているよ

うに見えました。平壌の弟妹は、まだ会ったこともない兄姉に送る真心の こもった手紙を書き、渡してほしいと私に頼んできましたが、その心がけ が立派だと感じました。それでも、父が「ここがお前の住んでいた金大教 員の官舎4号室があった場所だよ」と言い、空き地を指さした時、一瞬 「あぁ、家族がこの官舎でずっと住んでいたなら、いろんなことがどう変 わっただろうか。父が北に後退できずに、私たちが南下した後会ってみな 一緒に暮らしていたら、どうなっていただろうか」という、今さらどうし ようもない考えがよぎってしまうのを禁じ得ませんでした。

4-2. 年賀状

父は、1990年1月、瘍の闘病中だった私(次男・金泰成)の上の姉 (金壽卿 の長女・金惠慈]に対し年賀状を送ってきました(附録2参照)。姉は、父の切 なる願いにもかかわらず、それから1年後に私たちのもとを去ってしまい ました。4姉弟のうちで父との追憶を最も多く持っていた姉、父の消息を 知るために家族を呼び集めた姉自身は、父とともに暮らす夢を果たせない まま、逝ってしまったのです。姉の闘病の報せを初めて聞いた時から、「す ぐ良くなるだろう」という肯定的な態度で希望をふきこんでくれた父が、 再会を果たせずにいる最初の子を失った心情は、子を持つ私としても計り 知れないものがあります。

母は、その悲しみを、「何もない野」という時調〔朝鮮固有の定型詩〕の1 首に込めました。

何もない野

静かな夕方の光が そっとさしこむ 何もない野 葉の落ちた枝 新しい芝までもが 行ってしまい たった今失った 娘の姿を偲んで 三日月をいだく 清楚なお前の姿 三日月となってほほ笑むのだな お前が遊んだ丘は 風のおこる いばらの道 心 恨のやどった お前の大きな羽が 新しい空を飛ぶ

5. 続く再会の機会

5-1. 続く再会

1994年夏には、私 (次女・金惠英) の2人の子°が、元山市で¹⁰開かれた「国際青少年野営大会」に、他の家庭の子らとともに、カナダ青少年代表として参加しました。その際、平壌で祖父と会う貴重な経験をしました【図2】。



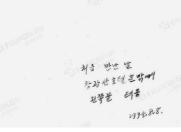


図2 金壽卿と対面した孫(1994年8月8日、平壌) (備考) 左から平壌の弟・金泰雄(4男)、父、イム・ユジン、イム・ユラ

⁹ 娘、イム・ユラ(Grace Eura Im、当時18歳)と息子、イム・ユジン(Daniel Eugene Im、当 時16歳)。

¹⁰ 朝鮮民主主義人民共和国江原道東海岸永興湾にある市。江原道の道庁所在地であり、近くの松濤園海水浴場と開沙千里が有名である。

父は、私の子どもにたくさんのプレゼントをくれたほか、1989年に出版 された父の著書『三国時期言語歴史に関する南朝鮮学界の見解に対する批 判的考察』も1冊送ってきました。この本のなかには、1993年夏に白頭山" に登って撮った写真【図3】が添えてあり、母に送ったメモ(附録3参照)が 入っていました。父は、終生登山を好んでいたのですが、75歳にもなって 若い人たちのあいだに混じって、朝鮮半島で最も高い白頭山に登ったので す。そのことで、自らの望むことをするためには、体力を養わなければな らないという模範を私たちに示したのでした。



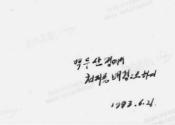


図3 白頭山に登った父(1993年6月21日) (備考) 写真裏面に「白頭山頂で天地を背景として」と書いてある

母に送ったメモ【図4】は短いものですが、父の性格の一面を垣間見るこ とができるので、みなさんとも共有しておきたいと思います。

¹¹朝鮮民主主義人民共和国両江道三池淵郡と中華人民共和国吉林省にまたがる休火山。高さ 2,744m

남 왜 학 이 한은 1988-89기 거로 중설 계환 के हिर्म काम स्थापम . व वर्ष हे में व 40 एरिट्र 2 1949 प्राण प्रमुक्तिया 4 देश दिए इंद्रिय म्या युद स्रिक्त रेखर साई खारेमण्डल 升等的 素好 砂划 25年 各份发生好多 盖生 2/24 101 701 the 24 8/21 the 3/2 mu 学》的 等年 从发音na. 1990ए नह सामा समित्राय गोर्ने केन से न गाम प्राप्ता के दिल देश गरेल देन देवार देश देश हीत प्राम 别是 等色学、发起 建多发物化 man अयुक्त त्यावन म रेट्ड Z'hni. 199402 83 15.7 事

図4 父が母に送ったメモ(1994年8月15日)

南載へ

この本は1988~89年の冬のあいだ、「江原道」 元山の松濤園 (休養地として有名)で書いたものです。その時から40年前の1949年に、大同江 [平壌市内を流れる河] の川辺で『朝鮮語文法』 [朝鮮語文研究会著として出版] を書いていた頃に、あなたが積極的に声援を送ってくれたことをいつも考え、耳のなかに響くあなたの鼓舞のささやき声を聞きながら、もう70歳を過ぎてからでしたが、力と勇気を出して最後まで書くことができました。

1990年夏に会ったら渡そうとしていたものですが、機会にめぐまれ

ず、ようやく今になって送ります。松濤園の国際野営所に行ってきた ユラ、ユジンを通じて送ることになったのは、何か意味があるのかも しれません*1。

内容の性格からして、惠英にとってより必要なものでしょう。

1994年8月15日

壽

このメモに書かれた、「1990年夏に会ったら渡そうとしていたものですが、 機会にめぐまれず」という言葉は、母が1990年夏に平壌を訪問したらその 時にこの本を渡そうとしたのに、それがかなわなかったという意味です。 父は1988年夏に私と会った後、母に1990年夏に平壌を訪問するよう計画を 立て、何度も懇願していました。

続いて、1996年には私の兄がトロントの離散家族何人かとともに平壌を 訪れ、父に会いました【図5】。父は兄に対し、「お前たちに鉛筆1本、菓子 1袋買ってやれなかった」と言い、申しわけなさそうにしていたといいます。





図5 父と長男・金泰正の46年ぶりの再会(1996年7月17日、平壌) (備考) 右側の写真は後列左から、平壌の弟・金泰均(3男)、父、金泰正。

^{*1} 松濤園にこもって書いた本を、松濤園に行ってきた孫に手渡すことになった偶然の意味 について述べていると考えられる。

5-2. 成佛寺の風鈴の音は佛國寺を呼びおこし

母は長いあいだ、平壌に来てほしいとの父の懇願にも、周囲の勧めにも、 行きづらい訪問をどうしてやるのかという態度をしていました。母は私た ちに、テニスン (Alfred Tennyson, 1809-1892) の叙事詩「イーノック・アーデン」 の内容¹²を比喩的に想起させたりもしました。

ところが父は1995年に脳卒中をおこし、その後遺症が少しずつ悪くなってきました。1998年、母はついに父に会いに行きました。その頃には、既に父は記憶力が依然より衰えていましたが、昔のことは鮮明に覚えており、それなりに2人は対話を続けることができたのではないかと思います。成業の事でである。1000年(1915年)での2人の写真【図6】は、55年前の佛國寺(慶尚北道慶州所在の寺)での新婚旅行の写真【図7】を思い起こさせます。





図6 48年ぶりに再会した父母(1998年7月、黄海北道沙里院市所在の成佛寺にて)

¹²愛する家族を養うために貿易船に乗り航海に出たところ、暴風雨に遭ったイーノック・アーデンは、ながい月日の後、九死に一生を得て帰ってくる。イーノックを10年も待っていた妻は夫が死んだものと信じ、イーノックの友だちと結婚して幸福に過ごしていた。これを知ったイーノックは、死ぬまでかれらに自分の生存、帰郷の事実を知らせない。



図7 新婚旅行中の父母(1943年3月24日、慶尚北道慶州市所在の佛國寺にて)

父は、体が不自由になった後も、震える筆致で母に簡単な手紙を書きま した。父が2000年3月1日に亡くなったという報せを受けて、歳月に打ち勝 つ人はいないのだなと、あらためて感じました。平壌の弟は手紙のなかに 父の遺髪を少し切って同封してくれましたが、そのきめ細やかな心をあり がたく感じました。

父と同年配だった許雄先生(ソウル大学校教授、ハングル学会会長を歴任した 国語学者、1918-2004)は、父の訃報を聞き、父が北に行かず南で研究に邁進 していたら、より多くの業績を積んだだろうとおっしゃっていたそうです。 虎は皮を残し、人は名前を残すという昔の言葉がありますが、この「名前」 というのは、まさに「精神世界」だと思います。私たちは、今日も父の世 界で呼吸をし、父を少しずつでも学んでいくことに努めようと思っていま す。

おわりに

今回のシンポジウムを準備してくださった方々の助力により、私たちは 期待していたよりも多く、より深く父の牛の痕跡を知ることになりました。 感謝の念は言葉で表現しつくせません。今回、私たちは主として父の年譜 の作成を手伝いましたが、1910年代から今日までの間を、1日に何度もタ イムマシンに乗って行ったり来たりした感じがします。一知識人の生涯に 関する話は、一国の歴史の1頁でした。

興味深いことに、父が翻訳したモーリス・クーラン (Maurice Courant, 1865-1935)の『朝鮮書誌』序論の終わりのあたりに、朝鮮について「運命のい たずらにより真価を存分に発揮できなかった」という言葉が出てくるので すが、この言葉は父にも適用できるのではないかと思います。おそらく学 問活動における社会的な条件と制約により、父は学者としての資質を十分 には発揮できませんでしたが、学者としての父の生涯が決して意味のない ものではなかったと言っておきたいと思います。父は、誰でもしたがるこ とよりも誰かがしなければならないことをしようとしたと考えているので すが、他の人があまり選ばなかった哲学科に進学し、言語学を勉強したこ とは、そうした脈絡から理解できます。父が成し遂げられなかったことを 成し遂げることは、いまや後学や子孫の役割なのでしょう。

私たちが育ちながら、胸のなかにだけ大切にしまっておき、他の人には 特に話してはいなかった父の人間的な側面を、本日ここで皆さんに少しで も理解していただけたのではないかと思いますので、心が満たされる思い です。

時代の渦のなかで、民族語の研究に生涯をかけ、どんな環境のなかでも 「最後まで科学活動をしつづける」と言った父の意志と夢がぱっと花開く ことができなかったのは残念ですが、遺族である私たちは学者としての父 の人生を振り返ってみるきっかけがつくられたことを、たいへん大切に思っ ていますし、特にこのシンポジウムを主管してくださり、充実した論文を 発表してくださった方々に、深い感謝の意を表したいと存じます。 ありがとうございます。

附録1

1986年1月15日、父が4人の子どもに対し、離別して初めて送った手紙の全文

वीर मार्य, वाष, मार्वनमा

1950世 8월초 평양교외의 어느 충養집앞 시내물에서 너희들라 함께 목욕을 하고 헤어진것이 이같이 기나긴 리벌의 첫시장이 될줄이야 어떻게 말았겠느냐? 너희들과 헤어진후 어린 꿈들이 어디서 쪽잡이라도 地변히 자고왔는지 마음을 잘은 곳에서 전계나 걱정하고 있었는데 수십년이 지난 오늘 뜻밖에 너희들의 소식과 사진을 받아보게 되고 모두다 훌륭한 사회의 명군 외 사라는 里备是出 智望 기쁘기도 하고 대社스럽기도 하다. 工外的 量率 建时日, 백早出外 生鸡的 路的 以至时观察 겠지만 누구보다도 너희들의 어머님의 공이 쿨갯이다. 너희들이 어건하겠느냐마는 너의 어머니에게 직접 보내지 못하는 Hy 胞遊冢는 검까지 합해서 연潮나 어머니를 잘 돌보아

三引卫 部份 中急力些川 别科를 부탁起다、

레자와 태경이가 나란이 서서 노래를 难 부르던 일이 때 HX 全县农业 里逛县 明亮治力, 喜라豆 등으로 산보하00일 대학 내방 창문에서 내다보면 집앞에서 뛰之后 모습이 칼 보이던 빌 등등 지산변의 일들을 회상하면 끝이 없다. 工者的五 일하다가 문득 付新電子 누구의 생일室이起次이 对子中 生에는 온종일 너희를 걱정을 하는 일이 路然다. 对强党 班 副水 우年水到水 너무 五州 城正 副時间 安徽电侧 喜到 似对 时间到 时时以外 拉洲 国科 投发之间 크면서 어떻게 되었는지? 멀려다니는 태성이를 보고 칼 松溪中山 사람들이 부러위하던 일도 생각せ다.

나는 그사이 많은것은 체험하는 가운데 항상 신범과 의지를 글게 하면서 내가 왔고, 내가 걷는길에 대한 자부심과 금지를 가지고 조국의 과학발전과 후대교육은 외해 성실히 일해왔다. 특히 위대한수정 김일성 주석보과 친에하는 지도자 김정일 선생님의 따뜻한 품속에 인기며

卫老加利丘 叶音欢 과학电子》 建元 建元午 外生观已 早效 보다도 큰 나의 행복이다. 너희들도 항상 정의와 진보를 사랑하고 새것에 민감하며 몸은 비록 이국장 에 있어도 언제나 민족적 량심은 지나고 조국의 발전과 조국의 통일을 위해 힘을 아끼지 말기를 바란다. 몸만 건강하면 알의 반의 만나게 될 날이 %을 双小叶、 대等中 叫作是 外间间 千正 十郎 计型量间 型对河 以中 新时孙玉 叶花的 当时是 小川卫 生的 董中昌 整笑 三 至孝皇 外改計正 민寺皇 外站計台 애子애寺의 사람이 되가.

外孔으로 特的 보지 灵起 四室的河童, 사위를에게 나의 인사를 전한다. 모두 훌륭한 젊의들일것이다. 그리고 소차, 손녀는 - 얼마나 재롱들은 피우고 对北岳的上美军是 计正义次十? 部分生即 卦本 外型是 星山 世外教다. 연성이도 잘 있는지? 《삼촌, 삼촌》라고 따르던 그 목소리가. 커에 깽깽하다.

시 체에도 모두들 건강하고 많은 일들을 성식히 初1 出起 ·

1986, 1.15

아버지 씀

惠慈、泰正、惠英、泰成へ

1950年8月初め、平壌の郊外のある農村の家の前を流れる小川の水で、 お前たちと一緒に水浴びをして別れたことが、これほどまで長きにわたる 離別の始まりになろうとは、どうして知り得ただろうか。お前たちと別れ た後、幼子たちがどこかでうたた寝でもちゃんとしているかどうか、心の なかの深いところでいつも心配していたが、数十年経った今頃になって、 思いもよらずお前たちの消息と写真を受け取り、みんな立派な社会の担い 手として育った姿を見ると、本当に嬉しくもあり、誇らしくも思う。

この間、もちろんお祖母さんや伯父さんの努力のおかげもあるだろうが、 誰よりもお前たちのお母さんの功が大きかったことだろう。お前たちなら

大丈夫だろうが、お前の母親に直接送ることのできない私の変わらぬ情も 合わせて、いつも母親をちゃんと手伝い、常に嬉しい思いにさせてあげて ほしいと願っている。

惠慈と泰正が並んで立って歌をうまく歌っていたことや、私と手をつないで牡丹峰、大筒江の川縁、綾羅島などを散歩したこと、大学内の部屋の窓から外を眺めると家の前ではしゃぎ回る姿がよく見えたこと、などなど、過ぎ去った日々を回想すればきりがない。なかでも、仕事をしながら、ふとお前たちのうちの誰かの誕生日だったということが思い出された日には、一日中お前たちのことが気になってしょうがないことが多かった。小さかった頃、惠慈の種痘の跡が大きくなったり、惠英の眉の下に傷あとができたりして、お前たちのお母さんと一緒に心配したものだが、大きくなってどうなったか。おんぶしていた泰成を見て、周囲の人がいい顔をしているとうらやましがっていたことも思い出される。

私は、この間、多くのことを体験したが、そのなかでもいつも信念と意志を固くし、私が求める道、私が歩く道に対する自負心と矜持をもち、祖国の科学発展と後身の教育のために誠実に働いてきた。特に偉大なる首領金日成主席と親愛なる金正日先生の温かいふところにいだかれ、今日までも心ゆくまで科学探究の道を歩くことができたのは、何よりも私の大きな幸福だ。お前たちも、常に正義と進歩を愛し、新しいことに敏感になり、たとえ体は異国の地にあっても、いつも民族的な良心をもって、祖国の発展と祖国の統一のために力を惜しまないことを望む。

体さえ健康であれば、いつか必ず会う日が来るだろう。大陸と大洋を間にはさんで、私とお前たちが離れているとはいっても、みんな一緒に希望をもって生き、心を一つに合わせて祖国を愛し、民族を愛する愛国愛族の人になろうではないか。

写真でしか見られない嫁や婿たちに、私からの挨拶を伝える。みな立派 な若者たちだろう。

それから孫たち――。どんなにかわいらしさを振りまき、どんな才能ぶ りを発揮しているか。

兄嫁とファジャの写真を見てうれしかった。ヨンシクも元気か。「おじ さん、おじさん」とついてきたあの声が耳に響いている。

新年もみな健康で、ひきうけた仕事を誠実にこなすことを望む。

1986年1月15日 父より

附録2

1990年1月1日、父が闘病中の長女・金惠慈に送った年賀状の全文

州部臺灣計劃中 A Happy New Year!

र्केट जाभा

書加至 经现 等到 學 이루어릴 '90 년대》 첫 아침을 빨르며 너와 본 집안식구현가 행봉을 충심으로 亲知她中,

세 레이트 너의 건강이 더욱 좋아 기리라고 밀고있다.

. 부디 우리의 만남이 이루어질 그날이 대한 신심을 옮기 말기 바라다.

事 1990:1.1.

慈へ

夢にも願う統一がかならず達成されますように。'90年代の最初の朝を 迎え、お前と家族みんなの幸福を心から祈る。

新年には、お前の健康がもっとよくなると信じている。

どうか、われわれの再会が果たされるその日を信ずる心を忘れないよう に願う。

1990年1月1日

壽

(板垣竜太 訳)

第 1 部

北朝鮮の言語学・言語政策と金壽卿

2 北朝鮮の言語学史をどうみるか

な 河秀

1. 北朝鮮の言語学史を理解するための前提

歴史の記述は一般的に、ある一定の対象の時間的変化と発展を普遍的に、一元論的に、ひとつの巨大な体系を中心にみる方法が大半である。全体の体系を構成するさまざまな部門の現象を、統合された流れのなかのひとつの支流として把握する視点は、歴史学ではなく、言語学的な概念で表現すると「構造主義的」*1に見るということである。しかし、構造主義的な視点の問題は、非体系的だと思われる対象を容易にその構造から排除してしまうことにある。そのような点で、特に言語学にたずさわる人間が自分たちの活動の歴史を構造主義的な矛盾を克服したうえで把握することは、難しいというよりは、多分に冒険的な思索になると覚悟することに近い。そうでなければ、言語学に関するより大きく時代的な問題を発展的に再解釈する作業には、脱構造主義化とまでは言わないまでも、既存の構造に対する認識をいったん解体し、再構造化する試みが切実に求められる。「北朝鮮社会」という、われわれにとっては排除された対象を再構造化する作業は、そのような点で大きな価値があると考える。

こうしたことから、今日、北朝鮮の言語学史を俯瞰する筆者の作業は、

^{*1} 構造(主義)言語学:1920-30年代以降から約半世紀にわたって支配的だった言語学理論。 言語を記号の体系とみる。

過去に筆者が北朝鮮の言語研究の状況を考察してきた視点は多分に構造的であり、それと同時に構造主義的だった。当時、南韓の学界が北朝鮮の学問史に注いでいた視線は好奇心、南と北に対する質的評価の欲求、民族的な愛情や期待など、おおよそ3つの視線が往々にして混ざっているか、特定の視点にとらわれがちであった。そのおかげで、北朝鮮の学問的業績についてかなり以前から抱かれてきたさまざまな偏見や感性の克服においては多くの効果が見られたものの、北と南の学問的な視点を統合、あるいは収斂させようとする試みはほとんどなかった。大半の意見が、北朝鮮の言語学も南と大きく違うことはないのだが、冒頭に入る「首領様」ということばが目障りであるとか、愛国心が過度にあらわれているせいで学問的活動なのか政治活動なのか区別がつかないであるとか、目的意識をあまりに露骨に表現していることが学問的に不適切に映る、といった不満であった。逆に、われわれがそのような視点をもつ態度自体に問題はないのかという自己反省は、少なくとも筆者の目にはまったく入ってこなかった。

北朝鮮の国語学に対する南韓の学界の論議は多様な方だが、その学問的アイデンティティーと正当性についての言及はほとんどの場合避けられる。北朝鮮の言語研究の傾向について、比較的その性格や流れを規定しようと試みている場合には、大別するといくつかの互いに異なる相貌が見られる。そのひとつとして、唯物論的な基盤に注目する金敏洙 [1989] や、これと類似しているがやや異なる見方としては民族主義的要素に関心を寄せる高永 礼 [1994]、そして内的な批判を中心にみようとする南基心・金河秀 [1989] などを挙げることができる。

金敏洙 [1989] と高永根 [1994] は、初期の北朝鮮言語学がマルクス主義 的な連携性を深く有していた点に注目する。特に金敏洙 [1989] においては、 マルクス主義的、唯物論的な哲学的基盤を見出そうとする試みが相当強 かった。それに比べて高永根 [1994] は、哲学的な連携よりはソ連の学問

との結びつきと、北朝鮮言語学の民族的性格により注目した。両者は広い 意味では類似しているのだが、細部を見るとそのアプローチの方向性に違 いが見られる。この2人の作業において際立っているのが、非常に緻密な 書誌作業である。分断状況において容易ではなかったであろう資料を非常 に細かく点検しようと努力した。一方、南基心・金河秀 [1989] は、北朝 鮮の思想的な流れよりは政策的な現象や意味などを取り上げようとしたた め、北朝鮮の初期の言語学史を取り扱うこの場での論点とはあまり関係が ない。したがって、北朝鮮の初期の言語学研究の成果を振り返るにあたっ て、どうしても原資料へのアプローチが容易ではない場合には、高永根 [1994] による整理も大きな助けとなる。

北朝鮮のようにわれわれと長い間断絶されていた社会の問題を十分に認 識するには、さまざまな資料を整理することも重要な基礎的作業ではある が、それをどう解釈するかという問題がさらに重要な価値を持つ。また、 その解釈を行うにあたり、あちらの社会が意図する観点や態度の問題もま た、対象化し客観化する必要がある。まさにその点で、金敏洙[1989]と 高永根 [1994] には残念な部分が多い。金敏洙 [1989] は、観点がいくぶん 古かったこともあるが、典型的な冷戦時代の視点をもとに解釈しようとす る傾向が強く、高永根[1994]は北朝鮮側の解釈をそのまま反復するよう に引用、羅列する傾向があるからである。そのため、北朝鮮の言語学的産 物を、学問的には非常に理解しにくい形で叙述したという弱点が歴然とし ている。

このふたつの論著を中心に北朝鮮の言語学を解釈すると、当初はソ連の 言語学理論を無批判に受容していたのが、ソ連でその理論の正当性が消滅 するや北朝鮮もその路線を捨て、のちには民族中心の主体思想に戻ってし まったという、多分に世俗的な解釈をすることになる。このようにしてか れらの研究史をみると、われわれが真剣に議論する価値などない極めて従 属的な学問に過ぎないものとなり、あえて南と北の学問的な差異や共通性 を苦労して見出す必要もなくなるだろう。また、そうした診断が、それ以 降、北朝鮮の言語学を真摯かつ粘り強く研究しようという雰囲気が醸成さ れない原因となったのではないかという批判を生み出す。

北朝鮮の言語学が歩んだ道をもう少し客観視するためには、その論点と 産物がかれらの社会の中でどのような意味を持つのかをもう少し積極的に 考えなければならない。もし仮に周時經2の意味を当時の時代的背景と関 連づけてとらえないとすれば、突如あらわれた特異な人物による、特異な 業績に過ぎなくなってしまうだろう。これと同じように、南韓の言語学に おいてもいえることだが、とりわけ北朝鮮の言語学は分断当時の時代的な 問題と切り離して考えることはできない。なぜかれらは「越北」という非 学問的な行動をしてまであのような学術的な言説をリードしていったのか、 という問題が、少なくとも我々の視点の基礎に前提されてこそ意味がある のである。北朝鮮の言語学は、そうした問題に対する前向きなアプローチ を基礎に南韓の言語学と連携させてこそ、非常に価値ある議論の結果が保 障されるのではないかと考える。

2. ソ連言語学の意味

むかしから、北朝鮮の言語学を語る際には決まってふたつの政治的な含 意のある事件を無視することが許されなかった。そのひとつが「越北」の 問題であり、もうひとつが「金料奉」の問題であった。越北の問題に重 きをおくと、かれらの活動を中心部から逸脱した周辺部のこととして捉え がちである。金科奉の問題は政治的な理由による粛清事件であり、学問的 な活動が政治領域においてはいつでも排除されうる些細なものとして認識

^{*2} 周時經:1876-1914。朝鮮語の近代的研究の創始者とされる。

^{*3} 金枓奉:1890-?。周時經のもとで朝鮮語学を学ぶ。その後、共産主義革命家となり1945年 以降は北朝鮮の要職を歴任するが、1958年に失脚。

させ、したがってその学問的な成果は当然その限界の範囲内に限定される をえないという前提を常に内包していた。

さらに一歩踏み込むと、北朝鮮の言語学は、とりわけ初期においては、 ソ連の言語学の影響から自由ではなかったという認識もまた北朝鮮社会に 関する重要な情報ではあるが、むしろ北朝鮮を歪曲して伝える逆情報とし ての役割もしっかりと果たしてしまったと考えられる。特にソ連の言語学 の影響について論じる際にしばしば取り上げられてきたマル*4の言語学も また、北朝鮮の関心事と成果をこきおろすレッテルとしてのみ機能し、一 体ソ連の言語学にどのような問題があったのか、その意味をどのように考 えなければならないのかという当前あるべき知的関心を喚起することがで きなかった。そのような点から考えると、われわれ南韓社会の北朝鮮への 認識は今ようやく始まったばかりといってもよいだろう。

まず、マルの言語学にどのような問題があったのか。これを少しでも理 解しやすくするためにはマルの位置づけが先行しなければならない。すで に金敏洙 [1989] や鄭光 [1999] で紹介されているように、彼は言語学よ りも考古学に関心が高い歴史・文化研究者であったが、特異なのは、カフ カス出身で、その地域の非ヨーロッパ言語にかなり通じていたという点だ。 すなわち言語学出身というよりは、歴史や文化史に強い関心を寄せた学者 だった。そして、その当時、言語学の主流であったインド・ゲルマン学の 研究者に比べ、非ヨーロッパ語に関する相当な専門知識を有していたこと が知られている。そうした十台のもとに彼はマルクス-レーニン主義に出 会い、革命以降、新たな世界観でもって新世界を創建しようとするソビエ トの関心を十分引きつける学説を発表したが、それは「言語に関する新理 論」と称された。

^{*4} マル (Nicholas Ya. Marr): 1865-1934。グルジア人の言語学者。1920-30年代のソ連で、言 語の単一起源論および単線的発展論(ヤフェト理論)を中核とするマル理論は「マルク ス主義的」な言語学の主流となった。

この理論の問題点はすでに金河秀 [1990] で簡略に紹介されており、鄭 光[1999]でも多くの批判的事例が挙げられている。では、なぜソ連当局 はマルの理論に正当性を与えたのかという点について推論しておく必要が あるだろう。当時は、ソ連の言語学界にさして厚みがなく、水準が劣ると いうような時代ではなかった。カザン、レニングラード、モスクワなどで 錚々たる言語学理論家や学派がすでに自分たちの学説を発展させていた。 言語学の外部からやってきたマルの舞台ではなかった。しかし、いわゆる 「マルクス主義的な言語学」、当時焦眉の関心事であったであろうまさに この問題に対して適切に機能すべき言語学は十分に成熟していなかった。 当初、マルクスやエンゲルス、またレーニンにおいても、言語問題は他の 問題について議論する際に少し触れる程度で、十分に論旨を述べることは なかった(ただしエンゲルスはフランケン方言に関する興味深い論文を書いている)。 このような空白の地においてマルは言語問題を歴史的、社会文化的な流 れを織り交ぜて、一定の唯物論的、歴史弁証法的な構成をさもありげな言 語理論として発表した。その研究が妥当なものであろうとなかろうと、ソ 連当局にとっては非常に歓迎すべきことだったはずである。当時、ソ連は 言語学の水準を高めることが目的ではなく、歴史的に例をみない新しい社 会を建設し、その妥当性を証明することがなによりも重要であった。まし てやソ連はマルクスとエンゲルスがさほど深く言及することのなかった複 雑な少数民族問題を抱えており、レーニンとスターリンは革命の過程でか れらを積極的に引き入れ、「民族自決」に共感を示した。また、そうした

ここでおそらくソ連当局は、マルの理論からふたつの有用な論点を発見 したと思われる。まず、革命の対極にある西欧の言語学理論を批判しうる、 それらしい、完全に異なるパラダイムを持った武器を発見した。もうひと つは、当時先進社会だと自負し他の地域に対して支配的な地位を占有して いた西欧社会中心ではなく、人類共通の言語、いわば原始言語の性格やそ

からこそ革命と内戦に成功したのだとも言える。

の分化過程についての歴史的説明を試みたことは、明らかにソ連の学問が 独歩的な問題領域を先占したのだと言えるだろう。

乱暴な言い方をすれば、このようなマルの言語に対する問題意識と比較 可能な西欧の言語理論となると、米国の言語相対主義理論**になるのでは ないだろうか。金壽卿が翻訳したカツネルソンの論文(『朝鮮語研究』創刊号、 1949)【図1】に出てくる「フランツ・ボアズやエドワード・サピアをその 主導者とするアメリカ民俗学*派は、北部アメリカ種族の……博物館の珍 品のごとく研究されている」(102頁)という言葉どおり、強い対抗意識を 抱いていた。そのような点で、ソ連当局にとってマルの理論は、西欧社会 の偽善的な市民文化、かれらが世界を認識する方法などを根本的に揺るが す道具であり、その言語や社会、文化を歴史的に織り交ぜたパノラマは確 かに有用だったと考えられる。しかも、西欧社会の研究成果をもってして は反論を行うことが容易ではない北アジア、カフカス地域の珍しい言語を 資料として用いることは、マルクス主義を粗雑なイデオロギーではなく、 真の「代案的な世界」を提示するシンボルとして掲げるに値すると思わせ ただろう。

当時(1920年代から30年代)のソ連は内戦と飢饉、そして農業政策の諸問 題によってかなり困難な局面に差しかかっていた。ややもすれば革命の理 想と生活の現実との乖離が大きすぎて、危険なほどであった。この危機を いわゆる鉄拳政治ですり抜けたわけだが、ソ連にとって幸いなことだった のか、西欧社会もかなり苦しんでいた。そのような苦痛のなかで、次第に

^{*5} 言語相対主義(linguistic relativity):米国では人類学者ボアズ(Franz Boas)が、「遺伝」や 「本能」などよりも文化が人間のあり方を規定するという文化相対主義を提唱した。そ の弟子である人類学者・言語学者サピア(Edward Sapir)とその影響下で研究したウォー フ(Benjamin L. Whorf) は、さらに現実に対する認識は言語によって規定されるというサ ピア=ウォーフの仮説(言語相対主義)を提示した。

^{*6} 民俗学(민속학):北朝鮮では民族学・文化人類学に相当する学問領域を「民俗学」と総 称する。ロシアの etnografiya の訳語である。

坐베三 一般 言語學 三十年

에스 • 데 • 까쯔넬손

社會主義 十月 革命은 우리들의 社會的 生存의 物質的 基礎의 發展에 있어 뿐만 아니라 生活의 모든 上層構造的 面과 精神文化 의 數많은 連鎖 위에서도 새로운 시기를 融하였으며, 또한 이리 하므로씨 华明트의 友好的 諸人民들로 하여금 모든 進步的 人類 의 前衞部隊로 만들었다. 이대율로기的 女化的 創造의 어느 한 部門도, 全國을 휩쓸어 沸騰하는 活動의 生生 躍動하는 奔流로부 러 離脫하여 있는 것은 없었다. 數世紀間의 偏見의 重壓과 貴 族的 世界觀의 狹量으로부터 解放되는 同時,象牙塔의 幽寂境으로 부터 聰明한 全人民의 事業이만 廣濶한 大地로 脫出한 쪼베르의 科學은 社會主義的 分聚의 全体系 가운데 名譽스리운 地位是 外 지하였으며, 부르쥬아 西默羅巴의 ূ 齊落的, 半轉移的 吳 神秘的 《春 學》理論으로부터 이물 뚜렷이 差別짓는 固有의,쪼페트의 刻印을 받았다. 새로운 方向과 明確한 쓰베트的 面貌을 띠게 된 科學的 活動의 諸部門 가운데서 "實踐的 現實的 意識" (맑스와 엥겔스) 으로서의, 《社會的 交際의 가장 重要한 手段》 (레닌) 으로서의, 그리고 《發展과 鬪爭의 道具》 쓰막린) 로서의 言語 및 言語文 化에 關한 科學 -- 言語學은 決코 末席을 차지하지는 않는다.

図1 カツネルソン「ソビエトー般言語学の30年」(金壽卿訳)

ファシズムが強く根を張りはじめていた。順調だった米国も1920年代半ばに大恐慌で大きな打撃を受ける。しかし豊富な資源を利用してなんとか立ち直った。日本もまた、この難局を乗り越える過程で満州と中国を攻撃した。ソ連はかろうじてこの時期を乗り切った。ヨーロッパのファシズムはソ連を憎悪したが、かれらの憎悪はむしろソ連の正当性を確認させただけであった。ソ連はついにその実体的存在が認められたのである。国家と制度、そしてその理念や文化はみな存在意義を有するようになり、数多くの弱小/少数民族がソ連に対してロマンを抱いた。

要するにソ連は、さらにいえばマルの理論は、西欧社会、ブルジョア世

界に対抗するアンチテーゼを提示することに成功した。多くの人は否定し たが、にもかかわらずスターリンはソ連で階級が撤廃されたと宣言した。 哲学的には意味のない言葉であったが、政治的には充分に効果のある宣言 だった。

3. ソ連の変貌とソ連言語学の変化

第2次世界大戦を勝利で迎えた日、ソ連は、否、スターリンは有名な演 説を行う。彼は戦争の勝利を「偉大なソビエト人民」ではなく「偉大なロ シア民族の勝利」であると宣言した。すでにソ連はさまざまな民族の共同 体というよりは、いつしかロシア化した巨大国家になっていたのである。 もはや自らの存在価値を認めてもらおうと躍起になっていた過去の姿とは 決別し、全世界を米国と二分する巨人になったのである。ロマンをもつ欲 望よりも新世界を守ることがより重要になった。ほどなく広大な土地を誇 る中国もかれらの陣営に立った。核兵器も手に入れた。

そうなるとソ連は、数多くの弱小/少数民族の民族性やかれらの固有の 文化が染み込んだ土着語の発展を切実な問題と認識するよりも、「現実」 における世界的な支配力を一層重要視するようになったと考えられる。し たがって、多種多様な諸民族の、多様な言語の歴史的妥当性や不可避な存 在理由を説明することよりも、すべての共産社会を代弁する代表性がより 重要になったのである。かれらに先行した多くの帝国が内部に多くの少数 民族を抱えていたように、かれらもまた、多様な少数民族を抱える、もう ひとつの巨大な帝国となったのである。

前述のとおりマルの言語理論は、実のところ言語理論というよりは歴史 的なインスピレーションに基盤を置く、そしてその上に唯物論的弁証法の 衣をまとったロマンであった。この論理を受け入れる限り、言語的事実に もとづいた言語研究は、互いに相容れない。言い換えると、衣替えの時期 がやってきたのである。

スターリンは、1950年の『マルクス主義と言語学の諸問題』【図2】という論評において、マルの正当性をはっきりと拒絶した。先に述べた北朝鮮言語学研究者たちはこれを西欧構造主義への還元であるとか、真のマルクス主義への回帰であるとし、言語学理論の大変革のように語ったが、これは言語学ではなく、政治的な決断であったと思う。すでにソ連では、唯物論的な言語学がそれなりに活発に自己発展を模索していた。言語と哲学のヴォロシーノフ*7、文学と詩学のバフチン*8、言語発達と失語症研究のルリヤ*9、また言語活動理論のレオンチェフ(とその息子)*10などは、現実の中での言語問題を地道に研究し、むしろ西欧社会に多くの示唆を投げかけるという、唯物論的でありながらも言語学的な、また多くの場合心理学的な成果を掘り起こした。嘲笑気味に言えば、マルはすでにこの世にはいなかったが、のみならず、もはや世界は彼を必要としていなかったのである。

マルの言語学に対する批判のなかで、あたかもその反対論者がひどい迫害を受けていたかのような言及については、まだ少々疑わしい部分が残っている。もちろん、その反対論者のうち、もっとも悲劇的な人物はポリワーノフ***であった。だが、彼が起訴されたのはマル理論に反対したという罪名ではなく、日本のスパイであるという嫌疑だった(彼はかなり独歩的な日本語学者だった)。マルの理論に反対するという行為が起訴の対象となる状況ではなかったと思われる。当時は日本との軍事衝突が続いていた時期で、

^{*7} ヴォロシーノフ (Valentin N. Voloshinov): 1895-1936。ロシア-ソ連の言語学者。『マルクス 主義と言語哲学』(1929) などで知られる (ただし同書はバフチンが書いたと言われる)。

^{**} バフチン (Mikhail M. Bakhtin): 1895-1975。ドストエフスキーやラブレーらの文学研究、言語研究で知られる。

^{*9} ルリヤ (Aleksandr R. Luriya): 1902-1977。ソ連の神経心理学者。

^{*&}lt;sup>10</sup>レオンチェフ(Aleksey N. Leont'yev): 1903-1979。ソ連の心理学者。息子の A. A. レオンチェフ(1936-2004)は心理言語学者。

^{**&}lt;sup>11</sup>ポリワーノフ(Yevgeny D. Polivanov): 1891-1938。ロシアの言語学者。日本語やアルタイ 諸語を研究した。



図2 スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』朝鮮語訳(1952年)

地理的にかなり離れた日本の攻撃行為がソ連にとっては非常に危険なもの と映り、ソ連が過敏に反応するということが頻繁に起こった時期でもあっ た。また、だからこそ満州の東北抗日遊撃隊がソ連に制圧され、高麗人が 中央アジアに強制移住させられもした。

マルとマル理論が姿を消した過程を誇張して描き、あたかも重大事件で あるかのように表現するものもいるが、それ以降もマルの追従者は自分た ちの研究を続けた。彼のヤフェト理論を継承したメシチャニーノフ*12(北 朝鮮の文献では州外山上世と表記)は、その後もマル理論の枠内で大変興味深 い主張を提示している。とくにマルの語彙文化論的な研究を通史論のレベ

^{*12}メシチャニーノフ (Ivan I. Meshchaninov): 1883-1967。ロシア (ソ連) の言語学者で、マ ルの言語学を体系化した。

ルに発展させたという評価も聞かれる。したがって、マル言語理論の廃棄を天地開闢が起こったかのようにみなすのは、マル言語学に対する客観的 認識ではなく、嫌悪感の表現に近い。

4. 北朝鮮の初期言語学はどのような意味を持っていたのか?

言語学は政治とどのような関係にあるのだろうか。おそらくこのような 主題自体、非常に興味深く、独立した研究領域になり得るだろう。言語と 思考、そして理念、また理念と社会構成などのつながりを考えると、この 部分でも無数の論点が存在するだろうが、本稿ではこの部分について深く 踏み込む余地はないように思う。

時代の転換期に言語学が一定の役割を果たしてきたことは、言語学史を綿密に検討すればある程度推測することができる。ドイツが現代化する過程でフンボルト*¹³とグリム兄弟*¹⁴は、ドイツ語とドイツ国家の連携を強化することに貢献したといえる。これについての論争は一旦措こう。青年文法学派*¹⁵の登場は、産業化および市民社会の発展と充分に連携可能であったと考える。ソシュール*¹⁶の言語学は、西欧語にみられる重要な言語的現象を通じて、非常に普遍的な説明の枠組みを獲得した。インド・ヨーロッパ語中心の言語学が、普遍性の形式を整えたのである(事実、マルの言語学あるいはソ連の言語学者らの関心や批判もここにあった)。それに対し、サピア=ウォーフの言語相対主義は、珍しい言語や未知の言語の特殊性にもその正

^{*&}lt;sup>13</sup>フンボルト (Wilhelm bon Humboldt): 1767-1835。ドイツの言語学者でフンボルト (ベルリン) 大学の創設者。

^{*14}グリム兄弟(Brüder Grimm):19c. ドイツの言語学者・民話収集家。グリム童話で有名。

^{*&}lt;sup>15</sup>青年文法学派(Junggrammatiker): 1870年代からドイツのライプツィヒを中心に影響力をもった言語学の一学派。

^{*&}lt;sup>16</sup>ソシュール(Ferdinand de Saussure): 1857-1913。スイスの言語学者。一般言語学、構造言語学の創始者とされる。

当性を与えた。ヨーロッパ帝国主義とファシズムに対するアンチテーゼの 性格が表れていると言える。

朝鮮の初期の言語学者・周時經は、中世の朝鮮に対するアンチテーゼを 提示した。つまり近代化の推進において多分に政治的な役割を果たしたの である。振り返ってみると、韓国社会における規範文法に関する論争や標 準語の査定および言語純化運動は、近代市民社会における主導権を誰が握 るのかという問題と深く関わっていたのではないかと思う。文法は、ある 特定の言語規範の正当性を確認し、標準語の査定と言語純化は一定の語彙 に対して正当性を与える一方、その他の語彙の正当性を剥奪するための排 戦であった。北朝鮮の言語学者らは当然、解放以前はこうした政治的・時 代的・理念的な流れに積極的に賛同した者たちであった。かれらにとって 「越北」は、このような自らの歩みとは特に矛盾しない行動であるととら えられただろう。

一方、平壌に樹立された政権にとっては、政治的、軍事的な安定も重 要であるが、何よりも理念にもとづく価値の正当性を確保することが急が れたと考えられる。伝統的な中心地から地理的に離れた不利な条件は「民 主基地論 |*"で克服し、土地改革を通じて大多数の住民の利益を保障し、 さらに文盲退治、漢字の廃止などにより、社会革新を躊躇していた南韓の 政府よりも新たな時代に見合った正当性を確保しようとする努力に、言語 学者は当然呼応しようとしたであろう。さらに、このような差別的な路線 に一層普遍的な価値を与えることのできる政治的・学問的な言説が必要と されていたであろうし、それに対してソ連の「最新言語学理論」が充分に 応答したと思われる。

対する南韓では、言語学の領域において「民族性の言説」と「科学性の

^{*17}民主基地論:1945年以降の南北分断状況において、北朝鮮を朝鮮統一および民主主義革 命の根拠地としなければならないという考え方。

言説 | が衝突し、非常に長い間、政治的にまたは時代的に有用な理念の枠 組みを提供する言説を展開することができなかった。1980年代に入り、な んとか一定の妥協的条件のなかである程度の整理が行われたが、もどかし くもつらいのは、その後言語学において民族性の言説や科学性の言説が統 合されることなく、非常に異質な性格を持ち、異質な機能を果たすことと なったことである。

結局、北朝鮮の言語学者が、一方では当時最も信頼のおける友邦であっ たソ連の学問的な潮流に共感を示し親密さを覚えていったのは、北朝鮮社 会の正当性の根拠を強化するための、政権への重要な貢献だったのであり、 他方では北朝鮮社会における再編成と革新を主導する勢力と手を結ぶこと で、その後の言語政策を遂行しうる動力を獲得したのだと考えられる。

したがって、北朝鮮の学界が示したソ連の言語学、特にマルの言語学に 向けた関心は、さほど大きな誤謬ではなく、さほど惨憺たる破局を招いた ものとみなさない方がよい。ブルームフィールド*18の言語学理論が降盛な なかで、チョムスキー*19の言語理論がその限界を批判する形で登場し、近 年コンピューターを利用した量的な研究や対話分析を通じた質的な研究が 行われても韓国社会にさほど動揺が生じないように、北朝鮮の言語学は当 時の時点において国際関係のふたつの政派の一方、自分たちに最も有利な 側の肩を持ったに過ぎない。

むしろ北朝鮮の学界はその後、辞典編纂、文法研究、文化語*20政策など を通じて自らが直面する社会問題に対応していった。一部の現象は南韓と 類似しており、一部は異なっていた。南韓に比べて相対的に民族性の言説

^{*18}ブルームフィールド(Leonard Bloomfield): 1887-1949。米国の言語学者。アメリカ構造主 義言語学の創始者。

^{*19}チョムスキー (Noam Chomsky): 1928-。米国の言語学者。生成文法論の創始者。

^{*20}文化語(문화어):標準朝鮮語という意味で、1966年の金日成の教示にもとづき「標準語」 という言葉に代わって用いられるようになった。

と科学性の言説をほどよく統合した北朝鮮の言語学界の強みは、その基礎を磨いた草創期の朝鮮語文研究会***1を中心とするさまざまな言語専門家の貢献に基づいている。

政治的には不運な運命を辿ったが、金枓奉の新しい文字*22の主張は、実際その実用性は実に問題であったが、言葉の音をとらえるその鋭い視点は非常に斬新であった。李克魯*23の組織力や指導力は、南でも北でも始終一貫していた。そして北の社会が求めていた進歩的言説に基づいた言語理論を紹介、整理し、頭音法則の問題を取り上げる中で示された精密な言語学の学術的言説を磨き、政治的正当性と言語生活の両面における発展に寄与した金壽卿の功労は、いつかは必ず実現すべき南北の言語学の学問的(再)統合において、消えることのないくっきりとした足跡を残している。

参考文献

高永根 [1994] 『통일시대의 어문문제』, 서울: 길벗.

金敏洙 [1985, 1989] 『增補版 北韓의 國語研究』, 서울: 일조각.

金河秀 [1990] "〈서평〉金敏洙 [1989] 북한의 국어연구", 『주시경학보』제5집, 서울: 탑출판사.

南基心, 金河秀 [1989] "북한의 문화어", 高永根 편『북한의 말과 글』서울: 을유문화사.

鄭光 [1999] "구소련의 언어학과 초기 북한의 언어 연구", 『언어정보』2집.

Bruche-Schulz, Gisela [1984] Russische Sprachwissenschaft, Tubingen: Niemeyer.

Girke, Wolfgang & Hachnow, Helmut [1974], Sowjetische Soziolinguistik, Kronberg: Scriptor.

(李陽早 訳)

^{*21}朝鮮語文研究会(조선어문연구회):北朝鮮で1947年に公的に設置された研究組織。1949~50年に雑誌『朝鮮語文研究』を発行した。

^{*221948}年に金枓奉の名義で「朝鮮語新綴字法」案が公表された際、新たな6つのハングル要素=新6字母が提案された。ただ、その後、実際にはほぼ使われなかった。

^{*23} 李克魯: 1893-1978。朝鮮語学会の中心人物の一人で、1948年に越北した。

3 国語学史の観点から見た金壽卿

チェ ギョンボン 展

1. 序論

この論文は金壽卿の言語学関連の翻訳物、文法論および文体論に関連した論文などを分析し、その研究が持った国語学史的な意義を明らかにすることを目的としている'。

金壽卿は1940年代後半から60年代末までに文法論、言語政策論、文体論などを主題としたさまざまな論文や単行本を発表したが、それらは当時、主要な論争の中心となったり、新たな領域を切り開いたりするような研究であった。ここで注目すべき点は、彼の研究が構造主義的な分析の方法論に依拠していただけでなく、当時のソ連言語学の研究動向に敏感に反応していたという事実である。このような研究履歴からすれば、彼は伝統的な国語学の議論を深化し多角化するのに極めて大きな役割を果たしたということができる。だとすれば、金壽卿に関する研究は、北朝鮮の国語学の研究傾向を把握するという次元から抜け出す必要がある。特にソ連言語学界の研究成果を翻訳紹介し、これを国語研究に適用したことを理念的な側面のみから評価し²、その結果、彼の研究に対する国語学史的な評価を疎か

¹ 筆者は、窮極的には南北朝鮮の研究を包括した国語学史が記述されるべきだと考えており、 このような観点から「国語学」と「国語学史」という用語を使っていることをことわっておく。

² 金壽卿を、唯物論的言語学に象徴されるソ連言語学を導入して北朝鮮の国語学を確立した 人物としてだけ見ることがその一例である。

にしてきたことは反省を要する部分である。

このような問題意識にもとづき、先に発表した論文[崔炅鳳2009]では 金壽卿の研究を翻訳、文法論、国語政策論、辞典学、文体論、国語学史な どに分けて整理しながら、彼の研究が持っている国語学史的な意義を概括 的に評価した。しかし概括的な研究であるがゆえの限界があり、崔炅鳳 [2009] においても金壽卿の研究を深く分析し、研究史的な位相を明瞭に 示すことはできなかった。したがって本稿では、崔炅鳳 [2009] の議論を 深化することを第一の目標として設定し、金壽卿の研究のなかでも、国語 学史的に意味があると判断される論文を集中的に分析し、それらの国語学 史的位相を明らかにしようと思う。

本稿は、次のような順で議論を進める。2では、金壽卿の研究履歴と彼 の研究から把握し得る言語学的な問題意識を連結させながら、金壽卿に対 する国語学史的な評価の方向と枠組みを定める。3では、彼の国語学論文 のうち代表的な4本の論文3を分析・評価する。

2. 言語学的な問題意識の国語学史的意義

金壽卿が活動していた頃、社会主義圏の国の言語学者たちは、構造主義 的な分析の方法論とマルクス主義の世界観を調和させるという問題に苦心 しなければならなかった。当時の状況において、言語分析の方法論は基本 的に構造主義の方法論を受け容れるほかなかったが、その一方で、言語の 歴史性と社会性を排除しながら言語体系を構築することに関心を傾けた構

^{3 [}金壽卿 1947] 1947.05. 「龍飛御天歌挿入子音考」『震檀学報』15. 「金壽卿 1956a 1956.02.「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について(上)」『朝鮮語 文』1号.

[「]金壽卿 1956b 1956.04.「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について(下)」『朝鮮語 文』2号.

[「]金壽卿 1963」1963.08.「文風についての理解をさらに深化するために」『朝鮮語文』3号.

告主義は、理念のうえで歴史性と社会性を根幹に据えるマルクス主義と背 馳していたためである。しかしこのような時代の要請は、言語学の方向に ついて新たな摸索をする契機にもなった。金壽卿の研究は、理念の時代を 生きなければならなかった構造主義者が、理念を意識して模索した研究の 様相をよく示している。この章では、金壽卿の問題意識を、構造主義的な 研究方法論と唯物論的言語観の調和、理論的国語学と実践的国語学の調和 に分けて検討する。

2-1. 構造主義研究の方法論と唯物論的言語観の調和

崔炅鳳 [2009] では、金壽卿が1947年に発表した論文「龍飛御天歌挿入 子音考」に注目しながら、この論文について、構造主義の方法論を国語文 法研究に適用させた最初の業績として評価した。崔炅鳳 [2009] で特に注 目した点は、「サイシオッ(外の外条)|**の分布の様相を把握し、その特性 を明らかにする手続きだったが、このような手続きにおける厳密性は、同 時代の研究水準を考慮したとき、科学的言語研究の模範事例だと評価し得 るものである。

このように金壽卿は科学的言語理論を受容し、これを国語の現状分析に 適用することによって国語研究の水準を高めるのに寄与した。卓越した外 国語の実力と東京帝大言語学科大学院で修学した経歴などを考慮すれば、 彼は当時の国語研究の科学化という時代的要求に応えることができる数少 ない研究者だったのある。だが、金壽卿の学問的経歴を見ると、彼を構造 主義理論に精通した研究者であるということだけでは評価できないことが わかる。

金壽卿は、ソ連の言語学書籍と論文を翻訳しながら、これを自らの議論

^{*1} サイシオッ:2つの語を合成する際にその間 (サイ) に挿入する'人'(シオッ)のこと。 (例) 中午 (海) +カ (へり、際、端) = 中子 (海辺)。

に適用したが、そうした研究は、唯物論的言語学を志向した北朝鮮の国語学界が理論的土台を構築するのに寄与した。ここで、彼の研究傾向に関連して特に注目しなければならないのは、彼が1949年に翻訳した『言語学』(A.A.レフォルマッキー著)である。南北朝鮮の国語学界に、言語学の概論書が翻訳されていなかったという現実と、当時のソ連言語学の高い水準がなどを考慮すれば、この本の翻訳は科学的な言語研究の方法論の受容と普及という側面から新たに評価する必要がある。

『言語学』の構成および内容上の特徴は、2つの側面から整理することができる。まず、この本は言語の構成単位と分析方法に対する説明を基本に据えてはいるが、それぞれの説明に歴史主義的な観点を付け加えている'。こうした点から、言語の本質を歴史性と力動性に求めながらも、文章および単語の構造分析と言語単位についての概念を確立する過程においては構造主義の成果を忠実に反映しているということを確認することができる。

(金壽卿が翻訳した『言語学』における概念設定の事例)

音韻:「音韻とは、形態部〔形態素の北朝鮮での訳語〕および語の区別に

⁴ 原著は1947年に発行されたレフォルマツキー (А.А. Реформатский) の 《Введение в языковедение》 (言語学概論) である。この本は1967年まで持続的に改訂版が出るほど、ソ連の言語学界に多大な影響を及ぼした。1955年に出た最初の改訂版で大幅に直された部分はマル理論を紹介した第6章(世界の言語とその分類)であった。

⁵ プラハ学派から構造主義が本格的に発展し始めたが、プラハ学派の主軸はロシア・フォルマリスト (形式主義者) たちだった。かれらは1920年代後半にマルクス主義者たちから批判を受けてソ連の学界を去ることになったが、かれらによって発展した構造分析の方法論までが否定されたわけではなかった。

⁶ この本は大学の教材用として翻訳された本だが、その点において、この本の記述内容と翻訳された文法用語は北朝鮮の国語学が体系化される過程で主要に参照されることになった。

⁷ 一例として、品詞について説明した後、次のような追加説明を付け加えている場合を挙げることができる。「注意すべきは、品詞が決して時間と空間を超越した永久的な範疇ではなく、その逆に、言語と時代によって制約される歴史的現象であるという事実である。」 (172ページ)

用いられる、言語の声音構造の単位であり、それによって言語の意味 的な単位(形態部、語、文章)が構成される最小の要素である。」(124頁) 音韻体系:「音韻が意味的な役割を担うことになるのは対立のおかげ である。ただ1個の標識によって区別される対立を相関対立または相 関とよぶ。| (126頁)

変移音:「変移は常に1個の音韻に属してそのニュアンスとして現れ る。」(128頁)

形態素:「形態部は語詞において意味を有する最小の単位である。」 (141頁)

次に、この本の構成を見れば、音韻論と文法論に先立って語彙論の領域 を最初に提示している。特にこの本での語彙論が構造主義的な意味関係だ けでなく、「多義性、隠喩、換喩、文脈 (脈絡)」等を重要なものとして扱っ ている点は注目する必要がある。語彙論を強調したのは「単語、語音、文 法的範疇 | 等を分析するときに、その文体論的な意義をあわせて考慮しな ければならないという観点を反映したものである。このように、言語の歴 史性と言語使用の具体的な脈絡を重視したのは、歴史主義と文脈主義にも とづいた唯物論的な言語観によるものだと言うことができる。

以上、『言語学』の構成と内容から見たソ連言語学の傾向は、北朝鮮の国 語学界における研究傾向、特に金壽卿の研究傾向を理解するうえで示唆す るところが大きいが、これは2つに整理することができる。まず、北朝鮮の 国語学で確立しようとした唯物論的観点は、いわば歴史的でダイナミック な観点からの言語研究だったが、それが構造主義の研究方法論との断絶を 意味するわけではなかったという事実である。 歴史主義的な言語学と構造

⁸ 金壽卿が翻訳した『言語学』は、1953年にマル理論に対する批判が本格化するなかで出版 が中断していたが、1955年に柳應浩によって新しい言語学概論書である『言語学概要』が

主義的な言語学のあいだが断絶しているというよりは、ある面においては相互補完的な特性を持っていたという点®を考慮するならば、このような見方は容易に首肯されよう。もう1つは、金壽卿の研究が文法論研究から文体論研究へと拡張していき、北朝鮮の国語学界が文体論研究を重視する傾向を帯びることが、ソ連言語学界の流れと連関しているということである。

では、これまで初期の北朝鮮国語学の展開過程について、「ソ連言語学理論の導入と構造主義文法との断絶」として単純化する態度が一般化されてきたのはなぜだろうか。これを知るためには、まず1950年代前後の唯物論的言語学に対する北朝鮮の国語学者の認識態度を点検する必要があり、その次に唯物論的言語学に対する現在の韓国の国語学者の認識態度を点検する必要がある。

北朝鮮の政府樹立以後、北朝鮮の国語学者たちはマルクス主義を国語学研究に適用しようとした。北朝鮮の国語学者たちがソ連言語学に注目したのはそのためだった。金壽卿の学問的経歴を見れば、彼もまたマルクス主義言語学者としてソ連言語学の新しい動向に関心を持ったことがわかる。彼は当時「新言語理論」と呼ばれたソ連言語学者マル (Marr, Nikolai Yakovlevich)の言語理論を翻訳して紹介しただけでなく、既存の朝鮮語学界のなかにもマル理論のモデルを探そうとした¹⁰。このような事実をよく示している文章が「朝鮮語学者としての金科奉先生¹¹」である。この文章は、60回目の誕生日を迎える金科奉の学問的業績を称賛するものだったが、当時のソ連

翻訳・出版された。これは当時のソ連言語学の概論書の翻訳の政治性をよく示す事例である。ただ、マルの見解に対する評価を除くならば、2つの本に提示された言語学研究の目標と方法に大きな違いはない。

⁹ 構造主義言語学は歴史主義言語学に対する反動であったが、歴史主義の観点を否定したというよりは、これを前提としながら言語の共時的な体系に注目したということができる。

¹⁰ ウリマル〔朝鮮語〕を研究したマルクス主義者のうち、申南澈や浜起文などは、1930年代からソ連言語学の動向に関心を持っており、この過程でソ連の言語学者であるマルの理論を紹介したこともある。これについては崔炅鳳 [2012] を参照されたい。

¹¹ この論文は、1949年6月に『朝鮮語研究』1-3に掲載された。

言語学の理念的基盤となったマルの言語理論を金枓奉の言語理論と対比させて説明したという点で注目する必要がある。金壽卿は、社会の発展過程にしたがって言語の姿と言語学の役割が決定されるという観点から、言語改革を志向する金枓奉の見解をマルの言語理論に対応させてその意義を強調したのである。しかしマル理論の批判から出発したソ連言語学界の理念論争が終わった1950年代半ばから、金壽卿は積極的にマル批判に乗り出した¹²。こうした金壽卿の歩みは、ソ連言語学界の理念論争が北朝鮮の言語学が方向性を定立するのに一定の影響を与えたことを示す例であると言うことができる。

しかし、既に述べたように、『言語学』(1949) と『言語学概要』(1955) などのように、マル理論の追従期と批判期に出た研究書を見れば、言語分析の方法論は大きく変わらなかったことが分かる。言語学の理念論争が言語分析の方法論や言語理念を定立するのには実質的な影響を与えなかったのである。これはマルクス主義言語学者のあいだでおこなわれた言語学の理念論争を、言語分析の方法論の受容という問題とは距離をおいて理解する必要があるということを物語っている。

^{12『}イ・ヴェ・スターリンの労作に照らしてみた言語学の諸問題』(各大学語文学部用、1952年にモスクワ大学で刊行したものを翻訳)と『ソビエト言語学の諸問題』(翻訳論文集、ロシア科学アカデミー学術会議資料集に発表されたものなどを翻訳・編集したもの)は、それぞれ1954年と1955年に相次いで出版されたが、この書籍の出版の主要目的は、マル理論を批判してスターリンの言語理論を強調することだった。金壽卿は前者の書籍の審査員であり、後者の書籍では、「言語学の問題に関するイ・ヴェ・スターリンの労作が社会科学の発展に対して持つ意義」、「言語学においての比較歴史的方法に関する問題について」、「言語学に関するイ・ヴェ・スターリンの労作に照らしてみた中国と日本における民族語について」の3本の論文を翻訳した。

¹³ 高永根ほか [2004:21] では「旧東ドイツから出た言語学書籍を見れば、常に底辺には唯物論を置きつつ言語の構造を探索する方向の叙述法を採っている。こうした点を見れば、唯物論のようなイデオロギーは本質とは距離が遠いうわべの装いである可能性が多い」と指摘している。しかし高永根ほか [2004] ではこのような傾向が1960年代以後、社会主義圏で構造主義言語学を受け容れたことで現れた結果と見ているが、これは実際とは違う主張である。

ソ連言語学界と北朝鮮の国語学界がマルの言語理論に注目したのは、あらゆる方面において唯物論的な世界観を構築しなければならなかった時代の要求にマル理論が適合的だったためである。マル理論をめぐる言語学の理念論争も、マル理論で強調された言語の発展法則やそれにもとづく言語的実践の適切性に関する論争であった。こうした脈絡から見れば、構造主義が批判の対象となったのは、まさに構造主義言語学の原理が言語の発展法則と言語的実践を考慮しなかったためである。したがって構造主義への批判があったからといって、すぐに具体的な文法現象の分析から構造主義的な分析の方法論までも排斥されたかのようにつなげて考える態度は、北朝鮮の国語学界の流れを事実から把握するためには障害となり得るのである。

2-2. 理論的国語学と実践的国語学の調和

金壽卿の国語研究は、1947年の傾向をそのまま維持したが、1949年から1956年のあいだに発表した論文の大部分は、単語の形態と機能に対する徹底した分析が目立って見られる。ただし、当時の議論では、言語研究の実践的な適用を模索する態度、実践的な適用において理論的根拠を確認する態度が目立つという点に注目する必要がある。

最初に、金壽卿は理論的研究と語文規範の問題とを関連付けて議論する態度を示していた。「龍飛御天歌に見える挿入字母の本質」という1949年の論文は、越北以前に発表した「龍飛御天歌挿入子音考」と内容が似ているが、綴字法 [正書法] の問題の解決を模索するための議論であることを表明している点、崔 兹 培の議論 **を批判している点、ソ連言語学の議論の内容を参照しているという点などで違いが見られる。なかでも、綴字法

¹⁴ 金壽卿と崔鉉培の議論はサイシオッを「の」[의] のような機能をするものと見なさないところでは共通しているが、崔鉉培 [1937] ではサイシオッを文法的な接辞として説明しているという点において金壽卿の議論と違いがある。

問題を解決しようとする目的が最も際立っているが、これは当時の形態主 義綴字法*を確立するのに「サイシオッ問題」が論争の種だったためだ。 金壽卿は1947年、『労働新聞』に3回にわたって論文を連載したが15、彼はこ の論文でも頭音 L(n)、 l(r) の表記に関連して現れる「ハングル正書法統 一案」の表音主義的偏向を批判して、形態主義表記の合理性を主張した。 次に、金壽卿は言語理論的議論を辞典編纂や文字改革などと関連付けて 議論した。「叶〔토〕|*3の性格規定に関する議論が本格化した時期に発表し た1956年の論文「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について(上、下)」 で、金壽卿は叶の性格を究明する問題を、ソ連言語学界の議論、辞典編纂 の慣習、分かち書きおよび文字改革問題などと関連させて議論した。屈折 語™では語尾部分を独立的に辞典に載せることがないが、朝鲜語辞典編纂 では叶を他の語彙と同じ資格で載せているという点を指摘して、叶の単語 的性格を強調したり、叶を単語として捉えてこそ叶を分かち書きが可能と なり、叶と語幹を分かち書きすることが分解横書き**の文字改革に寄与し

^{*2} 形態主義綴字法:綴りが不規則になっても発音に合わせて表記する表音主義に対し、形 態の一貫性を重視する立場を形態主義という。

¹⁵ この論文は「朝鮮語学会〈ハングル正書法統一案〉中で改正すべきいくつかの其一 漢字 音表記において頭音 L 及び E について」(『労働新聞』1947.06.06-06.08.) に収録されており、 「『民族語大辞典(겨레말큰사전)』南北共同編纂委員会第7次会議資料」に再収録された。

^{16「}ハングル正書法統一案」と外来語表記法の根本原則に基づいた批判、各言語の様相を実 例にした批判、ハングル学習の慣習を根拠とした批判などがそれである。

^{*3} 吐(豆):もとは漢文を読むときに漢字に添えて読む朝鮮語の送り字の部分(日本の漢文 訓読におけるヲコト点に相当)を意味していたが、20世紀になると助詞と同様の意味で 用いられ、さらに北朝鮮では文法上の独特の用語となった。

^{*4} 屈折語:例えば英語で「私は」は "I" だが「私を」は "me" となるように、動詞・名詞等が 文中での機能にしたがって異なる形をとる言語。ヨーロッパの多くの言語が当てはまる。

^{*5} 分解横書き:プロスギ(풀어쓰기)、プロソ・カロスギ(풀어서 가로쓰기)などと称さ れる。通常ハングルは、単音字を音節単位で方形に組み合わせて1文字を構成する。これ をアルファベットのように横にばらして表記することを「分解横書き」という。例えば、 つ(k)と ト(a)を組み合わせて、"斗"(kak)という1音節の1文字を構成する代わりに、 "¬ト¬"と表記するような正書法である。

得ると主張したりした。

第3に、理論と実践を調和させようとする金壽卿の問題意識は、文体研 究へと拡張される。構造主義的文体論を基本に言語学的な文体論を体系化 しながら、表現の効果を高めるための方策を理論体系に組み込むうとした 点も、理論と実践を調和しようとした事例として挙げることができるだろ う。このような一連の過程は、構造主義方法論に忠実な文法学者でありな がらも、絶えず実践的国語学を追求し、自身の学問領域を拡張させた金壽 卿を理解するのに重要な端緒になるだろう。

3. 国語研究の国語学史的意義

金壽卿が残した研究を総合すれば、彼の国語研究は文法論と文体論を中 心に成り立っていたということができる。したがって彼の国語学史的位相 を明らかにするためには、彼の文法論と文体論の分野での業績が有する研 究史的意義を明らかにする必要がある。崔炅鳳 [2009] では文法論と文体 論分野における金壽卿の業績を概括したが、議論の性格上、金壽卿の研究 を緻密に分析してはいなかった。本稿では、崔炅鳳 [2009] の評価"を前提 としたうえで、彼の研究が当時の文法論と文体論の議論のなかでいかなる 位相を有し、国語学の研究にどのような寄与をしたかを中心に議論したい。

3-1.「龍飛御天歌挿入子音考」の国語学史的位相

構造主義方法論を適用して文法現象を解明した研究として注目されるの は、「龍飛御天歌挿入子音考」という論文 [金壽卿 1947] である【図1】。こ れは、金壽卿が発表した最初の国語学論文であると同時に彼の実力を示す

¹⁷ 崔炅鳳「2009」では、金壽卿を「構造主義方法論に基づいた研究を先導したことと、北朝 鮮の初期標準文法を確立するのに寄与した国語学者」「文体論を言語学的観点から学問的 に体系化するのに寄与した国語学者」などと評価していた。

「龍飛御天歌」挿入子音考 (金書郷)

龍 飛御天歌」挿入子音考

金

卿

	***	聲	ţ		有	聲	T.	
1	ĸ	t	P	l	m	n	ວ	母音
	K-K	t(n)+	P-K	l-g(16)	m-9	n- 9	5-9	#-g
t	K-t	t-t	p-t	l-d(t)	m-d	n-d	5-d	母-d
P	K-P	t(P)-P	P-P	(-b(p)	m-b	n-b	5-b	母-6
s	K-S	5-5	P-5	l-s	m-s	n-5	2-5	4-8
5	K-tS	t-ts	P-ts	l-&(ts)	m-dz	n-dz	5-8	#-43
r	D-N	ท-ท	114-16	l-1	m-n	l-l		∯-Y
m.	J-m	ท-พ	m-m	l-m	m-m	n-m	J-111	A-m
n	D-12	N- 11	m-n	l-l	m-n	n-n	J-n	毋-n
音	9-#	d-#	b-毋	人一番	111-49	n-#	D-#	由-由
	t P S r m	K K-K K K-K t K-t P K-P S K-S S K-S F D-n m D-m n D-n	K t K K-K t(K)+K t K-t t-t P K-P t(P)-P S K-3 3-5 S K-t5 t-t5 r D-m n-n m D-m n-m n D-n n-n	K t P K K-K t(K)+K P-K t K-t t-t P-t P K-P t(P)-P P-P S K-3 3-3 P-S S K-t3 t-t3 P-t3 T D-m n-n m-n m D-m n-m m-m n D-n n-n m-n	K t P L K K-K t(K)-K P-K l-3(6) t K-t t-t p-t l-3(6) P K-P t(P)-P P-P l-6(9) S K-S S-S P-S l-S S K-tSt-tS P-ts l-9(5) T 3-M N-M M-M l-l M 3-M N-M M-M l-l	K t P L m K K-K t(N) K P-K l-3 w m-g t K-t t-t p-t l-d(t) m-d P K-P t(P) P P-P l-b(p) m-b S K-S S-S P-S l-S m-S S K-ts t-ts P-ts l-3 w m-g r D-n n-n m-n l-l m-n n D-n n-n m-n l-l m-n n D-n n-n m-n l-l m-n	K t P L m n K K-K t(K)-K P-K l-360 m-g n-g t K-t t-t p-t l-d(t) m-d n-d P K-P t(P)-P P-P l-b(p) m-b n-b S K-S S-S P-S l-S m-S n-S S K-ts t-ts P-ts l-365) m-d3 n-d3 r D-n n-n m-n l-l m-m l-l m D-m n-m m-m l-m m-m n-m n D-n n-n m-n l-l m-n n-n	K t P L m n 2 K K-K t(K)+6 P-K L-360 m-3 n-3 2-9 t K-t t-t P-t l-d(t) m-d n-d 2-d P K-P t(P)-P P-P l-6(P) m-b n-b 2-b S K-S S-S P-S l-S m-S n-S 2-S S K-t5 t-t5 P-t5 l-365) m-d3 n-d2 2-d T 2-n n-n m-n l-l m-n l-l 2-n m 2-n n-n m-n l-l m-n n-n 2-n n 2-n n-n m-n l-l m-n n-n 2-n

図1 金壽卿「龍飛御天歌挿入子音考」(1947年)

(眭1)이 두 文獻은 圣然 同時代의 作品으로 불수있으며 또한 이 두 文獻의 制作에 攀劃한 學者長가운데에 잠 前年에 該當하可、生란 他面으로「訓民正音」은 ユ公布에 앞서기 三年前 이미 一旦 完成見及り 明白社 以上

飛御天歌 [刘 刊行名 世宗二十七年(西曆一四四五年)� [訓民正音]� 公布名 世宗二十八年(西曆一四四六年)斘 生哉――「蒯民正音」の 頒布兄―― 汉과 때를 音りむ다는事實은 저지않り 우리들의 注目을 ユニ바이다。即「龍 外 이머한 言語의 表記外의 두 象面에 セオ있는 까담에 「龍飛御天歌」의 成立り 朝鮮에 새로운 表記法이 誕 七 萬難相の ユヲ에 遺憾なり 露呈되어있기 때문이다。 挿入子音의 現象은 임으로 이야기되는 言語 ユ 自飾 **윤겼은 實로 「龍飛御天歌」에 있어 揷入子音이 가장 典型的인 形態로 多彩하게 驅使되어、揷入子音의 提示하** 內也 點句 關하여 若干의 考察會 하여보자 하는것이 本稿의 目的이나、여겨에「龍飛御天歌」라는 限定會 明 接結部め 插入耳中及中 이미한 "까닭으로서인가"、또 그 子音은 어떠한 경우"、어떻게 插入되는것인가---이 髀의 接結部め 挿入ヨン 子音音 意味並다。 이러한 경우의 統合이만 어떠한 性質의 것인가、子音이 統合의 辭(ternne)(上例에 있어서는 「바다」와 「가」)가 놓여 하나의 統合(syntagme)을 일을 때에 그 表記에 있어 두 語 이곳에 「掃入子音」이라 말하는것은、例을 들면 現代朝鮮語 「바다人가」에 있어서의 「人」과 같이、두게의語

や人物り 거音 보아ヒス은 (例号 들면 鄭麟趾外をや)、「昔新羅薛聰。始作吏讀。官府民間。至今行之。然皆假字

代表的な論文¹⁸である。特に、科学的研究方法論を適用して言語資料を緻密に分析し、これをもとに議論を展開する叙述の方式は、近代的論文の典型を示していると評価できる。崔炅鳳 [2009] では、この論文が誕生した背景、すなわちこの論文の土台になった構造主義言語学理論と中世国語に関する知識を金壽卿がどのような経路で学んだかという点に注目した¹⁹。

金壽卿は「龍飛御天歌挿入子音考」で言語要素の分布関係を精密に分析し、言語要素の形態、構造、意味的特性を明らかにしようとした。これは挿入子音の分布環境を提示することで確認し得る。すなわち、挿入子音「シオッ」[^^] が属格「所有等を表す名詞・代名詞等の格」の「の」[^9] と区別される機能を有していることを、挿入子音の分布環境²⁰を通じて明らかにし、挿入子音が結合する2つの名詞の先行語の終わりが有声音(声帯が震えて声が出ている音)(「母音」「鼻音」〔mやnの音〕「流音」〔lやrの音〕)の場合にだけ現れる理由について、同化現象による有声音化を防止**するためのものであることを、一般的な音韻現象に基づいて説明している。このような点から見れば、「龍飛御天歌挿入子音考」は構造主義研究方法論を国語の形態、構造、意味に対する分析に本格的に適用した論文だと評価することができる。

-

^{18「}龍飛御天歌挿入子音考は、この分野ではまだこの論文を凌駕するものがないほど際立った研究として評価されている」(2000年8月19日付『韓国経済』記事)という、同時代に生きた金敏洙の評価によっても、この論文に代表される金壽卿の力量を確認することができる。

¹⁹ 崔炅鳳 [2009] では、京城帝大言語学講座と教授陣について調べ、この論文の執筆背景を推論しながら、小林英夫からの影響に注目したことがある。崔炅鳳 [2009] は金壽卿の東京帝大言語学科留学という事実について取り上げていなかったが、東京帝大言語学科での学習もまた小林英夫の影響の下で行われた可能性が高い。

²⁰ 挿入子音が属格を表す助詞"의"と重複して使われ、挿入子音が結合する2つの名詞の先行 語の終わりが有声音(「母音」「鼻音」「流音」)の場合にだけ現れる。

^{*6} 同化現象による有声音化の防止:たとえば "中中" (海) と "外" (へり、際、端)を合成して「海辺」という語をつくる場合、間にサイシオッを入れないと同化現象によって "中中 外" と "小" の音が濁る (=有声音になる) が、挿入すれば "中央外" と有声音化が防止される。

特に彼の議論は、挿入子音(サイシオッ)を属格表示の1つとして扱って きた従来の研究に問題提起をしたという点で、テーマ別の研究史において も重要な意味がある。それは、彼の問題提起を契機に「サイシオッ」論議 が本格化したといえるためである。仟洪彬 [1981] は「サイシオッ」に関 する議論について、「「サイシオッ」を属格の表示とする見解」と「「サイ シオットを音韻論的現象とする見解しに分かれると述べたことがあるが、 金壽卿の議論は「サイシオッ」を音韻論的現象として把握し得る根拠を初 めて提示した論文である。では、彼の議論の研究史的な意義は、挿入子音 を音韻論的現象として把握する見解の出発点となったということだけにあ るのだろうか。本稿では、上記論文が科学的言語研究の方向を提示した論 文という点において、主題別の研究者の観点ではない国語学史的観点から 上記論文の位相を明らかにしてみようと思う。

しかしこのような試みは、上記論文が完璧だと強調したり、「サイシオット 問題を再論したりするためのものではない。実際、彼の議論で「同化現象 による有声音化を防止するために挿入子音が介入する」という説明は、「硬 音化は受け入れながら、あえて有声音化を防止しなければならない音韻論 的理由は何か」という疑問にぶつかり、また「有声音と無声音の間に挿入 子音が分布する」という説明は、"ユブ"+"州"(船)という環境において、 "ユズ州"(釣り船)と"ユブ州"(肉の船)とで異なって実現される現象を適 切に説明できないという批判を受けたことがあるれ。しかし重要なのは、 插入子音が出現せざるを得ない理由について、彼が音韻、形態、意味論的 根拠を動員して原理的に説明しようとしたことである。これはそれまでの

²¹ 在浜杉はサイシオッが有声音化によって弱まるかも知れない第2要素の頭音を硬音化して その弁別性を高めるという議論は説得力が弱いと評しながら、有声子音や無声子音の音韻 論的認識が同一だという点、形態素の同一性を損なうのはかえって硬音化側だという点な どを指摘した。また、同じ環境内で音韻現象が違って実現されることをどのように説明す るのかについて問題提起をした。

規範的研究と次元を異にする点である。

第1に、上記論文では、対象となる言語資料を綿密に分析して挿入子音の分布特性を明快に示した。構造主義方法論の特徴の1つが言語の分布特性を把握する点にあるが、この論文で示している分析の仕方は研究史的に重要な意味を帯びている。

第2に、ウリマル**で有声閉鎖音 (b,d,g など) が音韻でないという点に基づき、挿入子音を通じて有声音化を阻止しなければならない音韻論的理由を原理的に説明した。彼は "ヱ刁" (koki > kogi) の例を提示しながら、ウリマルにおいて有声閉鎖音 (ここでは g) はただ同化作用がある場合にだけ現れる変移音であると規定した。そしてこの規定を根拠に、単語の最初の音節に有声閉鎖音が現れ得ない理由を説明した。すなわち、合成語が構成される場合、後に来る語根が単語としての独立性を維持しようとする属性があるならば、当然有声音化に抵抗するし、有声音化を阻止するために挿入子音が介在するほかはないと見たのである。このような論述を通して見れば、金壽卿は音韻論的な現象の原因を、形態・意味論的側面から探究し、説明しようとしたと考えられる。これを研究の水準という点から見れば、言語現象を解明するところから、その現象の原因を説明するところへと研究が発展したことを物語るものであり、その点で注目に値する。

3番目に、上記論文では、挿入子音の出現について、属格を表示する現象ではなく音韻論的な現象であると規定しながらも、挿入子音が含まれる構成を属格構成として説明した。このことと関連して、上記論文では「挿入子音ではない語辞の順列、すなわち意義部"の相互の位置が従属的な関

^{*7} ウリマル:字義どおりには「われわれの言葉」という意味であるが、ここでは韓国語/朝鮮語という用語上の南北分断を克服する意味で用いられていると考え、そのままカタカナ表記した。

²²現代の北朝鮮国語学界では、分析的な側面において単語を成す最小単位を「形態部」、総合的な側面において単語形成に参加する単位を「意味部」として区分しているが、これは

係を表す形態部²³ であるという点を明らかにした。このように、文法的 機能を特定の形態素に対応させて説明するのではなく、構成要素間の相互 の位置関係に対応させて説明したことは、文法形態素の概念を拡張したと いう点のみならず、構成要素間の意味的関係が文法現象として発現すると 考えた点において研究史的な意義がある。

ここで金壽卿が文法形態素を広い概念として理解した事実を、単語の形 態を単語間の相互関係の結果として広く見る議論と関連して考えることも 意味があるだろう。このような観点は1956年の論文で具体化されており、 彼は「広い意味での形態は、単語それ自体の形態の変化以外に、単語の間 の相互関係、複数の単語の結合、単語結合における単語の順序等を包括す る。広い意味におけるかかる形態は、単語を個別的に見ていては見いだせ ない」との見解を提示し、名詞、形容詞、動詞の文法的な範疇が吐との相 互関係を通じて表現されることを強調している²⁴。こうした主張は、同じ 論文で金壽卿が引用していた中国の方光燾の見解と同様である²⁵。金壽卿

南朝鮮の国語学界で形態素を構成素と形成素として区別しているような方式だ。ところで 私たちが注目しなければならない点は、このような区分方式がすでに金壽卿[1947]に現 れているという点だ。ただ、金壽卿[1947]では文法的形態素を示すときに、「形態部」 という用語を使って、語彙的形態素を示すときは「意義部」という用語を使っているとい う点を留意する必要はある。

²³ 北朝鮮の国語学界で「形態部」は形態素のような概念で使われるが、これについては、金 壽卿が1947年に発表した論文で形態部という用語を使っている。1949年に金壽卿が翻訳し た『言語学』(A.A.レフォルマツキー著)でも「形態部」という用語が使われている。し たがって北朝鮮国語学界で使う形態部という用語の概念は、1947年金壽卿の論文から始まっ たものだといわなければならないだろう。

²⁴ これは、「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について(下)」である。この論文では、 吐が1つの品詞として単語的な正確を持っていることを主張しているが、これは叶が単語 の屈折形態として表れるという見解を反駁するものであった。こうした主張を強化するた め、金壽卿は単語の内的な形態変化を表す形態素以外の諸単語間の相互関係も、広い意味 の形態であることを強調したのである。

²⁵ 方光燾 (Fuang, Guang Tao, 1898-1964) は、構造主義言語理論を中国語の分析に適用した代 表的な言語学者である。1930年代における中国語学の体系化に寄与し、新中国の樹立以降

が引用した方光壽の見解は、「私は単語の相互関係、単語の結合が広い意 味での形態であると認める。個別的な中国語の単語に固有の形態は少ない ため、品詞を分類する際には当然広い意味の形態に依拠せざるを得ない」 というものであった。方光壽が、孤立語**である中国語の形態論を論じる 際に、文法形態素の観点を広く見ることが必要であるとしたのに対し、金 壽卿は文法形態素の概念を広く見る観点がウリマルの文法範疇の特徴、と りわけ叶の正確を説明するのに活用し得ると考えたのである。このように 彼が文法的な関係を表現するあらゆる言語要素(単語の順序、単語間の相互関 係、ゼロ形態素までを含む)を一貫して形態素と認識し、こうした認識を多様 な議論に適用することができたのは、構造主義言語理論に対する深い理解 があったからこそ可能なことであった。

3-2. 「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について(上、下)」の国語学 史的位相

1950年代以後、金壽卿が発表した論文のうち文法論に関連した新しい研 究といえるのは「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について (L、下)」 である【図2】。この当時、北朝鮮の国語学界は叶の性格を規定することに議 論を集中させていたが²⁶、そのなかでなされた議論は膠着語*9である国語の

も中国語学の理論的な発展を先導する言語学者として活動した。金壽卿が引用した方光燾 の論文は、中国の品詞論争が一段落する要因となったもので、文法形態素が発達していな い中国語の特性上、単語内部の形態変化ではない、諸単語の相互関係やそれらの結合の様 相に根拠をおいて品詞を分類しなければならないことを主張したものである。

^{*8} 孤立語:中国語・ベトナム語等、単語が常に一定の語形で現れる言語。

²⁶1958年「朝鮮語形態論の特性に対する学術討論会」と1963年「朝鮮語文法構造研究におい て主体をしっかり確立するために」という学術討論会での主な争点は、吐の性格問題で

^{*9} 膠着語:トルコ語・朝鮮語・日本語のように、語幹に語尾等の接辞を付けることで、文 のなかでの文法関係を示す言語。例えば「食べ・ます」「食べ・ない」などでは「食べ」 を語根といい、「ます」「ない」などの語尾を接辞という。

조선 어문 1956: Na.1

조선어 형태론의 몇 가지 기본 문제에 관하여 (상)

김 수 경

I

과학으로서의 문법의 특성은 그가 추상하여 일반화하는 성격을 지니고 있는 점에 있다. 이에 환하여 이·체·쓰딸킨은 다음과 강이 만하고 있다.

<문법의 뚜렷한 욕정은 그것이 구체적인 단어가 아니라 일반적으로 아무런 구체 성도 없는 단어를 교회에 두면서 단어의 변화에 관한 규칙을 주며 그가 어떠한 구 체적인 문장, 말하자면 구체적인 주어, 구체적인 술어 등등이 아니라 어떤 한 문자 의 구체적 형태에는 관계 없이 일반적으로 모든 문장을 고려에 두면서 문장 구성 을 위한 규칙을 주는 점에 있다. 따라서 문법은 단어에 있어서와 문장에 있어서 목수적인 것과 구체적인 것을 추상하여 버리고 단어의 변화와 문장에 있어서의 단어의 결합의 기초에 놓여 있는 일반적인 것을 끌어 내여 이로부터 문법적 규칙, 문법적 법정을 만든다. (이·훼·프빨린;《밝스주의와 언어학의 제 문제》조선이 번여, 1932년 33~34 제지).

따라서 문법적 급착은 특수적인 것과 구체적인 것으로부터의 추상이며, 단어 와 문장에 고유한 일반적 특성의 박영이다. 이러한 의미에서 문법은 인간 사유 의 거대한 추상 작업의 결과이며, 사유의 거대한 성과의 지표 (동상씨, 34 저지)로 뭐다

조선어의 문법을 연구함에 있어서도 문법적 추상, 문법적 일반화의 원칙 우애 론론히 서서 조선어의 문법적 규칙, 조선어의 문법적 법칙을 설정하도록 노력하 여야 할 것은 다시 반할 필요도 없다.

그러나 배개의 구체적 선어는 자기 고유의, 오격 그에게만 내속된 투성을 가지고 있다. 따라서 어떠한 선어의 연구에 있어서나 그 언어가 가지는 온갖 투성, 온갖 고 성을 천명하는 것이 가장 중요한 파업으로 나선다.

조선어의 문법 구조를 연구함에 있어서도 조선어의 실재적인 언어 자료에 립

- 4 5 -

図2 金壽卿「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について」(1956年)

文法的特徴を説明するのに寄与した点において意義を有している。金壽卿の研究は、そこでおこなわれた吐の議論における主軸をなすものであった。 彼は単語の構造を語根、接頭辞、単語造成の接尾辞、形態造成の接尾辞 (相、時称、尊敬を表すもの)、吐(格、法、階称を表すもの)と分析し、吐を形態造成の接尾辞と区別して単語の統辞論的な位置を表す「位置的形態部」として見た。そして吐を単語的性格と接辞的性格を兼ねた二重的存在と規定しながら、独立的な品詞として設定した。このような見解は、既存の品

詞分類の類型と比較したときに次のような特性がある。

まず、金壽卿の見解は叶を品詞に含めた崔一鉉 培の見解と似ているが、 叶の範囲を助詞だけでなく語尾まで包括するものと捉えたという点におい て崔鉉培の見解と相違している。第2に、金壽卿の見解は助詞と語尾を別 のものとして区分しなかったという点で鄭烈模と類似する点があるが、 鄭烈模が叶を単語でない文法的関係を表す接辞として見たという点では彼 と異なっている。第3に、金壽卿の見解は助詞と語尾を単語と認定すると いう点で周時經と類似しているが、周時經が助詞と語尾を機能にしたがっ て「キョッ」「경=冠形格助詞「の=의」を除いた助詞」(- 는 [-は]、- し [-は]、 이〔が〕、가〔が〕、을〔を〕など)、「イッ」〔9=接続助詞「과」のような連結語尾〕 (- 고 [- て]、와 [と] など)、「クッ」 [共=終結語尾] (- 다 [-だ]、- 어라 [-せ よ〕など)」と分類したという点で周時經とは違いがある。これらを総合す れば、金壽卿の形態観は周時經の形態観を引き継いでいるものの、品詞分 類で周時經と違いがあるということが分かる。

このような金壽卿の見解は、その後の北朝鮮の形態論研究に深い影響を 及ぼすが、北朝鮮での叶の議論が叶の膠着的性格を重視する方向で整理さ れたという点に留意する必要がある。すなわち『朝鮮語文法』1 (1960)27で は以前の文法書とは違い、叶を独立品詞でない文法的接辞として分類する ことによって、叶の範疇に関する限り、金壽卿の見解を否定している。し かし『朝鮮語文法』1 (1960) で文法における膠着要素を全て文法的接辞と して分類しながらも、これをさらに叶と形態造成の接尾辞として区分する ことからすれば、2つの範疇の機能的な違いに注目した金壽卿の見解が依 然として有効であったことを確認することができる。『朝鮮語文法』(1964) では、文法的膠着要素を全て叶と見ているが、叶を「位置叶」と「非位置

²⁷ 金壽卿は『朝鮮語文法』(1960) の形態論の部分を李槿榮と共著で執筆した「金榮晃・権 スンモ 1996:348]。

叶」と区分することによって、やはり叶と形態造成接尾辞を機能的特性に よって位置的形態部と非位置形態部として区分した金壽卿の見解を部分的 に受け容れている。

結局、1964年の文法書によって調整された見解は、叶を「チャリ叶」〔み 司토;チャリは場所〕と「キウム叶」〔勿舎토;キウムははめ込むこと〕に区分す る現在の文法体系につながる。したがって、現在の北朝鮮の標準文法に見 られる形態分析の立場は「位置的なものと非位置的なものを異質であると して分離するのではなく、すべて叶の範疇に入れて位置叶と非位置叶に区 別す」ることにあるといえる [金榮晃 2004]。だとすれば、吐の範疇をどの ように設定するかはさておいたとしても、文法的膠着要素のあいだの機能 的違いに注目した金壽卿の見解が、形態分析の議論を深める契機になった ことは明らかな事実である。

ところで上記論文でとりわけ注目すべき点は、品詞を見る観点と文法形 熊素を見る観点のユニークさである。金壽卿が品詞を分類する基本的な観 点は、文法形態素に対する観点と連動している。品詞を見る観点は、叶の 性格についての議論の過程で明確に表れている。金壽卿は単語の範疇をま ず意味論的類型によって区分し、これをさらに従来の品詞部類で分けると いう方法を採っている。ここで意味論的類型は「語彙的意味」と「文法的 意味 | に区分され、「名詞、形容詞、動詞 | は語彙的意味を持った品詞、「冠 形詞、副詞」は語彙的意味と文法的意味が融合した品詞、「叶」は文法的 意味を持った品詞に区分される。結果的には、伝統的な品詞分類から大き く異なるものではないが、このような観点は「吐」の性格および範疇を規 定する上で重要な意味を帯びることになる。

(「朝鮮語形態論のいくつかの基本間的題について (上)」における説明) 叶の形態論的機能と関連してとりわけ指摘しなければならないことは、 朝鮮語の叶が名詞(数詞、代名詞を含む)、形容詞、動詞に共通して用い

られるという事実である。

上の説明は、意味論的類型によって品詞を区画することに由来している。 すなわち、語彙的意味を持つ「名詞、形容詞、動詞」が1つの意味論的類 型に分類されるとすれば、文法的意味を持つ吐はこの3つの品詞に同一に 機能すると見るのである。このような観点から、金壽卿は次のように説明 を続ける。

(「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について (上)」での説明)

仮に朝鮮語の動詞に時称、法、階称などの範疇を表す文法的形態があ るとするならば、まさにそれと同一の文法的な表現手法が形容詞にも あり、名詞にもあるということができる。

このように名詞、動詞、形容詞に付される文法形態素の性格を同一のも のと見る態度は、文法現象に対する新しい説明につながる。特に"이수"「で ある] の性格規定と文法的自立性についての判断は、テーマ別研究史にお いて重要な意味を帯びる。

第1に、金壽卿は"이다"の「指定詞」説を否定している。「動詞、形容詞」 に " \sim $\hat{\vec{\mathsf{L}}}$ " [だ] という「吐」が結合するように、「名詞」にも " \sim $\hat{\vec{\mathsf{L}}}$ " とい う「吐」が使われると見る。そしてこのような観点のもとで、"ol 中"を叶 の一種と規定する。" $\mathring{0}$ ず、名詞につく叶 " $\mathring{\sim}$ ず" の変種、すなわち音 韻論的異形態として捉え、「指定詞説」に反論したのである。

第2に、金壽卿は名詞を自立的形態素として捉え、動詞と形容詞を依存 的形態素として見る観点を批判する。この批判は名詞、動詞、形容詞を語 量的意味を持つ類型で分類することに由来している。すなわち "仝卉" 〔牛 - が〕、"全를" [牛 - を]、"全다" [牛 - だ] などにおける "全" [牛] と、"言다" [老 い‐る〕、"言ユ"〔老い‐て〕などにおける"言"〔老い‐〕は同じ意味的単位な ので、これらは全て自立性があると考えたのである²⁸。そして、動詞と形容詞が単独で使われた例として、"社芸" 4、「漂う」、"ヹヸ" 4、「食い止める」、"本 ガ 4、「行き来する」、"君景 4、「赤黒い」、"君明 4、「染み」、"望早 4、「見下げる」などのように、用言の語根が含まれた合成語*10を挙げている²⁹。このような観点から、先行単語の自立性を根拠として、名詞に付く助詞は単語であると認定し、動詞や形容詞に付く語尾は単語と認定しないという見解は受け容れられないと論じたのである。こうした観点は、吐(助詞と語尾)が単語と文法形態素の2つの特性を兼ねる準自立的な存在であり、名詞、動詞、形容詞の文法的範疇が吐の助けを得て表現されるという主張につながっていくことになる。

現在の観点とは異なる点が多いが、意味論的類型によって品詞を区分する見解や、単語の形態が単語間の相互関係を包括するといった見解を受け容れ、ウリマルの吐に関する議論を深めたことはあらためて評価する必要がある。特にこのような見解が周時經の議論とある面において呼応しているのも、国語学研究の系譜に関連して注目する必要があるだろう。

3-3. 「文風に対する理解をより一層深化するために」の国語学史的位相

南北朝鮮の国語学界は1960年代になってようやく文体論についての研究

²⁸名詞と用言の分布上の違いを、「動詞と形容詞は常に一定の対象をある方式によって規定するのを示しているため、名詞に比べて単独で使われる場合が少ない」と説明する。周時經が『マルモイ [聖모이]』[最初の朝鮮語辞典]に動詞と形容詞の語幹だけを記載したのを見れば、周時經もまた金壽卿と同様に、動詞と形容詞の語幹を名詞のように1つの意味的単位として理解したといえよう。

^{**10}用言の語根が含まれた合成語:ここで述べているのは、たとえば動詞 "��宀"(来る)、"介宀"(行く)の語根はそれぞれ "�ヹ"、"介" であるが、これを合成し "��宀"(行き来する)とした場合、語根 "�ヹ" が語尾抜きに単独で現れているという考え方である。

²⁹ 現在の学校文法ではこれを非統辞的合成語として見るが、金壽卿は意味的観点で語根の自立性を判断しているため、彼の体系内では非統辞的合成語という概念は成立し得ないだろう。

を本格化しはじめた。この時期には、南北朝鮮ともに文体論についての単 行本が出版された。李仁模 [1960] が南北朝鮮の国語学界で初めて出版さ れた文体論の単行本である。北朝鮮の場合には金壽卿 [1964] が初めて出 版された文体論の単行本である。しかし重要な点は、2つの文体論のアプ ローチが異なるという事実である。

李仁模 [1960] は、小林英夫 [1944] のアプローチと同じ問題意識を示す 文体論である。その特徴は、文体論の科学化を志向しながらも、作家の作 品を対象として表現方法の特徴に関連する問題を考察することを究極的な 目標とする点にある30。文体の最も基本的なものは、作家の個人的な文体 であり、文体研究もまた作家の個性が現れる文学作品の分析に必要だと考 えたためである。ただ、作家の個性を把握する際に言語学的な方法論によ る文体分析が必要だとする点において、文学における文体論とは異なって いたといえる。

これに対し、金壽卿 [1964] は個人の創造的文体よりは、状況による言 語表現としての文体の問題に関心を持ったと考えられる。これは、金壽卿 の文体研究が文風***の確立を目標に始められたためである。このような点 で彼の文体論は、「一般人の日常生活において自然に行われる言語活動を 対象にした」構造主義者バイイ(C. Bally)の「表現文体論」と同じ志向性 を持つと見ることができる。しかし金壽卿の著書『朝鮮語文体論』を直接 確認することはできない状況で、その文体論の特徴を詳らかにするのは限 界がある。ただし、金榮晃・權スンモ編 [1996:212] において、「この本は 言語実践科学としての文体論研究の対象と役割を明らかにしたものであり、 これによって朝鮮語文体論が成立することが認められるようになった」と

³⁰李仁模 [1960:53] では、「文体とは、作家の美的理想に適合し、個性がよく反映された 一定の構造の文章である」と定義している。

^{*11} 文風:言葉と文章の品格といった意味の用語。

いう評価を参照し、金壽卿文体論の志向するところを明らかにすることは できるだろう。これと関連して注目されるのが、「文風に対する理解を一 層深化するために | (『朝鮮語学』 3号、1963) という彼の論文である³¹。

文風の定立という問題は、北朝鮮の文体論研究の核心的な主題だという ことができる。ここで文風とは、個人的な文体でなく、社会的意思疎通に おける文体を意味する。文風に対する取り組みが北朝鮮の文体論を活性化 した契機になったということは、北朝鮮の文体論の方法と目標を決めるの に影響を及ぼしたと見られる。

2005年に社会科学出版社から出版された『朝鮮語学全書』のなかの「朝 鮮語文体論」では、「文体は、交際分野と目的に合わせて成り立つ体系、 表現的効果を高められるようにする体系であり、そのような文体論的手段 と文体論的手法の体系は、一時的・臨時的・条件的な体系ではなく、歴史 的に堅固に定着し、構造的に固定化され、社会的に認識された現実的な体 系である」(23ページ)と述べている。これは、文体論が文の機能、表現的 効果、表現の社会化などに注目しなければならないという主張であると理 解することができる。だとすれば、作家の個性的文体についての研究は言 語学的文体論において周辺的な領域とならざるを得ない。これは北朝鮮の 文体論がバイイの表現文体論に基づいて成り立っていることを物語ってい るといえる。このように推定する根拠は、上記論文の説明内容においても 比較的明確に表れている。

(「文風に対する理解を一層深化するために」の説明)

言語は人間活動のあらゆる分野において交際の手段として利用される

³¹文体論に関連した金壽卿の研究は、これ以外に「最近の政論に表れている会話体の要素」 [金壽卿 1964b]、「作家の個性と言語」「金壽卿 1964a] などがあるが、「文風に対する理 解を一層深化するために」「金壽卿 1963〕が、北朝鮮の文体論研究の動機や金壽卿の文体 論の特徴を示しているため、これを集中的に分析する必要がある。

だけに、その交際の分野、交際の条件、交際の目的、陳述の内容、対 象の特性等々のそれぞれの具体的情況によって、それに適合した言語 手段を選択、使用しなくてはならない。〔中略〕では、私たちの言語実 践においてそれぞれの具体的情況とはどのようなものか。それはまず 私たちの言語交際が行われる場面、条件によって言語行為の具体的な 発現形態が変わってくるということである。

上の内容に注目して、崔炅鳳 [2009] では、金壽卿の文体論は意思疎通 のためのラング (langue)*12としての文体を分析し、言語の表現効果を記述 しようと考えた構造主義者バイイ(C. Bally)の「表現文体論」と同様の志 向性を有すると評したことがある。このような点で陳鐘華 [2004] が翻訳 したバイイの次のような言明と、金壽卿の上記言明を比較してみるのも意 味があるだろう。

(バイイの文体観)

私たちの研究において本質的に文体論的な部分は、表現事実の情感的 な性格、これを産出するためにラングによって利用される諸手段、こ の事実の間に存在する相互間の諸関係、要するにこれらの要素たるあ らゆる表現体系を含むものである。「陳鐘華2004]

さらに1964年に発表した「最近の政論に表れている会話体の要素」[金 壽卿 1964b] で提示している文体分析の具体的な方法や目標は、金壽卿の文

^{*12}ラング(langue):ソシュールの一般言語学で提示された用語。個々人が発する個別具体的 な言葉をパロール (parole) と呼ぶ一方、社会的に共有された言語の体系をラング (langue) と呼んだ。パロールをメッセージ、ラングをコードだという場合もある。これを文体論 に適用すれば、個別作家の個性的な文体はパロールに該当し、ある社会的集団のなかで 共有される文体はラングに相当するといえる。

体論とバイイの文体論の関連性をより明瞭に示している32。

一方、バイイと金壽卿の違いは、金壽卿が記述的な表現文体論に「表現 効果の向上のための方案」を結合させることによって、これを実践的文体 論へと転換させたところに求めなければならないだろう。文風についての 議論を通じてみれば、金壽卿はバイイの文体論が排除しようとした修辞学 的技法の問題を積極的に含めていると言えるためである。

金壽卿は、上記論文で「言語行為の具体的な情況、言語手段の表現性」 などのように、言語学的文体論に関連した問題を論じているが、言語実践 において党的で人民的な立場を堅持する問題と革命遂行にとって緊要な内 容を伝達する問題などのように、実践的問題にも注目した。党的で人民的 な立場の堅持、革命遂行に緊要な内容の伝達などは、いわば修辞学的な問 題だということができる。であるならば、金壽卿の『朝鮮語文体論』は、 ある構造主義者がどのように実践的国語学を体系化するかを示す資料であ るといえよう。しかし金壽卿の『朝鮮語文体論』を直接検討することはで きないため、残念ながら、これについての議論は先送りするほかはない³³。

³² 金壽卿は、この論文で会話体の普遍的な特性を文章論的、形態論的、語彙論的な側面から 分析し、文体論研究の志向すべき点を示している。特に「会話体と叙事体を分け、それら の特性を明らかにした後、それぞれの具体的なことばや文章において会話体や叙事体の比 率がどのようになっており、それらの配合関係がどのように異なってくるのかということ を調べることは、ウリマルの現状態を明らかにし、その歴史的な動きを垣間見るための一 助となり得る」と述べている部分は、文体論研究の具体的な目標や方法を明瞭に説明して いるという点で、注目する必要がある。

³³¹⁹⁶⁴年(金壽卿が『朝鮮語文体論』を出版した年)を前後して発表された金壽卿の文体論 関連の論文と、1965年以降に出版された北朝鮮の文体論の書籍の構成や内容を総合してみ れば、『朝鮮語文体論』(1964)の構成や内容を概略的に推論することができる。今後、西 欧および日本の文体論との関連性、1964年以前に発表された論文と『朝鮮語文体論』の関 連性、1964年以降に出版された北朝鮮の文体論の単行本との関連性、南朝鮮で出版された 文体論の単行本との違いなどが総合的に解明されなければならないだろう。

4. 結論

本稿においては、金壽卿の言語学に関連した翻訳物、文法論および文体 論関連の論文等を分析し、彼の研究が有する国語学史的な意義を論じた。 そして金壽卿の研究を、理念の時代を生きざるを得なかった構造主義者が、 理念を意識しながら模索した結果として評価した。そのことを通じて、本 稿では、北朝鮮の研究傾向を「ソ連言語学理論の導入と構造主義文法から の断絶」と単純化する既存の研究の観点を批判した。こうした批判は、南 北朝鮮の国語学研究を合わせた国語学史記述の可能性と必要性を暗示する ものであった。これまでの議論の内容を整理すれば、以下のようになる。

2では、金壽卿が翻訳した『言語学』において採択していた用語や、こ れについての概念説明を根拠とし、構造主義言語学の分析方法論が当時の 北朝鮮の国語学界においてまだ有効であったことを示し、金壽卿の国語学 研究を「構造主義の研究方法論と唯物論的言語学が調和」(2-1)、「理論的 国語学と実践的国語学の調和 | (2-2) として特徴づけた。

3では、学説史の観点から金壽卿の国語学研究の持つ意義を説明した。 3-1では、「龍飛御天歌挿入子音考」の意義として、「挿入子音が出現せざ るを得ない理由を音韻、形態、意味論的な根拠を動員して原理的に説明し た点 | を論じた。この議論の過程で「形態部 (形態素) | という用語の出現と、 これに対する概念規定の研究史的意義を説明した。3-2では、「吐を単語的 性格と接辞的性格を兼ねた二重的存在と規定しながら、独立的な品詞と設 |定した||議論の国語学史的な系譜を明らかにし、その論理が北朝鮮の標準 文法において吐の範疇を設定するのに与えた影響を説明した。3-3では、 金壽卿の文体論研究が北朝鮮の文体論の方法と目標を決定するのに影響を 及ぼしたと論じ、彼の文体論がバイイの表現文体論に「表現効果を高める ための方案」を結合させた実践的な文体論であることを浮き彫りにした。

参考文献

- 金壽卿「1947」"「龍飛御天歌」挿入子音考"、『震槽學報』15.
- ---- [1956a] "조선어 형태론의 몇가지 기본적 문제에 관하여 (상)", 『조선어문』 1956. No.1.
- ─── [1956b] "조선어 형태론의 몇가지 기본적 문제에 관하여 (하)". 『조선어문』 1956. No.2.
- ---- [1963] "문풍에 대한 리해를 더욱 심화하기 위하여". 『조선어학』1963-3.
- ─ [1964a] "작가의 개성과 언어", 『문학연구』1964-3.
- ---- [1964b] "최근의 정론들에 나타나고 있는 회화체의 요소", 『조선어학』 1964-5. 례폴마트쓰끼, 아, 아, (김수경 역) [1949] 『(대학용) 언어학』, 교육성,

姜信沆「1996」『國語學史』(增補改訂版), 서울:普成文化社.

高永根 외 [2004] 『북한의 문법 연구와 문법 교육』, 서울: 박이정.

高永根 [1999] 『북한의 언어문화』, 서울:서울대출판부.

----- [2001] 『한국의 언어연구』, 서울 : 역락.

과학원(科学院) [1954] 『쏘웨트 언어학의 제문제』(번역 론문집), 평양:과학원,

교육도서출판사 (教育図書出版社) [1955] 『이, 웨, 쓰딸린의 로작에 비추어 본 언어학 의 제 문제』, 평양:교육도서출판사.

金敏洙編 [1991] 『북한의 조선어 연구사』1-4권, 서울 : 녹진.

金敏洙 [1980]『新國語學史』(全訂版), 서울:一潮閣.

------ [1990] "朝鮮語學會의 創立과 그 沿革". 『周時經學報』5. 50-74.

金榮晃「2004」 "조선어토의 문법적처리와 문법교육의 효률성 문제", 『이중언어학』24, 9-19.

金榮晃,권승모(權スンモ)편[1996]『주체의 조선어연구 50년사』평양:김일성종 합대학 조선어문학부.

朴甲洙編著 [1994] 『국어 문체론』, 서울: 대한교과서.

小林英夫 [1944] 『文體論の美學的基礎づけ』, 東京: 筑摩書房.

李商赫 [2007] "해방 후 초기 북쪽 국어학 연구의 경향 -1945~1950년 초기 국어학 연구 자를 중심으로.", 『어문논집』 56, 5-32.

李仁模 [1960] 『文體論』, 서울: 東華文化社 (宣明文化社, 1974).

李俊植「2002」 "일제 강점기의 대학 제도와 학문 체계 - 경성제대의 조선어문학과를 중 심으로". 『사회와역사』61. 191-218.

李忠雨「1980」『京城帝國大學』、 서울:多樂園.

任洪彬 [1981] "사이시옷 問題의 解決을 위하여", 『國語學』10, 1-35.

----- [1997] 『북한의 문법연구』, 서울: 한국문화사.

- 鄭光 [2006] 『훈민정음의 사람들』, 서울: 제이엔씨.
- 陳鐘華 [2004] "수사학과 문체론의 관계를 Charles Bally 의 문체론", 『수사학』1, 180-200.
- 崔炅鳳 외「2007」『해방 이후 국어 정립을 위한 학술적. 정책적 활동 양상』(국사편찬 위원회 구술 채록 자료).
- 崔炅鳳 [2006] "문법 교과서의 내용체계상 문제점과 개선방안", 『국어국문학』142, 431-463.
- ----- [2008] "일제 강점기 조선어 연구의 지향", 『한국어학』 40, 127-148.
- [2009] "金壽卿의 국어학 연구와 그 의의", 『한국어학』45, 363-385.
- ---- [2012] "국어학사에서 柳應浩의 위상과 계보", 『한국어학』 54, 291-324.
- 崔鎬哲 [2002] "자료 발굴과 소개: 1950년대 말 조선 민주주의 인민공화국에서의 조선 언어학 역사 ", 『한국어학』 17, 357-384,
- 胡裕树等「2003」『方光焘与中国语言学』、北京:北京语言大学、

(森類臣・板垣竜太 訳)

第 2 部

金壽卿の国際的な照明

4 金壽卿の朝鮮語研究と日本

一植民地、解放、越北-

板垣竜太

はじめに

金壽卿を主人公としたリ・ギュチュンの小説『人生の絶頂』は、日本の植民地期および米軍政下の南朝鮮に住んでいた時期の金壽卿を「植民地知識人」と呼んでいる'。「長編実話」と称された同書は、全体的には創作的色彩が強いものの、金壽卿の生前に発表されたものであり、ある程度本人に取材して書かれたと考えられる。ただ、「植民地知識人」としての金壽卿がリアリティをもって描かれているとは言いがたいし、越北後の歩みも単純化され誇張されている。

そもそも「植民地知識人」とは何なのか。異民族が主権を奪い、日増しに同化主義的な圧力が強まり、さらには戦時動員が進行していく状況において高等教育を受け、言語学者への道を歩むということはどういうことなのか。そうした植民地状況からの「解放」とは何だったのか。分断、革命と建国、戦争と目まぐるしく状況が変化していくなかで、どのように朝鮮語学を構築していったのか。

本稿は、日本の植民地下で知識人として自己形成した金壽卿の足跡を追

うとともに、その延長線上で、1945年以降の研究者としての歩みを描き直すものである。金壽卿の業績については、崔炅鳳の先駆的な研究においてかなり網羅的な検討が加えられているが [崔炅鳳 2009]、1945年以前の経歴についてはまだ明らかになっていないことが多い。まず本稿の前半 (1・2)では、史料や遺族の証言などにもとづいて、1945年以前の金壽卿の動向を可能なかぎり明らかにする。その上で本稿の後半 (3)では、1945年以降の金壽卿の歩みを脱植民地化と分断の歴史的脈絡に置き直して読む。ただし、本稿では紙幅の関係および他稿との重複を避けるためにも、朝鮮戦争以前の研究までにとどめることとする。それ以降については、別稿 [板垣2014] に譲る。

1. 言語学者になる

1-1. 家庭環境

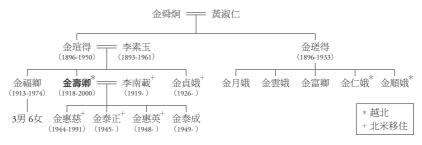


図1 金壽卿の家系図

金瑄得の経歴は、金壽卿の社会的背景を知るためにも重要なので、以下、 簡潔に整理しておこう。

金瑄得には双子の弟・金瑳得 (1896-1933) がいた。2人はいわゆる「遺腹の子」として母子家庭で育った。母の黄淑仁は苦しい家庭環境のなかで子どもを育て、金瑄得を12歳という若い年齢で良い家の娘である李素玉と結婚させた。金瑄得は初等学校を卒業後、江原道内にある春川公立農業学校に進学し、卒業 (1915年3月) 後はソウルの京城専修学校に進学した2。これは併合前からあった法学校を1911年に改称した法律専門学校で、「公私の業務に従事」する朝鮮人を養成する官立学校であった3。1918年3月に同校を卒業し、全羅北道の地方裁判所の井邑支庁で判任官見習期間を経て、同年10月に同支庁において書記兼任通訳生 (判任官) に任用された4。裁判所での実務経験を積んだ上で、光州地方法院・京城法務局での朝鮮人判事試験に合格し5、1921年9月に朝鮮総督府判事(高等官)に昇進し、全羅北道の港湾都市・群山の支庁で判事に任用された6。もともと富裕な家

² 履歴情報は『辯護士認可二關スル書類』朝鮮總督府法務局庶務係,1936年(国家記録院文書・管理番号 CJA0004097) 所収の「辯護士名簿登録換認可二關スル件 金瑄得」(1936年) を参照した。

^{3「}京城専修學校規程」,『朝鮮總督府官報』1911年10月20日号外。

^{4『}朝鮮總督府官報』1918年10月25日。任用の日付は10月23日である。また、下記の文献も参照。『(大正八年一月一日現在)朝鮮總督府及所屬官署職員録』、朝鮮總督府、1919、134頁。

^{5『}毎日申報』1921年6月3日,6月23日。

⁶ 朝鮮総督府判事への任命は『朝鮮總督府官報』1921年10月3日、群山での任用は『(大正十一年)朝鮮總督府及所屬官署職員録』1922年,156頁を参照。当時、朝鮮人が判事となるには、大きく(1)一般任用と(2)特別任用があった。(1)一般任用は判事検事登用試験を受けるもので、日本でも朝鮮でも通用する判事資格であった。一方、(2)特別任用は朝鮮人のみを対象とするもので、朝鮮でのみで通用した。これにも、(2-a)1910年制令第7号にもとづき、定められた学校で3学年以上学び、「文官高等試験委員の銓衡」を経て判事になる制度と、(2-b)1920年制令第11号にもとづき、5年以上・判任官以上に在職し司法事務に従事した者について、特別な試験によって判事になる制度があった[金炳華1979:90-97]。金瑄得の場合は、まだ5年以上官職に就いていなかったので、(2-a)のケースと思われる。

というわけではなく、朝鮮時代以来の文人の家庭というわけでもなかった ポジションから、新知識を積極的に取り入れ、植民地下の極度に制限され た「立身出世」のコースに乗ったレアケースといえる。

金瑄得はその後、1923年10月に朝鮮北部の国境の都市・新義州において地方法院の判事となった。しかし1925年6月には判事を辞任することになった。遺族によれば、独立運動家に有罪判決を下さなければならない立場がつらくて辞職したという。実際、1919年の3・1運動以降、独立を求める様々な秘密結社が朝鮮半島の内外で盛んに武装闘争を展開していた。調べた限りにおいて、金瑄得は、そのうち天摩山隊と呼ばれる部隊を率いていた程・時興、朝鮮半島西北部を中心に活動していた。碧 昌 義勇団の楊承南に対する死刑判決に判事として関わっていた。裁判長が日本人だったとはいえ、独立運動への参与者に死刑を宣告する判決に陪席判事の1人として責任のある地位にあったことが苦しかったのであろう。

判事を退職した金瑄得は、1925年8月に群山で弁護士を開業した。ここで詳細は控えるが、群山では様々な活動に携わった。労働団体を網羅した群山労働聯盟の顧問、「純全たる朝鮮文藝を研究」するための群山文友会の結成と会長就任、群山幼児院の設立と院長就任などである。起訴された金堤の青年会会員の弁護を無料で引き受けたこともあったし、裡里における在満同胞擁護会事件の弁護なども引き受けた。ある意味、新義州時代の贖罪活動をおこなっていたようにも思われる。そうした活動の結果、日本人が多く住む群山において、金瑄得は朝鮮人としては指折りの有力者

⁷ 崔時興については『東亞日報』1924年7月21,30日、楊承雨については『東亞日報』1924年8月10日を参照。

⁸ 群山労働聯盟については『東亞日報』1926年1月14日、文友会については『東亞日報』 1926年1月19日・3月3日、幼児院については『東亞日報』1927年3月3日,1928年3月24日を参照。

⁹ 金堤郡孔徳青年会の弁護については『東亞日報』1927年6月14日、裡里事件の弁護については『東亞日報』1928年2月12日。

となっていた10。

しかしながら金瑄得は、ちょうど金壽卿が京城帝大に進学した年である 1934年に群山を去り、通川に帰郷した。故郷の家事一切を任せていた弟の金瑳得が同年亡くなったためである"。金瑄得は弟がおこなっていた酒類醸造場「東鮮」の経営を引き継ぎ、1934年10月に合名会社とした。事業規模を拡大し、漁業にも事業展開した"。そのため1936年頃で年収が約5千円と、かなり裕福な家庭となっていた"。また、弟が力を注いでいた無産児童のための学校・金州学院の維持や院長としての運営もおこなった」。その他、通川商工協会の会長、通川漁業組合の組合長など、ここでも地域の名士として活動した"。

以上、1945年以前の金壽卿の家庭環境について、父・金瑄得の経歴を中心に整理した。いくつか金壽卿のバックグラウンドとして重要な点を挙げておけば、まず父が学校教育を通じて自らの地位を獲得したこと、そのため教育への投資に対して極めて熱心であったと考えられること、それも自分や家族のみならず無産児童も含めた教育への思いを有していたこと、それを支える経済的な基盤を築いていたこと、通訳生という言語と言語の間に身を置く仕事を経験していたこと、朝鮮文芸に対する理解もあったこと

10 たとえば『開港三十周年記念 群山』[釜山日報群山支社 1928] という冊子の末尾には、46 名の著名人物が紹介されているが、金瑄得はそこに並ぶ唯一の朝鮮人であった。

¹¹前掲・弁護士認可書類および遺族証言による。

^{12『}朝鮮銀行會社組合要錄』には、少なくとも1935年版から1942年版まで東鮮の記録が残っている。

¹³年収情報は前掲・弁護士認可書類による。

¹⁴金州学院(大同学院)については、『東亞日報』1932年2月25日,1933年7月16,1935年4月10日,4月24日に詳しい。

¹⁵通川商工協会については朝鮮商工会議所 [1939年:113-114]、通川漁業組合については 『朝鮮總督府官報』1940年7月17日,1944年3月30日。後者では創氏改名後の山川淸光とい う名で記載されている)。なお、『東亞日報』1936年5月10日の記事「法曹界의明星」に、「通 川の代表的人物」として写真入りで紹介されている。

が挙げられよう。また、父が判事の時代に民族独立運動に接していたことや、弁護士として地域の青年運動を支援していたことも、幼年時代の金壽 卿の重要な背景として銘記しておくべきであろう。

1-2. 京城帝国大学

金壽卿は幼い頃に故郷の通川を離れ、母とともに父のもとへと移り住ん だ。普诵学校(朝鮮人向けの小学校)には新義州で入学した。その後、群山 公立普通学校への転学(1925年夏)、群山公立中学校(1930年入学)を経て、 1934年に京城帝国大学予科に入学することになる。この頃、普通学校は一 般に6年制、中等学校は5年制であった。したがって満6歳で普通学校に入 学し、修業年限どおり進んだ場合、大学予科入学時には満17歳となるはず である。ところが、1918年5月生まれの金壽卿が予科に入学したのは1934 年4月、まだ満15歳のことであり、通常より2年も早い。これは、普通学校 と中学校で1年ずつ、いわゆる「飛び級」をしたためであった。普通学校 の方は、詳しいことが不明である。遺族は1年早く入学したと伝え聞いて いるが、「普通学校規程」では4月1日時点で満6歳に達していない場合は、 その年度は入学できないことになっている。規程にもかかわらず1年早く 1924年に入学して6年間修了したか、あるいは1925年に入学して「学業優 秀日身体の発育十分」とみなされ5年間で普通学校を終えたか、いずれか である。また、「大学令」では中学校4年を修了した者は修業年限3年の大 学予科に入学できると定めており、これを俗に「四修」と呼んだ。いずれ にせよ金壽卿の成績が極めて優秀だったということであろう。

群山中学校について付言しておこう。当時、「国語を常用する者」すなわち主として日本人向けには「中学校」(朝鮮語が随意科目)、「国語を常用せざる者」すなわち主として朝鮮人向けには「高等普通学校」(朝鮮語が必修科目)と、異なる学校体系があった。群山中学は、もともと日本人篤志家の寄付によって1923年に建てられた日本人向けの学校であり、全羅北道

で唯一の中学校であった。一方、総督府による中等・高等教育の抑制政策の結果として、群山には朝鮮人向けの中等普通教育施設が無く、高等普通学校に進学しようとすれば40km程離れた全州まで行かなければならなかった。そこで、1928年に群山中学校が全羅北道に移管されるのに伴い、朝鮮人も3分の1程度入学させることを求める陳情運動が起こったりもしたが16、この運動は実らず、1928・29年は毎年3-4人の朝鮮人が進学したに過ぎなかったという17。金壽卿が入学した1930年度には学級が増設されたものの18、1931年度で全校生徒中の日本人314名、朝鮮人32名(9.2%)、1933年度で日本人383名、朝鮮人47名(10.9%)という割合だった19。遺族所有の写真のなかには、卒業前に群山中の朝鮮人生徒だけが学年をこえて一緒に記念撮影をしたものがあるが【図2】、そこからは朝鮮人が数の上でもマイノリティであった学校に通う子どもらの民族的な連帯意識を読み取ることができる。そうした学校に金壽卿は飛び込んだのであった。

群山中学校を修了した金壽卿は、1934年4月、京城帝国大学予科に入学した。城大(京城帝大の略)は、ちょうどこの年度の入学者から予科の修業年限を2年から3年に延長していた。また、それまで文科入学者を文科 A (法学系)・文科 B (文学系) と分けていたのを、第一外国語を英語とする文科甲類、ドイツ語とする文科乙類に分けるよう変更した。他の帝大や高等学校に合わせた改革であった[京城帝国大学同窓会1974:23-28]。金壽卿は文科甲組に予科・第11回生として入学した。同期生のなかには、後に越北する金嶺亨 (史学)・학龜鉉 (文学)・丁海弥 (哲学)・李明善 (文学)・金得中 (史学) らがいた【図3】20。

_

^{16『}中外日報』1928年2月28日、『東亞日報』1928年3月1日。

^{17『}東亞日報』1930年2月10日。

^{18『}毎日申報』1930年3月5日。

^{19『}全羅北道要覧』(全羅北道)の1931年8月版・10頁、1933年8月版・68頁。

^{20 『}朝鮮總督府官報』 1934年3月30日。



図2 群山中学校での送別記念写真(1933年)

(備考) この "舎 増 긔 렴" (送別記念) (1933年3月4日付) と題された写真には、3年生の 金壽卿(最後列、右から2番目)を含む17名の男子生徒が写っている。裏面に記された 名前は全て朝鮮人で、学年も1~5年にまたがっている。なお、1934年3月4日付の写真に も20名の男子生徒が写っており、裏面情報も同様である。



図3 京城帝大予科時代(1934年)

(備考) 1934年12月8日付で、"清凉里 見산에서" (清凉里の裏山で) とメモされている。 左から2番目が金壽卿。

1934年度予科入学生のカリキュラムは表1のとおりである。一般教養科 目が並んでいるが、なかでも語学関連の科目が目立っている。金壽卿は予 科時代までに英語・ドイツ語・フランス語はマスターしていた [小林 1951:347]。語学はこの後の金壽卿にとって極めて重要な武器となるので、 これについては次章で述べる。

表1 京城帝国大学予科のカリキュラム(1934年)

	第1学年	第2学年	第3学年
修身	1	1	1
国語及漢文	5	5	6
第一外国語	10	9	9
第二外国語	4	4	4
歴 史	3	5	4
地 理	2	_	_
哲学概説	_	_	3
心理及論理	_	2	2
法制及経済	_	2	2
数学	3	_	_
自然科学	2	3	_
体 操	3	3	3
計	33	34	34

(備考) 数字は毎週の教授時数。

(出典)『京城帝國大學一覽(昭和九年)』京城帝國大學,1934年, 101頁。

1937年4月、金壽卿は京城帝大法文学部哲学科に進学した。この進学経 緯については、京城帝大で言語学を教えていた小林英夫が、戦後、次のよ うに回想している「小林 1951:346-347]。

金君は三年の終りごろ学部の研究室にぼくを訪ねてきて、言語学を専 攻したい意志を明らかにした。あいにく城大の法文学部には言語学講 座の設けがなかったので、専門的な講義をきくすべがなかった。それ でよんどころなく、他に専攻を決めなければならなかった。

ぼくは哲学科をすすめた。教授陣の充実ということもあったが、それ よりもこれからの言語研究は哲学的頭脳を必要とするように考えたか らだった。

この引用文の含意を理解するためには、当時の法文学部の学科等の構成に ついて確認しておく必要がある。表2は、金壽卿が入学した年度における 法文学部の学科・専攻・講座担任をまとめたものである。文学科には時枝 誠記の「国語学」すなわち日本語学のほか、小倉進平の朝鮮語学の講座が 設置されていた。にもかかわらず金壽卿が小林研究室の戸を叩いたのは、 個別言語の研究ではなく、より一般的な言語学に関心を示していたという ことであろう。小林英夫はソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913年) の『一 般言語学 (Cours de linguistique générale)』の翻訳などの活躍で既に著名人物だっ たが、東京帝大では選科生で学士号をもっていなかったためか、助教授の まま講座の担任が無かった。ここで小林が「言語学講座」が無いといって いるのも、ヨーロッパで盛んにおこなわれていた比較言語学や一般言語学 などを体系的に教える講座が無かったということであろう。

小林のアドバイスがどれほど作用したのかは不明だが、金壽卿が進学し たのは、哲学科のなかでも哲学専攻、いわゆる「純哲」(純粋哲学) のコー スだった。当時、哲学専攻で教鞭をとっていたのは、法文学部長もつとめ た安倍能成やその妹婿たる宮本和吉らであった。いずれもカント研究で業 績をあげた哲学研究者で、京城帝大では安倍が主として哲学史、宮本が最 新のフッサールの現象学も含む哲学概論を講義したというが 「安倍 1966: 557]、言語思想に特に詳しいということではなかったと思われる。そのた

表2 京城帝国大学法文学部の学科・専攻・講座(1937年度)

学科	専攻	講座担任	
法学科	(専攻別無し)	(略)	
哲学科	哲学専攻	安倍 能成	宮本 和吉
	倫理学専攻	白井 成允	秋葉 隆
	心理学専攻	黑田亮	
	宗教学専攻	赤松 智城	
	美学、美術史専攻	上野 直昭	田中 豊藏
	教育学専攻	松月 秀雄	田花 爲雄
	支那哲学専攻	藤塚鄰	
史学科	国史学専攻	田保橋 潔	松本 重彦
	朝鮮史学専攻	藤田 亮策	
	東洋史学専攻	大谷 勝眞	鳥山 喜一
文学科	国語国文学専攻	高木 市之助	時枝 誠記
	朝鮮語朝鮮文学専攻	高橋 亨	小倉 進平
	支那語支那文学専攻	辛島驍	
	英語英文学専攻	佐藤 淸	

(出典)『京城帝國大学一覽 昭和十二年』(1937年)より作成。

(備考) 講座名は専攻名に対応しているが、このうち秋葉降は社会学講座である。 また、西洋史講座を担任していた史学科の金子光介は、対応する専攻がないた めに外してある。講座担任は通常教授だが、辛島驍のみ助教授である。

め金壽卿は、哲学科で基礎的な思想史を学びながらも、「ひまあるごとに ぼく〔=小林英夫〕の研究室を訪れて、言語学の知識の吸収につとめ」たと いう [小林 1951:347]。その内容については次節で述べる。

金壽卿の学籍簿がソウル大学校に残っていないため、何をどう学んだの かについて正確には分からない。規程によれば、卒業までに、哲学科の共 通科目(哲学、倫理学、心理学、美学・美術史、教育学、中国哲学、社会学、史学概 論・文学概論)、 専攻に属する科目(哲学、倫理学認識論、哲学特殊講義及演習、 ギリシア語・ラテン語、その他の哲学科・史学科・文学科に関する科目)、外国語

(英・独・仏)を学んだ上で、卒業論文を提出することになっていた²¹。卒 業論文はヘーゲル哲学に関するものだったという[小林1951:347]。「純 哲 | は入学当時、教員側が教授2名(安倍、宮本)、助教授1名(田邊重三)、 助手1名(高亨坤)の計4名に対し、学生は1937年度生4名(金壽卿、丁海珎、 金洪吉、近藤時雄)、1938年度生1名(枡中健毅)の計5名しかおらず、かなり 濃密な関係だったようである【図4】²²。後に宮本は、「純哲」の合計30数名 の卒業生の9割が朝鮮人で、概して頭がよかったと回想している「宮本 1951:39²³

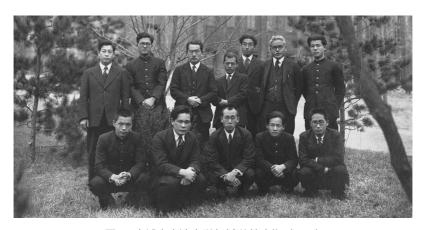


図4 京城帝大法文学部哲学科時代(1938)

(備考) 裏面に「1938.3.7 昭和十二年度哲學專攻生卒業 送別紀念」と記されている。後 列右側より金壽卿(1回生)、安倍能成(教授)、髙亨坤(助手)、田邊重三(助教授)、 宮本和吉(教授)、丁海珎(1回生)、朴義鉉(1936年卒業)、前列右側より孫明鉉(大学 院生、早稲田大卒、ギリシア哲学研究)、李本寧(1938年選科修了)、枡中健毅(1938年 卒業)、有賀文夫(大学院生、京城帝大卒、超越論研究)、金洪吉(1回生)。

²¹『京城帝國大学一覽 昭和十二年』1937年,72-75頁,83-85頁。

²²前掲『京城帝國大学一覽』より。

²³ただし宮本和吉は、朝鮮人学生について、成績はよいが、卒業研究では創造性が無かった などと低く評価している。

もちろん法文学部時代に朝鮮語学も学んだことは間違いない。朝鮮語学者の小倉進平は、1933年以降、東京帝国大学言語学科教授を兼任して本拠地を東京に移し、京城帝大には秋に集中講義で来ており[東京大学1986:692]、それは聴講していただろう。また、予科時代のこととして、金壽卿ら十数名が朝鮮語学会の事務室に行き、新たなハングル綴字法を李克魯から習ったという取材記事がある²⁴。朝鮮プロレタリア芸術家同盟(KAPF)を代表する作家だった「林和や同期生の申龜鉉に勧められ、フランスのクーラン(Maurice Courant, 1865-1935)が朝鮮の文献についてまとめた大著『朝鮮書誌(Bibliographie coréenne)』(1894-96)の翻訳に着手したのは1939年秋のことだった「金壽卿1946:190」。

こうして予科・本科あわせて6年間に渡る大学生活を終えた金壽卿は、1940年3月31日、学士試験に合格し、文学士の学位が授与された²⁵。

1-3. 東京帝国大学大学院進学から解放まで

京城帝大を卒業した金壽卿は、1940年4月30日付で東京帝国大学文学部 大学院に入学し、書類上は1944年3月15日に退学するまで約4年間在学した。 指導教員は言語学講座を担任していた小倉進平であり、研究課題は「朝鮮 語の比較言語学的研究」であった。単身東京に渡り、最初は杉並区高円寺 で下宿生活をしていたようである²⁶。当時の大学院には博士学位しかなく、

²⁴ 李忠雨 [1980:228-229]。情報リソースは不明であるが、李鍾原、車洛勳、金錫亨、金洪吉、 金壽卿、丁海珎、申龜鉉、李明善らが参加したという。朝鮮語学会が『한글맞춤법통일안』 を出したのは1933年のことである。なお、리규춘 [1996:20-21] でも、京城帝大時代に 李克魯を訪ねて行ったと記されている。

^{25『}朝鮮總督府官報』1940年4月9日。遺族所蔵の法文学部卒業式の写真(1940年3月25日)では、背の高い金壽卿が学帽をかぶらず、学生の最前列の真ん中に立っているので、たいへんよく目立っている。

²⁶ 東京大学文学部所蔵の学籍簿による。住所は「杉並区高円寺五丁目八十五ノ三 荻原方」であった。高円寺から大学のある本郷までは遠いが、なぜこの家だったかは不明である。

学部研究科で2年以上研究に従事し、論文を提出して合格した者に授与さ れることになっていたが。大学院生は各学部に分属し、指導教員の指導を 受けて研究に従事することになっていた。在学期間は2年間だが、満期と なっても1年ずつ延期は可能で、最長5年間まで在学することができた。特 段のカリキュラムなどは無く、ただ毎年度末に「其の攻究の状況及成績を 記載したる報告書 |を指導教員に提出することが求められている程度であっ た28。金壽卿がこの報告書を出していた形跡は確認できるが、1943年2月 10日付でまとめて3年分を出し、退学後の1944年4月26日に最後の提出をし ており20、あくまでも形式的なものだったといえる。そうしたこともあり、 この時期の金壽卿の足跡をたどるのは容易ではない。以下、基本的な事実 関係のみ整理しておきたい。

金壽卿の大学院進学当初、東大言語学研究室は、上田萬年門下の朝鮮語 学者である小倉准平を講座担任教授とし、アイヌ語学の金田一京助(助教 授)、ギリシア・ラテン語の神田盾夫(助教授)、モンゴル語学等を講じて いた服部四郎(講師)がいた。1943年春には小倉・金田一の両教授が退職し、 代わって服部四郎が助教授に昇進するなど、大きな変動があった「東京大 学 1986: 692-695]。 金壽卿の指導教員もこの時に服部四郎に代わっており、 その交替の関係で3年分の報告書をまとめて出すことになったと思われる。

1940年度の東京帝大の大学院生総数は406名、そのうち朝鮮からの留学 生は10名であった30。なかでも金壽卿に近い大学院生は、まず京城帝大「純 哲|同期の丁海珎が「独逸観念論の研究」という研究課題で進学していた

^{27「}學位令」(1920年勅令第200号)および「東京帝國大學學位規則」(1921年)による(『東 京帝國大學一覧 昭和十五年度』101-109頁)。

^{28「}學部通則」(前掲『東京帝國大學一覧 昭和十五年度』150-153頁)。

²⁹ 東京大学文学部所蔵の大学院研究生研究報告提出簿による。残念ながら報告書自体は保管 されていない。

³⁰ 前掲『東京帝國大學一覧 昭和十五年度』附録。

ほか、梨花女子専門学校で教えていた朝鮮語学者の李煕昇(京城帝大卒)が 「安息年」として1940年度の1年間「朝鮮語の音韻的研究」という研究課 題で小倉進平のもとに来ていたし、「純哲」のずっと上の先輩である会林 淑もドイツ観念論研究のため大学院に来ていた³¹。李熙昇 [2001:134-136] による後の回想によれば、朝鮮人留学生は「同じ民族」という意識をもっ て親しく過ごし、休日には旅行などもしていたという【図5】。



東京帝大図書館前で李熙昇とともに(1942) (備考) 裏面には "En avant de la bibliothèque" とのメモがある。

大学院時代で重要な出来事は李南載との結婚である。李南載は中朝国境 地帯である間島生まれで、吉林省龍井の光明女子高等学校を出て、1936年 にソウルの梨花女子専門学校文科に進学し、1940年に卒業していた。金壽 卿は、1942年3月、ソウルでおこなわれた京城帝大同期の李明善の結婚式 に出席した際に、李南載と出会った。翌1943年3月に2人はソウルの京城府

³¹前掲『東京帝國大學一覧昭和十五年度』492-496頁。

民館で結婚式を挙げた。その後、新婚旅行を経て、2人は豊島区要町に新居を構えることになった³²。この家は金壽卿の親戚である画家・金敏龜のアトリエだったが、本人が通川に帰郷することになったため、借りることになったという。

しかしながら東京での新婚生活は長く続かなかった。1943年の夏休み³³ に朝鮮に帰った2人は、そのまま東京には戻らず、金瑄得が用意していたソウルの惠化町(現・惠化洞)の家に住むことになったのである。そして書類上は1944年3月15日付で「一身上ノ都合上」により退学し³⁴、4月15日付で京城帝大法文学部朝鮮語学研究室の嘱託となった³⁵。東京での研究を中断した理由については、1943年春に小倉進平が退官していて朝鮮語学の専門家が東京帝大からはいなくなっていたこと、既に李南載がお腹に子どもを宿していたことなども考えられる。だが、学徒出陣の問題が最も大きかったのではないかと推察される。小林英夫 [1978:567] は、「昭和17年ころであったか、当時東大の大学院に席をおいていた金寿卿君が物情騒然となったので一時帰国し、わたしの研究室にしきりに顔を出すようになった」と回想している。「一時帰国」の時期は曖昧で、「物情騒然」の内容も不明だが、東大に席を残したままソウルに戻ってきたことはわかる。また、この頃に京城帝大法文学部で小倉進平の後任として講座担任をしていた河野六郎が、後に言語学者・菅野裕臣に伝えた情報によれば、「金壽卿氏は学徒

³²前掲・東大学籍簿には「豊島区要町三丁目十一ノー」とある。

³³ この頃の学年暦は戦時期のためきわめて変則的になっていた。1942年度が4~9月の半年で終わったころで、学年がズレはじめた。1942年には夏期休業が廃止となり、1943年には7月11日から8月30日までのあいだの1ヶ月以内で学部毎に休業することになっていた [東京大学1986:441-442]。

³⁴ 前掲·東大学籍簿。

³⁵ 金壽卿が金日成大学文学部に提出した自筆履歴書 (No.13、1946年12月28日付) による。 これは米国が朝鮮戦争時に北朝鮮でかき集めたいわゆる「鹵獲文書」に含まれている(『金 大教員履歴書文学部』、米国国立文書館 RG#242, 2005 1/31所収)。以下「金大履歴書」と よぶ。遺族によれば、附属図書館の嘱託も兼任していたという。

動員を逃れるため京城帝大朝鮮語及朝鮮文学講座の無給助手をしていた」 という36。嘱託任用の責任を有する地位にあった河野六郎の証言なので、 この情報は信憑性があるといってよいだろう。

朝鮮人学徒出陣をめぐる当時の状況を簡単に整理しておこう「姜徳相 1997]。朝鮮人にも兵役法を施行することが閣議決定されたのは1942年5月 であったが、諸々の準備の関係上、法の施行は1943年8月、実施は1944年4 月となっていた。一方、学生の戦争動員が進展し、1943年6月には「学徒 戦時動員体制確立要綱」が閣議決定され、9月には法文系学生の徴兵延期 の停止が決定され、10月には徴兵検査が始まった。だがこれは日本人学生 を対象にした法令であり、朝鮮人学生には適用されなかった。日本政府は、 朝鮮人・台湾人の学生だけが学園に残ることを避けるため、植民地学生を 「志願」により現役兵として編入する法令を定めた。「内地」では、大学・ 高専と朝鮮奨学会が、留学生を「志願」させるためキャンペーンを繰り広 げた。ところが、行方をくらます学生が多く、朝鮮人学生は容易に出頭に 応じず、「下宿を訪ねてみれば、どこへ行ったか幾日も帰らないというの が多かった | [姜徳相 1997:60-61] と、当時の東大教授は述べている。

その意味では、金壽卿も「行方不明」の大学院生の1人だったのかもし れない。実際、東京帝大内部文書では、どういうわけか1943年末には文学 部の大学院には朝鮮人が1人もいないことになっている³⁷。詳細に不明な 点はあるものの、結果的に金壽卿は学徒出陣に駆り出されることなく、ソ ウルで研究を継続することができた。

京城帝大嘱託の時期の研究内容について唯一判明しているのは、創氏改 名後の名前である「山川哲」38の名義で、1945年3月に『「老乞大」諸板の再

³⁶ 菅野裕臣の自叙伝「菅野裕臣の Aŭtobiografio」の「II)大学-大学院」による。

^{37「}昭和十八年十二月三十一日現在本学学生生徒在籍者数調」「東京大学史史料室 1998:430-431

³⁸ 金壽卿の父・金瑄得は1940年8月に、既に「山川清光」と創氏改名していた(『朝鮮總督府

吟味』を謄写版で印刷したことである[京城帝国大学法文学部1945]。これについては次章で検討するが、この時期の金壽卿は、京城帝大附属図書館に移管された奎章閣(朝鮮王朝の王室図書館)の朝鮮語関連史料を、腰を落ち着けて閲覧するような研究をしていたことは確かである39。と同時に、学部時代のように、小林英夫の研究室に通いながらのマンツーマンの講読も続けていた。16世紀ポルトガルの叙事詩『ウズ・ルジアダス(Os Lusiadas)』を読んでいるうちに、日本が敗戦を迎えた[小林1951:348]。日本が泥沼の侵略戦争を繰り広げるなか、金壽卿は朝鮮語史を深く掘り下げながら、世界の言語と言語学を広く学んでいったのであった。

2. 植民地下の言語学研究

以上、1945年8月以前の金壽卿の足跡を、判明した限りで辿ってきた。本章では、そのうち重要と思われるポイントを掘り下げる。解放後の金壽卿の言語学は、「日本の朝鮮語学」や「国語学」といった枠組に収まりきらない性格を有している。といって、ただ輸入理論型の学問でもなく、朝鮮語史の文献学的な蓄積も踏まえている。本章では、そうした金壽卿言語学の知的基盤の一端について明らかにしておきたい。ここでは、まず金壽卿の語学能力について確認した後、社会主義との関係について検討した上で、哲学や一般言語学・構造言語学への志向性と、史的言語学にもとづく朝鮮語学への志向性について見ておきたい。

-

官報』1940年10月3日)。戸主の金瑄得の創氏により、この時に金壽卿の氏も山川となっていたはずである。だが、東京帝大文学部に新氏名を届け出たのは1943年3月1日のことであり(学籍簿による)、少なくともそれまでは金壽卿で通していた模様である。「山川」は群山と通川からとったもので、「哲」は哲学を専攻していたことからつけたという[小林1951:345-346]。ただし小林は「通川」を「端川」と間違って記憶している。

³⁹ この頃、ソウルで河野六郎とともに雑誌を出していたとの情報もある(前掲「菅野裕臣の Aŭtobiografio」)。

2-1. 金壽卿の知的背景

金壽卿を直接知る人は、口を揃えるようにその語学力について語ってい る。まず群山中学校に入学できた時点で、在朝日本人の生徒並みに日本語 ができたと思われる。漢文教育を書堂や家庭などで受けた形跡はないが、 普通学校・中学校・予科の科目には漢文があり、そこで基礎は習得したと 考えられる。また、中学校からは英語を学んでいた⁴⁰。大学予科修了まで には、先述のとおり英語・ドイツ語・フランス語を身につけていた。英語 については、予科の梅原義一・兒玉才三の両教授の指導のもと、丁海珎ら とともに「英語研究会」で学んでいた【図6】。研究会では18世紀イギリス



図6 英語研究会(1937)

(備考)「英語研究会 送別記念 於金閣園 1937.2,20」と記されている。記された名 前から写っている人物を特定すれば、前列右側より梅原義一(予科英語教授)、兒玉才 三(予科英語教授)、後列右側より桶下田國威(文科3年甲組)、丁海珎(文科3年甲組)、 金壽卿(文科3年甲組)、金丸光宮(文科2年甲組)、高谷久則(文科1年甲組)である。

⁴⁰ 旧制中学校では英語・ドイツ語・フランス語・中国語が外国語科目として設定されていた が(中学校規程)、金壽卿の群山中学校の通知表(1933年度)では英語科目だけが記され ていた。

のロマン派の詩などを耽読していた [金壽卿 1937]。ドイツ語は予科で必須の第二外国語であるが、哲学科時代にはドイツ語による哲学書の講読を相当こなしたはずである。フランス語は予科で科目が設置されておらず、本科進学以前にどのようにマスターしたかは不明である。ただし、遺族によれば、金壽卿の父(金瑄得)は「朝鮮人は勉強しなければならない」との考えから、外国語を学びたいという息子に対し外国語の個人指導の費用を提供したことがあったということなので、そうした特別の教育を受けていた可能性もある。

他の言語についても述べよう。哲学科ではギリシア語・ラテン語がカリキュラムに含まれていた。ロシア語は法文学部講師チルキン(S. V. Chirkin, 1879-1943)から習った⁴¹。チルキンは帝政ロシアの元外交官で、ロシア革命以降、かつての赴任地だったソウルに移り住んだ、いわゆる白系ロシア人だった⁴²。授業を年度末まで受け続ける学生はごく僅かで、金壽卿はその1人だったという[李忠雨1980:218]。イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、デンマーク語は小林英夫から手ほどきを受けた。イタリア語はダンテの『神曲』を、スペイン語は現代作家の作品を、ポルトガル語は既述のとおり『ウズ・ルジアダス』を講読した。難しいテキストの読解も「ケロリとした顔でやってのけた」金壽卿に対し、「ぼくは内心、彼の底知れぬ語学力に舌を巻くのだった」と小林[1951:348]は回想している。解放直後にはサンスクリットの講義をしていたというから⁴³、その程度に学習

^{41 &}quot;Russian" と書かれた1938年2月15日付の写真を遺族が保管している。チルキンを4人の学生が囲んで教室で撮ったものだが、金壽卿は写っておらず、撮影側にまわったものと思われる。参考までに学生は裵澔(中文)、李碩崑(英文)、丁海珎(哲学)、龐溶九(英文)である。同期の丁海珎以外の3名は、予科の1年上の先輩である。

⁴²チルキンの回顧録の原稿が最近になってロシアで出版されているが、外交官時代のことがほとんどで、1920年代以降のことはほとんど書かれていない [Чиркин 2006]。

⁴³後にソウル大言語学科教授となる金芳漢が習っていたという(前掲「菅野裕臣の Aŭtobiografio」)。

していたのであろう。モンゴル語も習得していたようだが4、これは東京 帝大の服部四郎の関係もあるかもしれないし、後述する「老乞大」研究と も関係あるかもしれない。

かくて金壽卿は1945年(27歳)までに、インド・ヨーロッパ諸語(印欧諸 語)の古典語(ギリシア語、ラテン語、サンスクリット)と現代語(英、独、仏、露、 伊、西、葡、丁)、そして東アジアの古典語たる漢文と諸言語(朝、日、中、蒙) を習得していたことになる (他にもあるかもしれない)。この類い希な語学能 力が、金壽卿言語学の幅広さを担保していたといえよう。

次に、金壽卿の知的基盤の国際性を考えるとき、社会主義との関係は検 討に値する。ただ、あらかじめ述べておけば、金壽卿が戦前に社会主義者 だったという直接的な証拠はなく、間接的な状況証拠しかない。

作家リ・ギチュンは、京城帝大時代に金壽卿が金錫亨、朴時亨(選科生 として1937年に法文学部史学科に入学)、申龜鉉らとともに「読書会」を秘密裡 に結成し、マルクス・レーニン主義哲学と経済学の書物を読破したと描い ている [리큐を 1996:19]。十分あり得る話だが、小説のみを根拠にするわ けにもいくまい。ただし、これを多少裏付けるのが、金壽卿の同期生であっ た金得中が1947年に金日成綜合大学に提出した履歴書に付した「自叙伝」 (経歴説明書)である。金得中は、そのなかで「〔京城帝大予科〕2学年の時か らは社会科学に留意するようになり、その方面の読書を始め、意気相合し た学友とともに読書会をもち、あるいは名士を訪ねてかれらの経歴や抱負 を聞いたりした」と述べているが。当時の「自叙伝」は、過去の思想的・ 運動的経歴を強調して書くため傍証を要するが、読書会自体はあったと見

⁴⁴ 前掲「菅野裕臣の Aŭtobiografio」。

⁴⁵ 김득중, "자서전", 1947年7月28日付, 『一九四七年度 金日成大學發令件』, 北朝鮮人委教 育局, NARA 文書 RG #242, 2006 12/32.1。なお、金壽卿、朴時亨、金錫亨、申龜鉉らに ついては履歴書に自叙伝が付されていない。もともとあったのに欠落したのか、当初より 履歴書のみであったのかは不明である。

てよかろう。

この頃の一般的な状況をいえば、安倍能成 [1966:555] は、「その国の政治に不平」をもつ朝鮮人学生には「共産主義的傾向に走る者が多」かったと回顧しており、その例として安倍の下で助手もしていた「純哲」の学生の名をあげている*6。また、ジャーナリストの季*党南 [1980:218] は、法文学部時代のこととして、「図書館に備置されたソ連の新聞『イズベスチヤ』(知識という意味)や『プラウダ』(真理という意味)誌は、金壽卿(哲学科12期生)の独り占めも同然だった」と記している。当時、京城帝大附属図書館でソ連の新聞を定期購読していて、学生も容易に閲覧できる状態だったのどうかは確認できていないが、社会主義とのつながりを考える上で興味深いエピソードである。さらに、東京帝大時代に短期間指導教員をつとめた服部四郎は、1948年頃、「最近のうわさ」として「あの金君が終戦前すでに共産党員」だったと語っていたという「小林 1951:348」。越北した後に聞いた「うわさ」であり、既に党組織が壊滅していた時期に「党員」であったというのは疑問だが、何らかの非公然活動はしていた可能性が皆無ではない。

人的なつながりに関していえば、まず金壽卿の母・李素玉の弟(すなわち金壽卿の外叔父)で、後に越北する李種植が京城帝大で経済学を専攻した(法学科1930年度卒業)。マルクス主義者だったといい、1920年代末には京城帝大内の反帝同盟や文友会、経済研究会にも参加し、1930年には光州学生事件や東京留学生事件に関与した容疑で検挙されたこともあった47。金壽卿と同じ頃に東京帝大の大学院に進学していた「純哲」の先輩、金桂淑は京城帝大時代に経済研究会に参加し、プレハーノフやブハーリンの唯物

_

⁴⁶ 安倍が特に挙げている名前は朴致祐 (1933年卒業)、申南澈 (1931年卒業) である。

⁴⁷ 李種植, "自敍傳", 前掲『一九四七年度 金日成大學發令件』および李忠雨 [1980:180] による。

論などを読んでいた [李忠雨1980:124]。京城帝大の同期生のうち何人かは、 卒業後に何らかの活動をしていた形跡が見られる。申龜鉉は、京城帝大卒 業後に中央中学校で教員をしていたが、1941年9月、朝鮮共産党再建運動 事件の容疑で逮捕されている48。金錫亨と朴時亨は大卒後それぞれ養正学 道の高原警察署に検挙され、解放の日まで咸興刑務所で過ごした49。金 錫亨の遺族は、彼がハングル研究関連の事件に連累することになったと語っ ているが、詳細は定かでない [金日洙 2005:40]50。 丁海珠はそのように検挙 された形跡が見られないものの、東京帝大にいた頃に国際共産主義運動の 一員として活動していたと、その遺族は語っている [鄭根埴 2012:11]。

金壽卿は、解放直後にソウルで出した翻訳書のあとがきで、「長いあい だ筐の底に埋もれていた手稿が〔…〕日の目をみたのは、ひとえに朝鮮の 解放のために闘ってきた革命闘士の余沢にほかならない」と独立運動家に 謝辞を述べている [金壽卿 1946:191]。これは解放後に突然芽生えた思いで はなかったように思われる。とはいえ、金壽卿はふだん寡黙な人で必要以 外のことは語らなかった。小林英夫「1951:349」も「かれは秘密の守れる 男だった」と記している。彼が社会主義や朝鮮民族に対して思いを抱いて いたとしても、容易には周囲に打ち明けていなかったであろう。だが、そ の額の奥には計り知れない思いが、グローバルな広がりをもって秘められ

48 前掲『金大教員履歴書 文学部』所収の申龜鉉履歴書(No.1、日付記載無し)。

⁴⁹前掲『金大教員履歴書 文学部』所収の朴時亨履歴書(No.23、日付記載無し)、金錫亨履 歴書(No.24、日付記載無し)。

⁵⁰ 引 子 [2001] では、金錫亨がソウルで秘密裡に組織された武装蜂起準備結社に関わって いたと叙述している。これに関連して、進明高等女学校教員だった京城帝大同期の金得中 も、同じく1945年3月に逮捕され、未決囚として解放の日まで咸興刑務所に収監された。 金得中の前掲「自叙伝」によれば、「同志とともに中等学校以上の学生と教員の反帝反戦 組織を画策」していたと述べている。もし、これらが同じ事件だったとすれば、城大同期 が何らかの反帝国主義・反戦の動きを模索していたのかもしれない。

ていたと想像してみることは可能であろう。

2-2. 構造言語学と史的言語学

以上が1945年以前の金壽卿の知的バックグラウンドだが、次に彼の言語学の形成について考察しておきたい。ヨーロッパの言語学は、ギリシア・ラテンの古典研究、そしてサンスクリットの「発見」を契機とした印欧諸語の歴史的な比較文法研究と展開してきたため、19世紀までは主として「文献学」(philology)と呼ばれた。それ以来、具体的な文献の蓄積にもとづく史的言語学は言語学の1つの核であるが、20世紀には、そもそも言語とは何かを探求したソシュールの一般言語学、ソシュール以降にジュネーヴやプラハ、コペンハーゲン、米国等で展開した、いわゆる構造言語学、ソ連を中心に展開したマルクス主義言語学など、新たな潮流が次々に形成された51。金壽卿言語学の初期形成過程においては、一般言語学・構造言語学さらには言語哲学など、より普遍的な言語問題への志向性と、朝鮮語に関する個別具体的な史的言語学への志向性とが同時に存在している。その点をここで確認しておきたい。

ソシュールがジュネーヴ大学でおこなった講義を弟子がまとめた『一般言語学講義』(1916年)は、1928年に『言語学原論』とのタイトルで岡書院から初めて日本語訳が出されたが、その翻訳者が小林英夫であった。小林は京城帝大時代に、同書を改訳し縦組から横組にした新版を岩波書店から出した(1940年)。その「訳者の序」で「旧訳文を横書に移写する仕事を手伝はれた独古信子、某未亡人及び金壽卿の三氏の労」に謝辞を述べている[小林1940:9]⁵²。既にフランス語が堪能だった金壽卿は、ただ写し書きす

⁵¹ さまざまな言語学史の著述があるが、本稿との関係でいえば、イヴィッチ [1974] が、ソ 連等のスラヴ語圏の動向をも含めた潮流を幅広く要領よく整理しており、有益である。

⁵² この序文は1939年10月にソウルで書かれている。

るだけの役割以上のことを果たしたに違いないが、いずれにしてもソシュー ルを精読していたことは確かである。解放後に公表した論文でも、ソシュー ルやその弟子バイイ (C. Bally) の言語論を原典から引用しており [金壽卿 1949b:38]、ジュネーヴ学派は学んでいたと考えられる。また、小林は当 時ヨーロッパの言語学論文を盛んに翻訳紹介しており、そのなかにはジュ ネーヴのソシュールやバイイ、セシュエ (A. Sechehaye) のみならず、プラハ 学派のトゥルベツコイ (N. S. Trubetzkoy)、コペンハーゲン学派のイェルムス レウ (L. Hjelmslev) らも含まれていた [小林 1977]。

そうした最新の構造言語学の理論に金壽卿が幅広く接していたであろう ことは、小林英夫が1945年に刊行した『言語研究・現代の問題』[小林 1945] からうかがい知ることができる。同書は言語研究における「構造主 義」を教育するために体系的に編まれた翻訳論文集で、仏・独・伊の諸言 語で書かれた16本の論文の日本語訳が収録されている【表3】。同書は、記 号の恣意性をめぐるバイイやヴァルトブルクらの論争、共時熊/通時熊を めぐるバンヴェニストやレルヒらの論争など、当時日本ではまだどこでも 紹介されていなかったヨーロッパの構造言語学をめぐる最新の議論を含む ものであった。この本の「はしがき」(1943年晩夏の日付)で、小林が唯一謝 辞を記したのが金壽卿であった。すなわち彼は、「原稿浄書の労について でもあるが、それよりもこれだけの論文を比較的短時日に訳出する気力を もちえたことに対して尚のこと、勉学の苦楽を共にした山川哲君に私は感 謝しなければならない」[小林1945:4]と、金壽卿を単なる助力者以上の 協働者として言及している。表3に整理した小林の翻訳脱稿時期からすれ ば、原典をともに読むところから訳稿を清書するところまでの2人の協力 関係は、京城帝大法文学部時代にはじまり、東京帝大に進学した後も持続 していたことが推察される。

こうした構造言語学の複数の潮流のなかで、金壽卿は特にプラハ学派に 思想面でも方法面でも深入りしていたと見られる。まず思想面からいえば、

表3 小林英夫編訳『言語研究・現代の問題』(1945)の内容

著者		タイトル	原典		翻訳		
			言語	刊年	脱稿日	初出	
バイイ	C. Bally	共時態と通時態	仏	1937	1937/11/12	『方言』 8(1), 1938	
シュッハルト	H. Schuchardt	物と語	伊	1911	1938/10/14	『国語研究』 7(1), 1939	
ブレンダル	V. Brøndal	構造言語学	仏	1939	1940/4/17	『思想』 218, 1940	
ロジツィウシュ	J. v. Laziczius	いはゆる言語学上の 第三公理	独	1939	1940/6/13	『国語研究』 8(8), 1940	
ヴァンドリエス	J. Vandryes	静態言語学の課題に ついて	仏	1933	1940/11/4	『コトバ (再刊)』 3(1), 1941	
ドラクロア	H. Delacroix	言語の門口まで	仏	1933	1940/11/13	『国語研究』 9(2), 1941	
ヴァンドリエス	J. Vandryes	「経済に話す」	仏	1939	1940/11/22	『コトバ (再刊)』 3(7), 1941	
レルヒ	E. Lerch	言語における強制的 なものと自由なもの	独	1933	1940/12/3	_	
テラチーニ	B. A. Terracini	言語記号の形態論的 価値についての考察	伊	1939	1941/5/14	_	
ベルトーニ	G. Bertoni	「音韻法則」	伊	1923	1942/3/24	_	
ヴァルトブルク	W. v. Wartburg	史的言語学と記述言 語学との関係につい ての考察	独	1939	1942/3	-	
ビューレル	K. Bühler	言語理論の昨日今日	独	1934	1942/4/3	_	
セシュエ	A. Sechehaye	有機的進化と偶然的 進化	仏	1939	1942/4/7	_	
バンヴニスト	É. Benveniste	言語記号の性質	仏	1939	1942/6/21	_	
レルヒ	E. Lerch	言語記号の本質について	独	1939	1943/6/3		
ボイセンス	E. Buyssens	言語記号の性質	仏	1941	1943/6/3	_	

(出典) 小林英夫編訳『言語研究・現代の問題』養徳社,1945より作成。

1942年2月、ソウルに一時的に帰っていた金壽卿は京城帝大の哲学談話会 の例会で「言語の本質:マルティに従ひて」を発表した50。そこで報告し た内容の記録はないものの、今や言語学のなかでほとんど語られることの ないマルティ (Anton Marty, 1847-1914) の言語哲学に注目していること自体が 興味深い。マルティは、師ブレンターノの記述心理学を言語研究へと応用 し、言語の歴史的変化よりは心理や意思といった観点から現在の言語のあ り方を探求したため、構造主義の先駆者と評価する者もいる [Kiesow 1990]。 とりわけヤコブソン (R. Jakobson) やマテジウス (V. Mathesius)、トルンカ (B. Tmka)ら、プラハ学派の「理論と実践に紛れのない痕跡を残した」哲学者 である [Leška 2002:84]。 金壽卿は、現代言語学の思想的潮流を遡及してマ ルティに辿り着いたに違いないが。

方法論という側面でも、金壽卿は解放直後の1945~47年頃に脱稿した論 文 [金壽卿 1947a, 1949a, b] において、プラハ学派が確立したとされる音韻論 (phonology) を既に使いこなしている。諸言語の物理的な発音を普遍的・ 客観的な基準で分析する音声学(phonetics)に対し、音韻論は個別言語の使 用者にとって知的意味をもった音の区別に注目する(たとえば日本語の「ん」 は、音声学的には $[n] \cdot [m] \cdot [n]$ などの発音に区別され得るが、音韻論的観点からす ればこれらは1つの音素 /N/となる)。その際、その言語で区別される音の最小 単位を音素 (phoneme) といい、音素どうしを区別する特徴のことを弁別的 特徴(distinctive feature)という。ある音素と他の音素を弁別するのは音の対 立(opposition)、たとえば有声音か無声音かといった対立である。こうして、

^{53「}研究室通信」(京城帝國大學法文學部『學叢』第1輯、1943年、118頁)。哲学談話会は 1933年から始まったもので、大学院生・助手・卒業者らが発表し、教授陣や在学生が参加 していたもののようである。金壽卿が発表した時には、哲学科の宮本和吉、田邊重三のほ か、小林英夫も参席していた。

⁵⁴ 当時も今もマルティの著書の日本語訳はない。ただ、当時唯一の概説的著作として小林 [1937] があった。

その言語にとって意味のある音の対立を抽出していくのが音韻論の重要な プログラムであった55。金壽卿の解放直後の研究では、そうした知的トレー ニングを経た形跡が多分に見られる。

このような一般言語学・構造言語学への志向性とともに、金壽卿は史的言語学にも深く入り込んだ。まず、小林英夫のもとでは、既に印欧諸語の史的言語学の古典となっていたメイエ(Antoine Meillet)の『史的言語学における比較の方法』[メイエ1977]をフランス語で通読していた56。同書は、異なる言語間で安易な表面的要素の比較に陥ることなく、厳密に比較するための方法を説いた著書であり、金壽卿の朝鮮語史研究に一定の影響を与えたと思われる。メイエの弟子であるヴァンドリエス(Joseph Vendryes)の史的言語学も参照しており[金壽卿1947:132]、合わせて印欧語学の厳密な方法論を習得していたと考えられる。

朝鮮語学に関連しては、もちろん小倉進平の研究に接し、その文献学的な蓄積に学んだことは間違いない。ただ、学問的な影響関係は必ずしも師匠一弟子と直線で結ばれるようなものではない。京城帝大で小倉進平に朝鮮語学を学んだ季崇寧 [1983:449] も、その講義について「最後まで文献学の枠から抜け出せない感じ」で「新味がなく羅列と紹介に終始する感」があり、むしろ「才気あふれる」小林英夫から影響を受けたと回顧している。金壽卿もまた、朝鮮語史を小倉進平から学びつつも、その枠に収まらない研究関心を有していたと考えられる。

先述のとおり金壽卿はクーランの『朝鮮書誌』の翻訳を1939年から進めていた。しかも、それは単に横文字を縦にするだけの作業ではなく、金壽卿は訳稿に訳注を加えていた。解放後に出版する際には、「衒学的」とみ

^{55 1920-30}年代のプラハ学派の音韻論については、トゥルベツコイ [1980]、ヤコブソン [1996] などを参照。

⁵⁶小林 [1951:347] による。その他にもモノグラフィーを2人でたくさん読んだと記している。

なされるのを怖れて全て割愛してしまったが5、逆にいえば、自らの書誌 的調査にもとづいた詳細な訳注を加えていたのであろう。

そのような朝鮮語史の資料にどっぷりと使っていたと考えられるのが、 東京帝大の大学院時代と京城帝大嘱託時代である。特にソウルで1945年に 印刷した『「老乞大」諸板の再吟味』[京城帝国大学法文学部1945] は、この 時期の金壽卿の研究の方向性をよく示すものである【図7】。本書は、前年 に発行した影印本『老乞大諺解』「京城帝国大学法文学部 1944](以下、「城大本」) の別冊附錄と位置づけられた。『老乞大』は朝鮮で編まれた中国語会話読 本であり、「諺解」とはそれにハングルで発音と翻訳を付記したものである。 朝鮮王朝の宮廷図書館だった奎章閣(植民地期に京城帝大附属図書館へ移管) には、『老乞大』や『老乞大諺解』の種々のバージョンが所蔵されていた。 その『老乞大諺解』のなかから、京城帝大の朝鮮史講座教授・末松保和が 善本と判断したものを選び、解題をつけて影印出版したのが城大本であっ

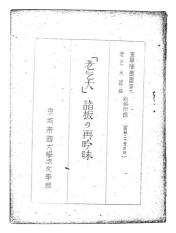
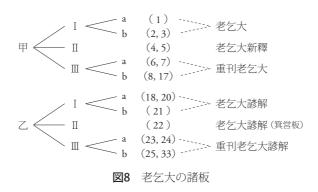


図7 『「老乞大」諸板の再吟味』(1945年3月)

⁵⁷ 金壽卿 [1946:191] による。クーランの著作年譜も活用したと記されている。

た。末松は解題のなかで漢字の誤植を一部指摘していたが、出版後、法制 史講座教授・内藤吉之助が、誤植の全て訂正された別本が奎章閣にあると 指摘した。つまり城大本の原典が校正未完本で、その訂正本が現存してい たことが発覚したのである。そこで末松は城大本の原典と訂正本の比較対 照と附属図書館所蔵の諸版の総合調査を、嘱託の金壽卿に依頼した⁵⁸。そ の報告書を出版したものが『再吟味』であった。

金壽卿 [1945] はまず奎章閣図書から33点の「老乞大」を見つけ出した。そこから先の書誌調査はいかようにでも煩瑣なものになり得るところだが、この報告書の興味深い点は、金壽卿がそれを「筆者の考案」による記号によって整理・分類したことである。すなわち彼は、本文で用いられる言語(甲/乙)、本文の内容(I/II/III)、同一内容本のうちの板本 (a/b)、同一板本での印刷 (1,2,...) の4つの変数によって整理した。その作業の結果、6種の異本があることを明らかにし、図示した【図8】。諸版を比較対照して



⁵⁸末松保和「小引」[京城帝国大学法文学部 1945]。『末松保和朝鮮史著作集』全6巻(吉川弘文館、1995-97年)には、1944年の影印本への解題は収録されているのに、この「小引」は入っておらず、その存在すら言及されていない。なお、『再吟味』を紹介した方鍾鉉[1946:40-41]は、内藤吉之助の役割を言及しておらず、金壽卿が末松の誤りをただしたかのように書いている。それもあり得る話なので、ここに付記しておきたい。

系統を明らかにする手法自体は書誌学の正攻法であろうが、4つのシンプ ルな弁別的特徴の組み合わせで、テキスト間の関係の構造を記号化する手 つきは構造主義的ともいえる。その上で、城大本底本と訂正本の比較を、 漢文部分のみならずハングル部分にもおこなった。実に基礎的な書誌的研 究であり、解放直後に朝鮮語学者の方鐘鉉[1946]は、「誰かが一度はし なければならない重大なことを、氏〔金壽卿〕がみなのためにしてくれた」 **もので、「実にこの方面の専門家によい資料」だと絶賛している。ただ、** 謄写版で広く普及しなかったためか、金壽卿が越北したためか、理由は分 からないが、『再吟味』は1990年代まで「見落としてはならない業績なのに、 その内容が全く知られていないもの | [安秉禧 1996:1] になってしまった。

当時、朝鮮語史の資料は代表的なものであっても稀覯本に属し、一般の 研究者にとっては接すること自体が容易なことではなかった⁵⁰。そうした 状況で、朝鮮語史の原資料に接していたことは、金壽卿言語学の形成にとっ て重要な蓄積となったであろう。

かくして、ソシュールの表現を借りれば、金壽卿は、言語を同時代の関 係性のなかでとらえる共時的 (synchronic) な観点と、歴史的な変化のなか でとらえる通時的 (diachronic) な観点の両方を獲得しようとしていたとい えよう。

3. 脱植民地化と分断のなかの朝鮮語学

日本の敗戦、朝鮮の解放は、金壽卿の言語学にとって何だったのか。本 章では、まず米軍政下の南朝鮮での金壽卿の歩みを可能な限り明らかにし、 越北の背景を描き出す。その上で、朝鮮戦争前―それはソ連でスターリン

⁵⁹ 李基文 [1982:2] (初出は1959年) は、「最近にいたっても〔朝鮮語史の〕代表的な文献 でさえ利用することは特恵に属することだった」と述べている。

が言語学に関する論文を『プラウダ』誌に公刊する前でもあった―の時期 に限定し、金壽卿の言語学を1945年以前の延長線上において位置づけてい く。

3-1. 越北前の活動と研究:2つの総合大学計画の間で

1945年8月15日の解放の日を迎え、京城帝大の朝鮮人教職員や学生らの動きは素早かった。8月16日までに京城大学自治委員会を組織し、8月17日には大学の接収を進めた。自治委員会は、大学正門に掲げられた「京城帝国大学」の表札から「帝国」の2文字を黒々と塗り消し、研究室・図書館なども封印・警備した[森田1964:401-404]。この自治委員会のなかに金壽卿がいた。彼の履歴書によれば、8月15日付で京城大学自治委員会法文学部委員となった60。

米軍が仁川に上陸したのが9月8日のことであるから、自治委員会は文字通り朝鮮人主導の組織であった。そこでは当時の朝鮮全体の動向も反映し、左派が圧倒的に優勢であった。ソウルの各専門学校・大学の自治組織は協議会組織まで結成していたが、9月11日から業務を開始した米軍政の学務当局は、こうした自治組織を無視して高等教育行政を進めた[姜明淑 2002:28-35]。こうした左派主導の大学の自治組織と米軍政との葛藤はその後も続いた。京城帝大第1期生だった兪鎭午[1974a]の回想によれば、10月初めに、金壽卿・李明善・朱在璜ら自治委員会のメンバーがやってきて、大学再建の事業に当たるよう要請してきた。その後、教職員や学生・卒業生からなる大学総会が総長候補を選出したものの、最終的に、米軍政はその意向を聞き入れることはなかった[兪鎭午1974b,c]。小林英夫[1951:346]が引き揚げ前に聞いたところでは、金壽卿は助教授として言語学講座を引き継ぐことに内定していたという。ただ、これも大学の自治組織の

⁶⁰ 前掲·金大履歴書。

中での内定だったと思われ、実現することはなかった。そもそも法文学部 の建物は米陸軍航空隊第308爆撃隊が占拠しており、授業も翌年春になる まで開講しなかった [USAMGIK 1946: 98-101, 108-109]。結局、金壽卿は1945 年11月30日付で京城大の嘱託および自治委員会委員を辞職した⁶¹。

一方、解放直後から大学の外側で金壽卿が関わっていたのが震福学会の 再建であった。震檀学会は、朝鮮文化の研究を目的にソウルで1934年に発 足した朝鮮人研究者による学会であり、1942年の朝鮮語学会弾圧事件を受 けて活動を中断していた。1945年8月16日、ソウル仁寺洞の泰和亭で雲檀 学会の会員が集まり、再発足のための集まりが開かれ、委員長に民俗学者 の宋錫夏を据えた。その場に参加していた金壽卿は、常任委員の1人とし て幹事を務めることになった⁶²。この頃の震檀学会は左派も右派も集まる 学会であり63、建国準備委員会にも関与していたし、米軍政下では軍政当 局との関係も結んでいた。金壽卿が震植学会でおこなった活動は、分かっ ている限りでは次のとおりである64。

1945年10月9日 訓民正音頒布記念講演会で李崇寧ともに参加。

論文「「龍飛御天歌」挿入子音考」を脱稿し入稿。 11月

第2回例会で「ソ連アカデミーのための新進学徒の 12月25日

養成」を報告。

1946年2月26日 朝鮮山岳会主催の済州島漢拏山学術調査隊に震檀学

会メンバーとして派遣される(-3月17日)。

61前掲・金大履歴書。なお、京城大学法文学部が授業を再開するのは、翌1946年春のことで あった。

62金載元 [1984:225];"彙報",『震檀學報』15호, 1947, pp.151-153.

63震檀学会のその後の分裂(左右対立、親日派をめぐる対立)については、李崇寧[1983: 461-463; 1984: 240-243]_o

64前掲「彙報」pp.151-152。

このうち論文については後述するとして、済州島の調査隊については、 ある程度詳細が分かるので説明しておこう。朝鮮山岳会はただの同好会で はなく、解放後間もなく宋錫夏を会長に結成された国土調査のための組織 だった「鄭秉峻 2010:115-130」。 済州鳥の漢拏山の調査について宋錫夏は、 調査を後援した自由新聞社のインタビューに答えて、「済州島調査は、倭 賊の軍事機密基地となっていただけあって、なかなかおこなうことのでき ない所だった。地理上からみて、済州鳥は南方文化圏に入り、クロスする 点からして、今回の調査団で済州を選択した」と述べている。調査団は、 言語学班として金壽卿が同行したほか、登山医学班・一般社会班・雪質調 査班・気象班・録音班・映画班・写真班・採譜班など18名の隊員からなっ ていた。また米軍政の積極的支援も受けており、人類学・考古学等を専攻 する3名の米国人も同伴していた。3週間の調査を終えてソウルに戻った調 査団は、3月30日、倭城台で報告講演会を開催した。金壽卿はそこで「言 語を通じてみた済州島文化」を報告した。その内容は不明だが、宋錫夏に よれば、採集した方言や巫堂の声の古い言葉のなかに「モンゴルの影響が 未だに残っていること」が分かったという65。このように金壽卿は、録音 班も随行させて、歴史的観点も有した実証的な方言調査を実施していたこ とが垣間見られる。

解放後、南朝鮮にいる間に金壽卿が発表した唯一といえる書籍が、既に述べたクーラン『朝鮮文化史序説』(1946年5月発行)である【図9】。この翻訳書について、1つだけここで補足しておこう。それは、「訳者後記」で金壽卿が「翻訳書刊行の直接的恩人」として言及している宣鎭秀という人物についてである。宣鎭秀は金壽卿の妻・李南載の外叔父(母の弟)で、京畿道の廣州の出身である。宣鎭秀は1936年に廣州共産党事件に連累した

-

⁶⁵以上の記述については、『自由新聞』1946,2,26, 3,20, 3,30,



図9 『朝鮮文化史序説』出版記念(1946年)

(備考) 写真には「朝鮮文化史序説出版記念」「1946.7.8. 於 올림픽 (オリンピック)」と 記されている。真ん中で黒い上着を着て立っているのが金壽卿である。

ことがある経歴を有するほかが、『人文評論』などの文芸雑誌に関わりな がら、1939年には文芸誌『文章』に投稿した「失人記」が推薦小説として 掲載され、選者の李泰俊から「相当面白く読んだ」と評価されたこともあ る人物でもあった6、宣鎭秀は解放後に金壽卿の翻訳本を発行した凡章閣 の中心人物だったと考えられるが、1946年1月、不幸にも家族を残して交 通事故により亡くなってしまった。金壽卿が「訳者後記」で「さる1月初旬、 印刷の途中に他界したことは訳者最大の悲しみである」と述べているのは そのためである。

さて、越北にいたる経緯を説明するために、話を大学へと戻そう。京城 大学を辞した金壽卿は、1945年12月1日付で京城経済専門学校の教授となり、

^{66『}毎日申報』1936年3月6日。ただし、宣鎭秀が起訴された形跡はない。

^{67『}文章』1939年10月号, pp.111-127。

フランス語等を教えていた【図10】68。同校の前身は、植民地期における官立の京城高等商業学校であり、1944年に規模縮小して同名に変更されていた。同校は1946年夏に創立したソウル大学校の商科大学に引き継がれることになるが、当時は左派の講師が多かった。農業経済の金漢周、社会経済史の全錫淡、京城帝大同期の歴史学者・朴時亨、「純哲」の先輩・朴致祐など、後に越北する研究者が数多く在職していた。また、翌1946年春からは京城大学法文学部の講師を兼任したほか、京城大学予科や京城師範学校(ソウル大学校師範大学の前身)に附設されていた臨時中等教員養成所で朝鮮



図10 京城経済専門学校(1946年)

(備考) 1946年6月20日付の写真には「ソウル経済専門学校第1回卒業記念」と書かれている。金壽卿の姿は見られないが、遺族所蔵の写真である。

⁶⁸前掲・金大履歴書。教科科目については、崔炅鳳외 [2007] に収録された金敏洙の回想による。

語学概論を講じていた60。このように、金壽卿はこの後にソウル大学校へ と引き継がれる諸学校で言語学の講義をおこなっていた。

ソウルで大学統合の方針が検討されていた頃、平壌においても総合大 学設置に向けての準備が急ピッチで進められていた。北朝鮮臨時人民委員 会は、1946年5月、北朝鮮綜合大学創立準備委員会を組織し、必要な教授 数や教授の選定方法を策定させた70。7月8日には、9月1日から金日成大学 を開校することを決定した"。ところが、日本の植民地期には朝鮮総督府 が中高等教育を抑制していた結果、朝鮮の大学は京城帝大1校のみであり、 専門学校もソウルに集中していた。そのためこの頃、「科学文化人らがソ ウルを中心に南半部に多く集中して」おり、朝鮮北部では「大学教授教員 の経験をもった人材は十指で数えられる程度」であった「金日成綜合大学 1956:21-22]。そこで、必要な人材を朝鮮南部や海外留学者から求める必要 が生じた。そうした背景で、南の左派系の学者を集めるために、経済学者 の金洗鏡をはじめとする研究者が南に派遣され、教員委嘱の工作活動に 当たることになった"。

平壌に総合大学が創設されるという消息は、さほど間もなく南の左派系 新聞でも伝えられた73。一方、ちょうど同じ頃(7月13日)、米軍政は、専門

69前掲・金大履歴書および崔炅鳳 [2009:364]。京城師範学校では金敏洙ら、京城大学予科 では姜吉云、南廣祐らが学んだという。

^{70 &}quot;北朝鮮綜合大學 創立準備委員會組織에 關한 件", 北朝鮮臨時人民委員會決定 第21號, 1946年5月29日 [国史編纂委員会 1987:660-661]。なお、金日成綜合大学の成立史につい ては、金基奭 [1996] および신立会 [2003] が参考になる。

기 "北朝鮮綜合大學創立에 關한 件", 北朝鮮臨時人民委員會決定 第40號, 1946年7月8日「北 朝鮮人民委員會司法局 1947: 226-227]。

⁷²この情報は、金日成綜合大学の哲学教授で、後に脱北したという崔光石の手記[崔光石 1968:148 による。

^{73 &}quot;平壤에 綜合大學: 9월 개교 목표로 사무에 착수", 『獨立新報』7月18日; "平壤에 綜合大 學 設置"、『朝鮮人民報』7月19日(いずれも李吉相・呉萬錫[1997:93,654-655]に収録)。 また、金基奭 [1996] を参照。

学校などを統廃合した9つの単科大学からなる国立ソウル大学校設立案(国大案)を発表した。これに対し学生や教職員等が反対運動を展開し、事態が収束するまで2年ほどかかることになる(いわゆる「国大案波動」)。金壽卿が国大案反対運動にどれほど関わったかは定かでないが、米軍政下での大学政策をめぐる葛藤が越北の一背景であったことは疑いない⁷⁴。

金壽卿の越北の経緯に関しては複数の可能性が考えられるが、京城帝大同期生だった朴時亨が一役を果たしたことはまず間違いなかろう。金壽卿がソウルで朝鮮共産党に正式入党したのは1946年5月6日のことだったが、その加入時の保証人の1人が朴時亨だった。朴時亨は金錫亨とともに既に1945年10月には党員となっており、彼が金壽卿の入党を仲介したものと考えられる。朴時亨は、1981年に公表した手記のなかで、1946年8月のある日、「思いがけず平壌から訪ねてきたある活動家」から、金日成に招待されている旨を伝えられたと書いている[朴時亨1981:261]。また、小説『人生の絶頂』では、金壽卿を訪ねて来た朴時亨と金錫亨が大学委嘱の旨を伝え、少し遅れてやってきた申龜鉉が金日成名義の委嘱状を持って来たと描写されている[리卍を1996:31-32]。申龜鉉が、1946年2月までに既に越北して元山労働者政治学校の校長となっており、8月には金日成大学教員となっていた経緯を踏まえるとで、申龜鉉もまた何らかの役割を果たしたとも考えられる。

そして金壽卿は、「8月17日の夜半、半ズボンに登山帽という形で密かに 38度線を越えて入北」した"。28歳の夏のことであった。ソウルに残って

⁷⁴金基奭 [1996:230-234] は、初期の金大教授の共通点として、(1) 各分野で卓越した業績を積んだ著名な学者であること、(2) 国内外の帝国大学を出た同門で、それぞれ独特な学縁で結ばれた人間関係を維持していたこと、(3) 1945年秋以降、革新政党に加入し、国大案反対運動で中心的な役割を担ったこと、という3点を挙げている。

⁷⁵いずれも前掲・金大履歴書による。

⁷⁶前掲・金大履歴書。

⁷金壽卿が平壌から1957年1月27日付で小林英夫に宛てて送った日本語書簡による(以下、

国大案波動のなかで共産党員として研究者を続けるか、共産主義革命が進 行している平壌で新たな大学の創立に参与するか、その選択肢のなかで後 者を選んだのである。同行したのは金錫亨と朴時亨であり、出立の直前に なるまで妻にも知らせない、本当に「密か」な越境であった⁷⁸。書物も何 も携えることなく、着の身着のままでの越北であった。その後、南北朝鮮 がこれほど長い間に渡って分断するとは想像もしていなかったことであろ う。

3-2. 金日成綜合大学と朝鮮語文研究会

金壽卿は、1946年8月20日付で、金日成大学文学部の教員として任命さ れた【図11⁷⁹。早速9月15日には開校式が開かれ、10月には開講したという のだから、相当慌ただしかったことであろう。当初は文学部には史学科・ 文学科・教育学科の3学科しかなく、朝鮮語学は文学科のなかに含まれて いた「金日成綜合大学 1956: 18-19, 23-27」。翌1947年1月付の金日成大学総長・ 金科奉名義の書類によれば、それまでに任命された教員は139名(非常勤や 助手等を除く)、うち文学部は31名であったが、言語学を担任していたのは 金壽卿1人であった(「朝鮮語」は他に4名の講師がいた)⁸⁰。同年7月には、専任 教員を60名増員する案が内部で作成され、言語学分野では南から金属湾

[「]小林宛書簡」と略す)。この箇所は、小林英夫の随筆「白いハト」「小林 1957:363〕に も引用されているが、「形」を「いでたち」と直すなど、小林が日本語としてより読みや すくするために、多少手を加えている。本稿は、小林英夫の遺族のご厚意により閲覧させ ていただいた書簡原文から直接引用することとする。なお、原文は朝鮮語式に分かち書き をし、句読点の代わりにカンマとピリオドを用いているが、それは現代日本語式に改めた 上で引用する。

⁷⁸遺族による。なお、家族が平壌で合流したのはそれから約2ヶ月後のことであった。

⁷⁹前掲・金大履歴書。

^{80 &}quot;教職員任命에 關한 件"、北朝鮮金日成大學總長金枓奉→北朝鮮臨時人民委員會教育庁、 1947年1月付, 前掲『一九四七年度 金日成大學發令件』所収。同書類によれば、金壽卿の 担当は英語と言語学だった。

1945	8	15	京城大学自治孝多會沒女子中委員
19 45	10	30	京城大子水店农业自汉至多金五号 6章(1)
1945	12	1	京城经治星門圣椒 叙 接
19.46	3	1	京城大学或是学行33% (黄色)
1946	8	19	李城大学或文学的 136/1 (英任) 李城往清学的学科 西捷日 李城大学在3年中 3896 34任
			北朝朝金成大子文子的 教员
		The second section of	力之前躺全的成大子附属国星额息(前

図11 金壽卿履歴書(1945~46年部分抜粋)

(備考)金日成大学に提出した1946年12月28日付履歴書による。脚注35を参照。

らを「招聘」する計画が立案された⁸¹。詳しくは不明ながら、模索の末、1949年の新年度までに10学部24講座、教員数153名、学生数2,746名の総合大学として編成された。文学部は歴史学部(朝鮮史学科、世界史学科、哲学科)、朝鮮語文学部(朝鮮語学科、朝鮮文学科、新聞学科)、外国語文学部(露文学科、英文学科)等に分割された。このうち金壽卿の所属する朝鮮語学科は学生数71名、所属教員数は5名まで拡張された[金日成綜合大学1956:42-43]。

金壽卿は学部の運営のみならず、1946年10月1日付で図書館長にも任命されていた。大学10年史が明らかにしているように、「1冊の本も無い状態から出発し、図書館事業は何よりもまず図書を広範に蒐集する事業から始めなければならなかった」[金日成綜合大学1956:37]。金壽卿は任用に当たっての調査書で、「語学方面で最も優秀な素質があり、先進各国語に通じている。言語学で独歩的な存在」と評価されていたが82、外国語に通じ書誌学にも明るかった点において、図書蒐集を第一の課題としていた図書館創

^{81&}quot;大學教員招聘依賴의 件", 北朝大366號, 1947年7月19日, 前掲『一九四七年度 金日成大學發令件』所収。

⁸² 前掲·金大履歴書。

立過程に欠かせぬ人材だったのだろう。言語学者にして革命家であった金 科奉が朝鮮語文献を寄贈するなど、一般の寄贈書で3万4千冊余りを集め、 ソ連軍司令部からも25,524冊の各種図書の寄贈を受けた。南北朝鮮から 34,073冊を購入した。1949年には中国東北人民政府から時価約20万ウォン 相当の図書を、レニングラードの科学アカデミー図書館からも多数の学術 書の寄贈も受けた。そうした過程で1948年には9万8千冊余り、1950年には 13万5千冊余り(漢籍が7万余、洋装本が6万余り)の蔵書となった「金日成綜合大 学 1956: 37-38, 50-51]。

この時期、金壽卿が力を注いでいたのは、1947年2月に組織された朝鮮 語文研究会の活動であった。研究会の本部は金日成大学に置かれ、金壽卿 の城大同期であり朝鮮語学会への参加経験も有していた申龜鉉が委員長を 担った。名称は研究会であるが、これは北朝鮮臨時人民委員会の決定によっ て設置され、教育局長が指揮監督する公的な組織であった。同委員会の決 定書は、研究会の設立趣旨に関して、朝鮮語が日本帝国主義者に発展を停 止させられていたが、「今日の民主主義自主独立国家建設の途上において 科学的理念に根拠した研究をかさね、朝鮮語文の統一と発展を期す」こと で、「朝鮮民族文化建設の基礎」をつくるとの目的を掲げていた。そして、 文化建設の中心的な事業として、漢字、横書および綴字法(正書法)の原 案を作成し(1947年末まで)、朝鮮語辞典を編纂すること(1949年末まで)を 掲げていた。このように朝鮮語文研究会は、単なる学問研究にとどまらず、 言語の国民的規範を時限付きで創制することが最初の任務として与えられ ることになった83。後述するように、この頃、金壽卿は綴字法に関する論 文を発表しているが、それはこの研究会のミッションの一環だったと考え られる。

^{83 &}quot;朝鮮語文研究에 關한 決定書",北朝鮮臨時人民委員會決定第175號,1947年2月3日「北朝 鮮人民委員会司法局 1947:227-228]。朝鮮語文研究会 [1949] も参照。

1948年、南では8月に大韓民国が、北では9月に朝鮮民主主義人民共和国が建国を宣言した。それから間もない10月の内閣決定により、朝鮮語文研究会は教育省に移管され、新たに朝鮮語文法教科書と朝鮮語辞典を1949年末までに公刊することが任務として課された⁸⁴。金壽卿は、文法編集文科委員会(委員長は哲学者)の一委員となり、1949年に公刊された『朝鮮語文法』編纂の中心メンバーとして関与した⁸⁵。

朝鮮語文研究会が雑誌『朝鮮語研究』を出していた1949~50年は、金壽卿の研究生活のなかでも多作な年だった。名前を明記したものだけでも論文が3本、ソ連の言語学概説書の翻訳が単行本1冊と論文6本、そしてこの『朝鮮語文法』が出版された(文献目録参照)。ここで詳細は述べないが、他にも朝鮮語文研究会名義ではあるが実質的に金壽卿が書いた文章もあると考えられる。

私生活面では、まず1946年10月に妻、母、2人の子、妹、従妹が平壌に合流した。金日成大学の官舎第4号に居を構え、1948年・49年には続けて2人の子ども(本書寄稿の金惠英、金泰成両氏)が生まれた。官舎の隣には金錫亨の家族が住んでいた。金壽卿の妻・李南載と金錫亨の妻・高學仁は梨花女専の同期生でもあり、たいへん親密に暮らしていたという。

だが、1950年6月に金壽卿は私生活においても学問的にも衝撃的な転換

^{84 &}quot;朝鮮語研究會에 關한 決定書",朝鮮民主主義人民共和国内閣決定第10號,『조선민주주의 인민공화국 내각공보』1948년 제1호,pp.2-3.

^{85 1949}年の文法書も、相当部分を金壽卿が執筆していたようである。金壽卿は小林宛書簡で、「私は主として現代朝鮮語の文法体系樹立といった方面に専念し、1949年に400p. (菊版) ばかりの朝鮮語文法書を出し、1954年には中学校用の教科書を書いたことがあります」と書いている。また、遺族によれば、1948年に『圣社の 문법(대학용)』との著書を既に出していたとの情報がある。これに関連して、金日成総合大学10年史では、1946~50年の間の時期のこととして、「朝鮮語文学部朝鮮語学講座・金壽卿副教授は"朝鮮語文法研究"を完成したが、これは先進的言語学理論に基づき朝鮮語文法を体系化する新たな試みだった」と述べている[金日成綜合大学1956:57]。だとすれば朝鮮語文研究会が文法書を出す前に、大学講義用の文法書を金壽卿がまとめていたことになる。

点を迎えることになる。1つは言うまでもなく朝鮮戦争の勃発である。金 壽卿は死の峠を幾度も越えて生き延びたが、家族とは生き別れになってし まった。もう1つは、ちょうど朝鮮戦争直前に起きたソ連における言語学 理論の大転換である。この転換以降の歩みについては、別稿 [板垣 2014] で論ずる。

3-3. 研究と朝鮮語の構築

1945年8月からの数年間は、しばしば「解放空間」と呼ばれる。日本の植 民地支配から解放され、南北が分断されながらも、流動的な状況のなかで 様々な可能性が模索されていた時期を表すのにふさわしい用語である。本 節では解放空間における金壽卿の研究業績について検討するが、多作なこ の時期について論点はさまざまなものであり得る。ここでは本稿2-2で提 起した論点、すなわち(1)一般言語学理論への志向性と(2)史的言語学 への志向性との関連において検討したい。越北後に国の言語政策にも関与 し得る地位にあったことは、金壽卿言語学に大きな影響を及ぼした。すな わち、言語が「今こうである」または「かつてこうであった」ということ を実証的に研究する記述的な言語学にとどまらず、「こうであるべき」と いう標準を策定しようとする言語学、すなわち(3)規範文法への取り組 みが金壽卿の研究の中心を占めるようになった。しかしながら、(3) 規範 文法を創り出していくプロセスにおいても、(1) 一般言語学理論と(2) 史 的言語学は重要な位置を占めていた。そうした観点から、以下(1)・(2)・

- (3) の順で検討してみよう。その際、ここでは次の3本の論文に注目する。
 - ①金壽卿 [1947b] 「朝鮮語学会『ハングル綴字法統一案』中で改正す べきいくつか 其一 漢字音表記における頭音 n 及び r について |
 - (2) 会壽卿 [1949a] 「訓民正音成立史考」(脱稿は1947年中)
 - ③金壽卿 [1949b] 「龍飛御天歌にみえる挿入字母の本質 |

論文①は規範文法、論文②・③は史的言語学に関わる論文である。

まず、金壽卿は1957年に小林英夫に送った書簡のなかで、「とにかく言語学の一般理論的基礎の上に朝鮮語学を築き上げるといふことが私共の目標であります」と書いている。他言語や一般理論との関係のなかで朝鮮語学を構築することは、おそらく金壽卿言語学の一貫した信念ともいうべきことだと思う。当時、「偉大なソ連軍」に解放されたと自己規定していた北朝鮮において、ソ連の学問体系は最も「先進的」なものとみなされていた。したがってここでいう一般理論の中心にソビエト言語学があったことは疑いない。そして1950年6月にスターリンの批判によって最終的に息の根を止められるまで、この頃のソビエト言語学の中核として独裁的地位にあったのがマル(N. Ya. Marr, 1865-1934)とマル派の言語学であった。

金壽卿は1949-50年の間にソ連の言語学を立て続けに翻訳紹介しているが、そのどれもがマル言語学に多かれ少なかれ基づく「新言語理論」に関わるものであった。グルジア出身でカフカス地方の諸言語の研究者だったマルは、1920-30年代に、メイエをはじめとする欧米の印欧諸語研究を中心とした「ブルジョワ言語学」を批判し、「ヤフェト理論」ともいわれる言語の統一理論を提起した。「唯物論的言語学」の体系を構築したと称する新言語理論(ヤフェト理論)の特徴は、あらゆる言語が一元的に発生し同一の段階的変化によって発展するという、言語の一元的発展段階論にあった。その基礎には、経済(生産様式)を土台(下部構造)とし、言語を下部構造に規定される上部構造だと考える史的唯物論があった。新言語理論が、ブルジョワ民族主義に対し国際主義的な理論であり、西欧中心の言語学に対し弱小民族の言語も含む一般言語学理論であると自己規定していたことは、植民地から独立したばかりの非-印欧語系の民族にとって、一定の魅

⁸⁶ マル理論については下記文献を参照した。ブイコフスキー [1946]、 平州르만 [1949]、 村山 [1950]、イヴィッチ [1974]、 田中 [2000]。

力を有していたことは間違いない。

だが、この時期の金壽卿がソビエト言語学主流派のテーゼを100%受け 入れていたとは言い難い。まず金壽卿がマルを直接引用している論文は、 管見の限り、金枓奉の功績を讃えるために書かれた講演原稿においてのみ である [金壽卿 1949c:6]。しかも、文字の表記における形態主義の思想(後 述)を論ずる文脈で、「言語は単純に音ではなく同時に思惟である」という、 マルでなくとも主張できるような部分を引用している程度である。史的唯 物論の枠組は論文②で援用されているが、訓民正音創製の歴史背景として 生産力の発展や封建的国家形態の整備があったこと、訓民正音が純粋に朝 鮮語表記のためではなく漢字音の矯正のために創られた点では支配階級の 階級的制約性を有していたという、いわば文字の社会性という穏当な範囲 の適用にとどまっている。また、金壽卿が翻訳したレフォルマツキー(A.A. Reformatskii)の教科書『言語学』(原著は Реформатский [1947]、翻訳は레폴마트丛 別 [1949]) は、序論では新言語理論が全く登場せず、語彙論・語音論・文 法論・文字論と文法理論が並んだ後、最後の方の「世界の言語とその分類」 で簡単にヤフェト理論が紹介される程度である。レフォルマツキーはモス クワ音韻論学派の創始者の1人で、マル学派とは一定の距離を置いていた といわれる87。 金壽卿がそのようなソ連内の立場の差まで熟知していたか どうかは分からないが、総じて、金壽卿がマルの言語理論を無条件には受 け入れていなかったとはいえよう。

構造言語学との関係でも、ソビエト言語学の見解に賛同していたかは疑 問である。ソビエト言語学では、共時的言語学を重視するソシュールの言 語理論や構造言語学を、言語発展の法則のない非歴史的・反社会的なブル

⁸⁷レフォルマツキーはよく「私はマル派でも反マル派でもなく、非マル派だった」と語って いたという [Алпатов 2004:138]。レフォルマツキーについては Vinogradov [1988] も参 考になる。

ジョワ言語学だとして批判していた。そのような見解を翻訳紹介していた のは、他ならぬ金壽卿自身であった[까쯔넬선 1949, 체모다노프 1950]。しかし、 ソシュールは共時的言語学と通時的言語学 (史的言語学) を峻別すべきこと は説いたが、それは各時代の言語の体系から部分的な要素だけを取り出し てその歴史的な持続や変化を論ずるような単純な方法を批判したのであっ て、歴史的な変化という視点を捨て去っていたわけではない。

ソシュールに通暁していた金壽卿が、ソビエト言語学による批判をどう 解釈したかは分からないが、明らかなのは、上記の論文①~③のいずれに おいても、ソシュールの共時的言語学の基本概念を用いていることである。 論文①・②では、言語は差異の体系であるというソシュールの基本テーゼ を提示している。

- ①言語は1つの価値であり、それゆえ、あたかも貨幣価値が貨幣体系 との関連下においてのみはじめて理解されるように、言語価値も言語 体系のなかでのみ理解されるのである。([三], 1947年6月8日)
- ② […] 音韻は示差的要素であるため(あたかも貨幣価値のように)、同一 体系中の他の音韻との関係に依拠しないでは、これを定義することが できない。すなわち、音韻は音韻体系から離れて存在することはでき ない。(p.151)

いずれも言語を貨幣と対置させて議論しており、マルクスの資本論とも接 続できるようになっているが、実はこれも既にソシュールが音韻論に関連 して言語価値を説明する際に提示していた比喩であった88。論文③は、全 体が音韻論的な考え方に基づいた研究だが、論文の基本枠組を提示する簡

⁸⁸ ソシュール「1940:157](II-4-3)。ソシュールの貨幣への言及については、丸山「1981: 209-225〕を参照。

所で、「統合(syntagme)」というソシュールの共時的言語学の重要概念を引 用している。しかも、それをレフォルマツキーの前掲教科書や、マルの高 弟であるメシチャニーノフ (I. I. Meshchaninov) の著書 (1945年)89における文法 論とつなげながら、小倉進平や崔 兹 培らの見解を退けている (pp.19-22)。 してみれば、この頃の金壽卿は、教条主義的に構造言語学を排斥するので はなく、むしろ構造言語学とソビエト言語学の結合の可能性を模索してい たのではないかと推察されるのである。

そのことを史的言語学に関して検討しておこう。金壽卿は、越北後は現 代朝鮮語研究にほぼ専念することになり、朝鮮語史に関する専門的な論文 は1940年代の論文②・③と1980-90年代の晩年の著作にほぼ限られている%。 その背景はいくつか考えられる。第1に、既に述べたように、1940年代に は奎章閣資料をも用いた1945年以前の研究の蓄積がまだあったことである。 実際、論文③の原型となる論文は1945年11月に脱稿していた90。論文②でも、 京城大学所蔵の訓民正音のテキストへの参照が見られる。第2に、朝鮮語 史に関する史料はソウルにかなり集中していたため、北部で利用できるも のが限られており、越北後は新規の実証的研究に困難があったと考えられ ることである。金壽卿は小林宛書簡(1957年)で、「私共の主な困難は図書 資料の欠乏です」としながら、越北時に図書を携行できなかったこと、集

⁸⁹メシチャニーノフは単なるマルの追従者ではなく、文法論において数多くの業績を残して いる。ヴィノグラードフはメシチャニーノフの立場について、「マルの学説の「創造的発展」 の名にかくれて、それに根本的な修正を加え、比較言語学ともつかず、マル学説ともつか ない不明瞭な立場を築き上げた」と評価している [村山 1950:62]。

⁹⁰ 金壽卿 [1949a] では、ハングル創制以前に漢字を発音表記のために用いていた時代のこ とについて、"訓民正音創制의 前段階에 對하여"、『民主朝鮮』1947년 10월 30-31일との論 文を書いたと言及されているが、残念ながらこの論文は未見である。また、1950-60年代 の数多くの著作のなかで朝鮮語史といえるものは、周時經の朝鮮語学について論じた金壽 卿「1954〕程度である。

⁹¹金壽卿 [1947] は、「「龍飛御天歌」が刊行されて500年となる年」(131頁)、すなわち1945 年の秋に脱稿している。

めた書物も朝鮮戦争で焼けて「紙一枚戦前のものは残って」いないこと、 停戦後はソ連・中国の文献は入手が容易だがそれ以外は難しいことなどを 述べながら、小倉進平や前間恭作の旧著等を送ってほしいと依頼している。 そして第3に、新たな民族文化建設という至上命題のもと、朝鮮語文の規 範整備や朝鮮語辞典の編纂などの基礎事業が中心的な課題となっていたこ とである。

そうした状況で公表された論文②・③は、いずれも15世紀中葉の訓民正音創製期の言語と文字を扱っている。論文②は訓民正音の成立年代と底本を確定した上で、文字の成り立ちの原理、当時のモンゴル文字や中国音韻学に対する知識、文字創製の音韻論的な意義、そしてその社会的な意義と、同時代の横断面とでもいうべき状況を切り出している。一方、論文③は、1445年に成立したテキスト『龍飛御天歌』において語と語の間に挿入されているハングル(挿入字母)の機能を、音韻体系の分析によって明らかにしたものである。合わせて、15世紀中葉における朝鮮語の言語体系を言語外の社会的背景を含めて論ずる共時的言語学とでもいい得るものを構築しようとしていたように見える。

だからといって、金壽卿は、そうした15世紀の言語体系についての研究を、現代と切り離すことはなかった。いやむしろ、20世紀中葉の現代における言語政策と積極的に関連づけて朝鮮語史を論じていた。論文②では、訓民正音に潜在する体系性・科学性・大衆性にもかかわらず広く普及しなかった背景として、当時の階級性と時代性という制約を指摘している。その後、日帝の弾圧などを経ても保存されてきたのは、圧迫された人民の力のおかげだとした上で、「大衆性と科学性をもった訓民正音を人民の文字として最も力強く発展させることができる」のは「北朝鮮のような人民の力でなされる文化建設の国」であるとの信念を提起している(pp.155-156)。ちょうどハングルを広く普及させる「文盲退治」運動が展開されている最中に書かれた論文であり、朝鮮語史が言語外の社会的条件を媒介して現代

へと接続されている。

論文③は、副題からして「特に問題の現実性に照らして」と付いており、 この頃ちょうど創られていた「朝鮮語新綴字法」の「理論的根拠探求」の 一環として位置づけられている。論文中で紹介されているように、1948年 1月に朝鮮語文研究会が公表した朝鮮語新綴字法案では、語と語をつなげ る際に'宀'(シオッ)の字を挿入する間音(宀) (ハー) を廃し、代わって中間 にアポストロフィを挿入することにしていた(例: " $rac{x}{2}$ (便所) \rightarrow "되'간")。 この論文では、訓民正音を創製した時代に溯り、当時の音韻の対応関係を 共時的に分析した上で、当初多様に表記されていた挿入字母が文法的な機 能をもった助詞ではなく、2つの語を合成する際の「語音論的な事実」(同 化作用の防止)を示すものだと結論づけた。そして、その後時代を下るにつ れて単純化していった変化の「必然性」を明らかにし、その延長上に現代 の新綴字法を位置づけた。新綴字法で符合'は「絶音符」と呼ばれたが、 本論文の趣旨と一致する用語である。この符号は1950年代半ばから1960年 代半ばまで実際に用いられることになるが、その導入に際して、金壽卿言 語学が積極的に寄与したことは疑いない⁹²。

党の機関誌(労働新聞)に掲載された言語政策の論説ともいえる論文① でも、言語学理論はもちろん、比較言語学や史的言語学の蓄積が活かされ ている。ここでの論点は、同じ漢字は同じ形態で一貫して表記するか(形 態主義)、発音に合わせて変化させるか(表音主義)というものである。朝鮮 語には、単語の初めに子音の r(=) が来たとき、その子音が欠落したり n (L) に変化したりする頭音の法則がある。その結果、例えば「労」(ro) という漢字は、単語の途中に来ると「過労」(kwa-ro)となるが、初めに来 ると「労働」(no-dong)と発音する(北朝鮮でも当時はそう発音していたという)。 発音に合わせて no-dong (노동) と記すか (表音主義)、表記の一貫性を重視

92安秉禧 [2001:113] を参照。なお、1954年以降は"사이丑"とよばれた。

して ro-dong (豆) と記すか (形態主義) という問いに際し、当時漢字使用 の撤廃を検討していた北朝鮮では、同一漢字を常に同一ハングルで表記する後者を選択した。その理論的根拠を提示したのが論文①である。それも イデオロギー批判というよりは、理論的および歴史的な観点で書かれている。詳細は省略するが、朝鮮時代の知識人による表音文字としてのハングルへの過剰評価を批判したり、フランス語の "oi" 表記の発音の歴史的変化を例に挙げたり、音韻論を説明するにあたってロシア語と朝鮮語の音韻体系の違いを論じたり、400年以上続く訓民正音の学習法において頭音の r を発音してきたことを指摘したりなど、比較言語学・史的言語学の知識が活用されている。

北朝鮮では、短期間中に朝鮮語の縦書きを横書きにし、漢字を撤廃し、さらには新たな文字まで創り出そうという、朝鮮語の革命とでもいうべき事業が進行していた。その事業に深く参画していた金壽卿は、言語学の知識が学問の内部にとどまらず、実際の政策へと反映されていく現場に居合わせていた。一般的には社会主義において「科学的」たることへの強い志向性があったことがその背景にあるが、それに加えて朝鮮語学に関していえば、言語学者だった金科奉が政治のトップの座にあったことの影響は大きかった。金壽卿は形態主義表記法の思想について、朝鮮語学者・周詩經に淵源し、その弟子たる金科奉が継承・発展させたものと、その系譜を辿っている[金壽卿1949c:6-7]。さらにいえば、金壽卿がそれを理論的に肉付けし、実際の表記として具現化したといっても過言ではなかろう。この学問と政治の蜜月が、その後の金壽卿の運命を左右することになるとは、この時考えてもみなかっただろう。

この形態主義をより徹底させたのが新た

⁹³ この形態主義をより徹底させたのが新たに6つの字母を追加した朝鮮新綴字法であり、その制定に金壽卿は中核的役割を果たしたと考えられるが、これついては別稿[板垣2014]で論ずる。

おわりに

当初本稿では、小倉進平・河野六郎らの朝鮮語学との関係において、金 壽卿の研究を位置づけてみようと考えていた。だが資料に分け入って調べ ているうちに、日本の朝鮮語学から影響を受けたとかそれを乗り越えたと か、そのような枠組では金壽卿の言語学をとらえきれないことが間もなく 分かった。小林英夫の手ほどきも受けながらヨーロッパの言語学を濃密に 学んだ金壽卿は、その類い希な語学能力を活かして、書物を通じて、世界 各国の言語と言語学を直接学び取った。金壽卿は、そうした欧米の言語研 究とも対話可能な一般言語学理論と哲学の上に朝鮮語学を構築しようとの 志を早くから抱いていたと思われる。東京帝大の大学院に進んで、小倉進 平の指導で本格的に朝鮮語学を学んでいた時も、一般理論、とりわけ構造 言語学への関心は持続していた。一方、京城帝大に移管された奎章閣図書 をはじめ朝鮮語史の資料にもかなり接しており、それが金壽卿にとっての 文献学的な蓄積となっていた。

解放後に、そうした金壽卿言語学は一挙に開花することになる。越北後 は朝鮮語史の資料の不足もあって、新たな朝鮮語史の調査研究は困難とな るものの、代わって現代朝鮮語の規範を作り出していくための規範文法へ のコミットが強くなった。一般理論の枠組はソビエト言語学へとシフトし ていくが、マル言語学の枠組を積極的に翻訳紹介しながらも、その中心と なるヤフェト理論に依拠することはなかった。むしろ構造言語学的な考え 方とソビエト言語学との結合の模索も見られた。このように言語学理論、 史的言語学、規範文法が練り合わさった金壽卿の朝鮮語学が見えてくる。

そうしたスケールをもった金壽卿の研究において、少なくとも本稿で扱っ た時期には日本人研究者への直接の言及がほとんど見られない。解放前の 『老乞大諺解』の板本研究では史料的に末松保和の誤りを訂正したのみな らず、結果的には小倉進平の主著『朝鮮語学史』(初版1920年、増訂版1940年) の不足を補うものとなっているがっ、本人はそうとは明記していない。越北後の論文でも、挿入字母の解釈について小倉進平の見解を他の研究と合わせて批判しているほか(既述)、訓民正音成立時期をめぐって洪起文とともに河野六郎の論文を参照しているものの(論文②p.138)、継承とか克服とかいうことを論じられるほどのことはない。

むしろ日本との関係でいえば、何といっても本稿で描いたような植民地 化と戦争、そして解放という大状況とその経験が金壽卿に大きな影響を及 ぼしたというべきであろう。1946年にソウルで出版したクーランの翻訳の あとがきでは、「朝鮮の解放のために闘ってきた革命闘士」に感謝の念を 表している。越北後に書いた論文①(連載第1回)では、朝鮮語学会の綴字 法(1933年)において「いくつか不十分な点を発見し、これに対しわれわ れの独自的見解をもっていたが、日帝の野蛮的文化政策下において陣営内 部の統一に無用な混乱をおよぼすことをおそれ沈黙を守ってきた」と述べ ている。論文②でもハングルが十分に普及しなかった要因に「日帝の弾圧」 をあげている。朝鮮語学者としての金科奉を讃えた文章 [金壽卿 1949c:2] でも、冒頭から解放前に「祖国の独立と民族解放のために不撓不屈の闘志 で闘われた」ことに対し、まずは賛辞を送っている。朝鮮語研究者や京城 帝大の同期生らが次々に逮捕され、名前を変えさせられ、学徒出陣の圧力 がかかり、「国語常用」のスローガンのもと朝鮮語の領域がどんどん縮小 されていくなか、辛うじて朝鮮語研究を継続していた金壽卿にとって、日 本帝国主義は文字通り「野蛮」な存在であり、また民族解放のために闘っ た人たちには本当に感謝の念を抱いていたことであろう。そのような経験 と認識は、その後の金壽卿の言語観や民族観にも影響を及ぼすことになる。

_

⁹⁴ 河野六郎による補注において、その旨が指摘されている[小倉1964:補注172]。河野は 金壽卿論文を目にしていたはずだが、戦後に入手できなかったためか、補注では当該文献 に言及していない。

それが「金壽卿の朝鮮語研究にとって日本とは何か」という問いに対する、 さしあたりの解答となるであろう。

謝辞:本論文の資料収集の過程で、金壽卿および小林英夫のご遺族のほか、多くの方々 のお世話になった。以下、お名前を記させていただく(五十音順、敬称略)。李相禄、 岡本真希子、菅野裕臣、金昌禄、熊谷明泰、コヨンジン、通堂あゆみ、朴漢龍、橋本繁、 福井玲、洪宗郁、水野直樹、渡辺直紀。

参考文献

【金壽卿文献】

- 金壽卿[1937]「英語研究會」,『學友會報 昭和十一年度』,京城帝國大學豫科學友會文 藝部.
- -----「1945」「「老乞大」諸板の再吟味:訂本「老乞大諺解」の發見を機として」。『「老 乞大」諸板の再吟味』京城帝國大學法文學部, 奎章閣叢書 第九 老乞大諺解 別冊附錄,
- ---[1946] "譯者後記", 쿠-랑 [1946].
- -----[1947a] "「龍飛御天歌」挿入子音考", 『震檀學報』15
- ---- [1947b] "朝鮮語學會『한글 맞춤법 통일안』中에서 改正할 몇가지 其一 漢字音 表記에 있어서 頭音ㄴ及ㄹ에 對하여". 『勞働新聞』1947.6.6, 6.7, 6.8.
- -----[1949a] "訓民正音成立史考",金日成綜合大學歷史文學部『歷史·文學研究論 文集』,金日成綜合大學科學學術研究論叢・第一、金日成綜合大學編輯部.
- ----[1949b] "龍飛御天歌에 보이는 揷入 字母의 本質: 特히 問題의 現實性에 비추어", 『조선어연구』1-2.
- [1949c] "조선어 학자로서의 김두봉 선생", 『조선어연구』1-3.
- ----- [1954] "주시경선생의 생애와 학설 : 선생의 서거 40주년에 제하여". 『조선민주 주의인민공화국 과학원 학보』1954. No.5.

【コリア語文献】

姜明淑「2002」『美軍政期 高等教育 研究』、서울대학교 교육학과 박사학위논문、

国史編纂委員会 [1987] 『北韓關係 資料集 V』, 国史編纂委員会.

金基酶 [1996] "김일성종합대학의 창설에 관한 일 연구", 『敎育理論』10-1.

金炳華「1979」『韓國司法史(近世編)』(訂正初版),一潮閣.

김일성종합대학 (金日成綜合大学) [1956] 『김일성종합대학 10년사』, 김일성종합대학. 金日洙 [2005] "역사가 会錫亨의 역사학", 『역사와 경제』 54.

金載元 [1984] "光復에서 오늘까지", 『震檀學報』57.

까쯔넬손, 에스・데 (С. Д. Кацнельсон) [1949] "쏘베트 一般言語學三十年" (김수경 역), 『조선어연구』 창간호.

례폴마트쓰끼, 아. 아. (А. А. Реформатский) [1949] 『(대학용) 언어학』(김수경 역), 교육성.

리규춘 [1996] 『장편실화 삶의 메부리』, 금성청년출판사.

---- [2001] 『장편실화 신념과 인간』, 금성청년종합출판사.

朴時亨 [1981] "조국력사연구의 보람찬 길에 세워주시여", 『은혜로운 사랑속에서(1)』, 三學社.

方鍾鉉 [1946] "老乞大諺解", 『한글』11-2.

北朝鮮人民委員会司法局「1947」『北朝鮮法令集』,北朝鮮人民委員会司法局.

宣鎭秀 [1939] "失人記". 『文章』1939年10月号.

신효숙 [2003] 『소련군정기 북한의 교육』, 교육과학사,

安秉禧「1996」"老乞大斗工 諺解書의 異本"、『人文論叢』35.

---- [2001] "北韓의 맞춤법과 金枓奉의 학설", 『정신문화연구』2001년 봄호.

兪鎭午「1974a」"片片夜話(63)京城大學總長",『東亞日報』1974.5.14.

—— [1974b] "片片夜話" (64), 『東亞日報』1974.5.15.

—— [1974c] "片片夜話" (65), 『東亞日報』1974.5.16.

李基文 [1982] 『16세기 국어의 연구』, 탑출판사.

李吉相, 吳萬錫編「1997」『韓國教育資料集成 美軍政期篇 I』, 韓國精神文化研究院.

李崇寧 [1983] "나의 硏究生活", 『나의 걸어온 길 : 學術院 元老會員 回顧錄』, 대한민 국 학술원.

----- [1984] "震檀學會와 나", 『震檀學報』 57.

板垣竜太 (이타가키 류타) [2014] "월북학자 김수경 언어학의 국제성과 민족성", 신주백 엮음, 『한국 근현대 인문학의 제도화: 1910~1959』, 혜안.

李忠雨 [1980] 『京城帝國大學』, 多樂園.

李熙昇 [2001] 『다시 태어나도 이 길을』. 도서출판 선영사.

朝鮮語文研究会「1949」「조선 어문 연구회의 사업전망」、『조선어연구』1-1.

鄭根埴 [2012] "탈냉전·분단'시대의 가족사쓰기: 이산복합가족의 경험을 중심으로", 〈호남지역사와 문화연구〉심포지움 발제문, 2012년 8월 23일, 보성문화원.

鄭秉峻 [2010] 『독도 1947 : 전후 독도문제와 한ㆍ미ㆍ일 관계』, 돌베개.

震檀学会「1947」"彙報"、『震檀學報』15.

쭈께르만, И. И. (И. И. Цукерман) [1949] "Н. Я. 마르와 쏘베트 언어학" (김수경 역), 『조선어연구』1-6.

체모다노프, H. C. (Н. С. Чемоданов) [1950] "구조주의와 쏘베트 언어학" (김수경 역), 『조

선어연구』 2-1.

崔炅鳳 [2009] "金壽卿의 국어학 연구와 그 의의", 『한국어학』45, 2009.

崔炅鳳 외[2007] "해방 이후 국어 정립을 위한 학술적 • 정책적 활동 양상 : 김민수 구술", 2007년도 구술자로 수집사업 녹취록, 국사편찬위원회,

崔光石 [1968] "北傀 金日成大學", 『新東亞』1968-6.

쿠-랑, 모리스 (Maurice Courant) [1946] 『朝鮮文化史序說』, 金壽卿訳, 凡章閣.

【日本語文献】

安倍能成「1966」『我が生ひ立ち』、岩波書店、

イヴィッチ、ミルカ (Milka Ivić) 「1974」 『言語学の流れ』、早田輝洋・井上史雄訳、みす ず書房.

小倉進平「1964」『(増訂補注)朝鮮語学史』,河野六郎補注,刀江書院、

姜徳相「1997」『朝鮮人学徒出陣:もう一つのわだつみのこえ』、岩波書店、

菅野裕臣 [一]「菅野裕臣の Aŭtobiografio」, http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/cgi-bin/hr.cgi? autobio/autobio-2.html

熊谷明泰 [2000] 「南北朝鮮における言語規範乖離の起点:頭音法則廃棄政策における 金寿卿論文の位置」、『関西大学人権問題研究室紀要』41.

京城帝国大学同窓会「1974」『京城帝国大学創立五十周年記念誌 紺碧遙かに』, 京城帝 国大学同窓会.

京城帝国大学法文学部	[1943]	「研究室通信」,	京城帝国大学	学法文学	部『學叢』	1.
	[1944]	『老乞大諺解』,	奎章閣叢書第	第九, 京	(城帝国大学	学法文学部
	[1945]	『「老乞大」諸様	反の再吟味』,	奎章閣	叢書第九老	乞大諺解
別冊附錄, 京城帝国	大学法戈	て学部.				

小林智賀平 [1937] 『マルティの言語學』 興文社.

小林英夫 [1940] 「譯者の序」、ソシュール [1940].

- ------- [1945] 『言語研究・現代の問題』,有徳社.
- -------「1951 (1977)]「教え子」、『小林英夫著作集 第10巻 随想』、みすず書房、1977 所収(原著は『Papyrus(東京工業大学学友会図書館委員会)』No.1, 1951)
- -----[1957 (1977)] 「白いハト」, 『小林英夫著作集 第10巻 随想』, みすず書房, 1977所収(原著は『PHP』第110号, 1957)
- ------ [1977] 「小林英夫著作目録」, 『小林英夫著作集 10』, みすず書房.
- ----- [1978] 「Os Lusíadas との触れ合い: あとがきに代えて」、ルイス・デ・カモン イス『ウズ・ルジアダス』、岩波書店、

ソシュール,フェルヂナン・ド (Ferdinand de Saussure) [1940] 『言語學原論(改譯新版)』, 小林英夫訳, 岩波書店,

田中克彦「2000」『「スターリン言語学」精読』、岩波書店.

朝鮮商工会議所「1939」『全鮮商工團體現勢調查』朝鮮商工会議所.

東京大学「1986」『東京大学百年史 部局史一』東京大学、

東京大学史史料室編「1998]『東京大学の学徒動員・学徒出陣』東京大学出版会。

トゥルベツコイ, N. S. (N. S. Trubetzkoy) [1980] 『音韻論の原理』, 長嶋善郎訳, 岩波書店. ブイコフスキー (C. H. Быковский) [1946] 『ソヴェート言語学』, 高木弘編訳, 象徴社.

釜山日報群山支社「1928」『開港三十周年記念 群山』釜山日報群山支社、

丸山圭三郎「1981」『ソシュールの思想』、岩波書店、

宮本和吉「1951」「京城大学」、『文藝春秋』1951年1月号、

村山七郎 [1950] 「ソヴィエト言語学とスターリンの批判」, 『思想』317 (1950.11).

メイエ,アントワヌ (Antoine Meillet) [1977] 『史的言語学における比較の方法』,泉井 久之助訳, みすず書房.

森田芳夫「1964]『朝鮮終戦の記録』、巌南堂書店、

ヤコブソン(Roman Jakobson)[1996]『構造的音韻論』,矢野通生ほか訳,岩波書店.

【英語文献】

Kiesow, Karl-Friedrich [1990] "Marty on form and content in language", Mulligan ed., Mind, Meaning and Metaphysics: The Philosophy and Theory of Language of Anton Marty, Kluwer.

Murra, John V, et al. eds. and trans. [1951] The Soviet Linguistic Controversy, King's Crown Press.

Leška, Oldřich [2002] "Anton Marty's philosophy of language", Eva Hajičová et al. eds, Prague Linguistic Circle papers, Vol.4.

United States Army Military Government in Korea (USAMGIK) [1946] "History of Bureau of Education from 11 September 1945 to 28 February 1946", 鄭泰秀編著『美軍政期 韓國教育 史資料集(上)(1945-1948)』,弘文苑,1992.

Vinogradov, Victor ed. [1988] Aleksandr Rerormatskij: Selected Writings, Moscow: Progeress Publishers.

【ロシア語文献】

Алпатов, В. М. [2004] «История одного мифа: Марр и марризм», 2-е, УРСС.

Реформатский, А. А. [1947] «Введение в языкознание», Гос. учебно-педагогическое изд-во Министерства просвещения РСФСР.

Чиркин, С. В. [2006] 《Двадцать лет службы на Востоке: Записки царского дипломата》, Русский путь.

【文書類】

国家記録院(韓国)

『辯護士認可二關スル書類』, 朝鮮總督府法務局庶務係, 1936年, 国家記録院文書・管 理番号 CJA0004097.

米国国立文書館(NARA)

『金大教員履歴書 文学部』, NARA 文書 RG#242, 2005 1/31.

『一九四七年度金日成大學發令件』, 北朝鮮人委教育局, NARA 文書 RG #242, 2006 12/32.1.

【定期刊行物】

『毎日申報』,『東亞日報』,『自由新聞』,『조선민주주의인민공화국 내각공보』,『朝鮮 總督府官報』,『朝鮮總督府及所屬官署職員録』,『朝鮮銀行會社組合要錄』,『中外日報』, 『全羅北道要覧』, 『京城帝國大学一覽』, 『東京帝國大學一覧』

5 金壽卿 [1989] から読む 韓国の歴史比較言語学の一様相

コ ヨンジン

1. 序論

韓国や日本で出版された多くの言語学概説書では、言語学とは「言語に関する科学的研究」であるとして言語学が定義されている。あるいは、そのような定義が明示的に示されておらずとも、言語研究では、その「事実」を暗黙裡に受け容れてはじめて議論が進められる。だから、言語に関する研究は、常に価値中立的であるというこ

とを前提に行われる。

だが、具体的なことは本論で言及するが、「息苦しい歴史的な変革が迫っていたり、社会的な葛藤が尖鋭化するときには、各学問分野がもっていた政治的、理念的属性が表面にふっと現れる場合」 [金河秀2008:22] があるが、「言語学も決してその例外ではなかった」[田中克彦2003:27] のである。私たちは、その典型的な事例を韓国の歴史比較言語学に見ることができると考えているのだが、本稿ではまさにそうした観点から金壽卿 [1989] を読み解いてみようと思う【図1】。



図1 金壽卿『3国時期言語歴 史に関する南朝鮮学界の見解 に対する批判的考察』(1989)

2. 「日韓両国語同系論」とその周辺

2-1. 金澤庄三郎 [1910]

朝鮮語の系統が日本語と同じであるという説は、「日韓併合」を前後し た時期に、主として日本で主張された。「L. de Rosny、W. G. Aston、E. H. Parker、J. Edkins らの西洋の学者や、大矢透、白鳥庫吉、宮崎道三郎、金 澤中三郎、稲垣光晴らの日本の学者が多くの業績を残した。特に Aston と 金澤の労作は、この時期の最大の成果であり、白鳥の語彙比較もまた小さ からぬ業績 | [宋敏 1969:7] だと評価されている。この頃は、「比較研究が 草創期的な性格を脱皮することができずにい」[宋敏1967:7] たものの、 「比較研究に対する意欲は最も旺盛だった時期」であり「宋敏1969:7」、 そうした「語彙比較を通じて韓国語と日本語が同系であると同時に、両民 族もまた同族であると主張することによって、ちょうど起きていた日本の 韓国併合に対する政治的な大義名分を提供したりもした | 「宋敏 1969:7] のである。特に金澤庄三郎の『日韓両国語同系論』[1910] は、英語でも同 時に発表されたため海外にも広く知られ、日本語と朝鮮語の比較研究にも 大きな影響を及ぼしたものとされている [金芳漢 1983:42-43]。のみならず 金澤のこの研究は、本人の意思とは関係なく、内容においてはもちろんの こと、そのタイトルが漂わせる役割を濃厚に果たした結果、以下の田中克 彦の評価に見られるように、言語系統論と侵略主義を議論するときには決 まって言及される定番となった。

[ソンメルフェルトは] 言語の系統論と人種主義とが常に危険な癒着をひ き起し、暗い野心につながるおそれを、日本についても指摘している。 南アメリカ征服のための足場を準備しようとして、日本人どもは 古代アメリカの諸文明が日本に起源をもつという神話をふりまい ている。かれらはインカ文明の創始者なのだそうだ。日本政府は

このでたらめを証明しようとして、書物の刊行に金を出した。 もし人種主義が言語系統論に補強されて、侵略を助けた例を挙げるな ら、ソンメルフェルトは、このような、いかがわしい根拠にたった「南 米征服説」ではなく、むしろ朝鮮やモンゴルの例を選ぶべきであった。 言語系統論と侵略主義との関係は、いつでもあからさまで直接的であ るとはかぎらないとはいえ、たとえば「日鮮同系論」が大衆的基盤を 持つに至ったとすれば、こうした議論が朝鮮の植民地化政策のもとで 好意的な扱いを受ける機会の多かったことが影響している。[田中克彦 2003:37]

この問題に関連しては、金壽卿 [1989:105] もまた次のように批判している。

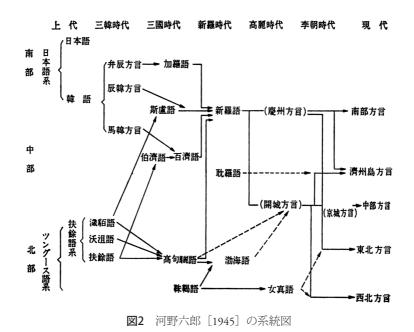
日本人言語学者・金澤庄三郎の『首朝両国語同系論』が1910年に刊行されたという事実それ自体が偶然ではないし、この本の序説において「韓国の言語は、我大日本帝国の言語と同一系統に属せるものにして、我国語(日本語を指す引用者)の一分派たるに過ぎざること、恰も琉球方言の我国語におけると同様の関係にあるものとす」と書き、結論部分で「斯して日韓両国民互いに国語(日本語)を了解して、遂に古代における如く再び同化の実を挙ぐるに至らば、真に天下の慶事といふべきなり」と締めくくっていることを通じても、植民地政策遂行のために日本人がどれほど恥知らずにも科学と真実を歪曲しているかを十分にうかがい知ることができる。

だが上記のような金澤の主張は、朝鮮の「併合」が完了した後は当然その効力を失い、それにともなって彼の主張も忘れ去られていった。のみならず、「1898年に日朝両国語の類似するもの二百語余りを挙げて、日本民

族の半島および大陸の種族との密接な関係を疑わなかった白鳥は、1909年に両国語は当初の期待ほど親密な関係にはないと述べ、14年には金澤の『日韓両国語同系論』を「臆断」と批判」[石川遼子2002:64] するに至った。すなわち白鳥は「併合」以降と、朝鮮語と日本語が同じ系統であるという見解から全く手を引いてしまったのである。さらに、「日韓併合直後から日朝同祖論自体が重要視されなくなり、教授をしていた東京外国語学校朝鮮語学科が廃止され、金澤は教授職を辞任することに」[石川遼子2012:100] なるなど、彼の個人的な境遇も「同系論」と同じ道を辿ることとなった。

2-2. 河野六郎 [1945] とそれ以降

金澤において本格化した「日韓両国同系論」は朝鮮の植民地化以降消えていったかにみえたが、必ずしもそうとばかりは言い切れないようである。



5 金壽卿 [1989] から読む韓国の歴史比較言語学の一様相 141

上記の系統図【図2】は「云ふ迄もなく暫定的なもの」[河野 1945/1979: 273] ということを前提に提示されたものであるが 2 、この図はさまざまな事実を物語っている。このうち本稿で私たちの関心をひくのは次の部分である。

- (1) 日本語と朝鮮語は系統が同じである。
- (2) 新羅語の直接の祖語となる斯盧語と高句麗語とはそれぞれ異なる 言語である。
- (3) 現代朝鮮語は新羅語の後裔であり、新羅語は斯盧語の後裔である。

このうち(1)(2)については、河野の次のような発言において確認することができる。

斯くてこの古い時代の言語状況を考へて見ると、南には韓語系の言語、東には滅語系の言語、東北には沃沮系の言語、そして西北に中国語系の言語が行はれてゐたことが知られる。而して西北の中国語系の言語は漢楊雄の撰と称せられる「方言」の中にその断片が止められてゐるが、これは一の方言を為し、この方言は燕(今の河北省)の方言と密接なる関係があつたことが伺はれる。其他の言語に就いては滅語と沃沮語とは後述の高句麗語と共に挟余語系といふ一大語系に属してゐるらしい。この語系に対して韓語が如何なる関係に立つか、今日尚不明で

¹ 河野自身の用語は「系統譜」である。

² この系統図は『河野六郎著作集1—朝鮮語学論文集』(平凡社、1979)に収録された「朝鮮 方言学試攷」(272頁)からの引用である。よく知られているように、同書の初版は1945年 4月に東都書籍株式会社京城支店から刊行されたものであり、李珍昊教授による韓国語訳 は『한국어 방언학 시론(韓国語方言学試論)』という題目で2012年9月に全南大学校出版 部から刊行された〔訳注:日本語版では重訳を避けるため著作集より直接引用した。また、 旧字体は新字体に直した。以下同じ。〕。

ある。然し一方韓語が我が国の言語と可也近い関係にあつたらしい事 は零碎な韓地名から推測せられるが、この事は考古学上から南朝鮮の 石器時代遺物が我が国の夫れに類似せる事実と相俟つて確かに興味あ る事である。 [河野 1945/1979: 259-260]

また(3)は、①前掲系統図において開成方言が新羅語の一方言となっ ている点、②高句麗語は渤海語へと継承されはしたが、開成方言とは高句 麗語と渤海語のいずれもが点線でつながっている点において確認すること ができる。それだけではなく、これに関連して河野が次のように直接的に 言及している事実もまた見逃すことのできない重要な事実である。

此の半島北半の地は上述の如き紆余曲折があつたにも拘らず、言語的 には空白である。それが現在の朝鮮語の成立に寄与した貢献はあまり 多くないと思はれる。現在の朝鮮語にとつて重要なのはむしろ南部朝 鮮である。[河野 1945/1979:260]

現在の朝鮮語は高麗を通して新羅語の延長であるから、其の基体は斯 慮語である「河野 1945/1979: 262]

このような河野の主張は、解放後にも韓国の学者に多くの影響を与えた と判断される。たとえば、解放からそれほど経っていない時期に刊行され た金亨奎 [1953:34] の「この地の先住民族である北方の濊・葯・沃泊・ 高句麗族の言語を代表する言語と、南側の三韓時代を経て百済を統一し高 句麗族を駆逐した新羅語が、代表的な韓族の言語の2系統であると大きく 区分することができるであろう。では、今日のウリマル〔朝鮮語〕 はその うちどの系統の言語なのか? (中略) 私は、今日のウリマルは韓族の言語 である新羅語が中心となり、ここに北方系の高句麗語は若干の痕跡を残し

て消えてしまったと考えられる」という発言において、その一端をうかがい知ることができる。

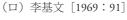
そして金壽卿 [1989] が主たる批判の対象とした李基文教授のさまざまな業績においても大きな影響を与えたものと考えられる。ただ「日本語系」という河野の主張は、以下にみるように、李基文 [1973b:233] において激烈な批判の対象となった。

今日、私たちが喋っている韓国語は、広く見て韓系諸語、狭く見て新羅語を根幹として形成されたものであるが、この系統圏³によれば、これは「日本語系」に属するものとなっている。この「日本語系」という用語は、河野六郎の韓国語と日本語の同系説の真意をあらわにする重大な証拠となる。彼は上古の三韓を、日本の言語圏に属していたものと見ていたのである。(中略)これは日帝末期の特殊な状況の下で主張されたことであり、無視しておいてもよいものではないかとの主張もあり得る。だが「終戦」以降も、日本の学者らの間では、このような考え方が根深く刻み込まれていることを、私たちは冷静に見据えなければならない。「良心的」だといえる学者の文章においても、古代の南韓は倭の棲息地だったかのように書いているのを時おり見かけることがある。このような主張にもとづき、言語学者らは古代南韓に倭の言語(すなわち日本語)があったと推定したりもしている。

しかし、金壽卿 [1989:109] は「李基文教授の文章は、河野六郎の見解を全面的に批判しているように見えるが、実のところ彼はここで韓語を日本語系と主張することに対して、それから高句麗語をツングース語に所属

^{3 (}引用者注) 先に提示した河野六郎の『朝鮮方言学試攷』の系統図を指しているが、李基文 [1973b:233] では「不必要な部分は省略」して提示されている。

させることに対してのみ批判しているのであって、朝日同系説や、朝鮮半島を南北に割って南は韓語系、北は挟余語系とすることに対しては一言も批判しないでいる。それだけではなく、まさにその部分はそのまま踏襲し、自らの『理論』の根拠と」していると批判する。彼の批判は次の(ロ)の系統図【図3】にまで向けられる。





(ハ) 李基文「1972:41]



図3 李基文の系統図

⁴ 金壽卿 [1989:109-110] において直接引用し、批判されている系統図は本文の(ロ)であるが、理解を助けるため(イ)と(ハ)もあわせて提示した。また、本文の(イ)~(ハ)以外に、李基文 [1998:53] にも系統図が提示されているが、それは表記がハングルになっているだけで、その内容は本文の(ハ)と同じである。そして(ロ)の系統図については、李基文 [1968:139] の脚注37で「原始日本語一古代日本語」の位置が左側の外へ出なければならないのに中に入っているので、この機会に訂正する」と述べている。

この系統図と、先に見た河野の系統図は似ている点が少なくないが、これについて金壽卿[1989:109-110]は上の(ロ)を引用し、「韓語と扶余語を南北に分断している点、そしてここに日本語を引っ張り込んだ点において特に異なる点はない。違う点があるとすれば、ただ日本語の位置を韓語系から扶余語系に移しただけ」だとし、次のように批判した。

高句麗語が新羅語と異なる言語だったとする彼の主張は、決してその何やら「独自的」な研究の結果から出てきたものではなく、かつてわが国を強占していた日本人がかれらの植民地政策を強行するために、わが民衆の頭のなかに深く注入しようとした、歪曲された朝鮮史観、ゆがんだ朝鮮語史観から解放され得ないでいるのみならず、かれらに従うことをその基礎においているのである。

わが民族とわが言語を扶余系だとか韓系だとかいい、北と南の二つの部分に分断したことは、それ自体が既に上で見たように、高句麗の歴史をそもそも朝鮮史の圏外に追いやり、わが民族の歴史と言語を矮小化、貧弱化しようという日本人の見解と直接連結しているのであるが、李基文教授が今でもその後を追って、わが国とウリマルの歴史を歪めて描写しているというこの事実は、きわめて重く、また遺憾なことであると言わざるを得ない。[金壽卿 1989:110]

結局、ここまでの議論で分かるように、金壽卿 [1989] によれば、①日本語と朝鮮語は系統が同じである、②高句麗語と新羅語は相互に異なる言語である、③今日の朝鮮語は新羅語にその起源がある、という3つの主張が、全て植民地期の河野の主張に由来するものであり、それは批判を受けて当然だという話になっている。

3. 金壽卿 [1989] の背景とそれが示唆するもの

金壽卿のこの本は1989年5月に刊行され、当り前の話ではあるが、執筆 はその前に行われた。具体的な執筆時期については、韓国の正書法につ いて言及している「終結形〈- $\dot{\mathbf{u}}$ 口 $\dot{\mathbf{q}}$ の上に過去 $\dot{\mathbf{r}}$ 〔토〕〈- $\dot{\mathbf{x}}$ 、 $\dot{\mathbf{x}}$ が来 る場合、南では〈豆炊竜니다, 名気竜니다〉のように〈-・・・・・・・と綴るが、 北では〈星外台「子、人気台「子)のように〈一台「子)と綴る」「金壽卿 1989:213] という記述が、ひとつの手がかりとなろう。なぜならこの内容 は、同書が少なくとも現行の「ハングル正書法」が告示ないしは施行され る以前に執筆されたことを示唆しているからである。よく知られているこ とだが、北と同様「〈-合니다〉〈보았合니다. 심었습니다〉」と綴るよう定 めた韓国の現行「ハングル正書法」は、1988年1月19日に当時の文教部に よって告示され、1989年3月に施行された5。

この単純な事実は、同書の執筆および刊行について、少なくとも次の2 つの事実を同時に考える必要があることを示唆している。第1に、この時 期は、1987年の「6月抗争」の結果、韓国での民主主義が本格化し始めた 頃だという点である。このような民主化の結果現れた動きのひとつが 「北朝鮮を正しく知る運動」であり、これと関わって、当時北朝鮮の「原 典」が洪水のように「氾濫」し始めたという事実にわれわれは注目しなけ ればならないと思う。この詳細についてはさらに調査してみなければなら ないが、たとえば北朝鮮で「不朽の古典的名作」と言われる『血の海〔3 바다]』(1988年11月、ハンマダン)6、『花を売る乙女〔꽃과는 처녀〕』(1989年1月、 ヨルサラム)、『ある白衛団員の運命〔한 자위단원의 운명〕』(1989年1月、黄土) などがみなソウルで出版されただけでなく、1988年1月には「主体思想叢

⁵ 李基文 [1988] の「머리말」および国語研究所 [1988]。

⁶ 韓国では『血海(民衆の海)』というタイトルで出版された。

書」の中の1冊である『主体思想の指導的原則』(柘山書堂) までもがソウルで出版されたのである。

第2に、言語の問題について、「氾濫」する当時の北朝鮮の「原典」とともに、真面目に提起され始めた「言語異質化論」とも結びつけて検討する必要がある。筆者は本稿執筆のために DBpia、KISS、RISS〔いずれも韓国の論文データベース〕で「言語、異質化」をキーワードに論著を検索してみた。すると、1985年以前はそれぞれ DBpia (0件)、KISS (0件)、RISS (3件)であったのに対して7、1985年から1989年まではそれぞれ DBpia (1985-1、1986-0、1987-0、1988-2、1989-1)、KISS(1985-0、1986-0、1987-1、1988-0、1989-3)、RISS(1985-5、1986-0、1987-1、1988-2、1989-5)という結果が得られた。もちろんこの数字には重複があるかも知れないし、またその量と質も一定ではないので機械的に評価することはできないが、それでも全体的な傾向は十分に把握することができると思う。上の統計に見られるように、1980年代後半以降間歇的に登場した「言語異質化」に関する議論はその後増加しつづけ、今日に至っては、その是非は措くとしても、ひとつの言説として完全に定着したと言える。

このような2つの事実と結びつけて金壽卿 [1989] を検討すると、われわれは同書が南〔韓国〕の読者を対象に執筆されたものと判断しても良いのではないかと思う。まず、金壽卿 [1989] の文体がその他の北朝鮮文献とは異なるという点を指摘できるが、これについては高宗錫 [1999:276] も「(同書は) 学問的のみならず政治的・イデオロギー的に非常に敬感なテーマを扱いながらも、似たようなテーマの北朝鮮文献に比べて文体が穏健である」と評している。これと関連して何よりも同書は、主に南の歴史比較

⁷ 北朝鮮の言語問題研究に先鞭をつけたものとして評価されている金敏洙 [1989:153] が 「異質化が加速するのは明らか」だが、「憂慮していたものよりはそれほど大したもので はない」と述べているのも参考になるが、金敏洙教授の同書はもともと1978年に出版され たものであったことが明らかになっている。

言語学の議論を批判的に検討する形を取っており、その内容もまた非常に 激しいものであるにもかかわらず、南に対する「非難の表現」がほとんど ないという点も特徴的である。特別な場合を除いては非常に中立的な「以 南」という表現で一貫しており、それと対をなす用語としても「以北」を 選択しているほどである。また、形式的な面においても、参考文献が示さ れている®一方、北朝鮮ではハングル専用が原則であるにもかかわらず、 引用文ではない本文においても、括弧内ではあるがしばしば漢字が使われ ており、ローマ字やキリル文字の使用もためらっていない。さらに、北朝 鮮で出された本であればそれらの本のあちこちに必ず表れるゴシック体で 書かれた金日成の「教示」もまた、金壽卿[1989]では結論部分で2、3度 登場するのみという点も極めて異例であると言わざるを得ない。また、 「われわれがこのように民族の問題を提起すると、ある者は今日の時代は すべての事柄が世界化?、国際化し、宇宙化する時代なのに、時代錯誤的 な水車小屋時代の民族概念を押し出す必要がどこにあるのかと反駁するか もしれない | [金壽卿 1989:199] という表現にもみられるように、南でのみ 使われる「世界化」という語彙が使用されている点にも注目すべきである。 これらの事実は、同書が1987年の「6月抗争」以降民主化の局面に入った 韓国社会、そして韓国社会の「北朝鮮を正しく知る運動」などを念頭に、 南の読者たちに民族と言語の問題をより多方面から考察させるために執筆 された本だということを示唆していると解釈しても大きな問題はないと思 われる。

このような彼の試みは、少なくともいくつかの点で大きな成功を収めた と思われる。同書の主な批判対象であった李基文教授の業績について何度

⁸ 김영황・권승모 편 [1996:596-597] には、26名の「博士学位論文」リストが提示されて いる。そのなかで筆者が確認することのできた15編のうち、参考文献が示されているのは われわれが本文で検討している金壽卿の学位論文のみであった。

⁹ 強調は引用者による。

か大小の議論が行われたという事実が、そのことを雄弁に物語っている。そのうち、「高句麗語と新羅語は異なるものではなく、高句麗語と新羅語が異なるという主張を展開する李基文教授は植民史観を繰り返しているに過ぎないので、学術院賞の受賞者にはなれない」という問題を提起したキム・ヨンファン [引母や1993/2012:212-216] には、特に注目する必要がある。彼のこの主張は「越北した国語学者・金壽卿の『三国時期の言語歴史に関する南朝鮮学界の見解に対する批判的考察』(平壌出版社、1989)にしたが」10つたものであることが明らかにされているからである。これに対する反論として出されたのが沈至葉 [1993/1998:194-199] であり、以下はその一節である。

もちろん金教授は、李基文先生の理論を充分に理解し、消化したと考えているでしょう。しかし私の所見では、やはり非専攻者の眼目には限界があるのだなという残念さがあります。ある一方の学説に傾倒する余り、他の見解を受容し検討する余裕が不足しているという感じです。ある面では、真実がこれほどまでにおかしな方向に曲解されうるのだということを発見しました。[沈在箕 1993/1998:195]

上の引用に見られるように、専攻が異なること"を前面に押し出した彼の反論は、反論というよりは一種の説教に近く、そうして「金教授に学術的な内容を一々取り上げて議論することはせず、単に理解の助けとなるいくつかの言葉を申し上げたい」[沈在箕1993/1998:195]と述べ、「野球場にバスケットボールの審判が入り'アウト'を宣言する姿」[沈在箕1993/1998:

¹⁰ 김영환 [2012:212] の注6参照。同書は元々『教授新聞』1993年9月1日付に掲載されたものだという。

¹¹キム・ヨンファン教授の専攻は、言語学ではなく、哲学である。

198] として戯画化してしまい、結局論争らしい論争は行われなかった。

このほかにも、金壽卿[1989]において批判の当事者として名指された 人々がどのような反応を示したのかについても、断片的ではあるが、いく つか探し出すことが出来る。まず、金壽卿[1989]においてもっとも多く の批判を受けた李基文教授の業績に関しては、金壽卿 [1989:12] におい て批判のきっかけとなった次の言及 [李基文1972:32] が、李基文 [1998] では削除されたという点を指摘できるだろう12。

今日の国語は単一言語なので、古代においても高句麗、百済、新羅の 言語が単一であっただろうという先入観に支配されてきたように思わ れる。しかし、そのような態度は批判されなければならない。

にもかかわらず李基文教授は、1991年8月に出版された『国語語彙史研 究』の「後記」において、自身の1968年の論文について「この論文が発表 された後に高句麗語に関する研究が内外の学者たちによって行われ、その 語形の再構においても新たな試みが時々なされたが、筆者の考えは基本的 にはこの論文を書いたときと別段変わりはない | 「李基文 1991:387」と述べ ているだけでなく、李基文 [1998:50-53] においても既存の見解を再確認 しているところを見ると、彼の主張が変わったとは言い難い。

また、金壽卿[1989]において別の批判対象となった金完鎭教授も、金 壽卿[1989]の批判に対して自らの見解を述べたものがある。以下がそれ である。

李基文教授を国内外的に有名にした高句麗の位置問題についての展望 をテーマとしたい。三国の言語を新羅語、百済語、高句麗語とするこ

とをもって是非を問う人々が一部にある。特に北朝鮮の学者のなかに、この問題を大きく誇張し、批判する傾向があることを知っているが、攻撃するための論理の針小棒大化という印象がある。本来、ある二つの地域における言葉の違いが方言的な違いか、独立した両言語の違いかを判定しうる絶対的な基準は、不幸にも用意されていないのである。(中略)言語面において非常に類似している場合でも、政治的、行政的に分離されていれば独立した言語として扱い、その反面相当の違いがあったとしても行政的に同じ圏域内にあれば一つの言語の方言として扱うのが一般的な処理の態度なのである。(中略)したがって5百年や6百年間も独立した国家として鼎立していた三国の言語にそれぞれ「語」の字をつけて呼ぶことは、言語学の慣習に少しも反するものではなく、その間の違いがどの程度であったかということを測定するのはその次の課題に属するのである。評者は、この点において李基文教授を積極的に擁護する。[金完績 1992:155-156]

上で確認したように、今も同書はあちこちで常に直接・間接的に引用され、いわゆる純粋言語学的側面においては歴史比較言語学への批判の呼び水となっているだけでなく、社会言語学的側面においても議論が殆どなされて来なかった韓国における民族と言語に関する問題、言語学と植民地主義に関する問題について批判的に考察することを常に喚起しているという点で、依然としてその生命力を失っていないと言えるだろう。

4. 残る問題

本稿でぜひとも扱うべきであったが時間の関係上取り上げることのできなかった、しかし非常に重要な問題がひとつある。ほかでもなく、韓国の歴史比較言語学が「民族分裂論」にいかなる影響を及ぼしているかという

問題である。このテーマは、金壽卿 [1989] に貫かれているもう一つのキー ワードと言っても良いが、それはわれわれが序論で提起した問題と関連さ せて考えると、南と北で言語に向ける眼差しが異なるということを雄弁に 物語るものでもある。

もし金澤庄三郎 [1910] の結論部分にある「我保護国なる韓国が、その 言語においても、亦我国語の一方言たる実を有し、明らかに同文同語の国 なりといる事実の一斑を示し…」「遂に古代における如く再び同化の実を 挙ぐるに到らば、真に天下の慶事といふべきなり ¹³という内容を引用し、 「韓国語と日本語の関係を最も接近させて考えたのは金澤庄三郎(1910) であった。だが彼の見解は、当時日本が韓国に対して行っていた侵略と密 接に結びついたものであった | という李基文 [1973:15] の言及をそのまま 受け入れるならば、序論においてわれわれが提起した問題、すなわち言語 学は常に価値中立的かという問題を再検討する必要があると言わざるを得 ない。言い換えると、「日韓両国語同系論」が日本の朝鮮侵略を合理化す るのに利用された言語理論であるならば、現在南と北で研究されている言 語学のある一側面が「民族分裂論」に結果的にであれ利用されてはいない か検証してみる必要もあるのではないかということである。したがって、 今後このような問題が現実的に存在するのか、もし存在するのであればそ れはどのような姿なのかなどを追求し、具体化することが、われわれの目 の前に置かれた課題であると言えるだろう。

〈参考文献〉

【コリア語】

고종석 (高宗錫) [1999] 『국어의 풍경들』. 문학과지성사.

13以上は李基文 [1973c:15] からの引用であるが、本稿では重訳を避けるため、金澤 [1910: 59、60] より直接引用した。

- 국어연구소 (国語研究所) [1988] 『한글 맞춤법 해설』, 국어연구소.
- 김민수 (金敏洙) [1989] 『증보판 북한의 국어연구』, 일조각,
- 김방한 (金芳漢) [1983] 『한국어의 계통』, 민음사,
- 김수경(金壽卿) [1989] 『세나라시기 언어력사에 관한 남조선 학계의 견해에 대한 비판적 고찰』, 평양출판사(『고구려•백제•신라 언어연구』, 한국문화사 영인본, 1995).
- 김슬옹 (キム・スロン) [2010] "삼국시대 언어의 동질설•이질설과 한국어 계통론", 전정예 외, 『새로운 국어사 연구론』, 경진, 490-502.
- 김영환 (キム・ヨンファン) [2012] 『한글 철학』, 한국학술정보㈜.
- 김영황 (キム・ヨンファン)・권승모 (クォン・スンモ) 편 [1996] 『주체의 조선어연구 50년사』, 김일성종합대학 조선어문학부.
- 김완진 (金完鎭) [1992] "서평;이기문 [1991], 『국어 어휘사 연구』", 『주시경학보』 제9집, 주시경연구소, 149-157.
- 김하수 (金河秀) [2005] "제국주의와 한국어 문제-제국주의와 민족주의가 한국 언어학에 미친 영향을 중심으로", 미우라 노부타카 가스야 게이스케 엮음, 『언어제국주의 란 무엇인가』, 돌베개, 479-511 (이연숙 고영진 조태린 옮김).
- ----- [2008] 『문제로서의 언어2 : 민족과 언어』, 커뮤니케이션북스㈜.
- 김형규 (金亨奎) [1953] 『국어사 (국어사 급 국어학사)』, 백영사,
- 박병채 (朴炳采) [1971] 『고대국어의 연구-음운편』, 고려대학교 출판부.
- 송기중 (宋基中) [2003] 『역사비교언어학과 국어계통론』, 집문당.
- 송 민 (宋敏) [1969] "한일 양국어 비교연구사", 『논문집 1』, 성신여자대학, 5-93.
- 심재기 (沈在箕) [1998] 『교양인의 국어 실력』. 태학사.
- 이기문(李基文) [1961] 『국어사개설』, 민중서관.
- ----- [1969] "한국어형성사", 고려대학교 민족문화연구소, 『한국문화사 대계9-언 어 • 문학사 (상)』, 고대민족문화연구소출판부, 19-112.
- ----- [1972] 『개정 국어사개설』, 민중서관.
- ─── [1973a] "언어상으로 본 고대 한일 관계,"『신동아』1973년 1월호, 104-110.
- ---- [1973b] "한국말의 조상." 『월간중앙』 1973년 3월호, 중앙일보사, 230-236.
- -----[1973c] "한국어와 일본어의 어휘비교에 대한 재검토,"『어학연구』제9권 제2호, 서울대학교 어학연구소, 1-19.
- ----- [1991] 『국어 어휘사 연구』, 동아출판사.
- ----- [1998] 『신정판 국어사개설』, 태학사.
- 이시카와 료코 (石川遼子) [2006] "가나자와 쇼자부로 땅과 사람 그리고 언어는 하나다," 다테노 아키라 편저,『그때 그 일본인들, 한길사』(오정환, 이정환 옮김), 161-167.
- ---- [2012] "가나자와 쇼자부로와 조선어," 고영진 김병문 조태린 편, 『식민지 시

기 전후의 언어 문제』, 소명출판, 91-119.

이현희 (李賢熙) [1992] "북한의 국어사 및 국어학사 연구", 『어학연구』 제28권 제3호, 서울대학교 어학연구소, 657-685,

【日本語】

石川遼子 [2002] 「金沢庄三郎―同祖論の飽くなき追究」 舘野晳編著 [2002] 『韓国・朝 鮮と向き合った36人の日本人』明石書店.

金澤庄三郎 [1910] 『日韓両国語同系論』, 三省堂書店.

田中克彦「2003」『言語の思想』、岩波書店、

河野六郎 [1945] 『朝鮮語方言學試巧』, 東都書籍株式会社京城支店.

-----[1945/1979]「朝鮮語方言學試巧」,『河野六郎著作集1』,平凡社.(韓国語版: 이진호 역 (2012), 한국어 방언학 시론, 전남대학교 출판부).

-------- [1971] 「中国語·朝鮮語」、服部四郎編 (1971)、『言語の系統と歴史』、岩波 書店, 303-322頁.

6 旧ソ連言語学と金壽卿

チョ ウィ ソン 養成

はじめに

本稿の目的は、朝鮮民主主義人民共和国(以下「共和国」とする)の朝鮮 語学において、旧ソ連言語学のいかなる影響があったのかについて、とり わけ政治・思想的な側面と文法論的な側面に関して考察することである。

朝鮮解放後の38度線以北地域(以下「以北」とする)では、南北分断が進む中で38度線以南と別個の形で朝鮮語研究が進められていく。ソ連占領を受けて以北ではソ連言語学が流入し、これに少なからぬ影響を受けた朝鮮語研究が行われた。本稿の大きな流れとしては、マール主義と呼ばれるソ連言語学の風潮とそれを受容する以北の言語学界の様子を観察し、金壽卿がそれにどう関わったのかを見る。

次に、文法論における金壽卿の役割について、1949年刊行の『朝鮮語文法』(以下『49年文法』とする)、および1960年刊行の『朝鮮語文法1』(以下『60年文法』とする)を中心に考察する。文法論に関して具体的には、二大部門である形態論と統辞論について、それぞれ1つの問題に焦点を当てて考察する。形態論に関しては助詞の扱いについて見る。周知のとおりロシア語

^{1 『}朝鮮語文法1』は音論・形態論が収録されており、その3年後の1963年に統辞論を扱った 『朝鮮語文法2』が刊行された。ただし、金壽卿は『朝鮮語文法1』にのみ関与し、『朝鮮 語文法2』には関与していないと見られるので [金栄晃,権スンモ 1996:368,407]、本 稿では『朝鮮語文法2』については直接的には分析の対象としない。

は屈折語であるため、膠着語に属する朝鮮語にあるような助詞というもの がない。ソ連言語学で直接的に扱われることのない助詞について、以北で どのように扱われたかは興味深いものがある。統辞論については単語結合 の扱いを考察する。単語結合という文法単位はロシア言語学で独自に設定 された単位であり、一般に西欧の言語学ではあまり扱われない。このよう になじみのない文法単位を以北でどのように受け入れ、それを朝鮮語に適 用したかを本稿で概観する。

1. 朝鮮解放直後の朝鮮語研究と金壽卿

1-1. ソ連言語学とマール主義

第2次世界大戦以前のソ連言語学界では N. Ja. マール (H. Sl. Mapp, 1864-1934)の理論すなわちマール主義が「マルクス主義言語学」として、絶対 的な地位にあった。彼はヤフェト理論という言語の一元発生説を唱え、ま たマルクス主義を標榜してからは、言語は上部構造であり、階級的なもの であると主張した。ヤフェト理論は、あらゆる言語のあらゆる単語は「sal, ber, jon, rosh」という4つの要素から発生したという説であり、比較歴史言 語学を「ブルジョア言語学」であるとして攻撃した。

マール主義は彼の死後もソ連言語学界に強い影響を及ぼしていたが、 1950年にスターリンが新聞『プラウダ』紙上で発表した論文(後に『マルク ス主義と言語学の諸問題』としてまとめられた)により公式に批判・否定され、 ソ連言語学はようやく正常な状態にもどることとなった。解放直後に以北 にもたらされたソ連言語学は、そのようなマール主義に染まったものであっ to

1-2. 朝鮮解放直後の以北の言語学界

植民地時代の朝鮮では、周時経学派の学者が中心となって1931年に結成

した朝鮮語学会が、朝鮮人による民間の朝鮮語研究団体として大きな役割を担った²。朝鮮語学会は解放後も38度線以南の地域において、引き続き朝鮮語研究団体、ハングル普及団体として中心的な役割を担っていった。

一方、以北では1947年2月5日に北朝鮮人民委員会の175号決定により朝鮮語文研究会が組織された。この組織が以北において言語政策および朝鮮語研究の中心的役割を担っていった。朝鮮語文研究会は、言語政策の面で1948年に朝鮮語新綴字の制定、1949年に朝鮮語研究雑誌『朝鮮語研究』の発行³、そして同じく1949年に規範文法『49年文法』を発表したことが大きな成果といえる。

1-3. 朝鮮語文研究会における金壽卿の活動と旧ソ連言語学

解放直後の時期、金壽卿の活動は朝鮮語文研究会から発行された書籍を通して知ることができる。朝鮮語文研究会が1949年から50年にかけて発行した雑誌『朝鮮語研究』において、金壽卿はソ連の言語学論文の翻訳をたびたび行なっている⁴。共和国の言語学界がソ連の言語学を受容することは衛星国としての公的な方針であり⁵、金壽卿の活動もその一環として見るべきであろう。上に見たように、この時期のソ連言語学界はマール主義の影響下にあったため、紹介された論文もほとんどがマール主義に関連づけられたものである⁶。

² 朝鮮語学会は1933年に朝鮮語綴字法統一案、1936年に査定した朝鮮語標準語集を作った。 この正書法、標準語集は、その後の南北分断後もそれぞれに引き継がれていった。

³ 菅野裕臣 [1997] によれば、1949年から1952年まで刊行されたという。

^{4 1949}年4月号から1950年6月号までの11冊で、14編の旧ソ連の論文が翻訳紹介されているが、 そのうち6編を金壽卿が担当している。

⁵ 申亀鉱 [1949:35] では共和国の言語学者の当面の課題として「先進的ソビエト言語学の 経験と理論を我々の事業に活かす仕事をしなければならない」としている。

⁶ 唯一、1950年6月号に紹介されたチェモダーノフの「イ・ヴェ・スターリンとソビエト言語学」だけはマールへの言及がないが、これはこの論文がスターリン称揚の論文であるからであろう。

マール主義が共和国に紹介される一方で、朝鮮語研究それ自体は至って 常識的な言語学に基づいた研究活動であると言ってよい。例えば、『朝鮮 語研究』1949年5月号に掲載された金壽卿の論文「竜飛御天歌に見える挿 入字母の本質 [を見ると、ソ連の文献のみならず日本語文献(小倉進平)、 西欧文献(ラムステット、ソシュール)、朝鮮語文献(崔鉉培、梁柱東)などを渉 猟しており、マールのヤフェト理論に見られるような突飛な論理展開は見 られない。マール主義的にみれば「ブルジョア言語学的手法」と言われか ねない論文が、研究雑誌に掲載されることが許される当時の共和国の状況 を見る限り、マール主義に染まった旧ソ連言語学が共和国内に浸透してい たとは言い難い。

そもそも、解放直後の時期にあって、対人民政策の面では民族文字の普 及が急を要する課題であったであろうし、朝鮮語学界においては規範文法 の作成、辞典編纂という基礎的な事業が急務であった[編集部1949:135; 申亀鉉1949:36]。このようにみると、この時期の共和国の言語学界は、マー ル主義に染まったソ連の理論が盛んに紹介されはしたが、それらは紹介の 段階にとどまっており、マール主義は共和国に根ざすことがなかったと推 測される。マール主義は1950年にソ連本国で否定される。共和国も同時期 に朝鮮戦争が勃発したため、マール主義はおのずから捨てられていくこと になる。このような状況下にあって、金壽卿はソ連言語学の紹介者である と同時に、旧来の伝統的な言語学の研究者という2つの側面をもって研究 活動をしていたといえる。

1-4. 『49年文法』の編纂と金壽卿の役割

『49年文法』【図1】は朝鮮戦争以前における総合的な文法研究の1つの集

⁷ この論文は1947年にソウルの震檀学報に掲載された論文「竜飛御天歌挿入音考」が下地と なっている。



図1 朝鮮語文研究会『朝鮮語文法』(1949年)

大成である。この文法書は1948年10月組織された朝鮮語文研究会の文法編修分科委員会⁸が中心となり、草稿は金日成総合大学朝鮮語学講座を中心として作成され[朝鮮語文研究會1949]、当時同講座の講座長をしていた金壽卿が主導的な役割を果たしていた[金栄晃,権スンモ1996:403]。

『49年文法』は音論、形態論、統辞論の3つの分野から成り立っている。 文法書に形態論、統辞論の他に音論を含める構成は、旧ソ連の文法書に見られる形式と同様である。『49年文法』も旧ソ連のそのような編纂手法を取り入れたものといえよう。内容的に見ても、音声学と音韻論を区分せずに音論として扱う点、造語論を形態論の中で扱う点、統辞論で単語結合を扱う点などは、当時のソ連言語学と軌を一にしている。

⁸ 李克魯、田蒙秀(委員長)、許翼、明月峰、金竜成、申亀鉉、洪起文、金炳済、朴宗軾、 朴俊泳、朴相埈、金壽卿の12名から成る。

⁹ その後、旧ソ連では音声学と音韻論を別個に記述したり、形態論から造語論を独立して扱ったりしている。後の時代の共和国の文法書においても同様の傾向が見られる。

金壽卿が具体的に『49年文法』のどの部分を担当して執筆したかは明ら かでない。これは、のちに見る『60年文法』についても同様である。した がって、本稿では『49年文法』の全体的な特徴を旧ソ連のものと比べてみ ることにする。

(1) 『49年文法』における助詞の扱い

形態論においてソ連言語学の理論を導入する際に、最も問題となるのは 朝鮮語のいわゆる助詞の扱いである。周知のとおりロシア語は屈折語に属 し、名詞の語形は語幹と語尾から成ると分析される。語幹、語尾はともに 非自立的であり、両者はいずれも単独では現れることがない。それに対し、 朝鮮語は膠着語であり、名詞は語彙的意味を担う自立的な部分(名詞の本体) に、文法的意味を担う非自立的な要素(いわゆる助詞)が後接することによっ て形づくられる。

解放以前の研究において、朝鮮語の助詞はまた「E to | あるいは「EM tossi と呼ばれ、文法的な関係を表す非自立的な品詞として扱われてきた。 ここで重要なことは、助詞を品詞と見なしている点である。助詞を一品詞 と見なすということは、すなわち助詞を単語と認定することを意味する。

さて、『49年文法』においても助詞という概念を認めてはいるが、従来 の文法論と異なる点は、それまで同義の用語だった「助詞」と「豆」をそ れぞれ別個のものとして扱っている点である。『49年文法』において「助 詞」は従来どおり一品詞すなわち単語であるが、「토」は単語ではなく単 語を形づくる形態素であるとした。そして、「助詞」に所属せしめている ものは、補助詞™と称されてきたもののみであり、格助詞と呼ばれてきた ものは「助詞」ではなく「토」であるとした。

「助詞」と「토」のこうした区分の根拠としては、ソ連言語学の文法論

¹⁰日本語文法の副助詞に相当する助詞の一群。

の影響が考えられる。ロシア語の名詞は語形変化を起こす。名詞の語形変化は語幹に後接する語尾がその役割を担い、格はこの語尾によって表される。ロシア語において語尾はあくまでも名詞の形態形成の形態素であり、それ自体は単語ではない。朝鮮語の格を表示する要素を「助詞」という単語と見ずに「토」という形態形成の形態素と見たのは、ロシア語文法における名詞の格の捉え方を参考にしたものと考えられる。

一方の「助詞」については、ロシア語文法における「小詞」の概念と関連づけることが可能である。旧ソ連言語学においては一時期、単語を分類するにあたって「品詞」(части речи, рагts of speech)と「小品詞」(частицы речи, рагticles of speech)を区分し¹¹、小品詞の1つとして「小詞」(частица, рагticle)という単語の一群が設定された。小詞とは「完全に自立した現実的意味あるいは物質的意味を通常持たないが、他の単語、単語グループ、文の意味において主に補足的なニュアンスを加えたり、あるいはまたさまざまな種類の文法的(つまり、論理的、表現的)関係を表すのに役立つような単語のクラス」であるとしている「ヴィノグラードフ1972:520」。『49年文法』では「助詞」を「自立的になりえずに、前にある語の意味をいろいろに助け、その意味に各種のニュアンスを付与する品詞である」としており、この定義が旧ソ連言語学における「小詞」の定義と相通ずるものがある。

(2)『49年文法』における単語結合の扱い

単語結合とはロシアの言語学で伝統的に扱われる文法的な単位である。 第2次世界大戦以前の研究においては、単語結合は例えば「ある単語が別 の単語に従属することによって表される文法的統一体を形づくる単語の連 結」[シャフマトフ1941:274] などと定義された。西欧の統辞論では文の構

[&]quot;ヴィノグラードフ [1972] では名詞、形容詞、数詞、代名詞、副詞、状態範疇(述語)、動詞といった自立的な単語を「品詞」に、小詞、前置詞、接続詞といった非自立的な単語を「小品詞」に分類している。

造や成分などを扱うことが多いが、旧ソ連言語学において統辞論は文に関 する理論と単語結合に関する理論という2つの柱から成っているほど、単 語結合という単位は旧ソ連言語学において重要な位置を占めている。

『49年文法』では「語詞結合」という用語で単語結合が扱われて、「文 法的に形態を兼ね備えた有意味的結合 | (306ページ) と定義されている。「語 詞結合」は「従属」と「並列」の2つの下位部類を持つが、これはソ連言 語学における自立的単語結合と非自立的単語結合の区分に一致する。

「語詞結合」は統辞論第1章の「文の一般的知識」で「文の構成」とと もに1節を割いて説明がなされていることから、『49年文法』においても重 要な位置づけにあることがうかがわれる。しかしながら、総101ページあ る統辞論において「語詞結合」に割かれているページはわずか7ページで あり、単語結合について詳細な分析は行われていない。それまでの文法研 究が主に形態論を中心としてなされてきたこと、単語結合という概念にこ れまで接する機会が少なかったことなどを総合して判断すると、朝鮮解放 直後の短期間で単語結合論を十分に吸収することが困難だったのではない かと推測される。

2. 朝鮮戦争後の朝鮮語研究と金壽卿

2-1. 旧ソ連におけるマール主義の否定

今日『マルクス主義と言語学の諸問題』として知られているスターリン によるマール批判は、ソ連共産党機関紙『プラウダ』で行われた言語学者 の紙上討論2を受けて、1950年6月20日付で掲載された「言語学における マルクス主義について」、およびそれに続く同志への回答から成る一連の

¹²スターリンの論文に先立ち、1950年5月9日から6月13日にかけて『プラウダ』紙上に週1回 の連載で合計11編の言語学論文が発表された「田中克彦 2000:124-127]。

文章である。この中で、マール主義は欠陥だらけであること、マルクス主義的言語学ではないことが指摘され、紙上討論によりソビエト言語学界のアラクチェエフ的支配¹³が粉砕されたとした。この過程でマールに近しい研究者であったメシチャニノフも失脚するが、「やがてマールを評価してはいたが正しい批判も怠らなかったとして復活した」「亀井孝,河野六郎,千野栄-1996:1512]といい、「ソビエトにおける言語学批判も(中略)マルにとどめ、まだ生きているメシチャニノフにまでは及ばないように、しかも、その業績を否認しないようにとの配慮があらわれているように感じられる」
[田中克彦 2000:159]という。

2-2. 金枓奉の失脚と金壽卿への影響

ソ連におけるマール批判の開始とほぼ同時期に始まった朝鮮戦争により、研究活動が一時期停滞を余儀なくされたが、休戦後研究活動は再開され、朝鮮語綴字法の制定(1954年)、言語・文学の研究雑誌『朝鮮語文』の創刊(1956年)と、学界は活発な活動を見せた。このころにはすでにマール主義を否定したソ連言語学が共和国にもたらされていたと見られる。菅野裕臣[1997]によれば、朝鮮戦争中の1952年にヴィノグラードフらによる論文集「言語学に関するイ・ヴェ・スターリンの労作発表2周年記念論文集」が金壽卿によって翻訳、紹介され、金日成総合大学言語学講座からは1954年に「イ・ヴェ・スターリンの労作に照らし合わせてみた言語学の諸問題」が出されたという。

金壽卿自身もスターリンの『マルクス主義と言語学の諸問題』を引用しつつ、朝鮮語の語彙論を論じている[金壽卿1953]。しかし、ここでは言語が上部構造か否か、言語は階級的か否かというマルクス主義的な問題には

¹³アラクチェエフとは帝政ロシアのアレクサンドル1世の寵臣で、専制的なボス支配を行った。

直接言及せず、スターリンが正常に戻した伝統的な言語学にのっとって語 彙を論じている。

朝鮮戦争後の時期、共和国の言語学界ではきわめて重大な事件が起きて いる。共和国言語学界の主導的立場にあった金科奉の失脚である。『朝鮮 語文』紙上では金枓奉を批判する論文が掲載され [著者不明 1958]、それに 続き6字母などの金科奉の業績はことごとく否定された【図2】。

金科奉批判のトーンはスターリンによるマール批判のトーンに類似する。 すなわち、金枓奉が朝鮮言語学界においてアラクチェエフ的支配を敷いた というトーンであり、それに加えて朝鮮語学に固有な問題として金枓奉が 周時経を歪曲したことが言及された。また、この時期はスターリン批判が 行われた後であったため、金枓奉に対する個人崇拝も批判された。

このとき、金壽卿は金枓奉の追従者という名目で、上述の『朝鮮語文』 上の論文で公式に批判を受けている。とりわけ標的となったのが、金壽卿

조선 어문

1958. № 3

우리 당의 과학 정책에 보다 츳실한 조선 언어학을 위하여

조선 인명의 력사, 조선 로통 운동의 력사에서 거대한 의의를 가지는 력사적인 조선 로통당 제 1차 대표자회에서 한결같이 시인한 바와 같이 김 일성 동지를 수반으로 하는 견실한 지도적 핵심을 가진 조선 로동당의 령도의 현명성은 오늘 조선 인민의 실생활의 모든 부문에서 무궁무 진한 생활력을 보여 주고 있다.

만일 조선 로통당의 현명한 령도가 없었더라면 해방후 공화국 북반부에서 거대한 력사적 외의를 가지는 제반 민주 개혁을 실시함으로써 조국 통일의 물질적 담보로 되는 민주 기지를 축 성할 수 없었을 것이며, 미제와 리 승만 도망들의 침략을 반대하는 위대한 조국 해방 전쟁에서 청사에 길이 빛날 력사적인 승리를 쟁취할 수 없었을 것이다.

図2 金科奉批判論文(1958)

が雑誌『朝鮮語研究』1949年5月号に発表した論文「朝鮮語学者としての 金料奉先生」であった。

京城帝大出身で、解放後に朝鮮共産党に入党、朝鮮語学会に入会した金壽卿と、周時経に師事し、延安派共産主義者として解放前から活動していた金枓奉とでは、その経歴がまったく異なり師弟関係にもない。果たして金壽卿がどの程度金枓奉に「追従」していたのかは定かでないが、金枓奉の失脚が政治的な動機によるものであって言語学とは無関係であることを考えると、一種のスケープゴートとされたのかもしれない。しかしながら、批判論文で俎上にのせられた金壽卿に対しては「동早 dongmu」(…君)の称号が付けられており、金枓奉の「反党反革命宗派分子」に対して金壽卿は「追従者」と受動的な立場に位置付けられていることから、金壽卿に対する批判はあらかじめ「逃げ道」の用意されていたもののようにも見える。マール批判の過程で同調者のメシチャニノフが失脚するも、その能力が認められてのちに復権したことを思うと、金壽卿もまた言語学者としての有能さを周囲から十分に理解されており、政治的な粛清劇とは一線を画して、完全な失脚をまぬかれたのかもしれない。

2-3. 『60年文法』と金壽卿

1960年と1963年に刊行された『60年文法』は、共和国が朝鮮解放・朝鮮戦争の混乱期を経て、国家的に安定期に入った60年代初めに、科学院から出された最初の大がかりな規範文法書という点で、非常に重要な書籍である【図3】。1960年に刊行された第1巻(音論・形態論)は金壽卿、李瑾栄が担当執筆し[金栄晃,権スンモ編1996:369]、1963年に刊行された第2巻(統辞論)は鄭 烈 模、宋瑞音が執筆した「金栄晃,権スンモ編1996:407]。

¹⁴ 菅野裕臣によるウェブページ「菅野裕臣の Aŭtobiografio」(http://www.han-lab.gr.jp/-kanno/cgi-bin/hr.cgi?autobio/autobia-2.html) は、「本来なら金料奉と共に処刑されかねなかったが、多くの弟子たちの嘆願によりそれは免れたという」と伝えている。



図3 科学院言語文学研究所『朝鮮語文法 1』(1960年)

旧ソ連ではマール主義が公的に否定されたのちに、反マール派であった V. V. ヴィノグラードフ (В. В. Виноградов, 1895-1969) が中心となって1952年と 1954年にアカデミー版『ロシア語文法』(以下『ソ連60年文法』とする)が刊 行された。ソ連言語学がマール主義のくびきから解放されて初めて編纂さ れた規範文法として、この『ソ連60年文法』は重要な意味を持つといえる。 そして、この文法書が共和国の『60年文法』に大きな影響を与えたと推測 される。

とりわけ会壽卿が担当したとされる第1巻は『ソ連60年文法』の影響力 が強い。文書の形式として「§」記号を用いてセクションを区切る書式、 「序論」と称して形態論の諸問題を広く検討する手法、音論において国際 音声記号を用いず固有文字(補助記号付きハングル)で発音を表記する手法15 などは、『ソ連60年文法』の手法をそのまま踏襲している。

^{15『}ソ連60年文法』では補助記号付きのキリル文字によってロシア語の発音が示されている。

(1)『60年文法』における助詞の扱い

『49年文法』から『60年文法』への大きな変更点は、すべての「助詞」を認めなくなった点である。『49年文法』では補助詞のみを助詞としたが、『60年文法』では補助詞を含めすべての助詞類を、単語を構成する文法形態素である「토」とした。そして、同時に非自立的な品詞としての「助詞」は認めなくなった16。

その結果、名詞の文法的形態は格、用言形(指定詞の付いた形式)、補助詞の付いた形の3種を認めることになるのだが、格が文法範疇であるのに対し、用言形と補助詞の付いた形が文法範疇でなくて何者であるのか、あいまいなまま処理された¹⁷。しかしながら、文法形態素として語根に膠着する要素をことごとく「토」とするこのような見解は『60年文法』以降の共和国のあらゆる文法論に原則的に引き継がれていくほど、重要な見解となる。

(2)『60年文法』における単語結合の扱い

『60年文法』第2巻(統辞論編)は金壽卿が関与していないので、簡単に見ることにする。『60年文法』第2巻ではソ連言語学に見られるような「単語結合」という文法的統一体をそのまま認めず、「諸単語の文法的連結」というより広い概念を設定し、その下位範疇として「結合」、「接続」の2つを設定した。このうち「結合」がソ連言語学の「単語結合」に相当するものである。『60年文法』第2巻でこのような広い概念を導入した理由は、ソ連言語学の「単語結合」だけでは処理しきれない問題があったためであると見られる18。

¹⁶ このことについて議論の余地があることは、形態論の「序論」に簡単に記述がなされている (129ページ)。

¹⁷ その後、金鏞亀 [1989] では補助詞によって形づくられるものを「関連範疇」と呼び、格、数とともに体言の文法範疇と見なしている。

¹⁸ これについての詳細は趙義成「2001〕参照。

ところが、金壽卿が関与した『60年文法』第1巻(音論・形態論編)では、 詳細な検討がなされているわけではないものの、ソ連言語学と同様の単語 結合の概念を認めている19。『60年文法』第1巻発行から第2巻発行まで3年 の間が空いており、また執筆者も異なる。単語結合の扱いについておそら く内部で盛んな議論があったものと推測されるが、金壽卿はよりソ連言語 学に忠実な単語結合を想定していたものと思われる。

3. 主体思想擡頭とソ連言語学からの乖離

主体思想擡頭以降について、ごくごく簡略に記述する。

1960年代ごろより擡頭した主体思想は、共和国の言語学界にも影を落と すことになる²⁰。とりわけ朝鮮語史においては、古代朝鮮における言語の 単一性を主張する際に、金日成の教示が用いられた¹。旧ソ連ではマール が歴史言語学において荒唐無稽とも言える論を展開し、それがスターリン によって否定されたが、共和国ではマールの亡霊が主体思想とともによみ がえって朝鮮語史に憑りついたかのようである。金壽卿がこれらの論考に かかわった形跡は見られない。それは、彼が文法論、なかんずく形態論を 主として研究していたためと思われる。

文法論においては、ソ連言語学からの脱却が進んでいくように見える。

^{19『}ソ連60年文法』第2巻(統辞論編)において単語結合は「2つ以上の自立語の連結により 構成され、単一ではあるが分節された概念や表象を表すのに奉仕する文法的統一体」(『ソ 連60年文法』第2巻第1分冊6ページ)と定義されている。これに対して共和国の『60年文法』 第1巻では単語結合を「文中において2つ以上の実質的単語から成る文法的統一体」(『60年 文法』第1巻4ページ)と定義している。

²⁰ 朝鮮語の醇化運動などにも主体思想の影響は見られるが、本稿は旧ソ連言語学との関連を 見るものであるので、ここでは言及しない。

^{21「}もともとわが民族は数千年の長い歴史を通じて1つの文化と1つの言語をもって生きてき た単一民族です」(金日成『外国記者たちが提起した質問に対する答え』、朴正文[1984] 『朝鮮語史研究論文集』から再引用)など。

形態論において、それまで品詞別に観察してきた「互」を、品詞にかかわらず同列に扱ったり、統辞論において単語結合を扱わずに文成分のみを論じるなどは、それまでの文法研究とはかなり様相が異なる。

4. おわりに

以上のような考察から、金壽卿が解放直後に旧ソ連言語学を積極的に紹介し、また朝鮮戦争後の共和国言語学界において、旧ソ連言語学の成果を取り入れた研究を行っていたことが分かった。旧ソ連言語学におけるマール主義は実質的に共和国に根付くことはなく、金壽卿自身もマール主義に染まることはなかったと見られる。結局のところ、金壽卿は旧ソ連言語学の「健全な」部分を朝鮮語学に取り込んでいったということができる。したがって、60年代までの共和国の言語学界が学問的に健全に活動を行うことができたのは、金壽卿をはじめとする研究者の真摯な学問的姿勢に拠るところが大きいといえよう。

参考文献

(1) 朝鮮語文献

- 菅野裕臣 (간노 히로오미) [1997] "북한 문법학의 계보와 소련 언어학과의 관계 (1945 ~1990)",『東方學志』第98集, 서울:延世大學校 國學研究院.〔菅野裕臣 [1997] 「北朝鮮文法学の系譜とソ連言語学との関係」,『東方学志』第98集〕
- 고영근 편 [2000] 『북한 및 재외교민의 철자법 집성』, 북한 및 재외교민의 어문자료총 서(1), 서울:역락출판사. [高永根編 [2000] 『北朝鮮および在外僑民の綴字法集成』 (1)]
- 편 [2001a] 『조선어 연구 1』, 북한 및 재외교민의 어문자료총서 (2), 서울 : 역 락출판사. [高永根編 [2001a] 『朝鮮語研究1』]
- 편 [2001b] 『조선어 연구 2』, 북한 및 재외교민의 어문자료총서 (3), 서울 : 역 락출판사. [高永根編 [2001b] 『朝鮮語研究2』]
- 편 [2001c] 『조선어 연구 3』, 북한 및 재외교민의 어문자료총서 (4), 서울 : 역 락출판사. [高永根編 [2001c] 『朝鮮語研究3』]

- 고영진 [2002] "북한 문법의 품사론의 변천 —'품사'에서 '품사론' 으로—", 『애산 학보』 27. 서울: 애산 학회, [高栄珍 [2002] 「北朝鮮文法の品詞論の変遷― 「品詞」から「品 詞論 | へ一 |
- 金枓奉「1934」『김더 조선말본』〔詳解朝鮮語文法〕, 京城:滙東書館,
- 김수경 [1953] "언어학의 문제들에 관한 이. 웨. 쓰딸린의 로작에 비추어 본 조선어의 기 본 어휘와 어휘 구성에 관하여", 『조선 민주주의 인민 공화국 과학원 학보』1953-2, 조선 민주주의 인민 공화국 과학원. 〔金壽卿「1953]「言語学の諸問題に関するイ・ ヴェ・スターリンの著作に照らし合わせてみた朝鮮語の基本語彙と語彙構成について」 김영황, 권승모 편 [1996] 『주체의 조선어 연구 50년사』, 평양 : 김일성종합대학 조선
- 어문학부. [金栄晃,権スンモ編 [1996] 『主体の朝鮮語研究50年史』] 김용구 [1989] 『조선어문법』, 평양: 사회과학출판사. [金鏞亀 [1989] 『朝鮮語文法』] 김일성종합대학출판사 [1972] 『문화어문법규범』. [金日成総合大学出版社 [1972] 『文
- 신구현 [1949] "조선 어문의 통일과 발전 사업에 있어서 우리들 조선 어문 학자들의 당 면과업". 『조선어 연구』8、평양: 조선 어문 학회. [申亀鉉 [1949] 「朝鮮語文の統 一と発展事業における我々朝鮮語文学者らの当面の課題」,『朝鮮語研究』8〕
- 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 언어 문학 연구소 언어학 연구실 [1960] 『조선어 문 법 1』,東京:학우서방, 〔朝鮮民主主義人民共和国科学院言語文学研究所言語学研究 室「1960」『朝鮮語文法1』〕
- ----- [1963] 『조선어 문법 2』, 평양 : 과학원 출판사. [朝鮮民主主義人民共和国科学 院言語文学研究所言語学研究室「1963」『朝鮮語文法2』〕
- 朝鮮 語文 研究會「1949」『朝鮮語 文法』、平壌:文化出版社、
- 조선 어문 연구회 [1950] 『조선어 신철자법』, 〔朝鮮語文研究会 [1950] 『朝鮮語新綴字 法』), 고영근 편 [2000] 所収
- 趙義成「2001」"북한 단어결합론과 옛 소련 단어결합론 ―60년 문법을 중심으로―"〔北 朝鮮単語結合論と旧ソ連単語結合論―60年文法を中心に―〕,『國語學』38,서울:國 語學會.
- 周時経「1911」『朝鮮語文法』、京城:新舊書林、

化語文法規範』

- 崔鉉培[1930] "朝鮮語의 品詞分類論", 『朝鮮語文研究』, 延禧專門學校文科研究集第1輯, 京城:延禧專門學校出版部.
- ----「1934」『중등 조선 말본』〔中等朝鮮語文法〕,京城:東光堂書店.
- 편집부 [1949] "조선 어문 연구회의 사업전망". 『조선어 연구』1. 평양 : 조선 어문 연 マ회. [編集部 [1949] 「朝鮮語文研究会の事業展望」, 『朝鮮語研究』1]
- Koncevich [1971] "蘇聯의 韓國語學" [ソ連の韓国語学], 『亞細亞研究』 XIV, No.2, 서울: 高麗大學校 亞細亞問題研究所. (菅野裕臣による Концевич, Л. Р. [1967] Корейский

язык, 《Советское языкознание за 50 лет》, Москва の朝鮮語訳と訳注)

(著者不明) [1958] "우리 당의 과학 정책에 보다 충실한 조선 언어학을 위하여", 『조선 어문』1958-3, 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 출판사. [(著者不明) [1958] 「わが党の科学政策により忠実な朝鮮言語学のために」, 『朝鮮語文』1958-3]

(2) ロシア語文献

- Академия наук СССР [1952] 《Грамматика русского языка》, Том I, Издательство академия наук СССР, Москва. [ソ連科学アカデミー [1952] 『ロシア語文法』第1巻, ソ連科学アカデミー出版社, モスクワ]
- —— [1954] 《Грамматика русского языка》, Том II, Издательство академия наук СССР, Москва. [ソ連科学アカデミー [1954] 『ロシア語文法』第2巻, ソ連科学アカデミー 出版社, モスクワ]
- Виногралов, В. В. [1972] 《Русский язык (грамматическое учение о слове)》, Издательство 《Высшая школа》, Москва. [ヴィノグラードフ [1972] 『ロシア語(単語に関する文法学説)』, 「高等学校」出版社, モスクワ〕
- Холодович, А. А. [1954] 《Очерк грамматики корейского языка》, Издательство литературы на иностранных языках, Москва. [ホロドビッチ [1954] 『朝鮮語文法概説』, 外国語文献出版社, モスクワ)]
- Шахматов, А. А. [1941] 《Синтаксис русского языка》, Государственное учевно-педагогическое издательство наркомпроца РСФСР, Ленинград. シャフマトフ [1941] 『ロシア語統辞論』 ロシアソビエト連邦社会主義共和国教育人民委員部国立学習・教育出版社, レニングラード〕

(3) 日本語文献

亀井孝,河野六郎,千野栄一 [1996] 『言語学大辞典』第6巻術語編,東京:三省堂. 桑野隆 [1979] 『ソ連言語理論小史』,東京:三一書房.

高峻石「1988」『北朝鮮現代史入門』,東京:批評社,

田中克彦 [2000] 『「スターリン言語学」精読』、岩波現代文庫、東京:岩波書店、

村山七郎 [1951] 「マルのヤフェット理論とスターリン批判後のソ連言語學界」,『民族 學研究』16-2, 東京:日本民族学協会.

7 金壽卿と中国の朝鮮語学

を 養秀

金壽卿先生は、1950年代から早くも中国の朝鮮民族社会に広く知られ、中国の朝鮮語学の発展に非常に貢献された傑出した学者である。先生は1956年11月25日、北京を経て延辺大学に来られ、「周時經**1先生の学説」「朝鮮の文字改革」および「朝鮮語の優秀性」などの特講をされた'。それから30年余りが過ぎた1988年8月、中国の北京大学朝鮮文化研究所と日本の大阪経済法科大学アジア研究所が共同で北京にて開催した、第2回朝鮮学国際学術討論会議に参加された。筆者はこの会議で、金壽卿先生に初めてお目にかかった。その後の1991年、朝鮮の平壌にある人民大学習堂で金壽卿先生にお会いし、教えを受けた。

今日、遅まきながらこのような会議を催し、金壽卿先生の輝かしい研究 業績を称える場を設けることができて幸いに思う。あわせて、今回の会議 を契機に、先生の朝鮮語研究における業績と理論がより深く研究されることを願う。これは、朝鮮民族の言語研究の歴史において必ず果たされるべ

^{*1 1876-1914。}大韓帝国期の言語学者で、近代朝鮮語学の先駆。

¹ 崔允平教授は1956年冬、金壽卿先生が冬であるにもかかわらず外套を着ずに延辺に来られたと回顧した。

金壽卿先生の延辺大学訪問時期については、一部の記録において違いがある。筆者が『中国における朝鮮語の発展と研究』[崔允甲 1992] という本で整理した「中国朝鮮語文大事記」では1955年11月25日となっており、玄龍順の『民族の魂を守って:延辺大学朝文学部が歩んだ45星霜』[包晷全 1997] に収録された大事記では、1953年9月とされている。これらはいずれも誤って伝えられているものであることを明らかにしておく。

1. 中朝文化交流の概況

金壽卿先生の朝鮮語文法理論が中国の朝鮮民族社会と朝鮮語研究に及ぼ した影響を知るには、まず中朝両国間の文化交流がどのようなものであっ たかを振り返ってみる必要がある。

日本帝国主義による植民地統治期、多くの韓人が中国に居住した。彼らの大多数が抗日闘士と貧しい農民たちであった。抗日闘士の隊伍には政治家、軍人、知識人、芸術家など、各界各層の人士がすべて網羅されていた。中国に居住する韓人は、20世紀初めから学校を建て、反日民族文化教育をおこなった。そうしたなか1908年に金躍淵が建てた明東学校は、反日民族教育の揺籃であった。そのため1920年に日本の侵略者たちが延辺にやってきて野蛮な大虐殺をおこなったとき、明東学校を燃やしてしまった。しかし朝鮮民族は屈することなく、1923年に新校舎をつくり、民族的人材を養成した。その時期故国の優秀な知識人が中国に来て、朝鮮民族文化の教育事業に貢献した。明東学校に来て教鞭をとられた方々のなかには歴史学者の黄義敦、法学者の金撤、言語学者の張志暎などがおり、この学校では有名な詩人・尹東柱、芸術家・羅雲奎をはじめとする優秀な人材が多く輩出された。

中国の韓人学校は、東北地区の吉林省、黒竜江省、遼寧省の三省にまたがって広く分布していた。このような韓人学校では非常に多くの抗日闘士を培養されただけではなく、解放後の韓国、朝鮮、中国の三国で活躍した出色の政治家、軍人、学者、芸術家たちも輩出された。この時期の韓人学校の民族語教育の内容、規範などは、故国のものをそのまま使っていたので、故国と何らの違いもなかった。

8.15解放以降、中国に居住していた韓人の3分の1が故国に戻り、3分の2

が中国に残って中国公民となった(1949年現在、中国の朝鮮民族の人口は120万 人であった)。故国に戻った韓人のなかには才能ある知識人も含まれており、 中国での朝鮮民族教育が影響を受けながらも持続的な発展がもたらされた。 1949年には小学校1500箇所に学生18万人、中学校70箇所に学生16,700人で あった。1949年4月に延辺大学が設立され、第1期生となる451が入学した。 こうして中国朝鮮民族は、中国で自分たちの民族大学までもつ唯一の少数 民族となった。中国の朝鮮民族文化の発展のため1945年に朝鮮語版の新聞 『韓民日報』(その年11月に『延辺民報』に、翌年5月に『吉東日報』に、9月に『人 民日報』に、1948年4月に『延辺日報』に改称される)が創刊され、1947年3月に 延辺教育出版社が成立し、7月に東北朝鮮人民書店が延吉に建てられた。 さらに1948年10月には文芸雑誌『延辺文化』が創刊され11月に放送局が成 立し、延辺が中国の朝鮮民族文化の中心地となった[高永一2002]。

ところが歴史的に故国に依ってきた中国朝鮮民族の文化教育は、8.15以 後朝鮮半島が南北に分断されると、中国と韓国の間の文化交流は断絶し、 中国と朝鮮の間でのみ文化交流がおこなわれるようになった。そのため解 放初期の中国朝鮮民族の文化教育は、朝鮮に依拠することになった。8.15 以後から1950年代後期までに朝鮮で出版された多くの書籍が中国で再版さ れた。そのうちの大部分は原本どおりに再版され、一部は修正して出版さ れた。特に中国の小中学校と大学の朝鮮語文法教育が朝鮮に依拠すること になった。

中国で出版された小中学校の朝鮮語教科書のタイトルの変遷の歴史が、 中国朝鮮民族の言語教育の歴史のありようを物語っている。解放前から 1952年までは「ハングル」、1953-1958年は「朝鮮語」、1959-1962年は「朝 鮮族語文*2」、1963年から現在までは「朝鮮語文」である。中国の小中学 校のウリマルの教科書が「ハングル」と呼ばれた時期は解放前から受けて

*2 語文は国語に同じ

きた半島の影響が継続していた時期であり、「朝鮮語」と呼ばれた時期は 朝鮮の影響を受けた時期である。中国で1957年から1959年までの間におこ なわれた反右派闘争と地方民族主義に対する闘争を契機に、小中学校のウ リマルの教科書に朝鮮の作品を入れられなくなり、中国で編纂された中国 語の教科書をウリマルに翻訳して使わせ、タイトルも「朝鮮族語文」と なった。そして1962年の反右派闘争の左傾的影響を是正し、「朝鮮語文」 に修正された。

この時期、大学の朝鮮語学科でも左傾的思想の影響を受けてはいたが、 教授と研究においては依然朝鮮の文法理論と研究成果を導入していた。また、延辺大学の朝鮮語学科の学生たちの参考資料はほぼ全部が朝鮮の資料 であり、大学が編纂した文法教科書も朝鮮で出た文法書を多く参照していた。

社会的に中国朝鮮語が直面した主要な問題は、規範化である。叙事規範は基本的に朝鮮のものに倣ったが、語彙規範は状況が異なっていた。中国語が不断に中国朝鮮語に影響を与え、新聞社、出版社、放送局などの文化単位においてこのような単語の翻訳をどのように統一すべきかという問題に直面した。特に1957年の反右派闘争以降、いわゆる「漢語大躍進」の左傾思想の影響で大量の中国語の単語を借用し、語彙の使用に混乱が生じた。このような問題を解決するため1962年に延辺言語文化研究会が設立され、翌年3月に「延辺朝鮮族自治州語文工作暫行条例(草案)」「朝鮮語名詞述語制定統一施行方案(草案)」「朝鮮語表記法方案(草案)」などが討論された。1963年6月には中国政府の総理・周恩来が、中国朝鮮語は朝鮮に従えという指示を出した。1964年2月、「朝鮮語名詞、述語規範方案(草案)」が作成された。この時期の朝鮮語規範も朝鮮に倣ったものだが、1965年5月延辺大学の語文界では朝鮮の社会科学院言語研究所が討論用に公布した「朝鮮語分かち書き(草案)」を再版し、学生たちに配って参照させた。

文化大革命の期間には、1969年に北京の毛沢東思想学習班が「朝鮮語分

かち書き(草案) を採択し、朝鮮の平壌に倣えという周恩来総理の指示に 反対した。その後、延辺朝鮮族自治州の毛主席著作翻訳出版辦公室の言語 研究組が1973年1月に「朝鮮語分かち書き(草案)」を執筆した。そして 1974年7月に「朝鮮語標準発音法(草案)」を、9月に「朝鮮語綴字法(草案)」 を出版した。

1977年5月に東北3省朝鮮語文事業協議小組が設立された。その年の8月、 第1次会議で「朝鮮語標準発音法」「朝鮮語正書法」「朝鮮語分かち書き」 「文章符号法」などの朝鮮語規範を採択し、これを1977年11月に延辺人民 出版社から出版した。これ以後、中国朝鮮語は独自の規範を使うこととなっ た。翌年の1978年からは、朝鮮語語彙規範が進んだが、文化革命期に新た に作られた漢字語を廃止し、既存の語彙を使用することを原則とした。 1978年12月5日に採択した「朝鮮語の名詞、述語の規範化原則」では、「朝 鮮語の名詞、述語は 平 壌語を基準にして学べという周総理の指示に従い、 言語の民族化と言語の大衆性、科学性の要求に合うよう規範することで、 祖国の社会主義革命と社会主義建設のために、祖国の4つの現代化のため に服務できるようにする」と規定した。

現在中国でおこなわれているウリマル教育は、2つのやり方によりおこ なわれるという矛盾した状態にある。すなわち、中国人を対象とする朝鮮 語教育では韓国の規範と理論に従い、中国の朝鮮民族の学生を対象とする 中国朝鮮語文教育では中国で制定された朝鮮語規範に従っており、事実上 中国国内では中国朝鮮語の規範と韓国の規範が並存しているのが実情であ る。

中国では1950年代から1970年代末まで韓国で出た資料は全く見ることが できず、朝鮮の文法書が中国の朝鮮語教育と研究に多くの影響を与えた。 1980年代から韓国の資料に接することができるようになったが、それすら も1980年代初期には北京にある国家図書館に行かなければ、そう多くもな い韓国の資料を見ることができなかった。しかし韓中修交以後、両国の間 の文化交流が深まって韓国の資料が多く入ってくるようになり、韓国の文法理論が中国の朝鮮語学に影響を与えている。現在中国の図書市場で販売されている朝鮮語文の図書には、中国、韓国、朝鮮の3国で出版されたものがすべて存在する。これは中国の朝鮮民族が3国の文法規範に直面していることを意味しており、それによって生じる混乱は避けられない状況にある。

2. 金壽卿と朝鮮の朝鮮語学

金壽卿先生は、朝鮮において朝鮮語研究の枠組みをつくった言語学者である。その根拠は次のとおりである。

2-1.「ハングル正書法統一案(1933)」改定の理論的基礎をつくった

朝鮮で「ハングル正書法統一案」の問題点が最初に提起されたのは、1946年8月である。この時共産党と新民党が合党して労働党になり、党の名称を「ロドンダン(豆を守)」とするか、あるいは「ノドンダン(豆を守)」にするかという問題が慎重を期すべき問題として提起された。これはハングル正書法の頭音法則を遵守するか否かの問題で、論争を経て「ロドンダン」とすると宣布された。「ロドンダン」の表記は当時朝鮮でも遵守されてきた「ハングル正書法統一案」と矛盾するので、「ロドンダン」の表記の正当性を理論的に明らかにするという課題が提起されることになる。この任務を果たした最初の論文が、金壽卿先生の論文「朝鮮語学会『ハングル正書法統一案』の中で改正すべき諸点 其の一 漢字音の表記において頭音 n および r について」である【図1】。この論文は、『労働新聞』1947年6月6、7、8、10日付に掲載された。論文では統一案の頭音法則の制限性について以下の4点を指摘している。1つ目は表音主義の傾向、2つ目は非体系性、3つ目に他の外来音表記との矛盾、4つ目に言語音の発展を予見できなかっ

た点などである。この論文が朝鮮労働党の機関紙に発表されたのは朝鮮労働党の言語政策の一端を示すものであり、統一案改定の嚆矢として評価されている[金榮晃・權昇模1996:88-90]。



図1 金壽卿『労働新聞』論文(1947)

ところが1948年8月31日、延辺の大衆書院が出版した朴相埈の『朝鮮語文法』の「お知らせ」に、「この本は、37年度〔民国紀元、西暦1948年〕中等学校教員研究会ハングル科において、東北地方の各中学校ハングル科の補充教材として「北朝鮮人民委員会が採択し、朴相埈先生の著した、初級中学校の朝鮮語文法」を刊行するとの討論がなされ、これを原本どおりに印刷したが、声音編第4章「転音」の第2節にある子音の転音のうち、rの転音に関するものは全て1947年5月30日に発表された「漢字音の表記における頭音 n 及び r について」という論文(本院印刊のハングル正書法の巻末に転載されている)を参照されたく、またそのような音はすべて本音どおりに改正

したので了承されたい。1948年8月31日大衆書院」という記録がある。ここで言及された論文「漢字音の表記における頭音 n 及び r について」の著者が誰かは明かされていないが、金壽卿先生の論文であることは間違いない。われわれはここから、次の3つの事実を知ることができる。

第1に、金壽卿先生の論文が1947年5月30日に発表され、発表時の論文のタイトルと『労働新聞』に掲載されたタイトルが全く同じではなかったという事実である。第2に、この論文が発表直後に中国でも広く知られたという事実である。第3に、中国の朝鮮語においても1948年から朝鮮の原則どおり語頭で L(n)、 是(r)を表記したという事実である。大衆書院が再版した朴相埈の文法は1947年の刊行本で、ハングル正書法の頭音法則を遵守したものを再版する際に改定したものである。

その後数年間の研究を経て1954年に「朝鮮語綴字法」を制定し、朝鮮語の標準語も統一案の「標準語は大体現在中流社会で使われるソウル語とする」から「標準語は朝鮮人民の間で使用される共通性の最も多い現代語の中でこれを定める」へと修正された。

2-2. 朝鮮の規範文法を開拓し発展させた主力であった

8.15解放以後から1979年までに朝鮮で出版された代表的な文法書をみると、 以下のとおりである。

1947年 『朝鮮語文法』朴相埈、1948年再版

1949年 『朝鮮語文法』朝鮮語文研究会

1960年 『朝鮮語文法(1)』科学院言語文学研究所

1961年 『現代朝鮮語(1)』金壽卿、金金石、金榮晃

1962年 『現代朝鮮語(2)』金壽卿、金白鍊

『現代朝鮮語(3)』金壽卿、宋瑞龍

1963年 『朝鮮語文法(2)』科学院言語文学研究所

『朝鮮語文法』会壽卿、廉宗訥、金白練、宋瑞龍、金榮晃 1964年

『朝鮮文化語(1、2)』金日成綜合大学朝鮮語学講座 1970年

『文化語文法規範(草稿)』朝鮮文化語文法規範編纂委員会 1972年

1973年 『朝鮮語』権昇模*

『朝鮮文化語文法規範』朝鮮文化語文法規範編纂委員会 1976年

1979年 『朝鮮文化語文法』社会科学院言語学研究所

以上の文法書の中で、規範文法として評価されている文法書は1949年の 『朝鮮語文法』、1960年の『朝鮮語文法(1)』、1976年の『朝鮮文化語文法 規範』である。

それでは、この3冊の文法書の著者が誰であり、どのように評価されて いるかを見てみよう。

1949年の『朝鮮語文法』の著者は「朝鮮語文研究会」となっている。朝鮮 語文研究会は1948年10月、田蒙秀を委員長として李克魯、許翼、明月峰、 キムリョンソン シンクヒョン ホンギムン キムヒョンシェ パクチョンシウ パクチュニョン 金龍成、申龜鉉、洪起文、金炳濟、朴宗軾、朴俊泳、朴相埈、金壽卿 の12人の学者からなる文法編修分科委員会を構成した。1年後の1949年9月 に文法書の草稿が完成し、10月に分科委員会で討論され、12月30日に出版 された。ところでこの本は、金壽卿先生が担当執筆した本である。『主体 の朝鮮語研究50年史』には「この時期に出された『朝鮮語文法』(1949) は 金壽卿が担当執筆した文法書で、解放後新たに受け容れた一般言語学理論 に基づき朝鮮語の文法構造現象を分析・考察し、体系化したところにその 意義がある | [金榮晃・權昇模 1996:365]、「人民たちと言語生活に真に助け となる規範文法をつくることに対する偉大なる首領の綱領的な教示を貫徹 する闘争の中で生まれた文法書がまさに『朝鮮語文法』(1949) である。『朝 鮮語文法』(1949)は当時金日成綜合大学の朝鮮語学講座長であった金壽卿 が中心となって執筆した。これはそれまで個別的に研究されてきた文法研 究の成果を綜合し、体系化する過程で達成された研究成果を代表すると言

える」[金榮晃・權昇模 1996:403] と評した。ここでの首領の教示とは、1948年1月14日に金日成が「朝鮮語文研究会会長と行った談話」を指す。この文法書のもつ最も致命的な弱点は、非科学的な「6字母」を入れたことである。

1960年に科学院出版社から出版された『朝鮮語文法(1)』の著者は、科 学院言語文学研究所となっている。しかし『主体の朝鮮語研究50年史』で は次のように紹介されている。「この時期に出された単行本である『朝鮮 語文法(1)』(1960年)は金壽卿、李槿榮が担当執筆したものであるが、解 放後の研究成果を総合して叙述した規範文法として豊富な言語資料に基づ き、朝鮮語の形態論的現象を深く分析・考察し、体系化したことにより、 当時の文法教育と言語生活の改善に大きく貢献した。特にこの本は、過去 の朝鮮語研究家たちが成し遂げた成果を継承発展させる一方、先進言語理 論を導入し、言語学部門の研究家たちの広範な意見を斟酌して体系立てた ことにより、過去の文法書に比べて一層高い発展水準を示していると言え る | と評した [金榮晃・權昇模 1996:369]。『朝鮮語文法(1)』と同系列の『朝 鮮語文法(2)』もまた著者は科学院言語文学研究所となっているが、執筆 者は鄭刻模、宋瑞龍であることが明らかにされている[金榮晃・權昇模 1996:407]。『朝鮮語文法(2)』は文章論である。ところがこの時期の文法 書の中で金壽卿、宋瑞龍が書いた『現代朝鮮語(3)』(高等教育出版社、1962) 【図2】が文章論の代表作として評価されている [金榮晃・權昇模 1996:408]。 上述した諸事実から、われわれは金壽卿先生が1960年代の朝鮮語規範文法 の編集の主力であったことを知ることができる。

1976年の『朝鮮文化語文法規範』は、金日成の主体思想に基づいて編集された規範文法である。この文法は、金日成綜合大学の朝鮮語学講座が中心となり、社会科学研究所とさまざまな師範大学を網羅する多くの有能な学者たちが集まり、討議を経て執筆がなされた [金榮晃・權昇模 1996:421]。ところがこの本は、それ以前の時期の研究成果に基づいて編集されており、



図2 『現代朝鮮語(1)~(3)』(1961-62)

金壽卿先生の理論が多く反映されていると思われる。この本は語音論、形 態論、文章論として叙述された。形態論の品詞設定においては、「前の時 期の『朝鮮語文法(1)』(1960)と同じ体系 | とされ「金榮晃・權昇模 1996: 353]、文章論の文章の標識は『現代朝鮮語(3)』の「陳述性」、『朝鮮語文 法(2)』の「述語性」と同じであり、単語結合は『現代朝鮮語(3)』(1962) と同じ立場を取っているが、漢字語になっていた学術用語をこなれたウリ マルに変えたという側面で違いがあるのみだとした [金榮晃・權昇模1996: 422]。これは1976年度の規範文法にも、金壽卿先生の文法理論が多く反映 されていることを示している。

2-3. 中学校の学校文法の基礎をつくった

『主体の朝鮮語研究50年史』において、朝鮮で出版された小中学校の文 法書については全く言及されておらず、同書を通じては朝鮮での小中学校 の朝鮮語文法の編纂がどのようになされたかを知ることはできない。しか し中国で再版された朝鮮の文法教科書を诵じて、朝鮮における40年代と50 年代に小中学校の学校文法書が出版されていたことが分かる。中国で出版 された朝鮮の小中学校の文法教科書は、以下のとおりである。

(1) 朴相埈『朝鮮語文法』(1947)

先に引用した再版者の「お知らせ」で明らかにしたように、朴相埈の文法を「北朝鮮人民委員会の採択である朴相埈先生の著、初級中学校の朝鮮語文法」とした。ここで「初級中学校の朝鮮語文法」と明言していることから、朴相埈の文法が朝鮮において初級中学校の文法として使われ、社会でも使用されたものと思われる。これは40年代末に朝鮮で学校文法の出版に早くも重きを置いていたことを示している。

(2) 鄭烈模、李槿榮、安文求の小学校用『国語文法教科書』

1950年代に延辺教育出版社において再版された朝鮮の小学校の文法教科書を通じて、朝鮮の鄭烈模、李槿榮、安文求*などの学者らが6.25戦争後、1950年代中頃に朝鮮の小学校用の文法教科書を編纂したことが分かる。

- A. 鄭烈模、李槿榮『朝鮮語文法』(初級小学校教科書、第4学年用)(1956) この文法書は、延辺教育出版社において1956年3月に第1版として再版された文法書で、この本の著者が鄭烈模、李槿榮となっている。ここから朝鮮で出版した書籍が中国で再販されたことは明らかであるが、朝鮮のどの時期のどの版本を再版したのかは明らかになっていない。
- B. 鄭烈模、李槿榮『朝鮮語文法』(高級小学教科書、第1、2学年用)(1956) この文法書は、延辺教育出版社において1956年8月に第1版として再 版された文法書で、著者が鄭烈模、李槿榮となっている。そして同書 では出版元が朝鮮の教育図書出版社となっており、1956年5月に第3版 を出版したことが明らかになっている。
- C. 鄭烈模、安文求『国語文法教科書』(人民学校、第3学年用) この文法書は、1957年に延辺教育出版社において修正・出版する際

に書かれた「出版者の言葉」で、朝鮮の3年生用の文法書であること が明らかにされた。「出版者の言葉」には、「この本は朝鮮民主主義人 民共和国の人民学校第3学年用の国語の文法教科書(鄭烈模、安文求著、 教育図書出版社、1956年度、第2版)として編纂されたものを人民学校の国 語文法の参考資料とウリ(延辺の)学校の実際に適合するよう修正・ 改編したものである。……1957年1月、延辺教育出版社」と書かれて いる。この文法書を延辺では3巻に改編し、第2巻と第3巻が57年3月に 初版として出版されたが、第1巻はまだ発見されていない。ただ、延 辺教育出版社において改編された『朝鮮語文法』(小学校教科書第1冊、 1956年2月、第1版)が発見されている。これが鄭烈模、安文求の文法書 を3巻に改編して分けられたものの第1巻であると推定される。すなわ ち、1956年2月に改編されるときに第1冊とし、1957年には第2巻、第3 巻としたのではないかと思う。

上述した状況から、われわれは以下の諸点に要約することができる。 第1に、朝鮮で6.25戦争が終わり、小学校用の文法教科書が出版された。 この教科書は1955年(1954年?)から出版されたものと推測される。

第2に、小学校用の文法教科書の著者は鄭烈模、李樺榮、安文求の3人で ある。鄭烈模、安文求が小学校3年生用の文法書を執筆し、鄭烈模、李槿 榮が4年生、5年生、6年生用を執筆した。ここでわれわれは、朝鮮におい て1950年代中頃に、小学校3年生からの文法教科書が書かれていたことを 知ることができる。

第3に、朝鮮における書籍名は『国語文法』であったが、中国で再版さ れて『朝鮮語文法』に変更されたものと思われる。

(3) 金壽卿の中学校用『朝鮮語文法』(1954年11月)

この文法書について、韓国では誤った伝えられ方をしている。金敏洙教

授の『現代語文政策論』920頁では、「彼らの研究は前期に安文求の『朝鮮語文法』(初級中学校用、1954)、洪起文の『郷歌』(1956)、『吏読』(1957)、金炳濟の『方言学』上(1959) ……」と述べ、朝鮮で1954年に出版された初級中学校用『朝鮮語文法』の著者が安文求であるとした。しかしこの本の著者は安文求ではなく金壽卿であり、安文求は同書の語学編修とされている。



図3 金壽卿『朝鮮語文法 初級中学校用』(延辺版、1955年)

この本を朝鮮の教育図書出版社が1954年11月に初版として発行した。中国では1955年3月に編集、5月に再版されたので、本が出て半年後に中国で再販されたということである【図3】。この本の再版者である延辺教育出版社の「翻印者の言葉」をそのまま紹介すると、次のとおりである。

この本は、朝鮮民主主義人民共和国の初級中学校用の『朝鮮語文法』 教科書として金壽卿先生が著作したものである。

本社は、朝鮮族の初級中学校で適切な朝鮮語の文法教科書がない情況下において、そしてわが朝鮮族大衆にもまたこのような文法書籍が

欠乏した情況下で、著者の同意を経てこの本を翻印出版する。

原書は初中1、2学年用と初中3学年用の2冊に分けられた。しかしわ れわれは、発行上の便官のためにこれを合本して発行する。

最後に、原書にある綴字法と字母の名称には、著作された時間的差 異によって朝鮮民主主義人民共和国科学院が1954年に出版した『朝鮮 語綴字法』と一部統一されなかった部分があったので、著者の同意を 経て修正したということを述べておく。われわれの修正によって発生 した誤謬について、著者および読者は指摘してくれるよう願う。

1955.3.20. 延辺教育出版社

ここでの「翻印」とは中国語の「翻印」を音訳した言葉で、ウリマルの 「再版」や「復刻」の意味である。上の「翻印者の言葉」でも分かるよう に、この本の綴字法が1954年9月9日に公布された「朝鮮語綴字法」と異な るものがあったので、この本の編集が新たな綴字法が公布される前に終わっ たことを意味する。当時の本の出版が現在とは異なり活字を組んで組版し なければならないので、少なくとも2か月はかかることを勘案すると、そ の年の9月9日以前に同書が印刷に付されたのであろう。

この本が中国において全部で何回印刷されたのかは分からないが、1956 年10月の第4次印刷まで、都合53,400部が印刷された。1955年版本の表題 は「著者金壽卿、朝鮮語文法、延辺教育出版社」となっているが、1956年 10月版本の表題は「初級中学校教科書、朝鮮語文法(代用本)、延辺教育出 版社、1956」となっており、表題では著者の名が明示されていない。しか し1ページ目の「翻印者の言葉」は1955年の版本の原文がそのまま掲載さ れており、本の著者が金壽卿であることが明らかにされている。

50年代以降、朝鮮における小中学校の文法教科書出版の詳細な状況は分 からないが、50年代に鄭烈模先牛が朝鮮の小学校の文法教科書の編集を担 当し、金壽卿先生が初級中学校の文法教科書の編集を担当したことには疑

問の余地がないと認められる。したがって朝鮮で金壽卿先生と鄭烈模先生 の2人が50年代の学校文法の基礎をつくったのである。

2-4. その他の研究業績

(1) 語彙論研究

金壽卿先生の『現代朝鮮語 (1)』において語彙論が扱われているが、この著作がこの時期の語彙意味論の基礎概念を定立し、総合体系化し、理論化した最初の著述として評価されている「金榮晃・權昇模 1996:163]。

(2) 文体論研究

金壽卿先生が1964年に朝鮮で最初に『朝鮮語文体論』(高等教育図書出版社) を発表した。この本は、朝鮮における文体論の成立として評価されている 「金榮晃・權昇模 1996:212]。

その他にも、金壽卿先生は「龍飛御天歌**に見られる挿入字母の本質」 (『朝鮮語研究』1巻2号、1949)などをはじめとする優秀な論文を発表し、新たな文法理論の導入に大きく寄与した。

金壽卿先生が蓄積された業績を振り返ってみると、先生は朝鮮の現代朝鮮語研究の新たな道を開拓され、朝鮮語研究の主流をリードしながら朝鮮の言語学の発展、さらにはわが民族の言語学の発展に不朽の貢献をした、傑出した学者であるといわざるを得ない。

3. 金壽卿と中国の朝鮮語学

金壽卿先生は中国朝鮮語学の発展にも非常に寄与した学者である。

^{*3} 朝鮮王朝建国の事蹟を記した叙事詩。世宗代に創作。

3-1. 金壽卿と中学校の朝鮮語文法教育

1950年代、中国の小中学校の朝鮮語教育は朝鮮の影響を受け、小中学校 の学生用の文法教科書を発行した。小学校における文法教科書は、先述の ように鄭烈模、李槿榮、安文求の小学校用の文法教科書をそのまま使うか、 あるいは改編して使用した。中国では鄭烈模、安文求が書いた3年生用が 改編されたのだが、第1冊は金益榮、第2巻は李正龍、第3巻は金斗川が それぞれ改編した。

中学校では1948年から朴相埈の『朝鮮語文法』を再版し、教科書として 使った。朴相埈の文法が何度再版されたのかは分からないが、1951年にも 再版されている。その後1955年に金壽卿の『朝鮮語文法』が中学校の朝鮮 語文法教科書として採択され、50年代末まで中学校の朝鮮語文法教科書と して使われた。このことは50年代中頃から金壽卿の文法が中国の中学校の 朝鮮語文法教授に非常に大きな影響を与えていたことを物語っている。筆 者もこの時期に金壽卿先生の『朝鮮語文法』で、ウリマルの文法教育を受 けた。1960年代から中学校の朝鮮語教育において文法の科目を別に設けず、 朝鮮語学科において文法知識を伝授したが、基本体系は金壽卿先生の文法 体系であった。その後、1984年に延辺教育出版社が、中国では初めて金斗 川、李奎浩*、朴世岩、張榮泰などが編纂した独自の『中学生朝鮮語実用 文法』を編集・出版した。

3-2. 金壽卿と大学校の朝鮮語文法教育

中国朝鮮族の小中学校が朝鮮の影響を受けたのは50年代であり、60年代 からは朝鮮の影響をほとんど受けなくなった。しかし大学における朝鮮語 文法教育は事情が異なり、左傾思想の影響を受けはしたが、中韓修交以前 まで大学生の朝鮮語学習の主な参考書は、朝鮮で出版された資料であった。

1949年に設立された延辺大学朝鮮語学科が、草創期には朝鮮民主主義人 民共和国の金日成綜合大学朝鮮語学科の助けを多く受けた。資料によると、 反右派闘争以後、民族整風期である1958年にも、延辺大学師範学院教務課において朝鮮の金日成綜合大学朝鮮語学科用の『古代朝鮮語』教授案を謄写本として翻印した。50年代初期に金壽卿先生が金日成綜合大学朝鮮語学科の講座長を務めていたことを考えると、金壽卿先生が延辺大学朝鮮語学科の建設と発展に直接的または間接的に多くの寄与をしたことは、疑問の余地がない。なぜならば、金日成綜合大学朝鮮語学科の資料を延辺大学に送るには、学科長の批准なくしては不可能だからである。

延辺大学朝鮮語学科の草創期には金 昌 杰*、李鎬源*の2人が朝鮮語文法を教えたが、1949年の朝鮮語文研究会が編纂した『朝鮮語文法』を教材にしていた『崔允甲1992:120』。先述したように1949年の朝鮮語文研究会の『朝鮮語文法』は、金壽卿先生が担当執筆した書籍である。この文法では、それ以前の時期の研究成果を受け容れながらも、新たな探求がおこなわれた。この本は、1956年に独自の教材を編集するときまで、延辺大学の朝鮮語学科の教材として使用された。1960年代には『朝鮮語文法(1)』が延辺大学朝鮮語学科の学生たちの主な参考書となった。この本の形態論もまた、金壽卿と李槿榮が執筆した本である。このことからわれわれは、金壽卿先生が事実上中国の大学校の朝鮮語文法教育の基礎をつくるのに非常に大きく寄与したと言える。のみならず、金壽卿先生の文法理論はその後の大学校の朝鮮語文法教育にも持続的に影響を与えた。

3-3. 金壽卿と朝鮮語文法研究

20世紀の中国の朝鮮語研究の主力は、延辺大学であった。1949年の延辺 大学成立以前は北京大学に朝鮮語学科が開設されてはいたが、延辺大学が 建てられてからは延辺大学朝鮮語学科が中国の朝鮮語研究の主力となった。 50年代前半は朝鮮語文法研究の人材の養成期で、これといった研究成果は 出されなかった。1956年に延辺大学朝鮮語講座において学生用教科書とし て『朝鮮語文法』を編纂したが、李世龍が語音論を、崔允甲が形態論を、 金學錬が文章論を執筆した。謄写本として出された同書は、当時中国で育 成された朝鮮語研究者が初めて書いた朝鮮語文法の本である。この本は、 延辺大学の学生だけでなく、東北三省の中学校と朝鮮語人材の主要な参考 書となった。この本の執筆には、1949年の朝鮮語文研究会の『朝鮮語文法』、 朴相埈の『朝鮮語文法』、金壽卿の『朝鮮語文法』、崔 鉉 培の『ウリマル 本』、ソ連のホロドーヴィチの『朝鮮語文法』などが参考にされた「崔允甲 1992: 121]

1963年と1964年に延辺大学で新たに『古代朝鮮文講読』と『現代朝鮮語』 を内部教材として編纂・印刷したが、『現代朝鮮語』は活字本であり、『古 代朝鮮文講読』は謄写本である。『古代朝鮮文講読』(1963) は崔允甲教授 が編集し、『現代朝鮮語』は新たに養成された教員方長春と金相願が編 集した。方長春が『現代朝鮮語(語音論)』(1964)と『現代朝鮮語(形態論)』 (1、2)(1963)を、金相願が『現代朝鮮語(文章論)』(1963)を執筆した。 延辺大学で新しく編纂された『現代朝鮮語』は、1960年に朝鮮社会科学院 から出された『朝鮮語文法(1)』と、1961-1962年に金日成綜合大学から出 された『現代朝鮮語』を参考にしているだけに、この2冊の文法書の見解 をそのまま用いたものと評価されている。この本は、品詞の設定において は『現代朝鮮語(2)』の見解に従わず、『朝鮮語文法(1)』の見解に従った。 先述したように、朝鮮社会科学院『朝鮮語文法(1)』と金日成綜合大学『現 代朝鮮語』はいずれも金壽卿先生が編纂した文法書であることを考えると、 1960年代の中国の朝鮮語研究もまた金壽卿先生の影響から自由ではありえ なかった。

1966年3月に延辺歴史言語研究所の言語研究室は『朝鮮語語彙論基礎』 (延辺教育出版社)を出版した。この本の基本理論もまた、金壽卿先生が執 筆した『現代朝鮮語(1)』の語彙論の部分の理論をそのまま踏襲したもの と思われる。

1970年代、文化大革命の影響を受けて中国朝鮮語研究が活発に展開され

なくなったが、数冊の文法書が公開・出版された。70年代に発表された文法書としては、徐永燮、金基鍾の『朝鮮語文法(形態論)』(1972)、崔允甲の『朝鮮語語音論』(1973)、崔允甲の『朝鮮語文法(文章論)』(1974)、許東派、章旭昇の『朝鮮語実用文法』(1976)などがある。このような文法書は、当時の社会的需要から通俗性と大衆性を強調し、応用に関心を向けた。しかし、数十年間影響を受けてきた朝鮮の文法理論、体制などから抜け出せず、朝鮮の理論を踏襲していた。特に形態論においては、金壽卿の『現代朝鮮語』の影響を受けた。

1980年代は、中国朝鮮語研究の開花期であると言える。この時期中国で は、多くの文法書が出版された。それらを挙げると、崔允甲『朝鮮語文法』 (1980)、徐永燮『朝鮮語実用文法』(1981)、東北三省編纂小組『朝鮮語文法』 (1983)、延辺教育出版社『中学生朝鮮語実用文法』(1984)、金鎭容『現代 朝鮮語』(1986)、崔允甲、許東振、金相願『朝鮮語文法』(延辺大学朝文学部) (1986)、崔允甲『中世朝鮮語文法』(1987)、姜銀國『現代朝鮮語』(1987)、 崔明植『朝鮮語□頭語文法』(1988)、李貴培『朝鮮語文法理論』(1988) な どである。このような文法書の中で朝鮮の文法理論の影響から抜け出そう と努力したのは、崔允甲の『朝鮮語文法』(1980) である。その他の文法書 は、理論と体系において朝鮮の60年代の文法と70年代の文法の影響から抜 け出せなかった。先述したように、金壽卿先生の文法理論と体系が朝鮮の 60年代の主流をなし、それが70年代半ばに出された文化語規範文法にまで 莫大な影響を及ぼした。中国の80年代に出た朝鮮語文法の大多数が朝鮮の 60-70年代の文法の影響から抜け出せなかったという事実は、金壽卿先生 の文法理論と体系が80年代まで中国の朝鮮語文法研究に非常に大きな影響 を与えたことを意味する。

1992年の中韓国交樹立以降、韓国の文法理論が中国に広く伝播し始め、中国人を対象とする韓国語教育が発展し、朝鮮民族を対象とする小中学校

の朝鮮語教育が委縮して、中国における朝鮮語研究にも変化が生まれ、韓国の文法理論の影響が広がる趨勢へと向かい始めた。

3-4. 金壽卿と一般言語理論の研究

延辺大学の崔允甲教授は、金壽卿先生は中国朝鮮語学者たちの一般言語 学理論の学習と研究にも非常に多くの力を与えたと述べた。議論に先立ち、 以下の内容はすべて崔允甲教授の回顧によるものであることを明らかにし ておく。

解放後、社会主義陣営と資本主義陣営の対立により、中国国内の朝鮮語学者たちが新たな言語理論を受け容れることのできる道は2とおりあった。ひとつは、社会主義集団の盟主であり言語理論の発展をもたらしたソ連の理論を学ぶ道であり、もうひとつは中国から受け容れた言語学理論を学ぶ道であった。しかし日帝の統治期、日本語を学んだ朝鮮民族の学者たちのロシア語や中国語のレベルが制限されており、ロシア語で書かれた書籍や中国語で書かれた書籍を読むことができなかった。このような状況にあって、朝鮮語文法のみならず一般言語学理論を学ぶことのできる道は、朝鮮で翻訳された旧ソ連の言語理論であった。延辺大学草創期である1951年に華光音先生が「言語学概論」の講義を担当したのだが、その際、金壽卿先生が翻訳したレフォルマツキー言語学を教材にして教えていたという。

崔允甲教授は、金壽卿先生を一般言語学理論の普及に大きく寄与した方とみなし、先生は言語理論に該博であり、新たな理論を多く掌握している方だと述べた。その他にも、金壽卿先生の論文「現代朝鮮語研究序説」(『朝鮮科学院学報』、1953年1号)、朝鮮語構造の特性、朝鮮語の優秀性などについての論文と講義は、先生に深い印象を与えたと述べた。

最後に、崔允甲教授は、金壽卿先生は1950年代と1960年代の延辺大学をはじめとする中国の多くの朝鮮語教員と学生の養成、および朝鮮語研究に 非常に大きく貢献した優秀な学者であることを再三にわたって強調した。 上述した諸般の事実からわれわれは、金壽卿先生は朝鮮民主主義人民共和国の朝鮮語学の発展、中国朝鮮語学の発展、さらにはわが民族語学の発展に卓越した貢献をした傑出した言語学者であることを知った。しかしわれわれは、今日になってようやく金壽卿先生の業績を称えたが、先生の研究業績すらも十分に整理できていない状況にある。実に残念なことである。今回の会議を契機に、先生の言語哲学、言語理論に関する研究を誠実に行い、さらにはそれがわが民族言語の統一と共同の発展における素晴らしい基礎となるよう願う。

参考文献

高永一 [2002] 『중국抗日戰爭과 조선민족』, 서울: 도서출판 백암.

金榮晃・權昇模* [1996] 『주체의 조선어연구 50년사』, 평양: 김일성종합대학 조선어 문학부.

崔允甲 주필 [1992] 『중국에서의 조선어의 발전과 연구』, 延吉: 연변대학출판사. 玄龍順 [1997] 『겨레의 넋을 지켜: 연변대학 조문학부가 걸어온 45성상』, 延吉: 연변대학출판사.

(訳者付記)文中で*印の付いた人名(初出のみ記した)は、漢字表記が確認できなかったため、同音の漢字を当てたものである。

(呉仁済 訳)

附

録

寄稿私の心から尊敬する師匠、金壽卿先生

産 産力

※本稿は2013年11月に開催したシンポジウムに際して、寄稿いただいたものである。 当日は、この文章を受け取った金惠英・金泰成両氏がこれを読み上げた。

まず、私たちの尊敬する師匠である金壽卿先生を称えてシンポジウムを 開催してくださった主催者側と先生方に厚くお礼申し上げます。

[金] 惠英さんの依頼により、私の見た壽卿先生に関して簡単に書いて みたいと思います。

私は1961年9月、延辺大学朝文学部を卒業し、中国人留学生の身分で金 日成綜合大学の研究院〔大学院〕に行って、3年間、研究生(大学院生)とし て勉強しました。そのときの私の指導教授が金壽卿先生だったのです。当 時、同じクラスで勉強した研究生は3人でした。綜合大学で教鞭を執りな がら研究していたパク・ヨンスン(박용순)**さんと、中央党機関で勤務し ながら勉強していたハン・ジョンジク(한정직)**さんでした。私たちは文 体論を勉強していました。しかしながら、その頃は平壌とソウルのいず れにおいても、まだ文体論研究が始まる以前のことでした。

授業の最初の時間に、壽卿先生はフランスの文体論の本を持ってこられ、

^{*1} パク・ヨンスン(박용순): 後に金壽卿『朝鮮語文体論』(高等教育図書出版社, 1964) を土台として『朝鮮語文体論』(金日成綜合大学出版社,1966)を著述。

^{*2} ハン・ジョンジク(한정직):朝鮮労働党中央党学校教員等を歴任。

はじめから朝鮮語でお読みになりました。私たちはそれを熱心に筆記しました。私は非常に不思議に思って、休み時間に先生のフランス文体論の本を通覧してみたのですが、全部フランス語で書かれており、朝鮮の文字は一字もありませんでした。講義の終わった後、ヨンスンさんに聞いたところ、壽卿先生はさまざまな外国語がとてもお上手で、スターリンの『マルクス主義と言語学の諸問題』**3も壽卿先生が読みあげたものを弟子たちが書き取って出版したものだと言っていました。

フランスの文体論の講義が終わってから、中国の有名な言語学者・陳望道先生の『修辞学発凡』〔原著は1932年初版〕をまた同じように読み下されました。中国の古文と現代文が混ざった、中国人にも読みにくい本でした。同じ本を見ている私に、間違ったところはないかと聞かれました。私は間違ったところを1つも見つけられませんでした。私は内心、世の中にはこんな方もいらっしゃるのだなと感歎しました。先生は7ヶ国語をああいう風にこなされるのだと、友だちが教えてくれました。

先生が書かれた『朝鮮語文法』**と『現代朝鮮語』全3巻〔1961-62年刊〕は、朝鮮民主主義人民共和国の中学校や大学で教科書として使用されたばかりでなく、〔1945年8月の〕解放後、同国の国語学の基礎となりました。先生が書かれた『朝鮮語文体論』〔1964年刊〕は朝鮮語学の新しい領域を開拓したものです。

そして多くの弟子を育てました。現在、朝鮮社会科学院言語学研究所の 所長をはじめとし、語学界で中堅的な役割を果たしているほとんど全ての 人が、1950年代や60年代に綜合大学を卒業した、壽卿先生の教え子です。

先生はいつも謙虚な態度で、慈しみ深く、温かい方でした。学生たちは

^{*3} スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』:原典は1950年にソ連で出版、朝鮮語訳は朝鮮労働党出版社から1952年に出版。

^{*4『}朝鮮語文法』: 金壽卿が関わった同題の文法書は1949年、1954年、1960年、1964年に出されているが、そのうちどれを指すかは不明。

みんな親しげに、先生をただ「壽卿先生」と気軽に呼びました。学生のこ ろ、先生は私をご自宅に招かれ、食事を共にしたことがあります。1990年 代になっても、平壤に行った私をご自宅に呼び、一緒に食事をなさいまし た。平壌市内の金策工科大学近くに引っ越して来られていたのですが、 私は先生のお宅に入ってみて大変びっくりしました。壁にかけた、色褪せ た小さい掛け軸が目についたからです。それは、私が学生の時、先生にさ しあげた贈り物だったのです。先生は掛け軸を指さしながら、これを見る 度に私を思い出していたとおっしゃいました。30年以上も前に1人の弟子 がくれた小さな掛け軸1つを、黄色く色褪せるまで壁に飾っていてくださっ た先生の心が、私の心に触れてじんと来ました。

時間の関係もあり、これで終わらせていただきます。 先生のご冥福をお祈りいたします ありがとうございます。

金壽卿年譜

年	月	日	年齢	事項	備考
1918	5	1	0	金瑄得(1896-1950、慶州金氏、短い 判事生活の後、弁護士業を務める)と 李素玉(1893-1961)の3兄妹の次男と して生まれる。本籍は江原道通川郡通 川面西里13番地。兄は金福卿(1913- 1974)、妹は金貞娥(1926-)。	遺族情報。
1921	9		3	父が全羅南道光州地方法院群山支庁の 判事として赴任。家族が故郷の通川を 離れ、群山に移住。	『朝鮮総督府及所属官署 職員録』。遺族情報。
1923	10		5	父が平安北道新義州の地方法院判事と して赴任。家族が新義州に移住。	『朝鮮総督府及所属官署 職員録』。遺族情報。
1924	4	1	5	新義州で普通学校に入学(学校名は不明)。	遺族情報。1925年4月1日 に入学し、5年生を修了し て卒業した可能性もあり。
1925	6		7	父が新義州の地方法院判事を退職。	『時代日報』1925.7.17。
1925	8		7	父が群山で弁護士を開業。家族の群山 転居にともない、群山公立普通学校に 転校。	『時代日報』1925.7.17。 遺族情報。
1930	3	31	11	群山第一公立普通学校(1929年に群山 第二公立普通学校が設立したことによ り改称)を卒業。	遺族情報(卒業証書を保有)。
1930	4	1	11	群山中学校に入学。	遺族情報(通知書を保有)。
1934	3	31	15	群山中学校の課程を4年間で修了。修 了前に京城帝国大学予科に入学するた めの専門学校入学検定試験に合格。	金壽卿が1946年12月28日 に作成し、金日成大学に 提出した履歴書(以下 「履歴書」)。遺族情報。
1934	4	1	15	京城帝国大学予科文科甲類に入学(第 11期入学生)。同期の入学者に金錫亨、 申龜鉉、李明善、丁海珎、洪璡基など がある。	『朝鮮総督府官報』1934. 3.30に合格者名簿。この 年度の入学生から予科が 2年制から3年制に変更さ れた(『紺碧遙かに』)。

年	月	日	年齢	事項	備考
1937	3	31	18	京城帝国大学予科を修了。	『朝鮮総督府官報』1934. 4.7に修了者名簿。遺族 情報(修了証書を保有)。
1937	4	1	18	京城帝国大学法文学部哲学科に入学 (金錫亨は史学科、申龜鉉と李明善は 文学科、丁海珎は哲学科、洪璡基は法 学科へ進学。同年、朴時亨が史学科選 科生として入学)。	『朝鮮総督府官報』1934. 5.11に入学者名簿。
				ヘーゲル等の哲学を研究し、小林英夫 (1903-1978)の指導の下、言語学を研究。	小林英夫「教え子」1951。 遺族情報。
				ロシア語は法文学部の講師であったチルキン (C.B. Чиркин, 1879-1943) から 教わったという。	李忠雨《京城帝国大学》 1980。遺族情報(教室写 真を保有)。
1939			21	林和と申龜鉉の勧めにより、Maurice Courant(モリス・クーラン、1865- 1935)著『 <i>Bibliographie coréenne</i> (朝鮮書 誌)』の朝鮮語翻訳を開始。	《朝鮮文化史序説》凡章閣, 1946。
1940	3	31	21	京城帝国大学法文学部哲学科を卒業 (哲学科第12回卒業生)。	『朝鮮総督府官報』1940. 4.9に学士試験合格者名簿。 遺族情報(卒業証書を保 有)。
1940	4	30	21	東京帝国大学文学部大学院(言語学講座)に入学。研究課題は「朝鮮語ノ比較言語学的研究」。指導教官は小倉進平(1882-1944)教授(言語学講座担任)。後に指導教官を引き継ぐ服部四郎(1908-1995)は、当時講師として在職。	東京大学文学部の記録。 『東京帝国大学一覧』 1940-42年版。遺族情報 (1942年12月当時撮影し た写真が存在)。
				当時1年間の研修のため東京帝国大学 に来ていた梨花女子専門学校教授の李 熙昇と交流。当時東京帝国大学の学部 留学生に趙承福などがいた。	李熙昇の自叙伝《再び生 まれ変わってもこの道を》 1977;趙承福の自叙伝 《分断の恨》2004。
1942	2	28	23	京城帝国大学哲学研究室で開かれた哲学談話会第30回例会にて「言語の本質 一マルテイに従ひて」を発表。	京城帝国大学文学会「研究室通信」『学叢』第1輯, 1943。

年	月	日	年齢	事項	備考
1942			24	春休みにソウルで李明善(京城帝大の同期)と金錦子(梨花女専音楽科卒業)の結婚式に参席。李南載に出会う。李南載は広州李氏の李容復(1895-1966)と宣仁錫(1895-1928)の4兄妹の中の一人娘で、1919年12月18日満州の間島にて出生し、梨花女子専門学校文科を卒業。	遺族情報。
1943	3	17	24	春休み中にソウルで李南載と結婚。そ の後、東京の豊島区要町で新婚生活。	遺族情報および東京大学 の記録。
1943	3		24	小倉進平が東京帝国大学を定年退職。 このとき指導教官が服部四郎(助教授 に昇進していた)に変わったものと推 定される。	東京大学文学部旧制大学 院学籍簿の指導教官欄で は、小倉進平が削除され、 服部四郎が記入されてい る。
1943			25	夏に妻とソウルに帰り、恵化町74番地 に居住。	遺族情報。
1944	1	6	25	長女・金惠慈がソウルで生まれる。	遺族情報。
1944	3	15	25	東京帝国大学文学部大学院を退学。	東京大学の記録。東京大 学文学部旧制大学院学籍 簿に「一身上ノ都合上退 学」と記入されている。
1944	4	15	25	京城帝国大学法文学部朝鮮語学研究室 の嘱託、京城帝国大学付属図書館の嘱 託を兼任。	履歴書。後段は遺族情報。
1945	3	25	26	報告書『「老乞大」諸板の再吟味』を 京城帝国大学法文学部で印刷。	著作目録参照。印刷され た初の論文と推定される。
1945	5	28	27	長男・金泰正が生まれる。	遺族情報。
1945	8	15	27	京城大学自治委員会法文学部委員となる。	履歴書。兪鎭午「片片夜 話(63)京城大学総長」, 《東亜日報》1974.5.14。
1945	8	16	27	夕刻、ソウルの仁寺洞にある泰和亭で開かれた震檀学会の再発足のための会に参加。	金載元「光復から今日まで」,《震檀学報》57号, 1984。
1945	8	23	27	鍾路の YMCA にて震檀学会委員会を 開催。金壽卿は常任委員(幹事)。	《震檀学報》15号,1947。

年	月	日	年齢	事項	備考
1945	10	9	27	震檀学会が訓民正音頒布紀念講演会に 李崇寧と金壽卿を派遣。	《震檀学報》15号,1947。
1945	11	30	27	京城大学嘱託および自治委員会委員を 辞任。	履歴書。
1945	11		27	解放後の初論文となる「『龍飛御天歌』 挿入子音考」を収録した《震檀学報》 15号の原稿を印刷所に送る。出版が遅れ、発刊自体は1947年5月となる。	《震檀学報》15号,1947。
1945	12	1	27	京城経済専門学校教授に任命される。	履歴書。
1945	12	15	27	震檀学会第2回月例会にて「ソ連アカ デミーのための新進学徒の養成」を発 表。	《震檀学報》15号,1947。
1946	2	26	27	朝鮮山岳会主催の済州島漢拏山学術調 査隊に、震檀学会が宋錫夏(隊長、震 檀学会長)、趙明基、金壽卿を派遣(3 月17日まで)。金壽卿は言語学班。	《震檀学報》15号, 1947; 《自由新聞》1946.2.26。
1946	3	1	27	京城大学法文学部講師を兼任。	履歴書。
				「京城大学予科附設臨時中等教員養成所」および「京城師範学校附設臨時中等教員養成所」にて「朝鮮語学概論」 を講義。	崔炅鳳 (2009)。金敏洙、 姜吉云、南廣祐などが聴 講。
1946	3	30	27	朝鮮山岳会が済州島調査報告講演を倭城臺で開催。金壽卿は「言語を通じて みた済州島文化」を講演。	《自由新聞》1946.3.30。
1946	5	6	28	朝鮮共産党(南朝鮮)に入党。高等教 育部フラクション。	履歴書。加入時の保証人 は、朴時亨および尹炳商。
1946	5	10	28	クーラン《朝鮮書誌》の序論部分の朝 鮮語訳を《朝鮮文化史序説》としてソ ウルで出版。	《朝鮮文化史序説》凡章閣, 1946。
1946	5		28	朝鮮語学会に加入。	崔炅鳳(2009)。「ハング ル新聞」《ハングル》11 巻3号,1947.7。
1946	7	8	28	《朝鮮文化史序説》の出版記念会を開催。	遺族情報(記念会の写真を保有)。

年	月	日	年齢	事項	備考
1946	8	17	28	金日成大学からの委嘱状に応じ、夜に 半ズボンと登山帽の服装で家族より先 に越北。当時朴時亨、金錫亨の二人の 同僚とともに越北した。	小林英夫の随筆「白いハト」1957年に引用された 金壽卿の書簡;遺族情報; 《ハンギョレ新聞》1990. 8.4;《京郷新聞》1990.8.4。
1946	8	19	28	京城経済専門学校および京城大学を辞 任。	履歴書。
1946	8	20	28	北朝鮮の金日成大学文学部教員。	履歴書。
1946	10	1	28	北朝鮮の金日成大学附属図書館長を兼 任。	履歴書。
1946	10		28	ソウルから呼び寄せた家族と合流。そ の後、金日成大学の教員社宅4号に居住。	遺族情報。
1947	2	5	28	北朝鮮臨時人民委員会決定第175号に より朝鮮語文研究会を組織し、本部を 金日成大学に置く。	《朝鮮語研究》1-1, 1949。
1948	3	1	29	次女・金惠英が平壌で生まれる。	遺族情報。
1948	10	2	30	内閣第10号決定書「朝鮮語文に関する 決定書」により朝鮮語文研究会を教育 省内に設置。文法編修分科委員会(委 員長=田蒙秀、金壽卿は12人の委員中 の1人)を組織し、文法書の編纂を開始。	《朝鮮語研究》1-1, 1949; 《朝鮮語文法》1949。
1949	3	23	30	金日成綜合大学で開かれた金枓奉先生 誕生60周年記念会合にて「朝鮮語学者 としての金枓奉先生」を講演。	《朝鮮語研究》1-3, 1949。
1949	11	28	31	次男・金泰成が平壌で生まれる。	遺族情報。
1949	11		31	副教授の職位を授与。朝鮮民主主義人 民共和国で初の副教授という。	《文化語学習》2004-3。
1950	8	9	32	戦争勃発後、党中央委員会の決定により、大学教員からなる短期宣撫工作隊 の一員として南派。	遺族情報。
1950	9	25	32	父・金瑄得が群山の人民軍によって虐 殺される。	遺族情報。
1950	10		32	家族が南朝鮮に避難。	遺族情報。

年	月	日	年齢	事項	備考
1951	3	3	32	九死に一生を得て平壌へ帰還、家族が 既に南下していたことを知る。	遺族情報。
1952	6	20	34	朝ソ文化協会が主催した「イ・ヴェ・スターリンの労作《マルクス主義と言語学の諸問題》発表2周年記念学術報告会」で「イ・ヴェ・スターリンの労作《マルクス主義と言語学の諸問題》と朝鮮言語学の当面課業」を報告。	《労働新聞》1952.6.23。
1952	12	1	34	科学院が設立され、金壽卿は朝鮮語及 朝鮮文学研究所の朝鮮語学研究室長と なる。	科学院設立過程について は金容燮《南北の学術院 と科学院の発達》知識産 業社,2005。
1953	6	4	35	科学院朝鮮語及朝鮮文学研究所の第1 次評議会で、《朝鮮語綴字法》編纂委 員会を組織し、草案作成の責任者を金 壽卿とすることが決定される。	《朝鮮民主主義人民共和国科学院学報》1954-7。
1953	6	21	35	科学院と朝ソ文化協会が共同主催した「イ・ヴェ・スターリンの労作《マルクス主義と言語学の諸問題》発表3周年記念学術報告会」において「言語学の諸問題に関するイ・ヴェ・スターリンの労作に照らして見た朝鮮語の基本語彙と語彙構成」を報告。	《労働新聞》1953.6.24。
[1953]			[35]	金正順(金日成大学卒業)と平壌で再 婚。	遺族情報(金壽卿の手紙)。
1954			36	三男・金泰均が平壌で生まれる。	遺族情報(金壽卿の手紙)。
1955	7	27	37	科学院朝鮮語及朝鮮文学研究所が周時 經逝去41周年に際して開催した学術講 演会で周時經の生涯と活動について報 告。	《教員新聞》1955.7.30。
1955	11	30	37	科学院朝鮮語及朝鮮文学研究所で開かれた中国文化代表団との座談会(11月 30日、12月4日両日開催)に参席。	《朝鮮語文》1956-1。
1955			37	三女・金惠媛が平壌で生まれる。	遺族情報(金壽卿の手紙)。

年	月	日	年齢	事項	備考
1956	4	10	37	朝鮮民主科学者協会が結成され(委員 長・白南雲)、金壽卿は委員となる。	《朝鮮民主主義人民共和 国科学院学報》1956-2。
1956	4		37	この頃、金日成綜合大学の科学研究部 長を務める。	《大学新聞》1956.4.26。
1956	9		38	金日成綜合大学《学報》が創刊され、 金壽卿は金日成綜合大学編集委員会の 委員を務める。	金日成綜合大学《学報》 No.1。
1956	10	6	38	科学院言語文学研究所に朝鮮文字改革 研究委員会が創立され、金壽卿は常務 委員となる。	《朝鮮語文》1956-6。
1956	10	11	38	朝中間の文化交流計画により中国を訪問。科学院文字改革研究委員の資格で、中国科学院の招請を受けて中国を訪問(-1956.12.4)。	《朝鮮語文》1957-2。 『現代朝鮮人名辞典』。手 記として「中国言語学界 視察旅行記」があるとい う (遺族情報)。
				中国訪問期間中、日本社会党の国会議 員と面会。	小林英夫「白いハト」。
1956			38	朝鮮語文編修委員会編集委員。	李得春他(2001)。
1957	10	19	39	科学院言語文学研究所の言語学研究室 を中心に形態論の基本的特性に関する 学術討論会が開催され、金壽卿は「朝 鮮語の〈語幹〉と吐の特性」を報告。	《朝鮮語文》1958-1。
1958	1	17	39	科学院言語文学研究所の言語学研究室 の主催により言語学学術討論会が開かれ、「金科奉同志が提起し金壽卿同志 が理論的に体系化しようと試みた《新 字母6字》」に対する批判が相次ぐ	《朝鮮語文》1958-2;《労働新聞》1958.1.19。
1958	1		39	ソ連の言語学者マーズル (Ю.И. Мазур、 1924-1998) が科学院言語文学研究所 で研修 (-1959年2月)。滞在中、金壽 卿と頻繁に会って意見交換。	《ロシア韓国学》第2巻 (《韓国語学》17,2002に 翻訳掲載)。
1958	4		39	8月宗派事件(1956年)後に進められた「反宗派闘争」の一環として《朝鮮語文》雑誌上で金枓奉とともに批判される。	《朝鲜語文》1958-3。

年	月	日	年齢	事項	備考
				多くの弟子たちの嘆願のおかげで粛清 を免れることができたという。	「菅野裕臣のAŭtobiografio」。
[1958]			[40]	小林英夫が李崇寧に送った金壽卿の生存事実を知らせる手紙の内容が、兄金 福卿を通じて妻の李南載に伝えられる。	遺族情報。
1961	2	14	42	母・李素玉がソウルで老衰により他界。	遺族情報。
1961			43	四男・金素雄が平壌で生まれる。	遺族情報(金壽卿の手紙)。
1962	7	19	44	科学院言語文学研究所主催で開かれた 学術討論会「朝鮮語の文法構造研究で 主体をしっかり確立するために」(7.19 ~7.21) に参席。	《朝鮮語文》1962-4。
1963			45	四女・金惠玉が平壌で生まれる。	遺族情報(金壽卿の手紙)。
1964	4	11	45	朝鮮言語学会(会長・金炳濟)が結成され、常務委員となる。また「一般言語学および比較言語学分科委員会」の委員長を務める。	《朝鮮語学》1964-4。
1968	10		50	金日成総合大学から中央図書館の司書 に転職。	《文化語学習》2004-3; 李得春他(2001)。
1970	7		52	長女・金惠慈夫妻がカナダに移民。	遺族情報。
1972			54	妹・金貞娥の家族がアメリカに移民。	遺族情報。
1973	12		55	次女・金惠英夫妻がカナダに移民。	遺族情報。
1974	1		55	兄・金福卿がソウルで病により他界。	遺族情報。
1974	10		56	長男・金泰正がカナダに移民(その後 結婚)。	遺族情報。
1979	3		60	妻・李南載が教職引退後、カナダに移 民。	遺族情報。
1980	11	25	62	東北大学学者訪朝・訪中団の一員として平壌を訪問した中村完(言語学者河野六郎の弟子)の短期間の訪問を受ける。	『高句麗の故地をたずね て:東北大学学者訪朝・ 訪中団報告』東出版寧楽 社, 1981, 33頁。
1982	4		63	人民大学習堂の完工。その後金壽卿は、 運営方法研究室長を歴任(-1998年)。	《文化語学習》2004-3。

年	月	日	年齢	事項	備考
1985			67	妻・李南載が、カナダを訪問していた 延辺大学の高永一教授の助力により人 づてに送った手紙を金壽卿が受け取り、 家族の消息を知る。	遺族情報。
1986	1	15	67	カナダの家族に人づてに手紙を送る。 その後カナダ在住の家族と郵便で書信 のやり取りをしはじめる。	遺族情報。
1988	5	11	70	平壌で開かれた「朝鮮関係専門学者の 国際科学討論会」の言語学分科に参加 し、発表および司会(議長)を務める。	《朝鮮関係専門学者の国際科学討論会討論集(言語学分科)》1989。
1988	8	24	70	北京で北京大学朝鮮文化研究所と大阪 経済法科大学アジア研究所の主催で開 かれた「第2次朝鮮学国際学術討論会」 (8.24-8.28) に参席。カナダから参席 した次女・金惠英と再会。	遺族情報。
1990	8	3	72	大阪で大阪経済法科大学アジア研究所 と北京大学朝鮮文化研究所の主催で開 かれた第3次朝鮮学国際学術討論会に 参席することになっていたが、不参加。	遺族情報(学術討論会言 語部会のプログラムを保 有)。
1990			72	言語学博士学位を授与。博士学位論文のタイトルは「三国時期の言語歴史に関する南朝鮮学界の見解に対する批判的考察」。	《文化語学習》2004-3; 李得春他(2001)。
1991	2	22	72	長女・金惠慈がカナダで病により他界。	遺族情報。
1992	11	6	74	申龜鉉の傘寿を記念して、金壽卿、金 錫亨、朴時亨、丁海珎が申龜鉉の自宅 に集まる。	遺族情報(写真保有)。 写真には「紅顔の青年たちであった半世紀前の日々を回想して」と記されている。
1992	12	9	74	全国から6千名の知識人を集め、金日成・金正日参席のもと開かれた朝鮮知識人大会(12.9~12.12)に参加。	《労働新聞》1992.12.10~ 13;リ・ギュチュン《人 生の絶頂》1996, 221-227。
1992			74	教授職位が授与される。時期は不明だが、〈国旗勲章第1級〉も授与された。	《文化語学習》2004-3。

年	月	日	年齢	事項	備考
1993	7	23	75	朝鮮戦争停戦40年を記念して開かれた 全国老兵大会 (7.23~7.25) に参加し、 記念の勲章を授与される。	《労働新聞》1993.7.24~ 26;遺族情報。
1993	8	15	75	周囲の人々の勧めにより朝鮮戦争の参 戦手記を執筆しはじめる。	遺族情報。
1994	7		76	元山市で開かれた「国際青少年野営大会」にカナダの青少年として参加した次女・金惠英の2人の子女に平壌で会う。	遺族情報。
1994	11	20	76	朝鮮戦争参戦手記《背嚢のなかの手帖 をひろげて》を脱稿。	遺族情報。
1995	7	21	77	脳卒中を患う。その後、次第に健康が 悪化。	遺族情報(金壽卿の手紙)。
1996	7		78	平壌を訪問した長男・金泰正と再会。	遺族情報。
1996	8		78	《主体の朝鮮語研究50年史》発刊を監修(審査)する。	《主体の朝鮮語研究50年 史》金日成総合大学朝鮮 語文学部, 1996。
1996	9		78	長編実話《人生の絶頂》が出版される。 また、金正日によって「反日愛国烈士」 と認められたという。その他「テレビ ジョン手記〈矜持〉」が放映されたと いう。	後段の情報は《文化語学 習》2004-3。
1998	7		80	平壌を訪問した妻・李南載と再会。	遺族情報。
2000	3	1	81	平壌で他界。	遺族情報(平壌の遺族の 手紙)。

(備考) 出典で『』は日本語文献、《》は朝鮮語文献であることを示す。

金壽卿著作目録

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1937	03	活動報告	単著	「英語研究會」,『學友會報 昭和十一年度』京城帝國大學豫科學友會文藝 部	
1945	03	論文	単著	「「老乞大」諸板の再吟味:訂本「老 乞大諺解」の發見を機として」,『「老 乞大」諸板の再吟味』京城帝國大學 法文學部,奎章閣叢書第九老乞大 諺解別冊附錄,油印本	「山川哲」名で本文を執 筆。序文(「小引」) は末 松保和が執筆。
1946	05	翻訳書	単著	모리스・쿠-랑『朝鮮文化史序説』, 서울:凡章閣 (モーリス・クーラン『朝鮮文化史序説』, ソウル:凡章閣)	原著 Maurice Courant, Bibliographie coréene, Paris: E. Leroux, 1894-1896.
1947	05	論文	単著	"「龍飛御天歌」挿入子音考",『震檀 學報』15 (「「龍飛御天歌」挿入子音考」,『震檀學 報』15)	原稿は1945年中に提出。
1947	06	論文	単著	"朝鮮語學會『한글 맞춤법 통일안』 中에서 改正할 몇가지 其一 漢字音 表記에 있어서 頭音 L 及 로 에 對하여", 『勞働新聞』1947.6.6, 6.7, 6.8, 6.10 (「朝鮮語学会『ハングル綴字法統一案』 中において改正すべきいくつか 其一 漢字音表記における頭音 n および r に ついて」,『労働新聞』1947.6.6, 6.7, 6.8, 6.10)	『関西大学人権問題研究 室紀要』41(2000)に熊 谷明泰による日本語訳と 解説あり。
1947	10	論文	単著	"訓民正音創制의 前段階에 對하여", 『民主朝鮮』1947년 10월 30-31일 (「訓民正音創制の前段階について」, 『民主朝鮮』1947年10月30-31日)	

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
[1948]		単行本	単著	『조선어 문법 (대학용)』, [김일성 종합대학] (『朝鮮語文法 (大学用)』, [金日成綜合 大学])	遺族情報。《金日成綜合 大学10年史》(1956) に よれば、この頃に《朝鮮 語文法研究》を完成した という。
1949	01	論文	単著	"訓民正音成立史考",金日成綜合大學歷史文學部『歷史·文學研究論文集』金日成綜合大學科學學術研究論叢·第一,金日成綜合大學編輯部(「訓民正音成立史考」,金日成綜合大学歷史文学部『歷史·文学研究論文集』金日成綜合大学科学学術研究論叢·第一,金日成綜合大学編輯部)	論文末尾に「1947年11月 4日」という日付が記さ れている。
1949	04	翻訳論文	単著	에스・뎨・까쯔넬손, "쏘베트 一般 言語學 三十年", 『조선어연구』 教 간호 (S.D.カツネルソン, 「ソビエトー般言 語学30年」, 『朝鮮語研究』 創刊号)	『ソ連科学アカデミー文学言語学分科機関誌』 1947年第5号より。
1949	04	翻訳論文	単著	"쏘베트 言語學의 當面課題", 『조선 어연구』 창간호 (「ソビエト言語学の当面問題」, 『朝鮮 語研究』創刊号)	『ソ連科学アカデミー文 学言語学分科機関誌』 1947年第5号より。
1949	05	論文	単著	"龍飛御天歌에 보이는 挿入 字母의本質:特히 問題의 現實性에 비추어", 『조선어연구』1-2 (「龍飛御天歌にみえる挿入字母の本質: 特に問題の現実性にてらして」,『朝鮮語研究』1-2)	
1949	05	翻訳論文	単著	이・이・메쉬챠니노브, "新 言語 理 論 發展의 現段階",『조선어연구』 1-2 (I.I.メシチャニーノフ「新言語理論発 展の現段階」,『朝鮮語研究』1-2)	レニングラード国立大学 小冊子、メシチャニーノ フ著『新言語理論発展の 現段階』(1948)より。

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1949	06	論文	単著	"조선어 학자로서의 김두봉 선생: 선생의 탄생 60주년을 맞이하여", 『조선어연구』1-3 (「朝鮮語学者としての金科奉先生:先 生の誕生60周年をむかえて」,『朝鮮語 研究』1-3)	
1949	06	翻訳論文	単著	아. 까. 보로브꼬브, "三十年 間의 <i>쏘</i> 린 東方學", 『조선어연구』1-3 (A. K. ボロフコーフ「30年間のソ連東 方学」, 『朝鮮語研究』1-3)	『ソ連科学アカデミー文 学言語学分科機関誌』第 6巻第5分冊,1947年より。
1949	07	翻訳書	単著	아. 아. 례폴마트쓰기『(대학용) 언 어학』, 평양: 교육성 (A.A. レフォルマツキー『(大学用) 言 語学』, 平壌: 教育省)	原書:А. А. Реформатский, 《Введение в языкознание》 1947。
1949	09	翻訳論文	単著	N. N. 平 州 르 만, "H. Я. 마 르 와 쏘 베 트 언 어 학", 『조 선 어 연 구』 1-6 (I. I. ツーケルマン「N. Ya. マルとソビエト言語学」, 『朝鮮語研究』 1-6)	レニングラード国立大学 小冊子、メシチャニーノ フ著『新言語理論発展の 現段階』(1948)より。
1949	12	単行本	共著	조선 어문 연구회 『조선어 문법』, 평양: 조선어문연구회 (朝鮮語文研究会 『朝鮮語文法』, 平壌: 朝鮮語文研究会)	金壽卿が「主動」となって「担当執筆」した(《主 体の朝鮮語研究50年史》 365,403頁)。
1950	02	翻訳論文	単著	H. C. 체모다노프, "구조주의와 쏘 베트 언어학", 『조선어연구』2-1 (N. S. チェモダーノフ「構造主義とソ ビエト言語学」, 『朝鮮語研究』2-1)	『ソ連科学アカデミー文 学言語学分科機関誌』第 6巻第2分冊,1947年より。

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1952	06	論文	単著	"언어학의 문제들에 관한 이. 웨. 쓰 딸린의 로작과 조선 언어학의 과업", 『언어학에 관한 이. 웨. 쓰딸린의 로 작 발표 二주년 기념 문헌집』, 조쏘 문화 협회 (「言語学の諸問題に関する I. V. スター リンの労作と朝鮮言語学の課業」, 『言 語学の諸問題に関する I. V. スターリン の労作発表2周年記念文献集』,朝ソ文 化協会)	
1952	06	翻訳論文	単著	위. 위. 위노그라도브, "이. 위. 쓰딸린의 로작『맑스주의와 언어학의 제문제』와 쏘베트 언어 과학의 발전",『언어학에 관한이. 위. 쓰딸린의 로작 발표 그주년 기념 문헌집』, 조쏘 문화 협회(V. V. ヴィノグラードフ「I. V. スターリンの労作『マルクス主義と言語学の諸問題』とソビエト言語科学の発展」,『言語学の諸問題に関する I. V. スターリンの労作発表2周年記念文献集』,朝ソ文化協会)	
1952	07	翻訳書	単著	위. 위. 위노그라도브『언어학의 문제들에 관한 이. 위. 쓰딸린의 로작에 관하여』 / 위. 위. 노위꼬브『언어학에 관한 쓰딸린 동지의 로작들과 쏘베트 문예학의 제 문제』, 평양:교육성 교육 도서 출판관리국 (V. V. ヴィノグラードフ『言語学の諸問題に関する I. V. スターリンの労作に関して』 / V. V. ブヴィコフ『言語学に関するスターリン同志の諸労作とソビエト文芸学の諸問題』, 平壌: 教育省教育図書出版管理局)	原著 В. В. Виноградов, 《О труде И. В. Сталина по вопросам языкознания》と もう1冊の本の翻訳を合 本したもの。

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1953	09	論文	単著	"현대 조선어 연구 서설", 『조선민 주주의인민공화국 과학원 학보』 1953년 No.1 (「現代朝鮮語研究序説」, 『朝鮮民主主 義人民共和国科学院学報』1953-1)	
1953	12	論文	単著	"언어학의 문제들에 관한 이. 웨. 쓰 딸린의 로작에 비추어 본 조선어의 기본 어휘와 어휘 구성에 관하여", 『조선민주주의인민공화국 과학원 학보』1953년 No.2 (「言語学の諸問題に関する I. V. スター	
				リンの労作にてらしてみた朝鮮語の基本語彙と語彙構成に関して」, 『朝鮮民主主義人民共和国科学院学報』1953-2)	
1954	06	論文	単著	"주시경선생의 생애와 학설: 선생의 서거 40주년에 제하여", 『조선민주 주의인민공화국 과학원 학보』 1954 년 No.5 (「周時經先生の生涯と学説: 先生の逝 去40周年に際して」, 『朝鮮民主主義人	
1954	08	翻訳論文	単著	民共和国科学院学報』1954-5) 剛. 에프. 유진, "언어학의 문제들에 관한 이. 웨. 쓰딸린의 로작이 사회 과학의 발전에 대하여 가지는 의의", 『쏘웨트 언어학의 제문제: 번역 론문집』 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 (P. F. ユージン「言語学の諸問題に関する I. V. スターリンの労作が社会科学の発展に対してもつ意義」, 『ソビエト言語学の諸問題: 翻訳論文集』朝鮮民主主義人民共和国科学院)	П. Ф. Юдин, "Значение трудов И. В. Сталина по вопросам языкознания для развития общественных наук" (ソ連科学アカデミー編 『I. V. スターリンの天才 的著述「マルクス主義と 言語学の諸問題」発刊1 周年記念ソ連科学アカデ ミー社会科学分科合同会 議資料集』1951年版)。

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1954	08	翻訳論文	単著	아. 이. 스미르니쯔끼, "언어학에 있어서의 비교-력사적 방법에 관한 문제에 대하여", 『쏘웨트 언어학의 제문제: 번역 론문집』조선 민주주의인민 공화국 과학원(A. I. スミルニッキー「言語学における比較歴史的方法に関する問題について」, 『ソビエト言語学の諸問題:翻訳論文集』朝鮮民主主義人民共和国科学院)	A. И. Смирницкий, "К вопросу о сравнительно- историческом методе в языкознании" (『言語学の諸問題』1952 年第6号)。
1954	08	翻訳論文	単著	엔. 이. 꼰라드, "언어학에 관한 이. 웨. 쓰딸린의 로작에 비추어 본 중국과 일 본에 있어서의 민족어에 관하여", 『쏘 웨트 언어학의 제문제: 번역 론문집』 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 (N. I. コンラッド「言語学に関する I. V. スターリンの労作にてらしてみた中国 と日本における民族語に関して」, 『ソ ピエト言語学の諸問題:翻訳論文集』 朝鮮民主主義人民共和国科学院)	H. И. Конрад, "О национальном языке в Кнтаи и Японии в свете трудов И. В. Сталина по Языкознанию" (ソ連科学アカデミー『東 方学研究所学報』第4巻, 1952年)。
1954	[9]	単行本	共著	조선민주주의인민공화국 과학원 조 선어 및 조선문학 연구소 『조선어 철자법』, 평양: 조선민주주의인민 공화국 과학원 편집출판위원회 (朝鮮民主主義人民共和国科学院朝鮮語 及朝鲜文学研究所『朝鮮語綴字法』, 平 壌:朝鲜民主主義人民共和国科学院編 集出版委員会)	金壽卿は草案の作成を担当。
1954	10	単行本	単著	『조선어문법 (문장론) 초급중학교 제3학년용』, 평양: 교육 도서출판 사 (『朝鮮語文法 (文章論) 初級中学校第3 学年用』, 平壌:教育図書出版社)	

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1954	11	単行本	単著	『조선어문법 (어음론 형태론) 초급 중학교 제1, 2학년용』, 평양: 교육 도서출판사 (『朝鮮語文法 (語音論, 形態論) 初級 中学校第1, 2学年用』, 平壌: 教育図書 出版社)	1956-57年に学友書房から影印出版。
1955	05	単行本	単著	『조선어문법』, 연길: 연변교육출판 사 (『朝鮮語文法』, 延吉: 延辺教育出版社)	平壌で出版された《朝鮮語文法》初級中学校1,2 学年用と3学年用を合本 し、1954年の《朝鮮語綴字法》にもとづいて一部 修正して組み直したもの。
1955		翻訳監修	共著	召皇성종합대학 조선어학 및 일반언 어학강좌 역『이・웨・쓰딸린의 로 작에 비추어 본 언 어학의 제 문 제 (각 대학 어문학부용)』, 평양: 교 육 도서 출판사 (金日成綜合大学朝鮮語学及一般言語学 講座訳,『I.V.スターリンの労作にてら してみた言語学の諸問題(各大学語文 学部用)』, 平壌:教育図書出版社)	原書: 《Вопросы языкознания в свете трудов И. В. Сталина》 (1952)。金壽卿は、本全 体の「審査」(監修)を 担当。
1956	02	論文	単著	"조선어 형태론의 몇 가지 기본적 문제에 관하여 (상)",『조선어문』 1956. No.1 (「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題に関して(上)」,『朝鮮語文』1956. No.1)	
1956	02	翻訳論文	単著	오. 빼. 빼뜨로와, "특별기고 로씨야 와 쏘련의 조선어 연구사 개요: 형 제적 인민들의 조선어연구", 『조선 어문』1956. No.1 (O. P. ペトローワ「特別寄稿 ロシアとソ 連の朝鮮語研究史概要: 兄弟的諸人民 の朝鮮語研究」、『朝鮮語文』1956. No.1)	原著:О. П. Петрова, "Очерк истори изучения Корейского языка в росии и СССР"

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1956	04	論文	単著	"조선어 형태론의 몇 가지 기본적 문제에 관하여 (하)", 『조선어문』 1956. No.2 (「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題に関して(下)」, 『朝鮮語文』1956. No.2)	
1956	04	論説	単著	"당의 고무하에 달성된 과학 연구 사업의 성과",『대학신문』1956년 4월 26일 (속간 제3호) (「党の鼓舞下に達成された科学研究事業の成果」,『大学新聞』1956年4月26日,続刊3号)	
1957	07	論文	単著	"출판물의 언어를 더욱 인민대중에게 접근시키자",『근로자』1957년 7호 (「出版物の言語をいっそう人民大衆に 接近させよう」,『勤労者』1956年7号)	
1958	01	論文	単著	"공화국 북반부에서는 어찌하여 한 자를 폐지할 수 있었는가?", 『말과 글』 창간호 (1958년 1호) (「共和国北半部ではいかにして漢字を 廃止することができたのか」, 『言葉と 文』創刊号=1958年1号)	
1960	07	単行本	共著	과학원언어문학연구소 『조선어문법 1 어음론 형태론』, 평양: 과학원출 판사 (科学院言語文学研究所『朝鮮語文法 1 語音論・形態論』, 平壌: 科学院出版社)	金壽卿・李槿榮が担当執 筆(《主体の朝鮮語研究 50年》1996年,369頁)。
1961	03	単行本	共著	『현대조선어 1』, 평양: 고등교육도 서출판사 (『現代朝鮮語1』, 平壌:高等教育図書 出版社)	執筆者:金壽卿、金金石、 金榮晃

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考	
1961	08	論文	単著	"인민적 문풍 확립을 위한 당의 방침을 더욱 철저히 관철하기 위하여", 『조선어학』1961년3호 (「人民的文風確立のための党の方針を		
				いっそう徹底して貫徹するために」, 『朝鮮語学』1961-3)		
1961	11	単行	共著	『현대조선어 2』, 평양 : 고등교육도 서출판사	執筆者:金壽卿、金百鍊	
		本		(『現代朝鮮語 2』,平壌:高等教育図書 出版社)		
1962	08	単行	共著	『현대조선어 3』, 평양 : 고등교육도 서출판사	執筆者:金壽卿、宋瑞龍	
1962	08	本	六百	(『現代朝鮮語 3』,平壌:高等教育図書 出版社)		
10/2	0.4	論文	= △- -	7 単著	"《조선말 사전》(1-6) 권", 『조선어 학』1963년2호	
1963	04			(「『朝鮮語辞典』1-6巻」,『朝鮮語学』 1963-2)		
1963	08	±∆-4-	論文	単著	"문풍에 대한 리해를 더욱 심화하기 위하여", 『조선어학』1963년3호	
1903	08	빼又	半白	(「文風に対する理解をいっそう深化するために」、『朝鮮語学』1963-3)		
10/2		-1A (.	全 単著	"우리 나라에서의 문풍 운동의 발전", 공화국창건15주년학술대회	李得春他《光復後朝鮮語 論著目録指針書》(2001)	
1963		빼又		(「わが国における文風運動の発展」, 共和国創建15周年学術大会)	で言及。	
1064		=^	VV +1-	"작가의 개성과 언어", 『문학연구』 1964-3		
1964	03	論文	単著	(「作家の個性と言語」,『文学研究』 1964-3)		
*651	0.7	=A_L.	VV -1-1-	"최근의 정론들에 나타나고 있는 회 화체의 요소", 『조선어학』 1964년5호		
1964	09	論文	論文単著	(「最近の政論にあらわれている会話体 の要素」,『朝鮮語学』1964-5)		

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1964	11	単行本	共著	『조선어문법』, 평양: 고등교육도서 출판사 (『朝鮮語文法』, 平壌:高等教育図書出 版社)	品詞論:金壽卿、形態 論:廉宗訥・金百錬、文 章論:宋瑞龍・金榮晃
1964		単行本	単著	『조선어문체론』, 평양: 고등교육도 서출판사 (『朝鮮語文体論』, 平壌:高等教育図書 出版社)	
1964		単行本	共著	『조선어 어휘론 및 어음론』, 평양: 고등교육도서출판사 (『朝鮮語語彙論及語音論』, 平壌:高等 教育図書出版社)	執筆者:金壽卿、金金石、 金榮晃
1965	11	論文	単著	"새로운 조선말 사전 편찬을 위한 몇 가지 문제", 『조선어학』1965년4호 (「新たな朝鮮語辞典編纂のためのいく つかの問題」, 『朝鮮語学』1965-4)	
1967	02	論文	単著	"우리 말 학술용어를 주체적으로 다듬기 위한 몇가지 문제",『어문연구』 1967년1호 (「朝鮮語学術用語を主体的に整えるためのいくつかの問題」,『語文研究』 1967-1)	
1989	01	学会報告	単著	"14-19세기 조선에서의 동아세아언어연구의 몇가지 특성에 대하여", 『조선관계전문학자들의 국제과학토론회 토론집 (언어학 분과)』사회과학출판사 (「14-19世紀朝鮮における東アジア言語研究のいくつかの特性について」,『朝鮮関係専門学者らの国際科学討論会討論集(言語学分科)』社会科学出版社)	

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1989	89 05	単行本	単著	『세나라 시기 언어력사에 관한 남조 선 학계의 견해에 대한 비판적고찰』, 평양:평양출판사 (『三国時期言語歴史に関する南朝鮮学	ソウルで『高句麗・百 済・新羅言語研究』(韓 国文化社, 1995年) との タイトルで再版。
		7		(『三国時期言語歴史に関9る開朝鮮子 界の見解に対する批判的考察』, 平壌: 平壌出版社)	
1989	12	学会報告	単著	"《로걸대》,《박통사》계렬의 옛 중국 어학습서들이 가지는 언어사적의의", 중국 북경대학 조선문화연구소, 일 본 오사까 경제법과대학 아세아 연 구소 편집『제2차 조선학 국제학술 토론회 론문집』북경: 민족출판사 (「『老乞大』『朴通事』系列の旧中国語	1988年8月24日~28日に 北京大学でおこなわれた 討論会で発表された140 余の報告のうち71本を収 録。
				学習書がもつ言語史的意義」,北京大学朝鮮文化研究所・大阪経済法科大学アジア研究所編集『第2次朝鮮学国際学術討論会論文集』北京:民族出版社)	
1990	05	学会 報告	単著	"《번역, 로걸대, 박통사, 범례》 및 《로박집람》에 반영된 16세기초 조 선에서의 대조언어학적연구의 주요 특징에 대하여", 『제3차조선학국제 학술토론회 론문요지: 1990년 8월 2 일-8월 5일 일본 오사까에서 개최』	主催:大阪経済法科大学アジア研究所、北京大学朝鮮文化研究所
	1990 05	報告	报告 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	(「『翻訳老乞大朴通事凡例』および『老朴集覧』に反映された16世紀初朝鮮における対照言語学的研究の主要特徴について」, 『第3朝鮮学国際学術討論会論文要旨:1990年8月2日-8月5日日本大阪で開催』)	

年	月	範疇	執筆 形態	文献	備考
1994	10	論文	単著	"《번역 로결대 박통사 범례》 및《로 박집람》의 서지학적문제점과 어학 사적의의에 대하여",『언어학론문 집』(11),과학백과사전종합출판사 (「『翻訳老乞大朴通事凡例』および『老 朴集覧』の書誌学的問題点と語学史的 意義について」,『言語学論文集』11, 科学百科事典綜合出版社)	
1994	11	手記	単著	『배낭속의 수첩을 펼치며』[오직 한마음 당을 따라 북남 7천리: 한지식인의 조국해방전쟁참전수기 (1950. 8.9~1951.3.3)] (『背嚢のなかの手帖をひらいて』[ただ一心党に従って北南7千里: 一知識人の祖国解放戦争参戦手記 (1950.8.9~1951.3.3)])	遺族保有の未刊行原稿。 1993年8月15日執筆開始、 1994年11月20日脱稿。タ イトルが2つあり、元の タイトルと思われる方を 『』で、後から付けたと 思われる方を [] で表示 した。

著者・翻訳者プロフィール

◎著者

板垣 竜太(いたがきりゅうた)

同志社大学社会学部・教授。朝鮮近現代社会史・文化人類学を専攻する。主著に『朝 鮮近代の歴史民族誌』(2008)、共著に『東アジアの記憶の場』(2011)等がある。

コ ヨンジン (高榮珍, 고영진)

同志社大学グローバル地域文化学部・教授。韓国語学、社会言語学を専攻する。主な論文に、「北韓文法の品詞論の変遷― '品詞' から '品詞論' へ (북한 문법의 품사론의 변천 ― '품사' 에서 '품사론' 으로)」(2002)、共著に『植民地時期前後の言語問題(식민지시기 전후의 언어 문제)』(2012)等がある。

金 惠英 (キムヘヨン, 김혜영)

トロント大学(カナダ)文理科大学東洋学科・元講師(2013年に退職)。外国語としてのコリア語教授法を専攻する。主な論文に「コリア語尊待法の変遷」等がある。

金 泰成 (キム テソン、 召 태성)

釜山大学校(韓国)・名誉教授。ドイツ語学を専攻する。釜山大学校人文大学独語独文学科在職(1980.9-2013.8)、韓国独語学会会長(2002-2004)。主な論文に「東独時期の陳情書テキストの分析」、「ルター聖書の言語形態」、「ドイツ言語純化運動の様相」等がある。

金 河秀(キム ハス, 김하수)

延世大学校(韓国)国語国文学科・元教授(2014年に退職)。国立国語院言語政策部 長(2004-2006年)、延世大学校言語情報研究院院長(2008-2013年)を歴任した。社 会言語学と言語思想史を専攻する。主な論著に「帝国主義と韓国語の問題―帝国主義 と民族主義が韓国言語学に与えた影響を中心に(제국주의와 한국어 문제 ― 제국주의와 민족주의가 한국 언어학에 미친 영향을 중심으로)」(2005)、『問題としての言語1:社会 と言語(문제로서의 언어 1: 사회와 언어)』(2008)、『問題としての言語2:民族と言語 (문제로서의 언어 2: 민족과 언어)』(2008) 等がある。

崔 炅鳳 (チェ ギョンボン、최경봉)

圓光大学校(韓国)国語国文学科・教授。語彙意味論および国語学史を専攻する。主 著に、『国語の名詞の意味研究(국어 명사의 의미 연구)』(1998)、『ウリマルの誕生(우 리말의 탄생)』(2006)、『ハングルについて知るべき全てのこと(한글에 대해 알아야 할 모든 것)』(2008)、『ハングル民主主義(한글민주주의)』(2012)、『意味によって分け られたウリマル慣用語辞典(의미 따라 갈래지은 우리말 관용어사전)』(2014) 等がある。

趙 義成(チョ ウィソン,조의성)

東京外国語大学大学院(日本)総合国際学研究院・准教授。現代韓国語文法と中世韓 国語文法を専攻する。主な論文、訳注書に『訓民正音』(2010)、「起点的意味を表す中 期朝鮮語の諸形式について」(2009)、「北韓の単語結合論と旧ソ連の単語結合論―60 年文法を中心に (북한 단어결합론과 옛 소련 단어결합론 - 60년문법을 중심으로) | (2001) 等がある。

崔 義秀 (チェ ヒス, 최희수)

青島濱海学院(中国)・教授。韓国語を専攻する。延辺大学教授、中国韓国語教育学 会副会長、中国国家哲学社会科学プロジェクト評審委員を歴任した。主著に『朝鮮漢 字音研究조선한자음 연구』(1986)、『韩国语实用语法』(2008)、『韩汉语音对比』 (2007) 等がある。

崔 應九(チェ ウング, 최응구)

北京大学(中国)・教授。北京大学朝鮮文化研究所所長、国際高麗学会会長を歴任。 朝鮮語文体論を専門とする。1961年に延辺大学朝鮮語文系を卒業した。1961年に金日 成綜合大学研究院学習文体学(語体学)に入学、1964年に帰国し、1965年に副博士学 位を取得した。主著に、『朝鲜语文体学』『朝鲜语词汇学』『语言学概论』『金哲与他的 诗』等がある。

◎翻訳者

李陽民 (イヤンミン、이양민)

日韓会議通訳・翻訳。梨花女子大学通訳翻訳大学院通訳修士を取得。

呉仁済 (オインジェ, 오인제)

大谷大学・非常勤講師(韓国・朝鮮語)。同志社大学グローバル・スタディーズ研究 科・博士後期課程。朝鮮近現代史、在日朝鮮人史を専攻する。主な論文に、「韓国の 朝鮮籍に対する認識―二つの韓国入国拒否事例から考える」(2012)等がある。

森 類臣(もり ともおみ)

立命館大学コリア研究センター・専任研究員、同大学文学部非常勤講師。同志社大学 グローバル地域文化学部嘱託講師。博士(メディア学)。専門は韓国社会論。主な論 文に「言論民主化運動から『ハンギョレ新聞』へ一韓国ジャーナリズムの変動過程に 関する一考察」(2013)等がある。

同志社コリア研究叢書2 北に渡った言語学者・金壽卿の再照明

発行日 2015年1月30日 初版

編 者 板垣 竜太・コヨンジン

発行者 同志社コリア研究センター

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL & FAX 075-251-3868

ホームページ http://do-cks.net/index.html

e-mail rc-korea@mail.doshisha.ac.jp

表紙装幀 大本幸恵

印刷 예木村桂文社

ISBN 978-4-907634-01-8

本書の電子版は同志社大学学術リポジトリ(http://library.doshisha.ac.jp/ir/)で読めます。

ISBN 978-4-907634-01-8

〔発行〕

同志社コリア研究センター